

福岡市

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ

西新町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集

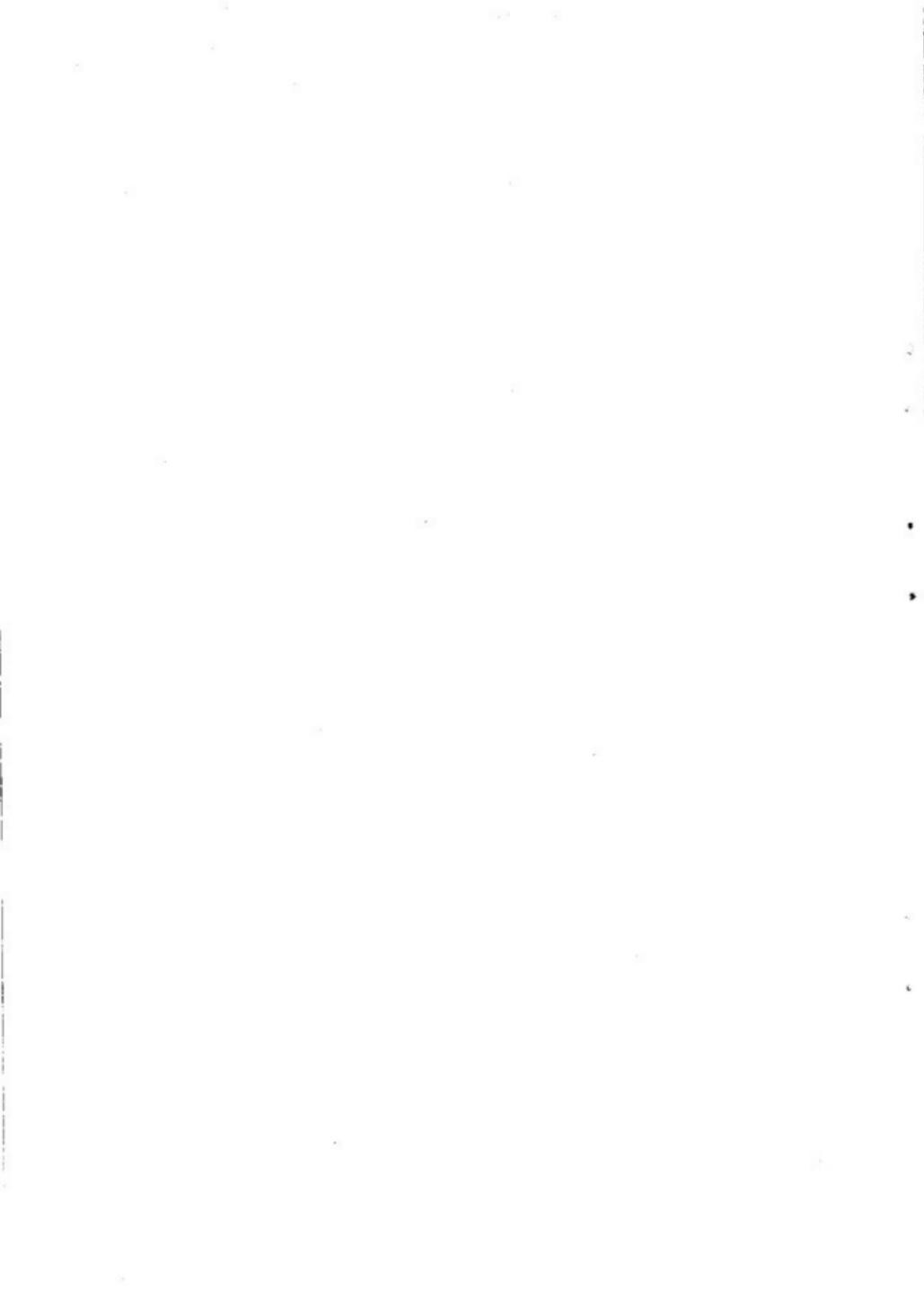
1982

福岡市教育委員会

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 正 誤 表

No.11688

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
例 言	19	桐朋短期大学	桐朋学園大学短期大学部	22	30	力武卓次	力武卓治
挿図目次	7	呉服町交又点	呉服町交又点	23	17	張りに使用	梁りに使用
2	—	(縮尺 1 / 5万)	(縮尺 1 / 7万 5千)	23	20	相方から	双方から
4	9	井上綱紀氏	井上綱紀氏	23	27	道路専有	道路占有
5	22	岡部隆浩	岡部隆浩	23	28	2分括……3分括	2分割……3分割
5	32	かかるⅠ区	かかるⅠ区	24	2	副葬品	着装品
7	19	が須久	が須玖	24	8	梅津静江	海津静江
9	32	宗教………仏教	宗教………仏教	24	20	桐朋短期大学	桐朋学園大学短期大学部
11	6	とに挟まれ	とに挟まれ	59	11	土拡出土	土壙出土
11	11・14	「T」字型	「T」字形	60	6	弥生時代初頭	弥生時代終末～古墳時代初頭
12	3	青磁碗	白磁碗	89	1・2・6・7 9・10・11	竪穴式住居跡	竪穴式住居跡
12	12	(太閤の街割)	(太閤の街割)	164	24	磨製品	磨製品
12	26	付合したか為	符合したか為	173	5	しての有り方	しての在り方
12	27	地一族	池一族	173	11	矛盾しない。	矛盾しない。
14	8	氾濫原	氾濫原	174	3	第1章3項	第1章2項
18	30	壺型土器	壺形土器	181	30	A一類	A一Ⅰ類
18	31	思われる効目	思われる刻目	183	3	鉢型土器	鉢形土器
18	32	甕型土器	甕形土器	183	27	竪穴式住居出土	竪穴式住居跡出土
20	26	表わしつつ	現わしつつ	184	7	屈折して	屈折して
21	7	かなりの営み	かなりの営み	188	24	技法と供に	技法と共に
21	34	墓8基	棺墓8基	190	3	第1章第3項	第1章第2項





西新町遺跡出土の甕棺



「西新町式土器」(D地区第3号竪穴式住居跡一括出土、高環のみ第4号竪穴式住居址出土)



序 文

福岡市の新しい交通体系として昭和56年7月地下鉄1号線が部分開通いたしました。福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け、昭和51年以来地下鉄路線内の埋蔵文化財の発掘調査と出土資料の整理を進めています。

本書は昭和51年8月から昭和53年4月にかけて調査を実施した西新町遺跡の記録を報告するものです。

砂丘に立地する西新町遺跡からは、弥生時代の甕棺から朝鮮系の細型銅剣や南方産のゴホウラの貝輪が出土するなど大陸や南方との交流をしめす資料がみられました。また、畿内、瀬戸内や山陰地方の土器も発見され、古代から各地域との幅広い交流を裏付けるなど大きな成果を得ることができました。

この報告書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、研究資料としても活用いただければ幸いです。

調査から資料整理にいたるまで、交通局をはじめ指導委員の先生方など多くの人々からいただいた御協力と御助言に対し深甚の敬意を表するものであります。

昭和57年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津 茂美

例 言

1. 本書は、福岡市交通局が企画した、福岡市高速鉄道（地下鉄）建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和51年8月から同53年4月にかけて行った、面積6,230m²の埋蔵文化財の受託調査の報告書である。
2. 本報告書を福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ・福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集『西新町遺跡』とする。
3. 挿図の縮尺は挿図目次の末尾に示すとおりである。
4. 本書の地図は国土地理院発行5万分の1の地形図「福岡」（Fig. 1）と、同発行2万5千分の1の地形図「福岡西部」・「福岡西南部」・「福岡」・「福岡南部」（Fig. 12）を使用している。
5. 本書掲載の出土遺物、各種実測図・各種写真は、福岡市教育委員会文化部文化課、福岡市立歴史資料館、福岡市埋蔵文化財センターに分散保管してあるが、将来、福岡市埋蔵文化財センターが一括保管することになる。
6. 遺物実測の製図にあたっては、特に弥生時代の終末から古墳時代の前期の集落跡出土の土器の製作技法に留意した。
7. 遺構実測図は山本京子・平野芳英・渡辺一雄・田中寿夫・田中克子・山崎賀代子・増喜緑子・菊川ひづる・中島玲子・酒井晴子・平石敦子（以上熊本大学）、石川むつみ・高橋和子・坪田正裕・高倉浩一・菅野都・夏原敦子・青木和明（以上明治大学）、長沼孝・小木曾隆・郷端英司・佐藤正知・富田和夫（以上静岡大学）、坂田美土里・松田美知子・浜石正子（以上桐朋短期大学）、須賀京子（日本大学）、石井 穂（大正大学）、三島光子（武蔵野美術大学）、藤井伸幸（九州大学）、木村幾太郎（九州大学医学部助手）が行ない、製図（トレース）は田中克子が行なった。
8. 遺物の実測は、田崎博之・藤尾慎一郎・（以上九州大学）、常松幹雄（早稲田大学）、後藤 直（銅剣鋳型、福岡市立歴史資料館）・井上加代子・池崎讓二・田中克子が行ない、常松幹雄・田崎博之が製図（トレース）を行なった。
9. 写真撮影は現場関係を池崎讓二・浜石哲也・山崎龍雄・折尾 学・東洋航空事業株式会社が行ない、各種遺物撮影を白石公高が行なった。
10. 本書の編集は池崎讓二・田崎博之・常松幹雄・田中克子・折尾 学が行なった。
11. 本書の執筆は各項目の末尾に示すとおりである。

本文目次

1. 高速鉄道関係埋蔵文化財概要	
第1章 調査に至る経緯	折尾 学 3
第2章 組織の構成	折尾 学 4
第3章 路線内遺跡の調査概要	折尾 学 6
I. 西新町遺跡の調査	15
第1章 遺跡の立地と歴史的環境	
1. 立地	浜石哲也 17
2. 遺跡の発見と研究	常松幹雄 18
3. 周辺の歴史的環境	浜石 20
第2章 調査の経過	折尾 23
第3章 調査の内容と結果	
1. 甕棺墓	折尾 26
2. 祭祀遺構	池崎謙二 59
3. 竪穴住居跡	田崎博之 60
4. 竪穴住居跡出土の土器	常松・折尾 89
5. 土壇	田崎 153
6. 土壇出土の土器	田崎 157
7. その他の遺物	
(1) 貝輪について	永井昌文 162
(2) 銅剣の切先について	常松・折尾 164
(3) 銅剣の銜型について	常松・折尾 164
(4) 鉄器について	常松・田中 164
(5) 石錘・土錘・砥石・タコ壺について	常松・田中 164
(6) 中世木棺墓と出土遺物	池崎 169
(7) 包含層出土の土器	田崎・田中 170
8. 甕棺墓検出の人骨について	永井 171
第4章 結語	常松・折尾 173

挿 図 目 次

Fig. 1	高速鉄道路線内遺跡地区 (縮尺1/7万5千)	2
Fig. 2	西新町遺跡 (弥生時代甕棺墓)	7
Fig. 3	西新町遺跡 (古墳時代住居跡)	7
Fig. 4	福岡城の濠の石垣	8
Fig. 5	福岡城の濠の石垣 (赤坂丁区公開保存部分)	8
Fig. 6	福岡城薬院新川の石垣	9
Fig. 7	呉服町交又点	11
Fig. 8	呉服町遺跡の作業風景	11
Fig. 9	ナヨナラ路面電車	12
Fig. 10	祇園町遺跡の調査風景	12
Fig. 11	店屋町遺跡出土の輸入陶磁器	13
Fig. 12	西新町遺跡とその周辺の遺跡 (縮尺1/2万5千)	16
Fig. 13	旧藤崎刑務所内出土の土器 (九州大学教養部玉泉館蔵 縮尺1/4)	19
Fig. 14	西新町遺跡第1号~3号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	29
Fig. 15	西新町遺跡第4号~6号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	30
Fig. 16	西新町遺跡第7・8号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	31
Fig. 17	西新町遺跡第10号甕棺墓の実測図 (ゴホウラ製貝輪を着裝・縮尺1/20)	32
Fig. 18	西新町遺跡第11号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	33
Fig. 19	西新町遺跡第12号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	34
Fig. 20	西新町遺跡第9・13号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	35
Fig. 21	西新町遺跡第14~16号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	36
Fig. 22	西新町遺跡第17号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	37
Fig. 23	西新町遺跡第18・20号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	38
Fig. 24	西新町遺跡第19号甕棺墓の実測図 (腰骨付近検出の銅剣の切先・縮尺1/20)	39
Fig. 25	西新町遺跡第21・22・24号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	40
Fig. 26	西新町遺跡第25・26号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	41
Fig. 27	西新町遺跡第27号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	42
Fig. 28	西新町遺跡第28号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	43
Fig. 29	西新町遺跡第29・30号甕棺墓の実測図 (縮尺1/20)	44
Fig. 30	西新町遺跡第1号甕棺 (縮尺1/6)	45
Fig. 31	西新町遺跡第2・3・4号甕棺 (縮尺1/6)	46
Fig. 32	西新町遺跡第5号甕棺 (縮尺1/6)	47

Fig. 33	西新町遺跡第6・7・8号甕棺 (縮尺1/6)	48
Fig. 34	西新町遺跡第9・14号甕棺 (縮尺1/6)	49
Fig. 35	西新町遺跡第10・11号甕棺 (縮尺1/12)	50
Fig. 36	西新町遺跡第12・13号甕棺 (縮尺1/12)	51
Fig. 37	西新町遺跡第15・16・17号甕棺 (縮尺1/6)	52
Fig. 38	西新町遺跡第18・20号甕棺 (縮尺1/6)	53
Fig. 39	西新町遺跡第19・27号甕棺 (縮尺1/12)	54
Fig. 40	西新町遺跡第21・22・23号甕棺 (縮尺1/6)	55
Fig. 41	西新町遺跡第24・25号甕棺 (縮尺1/6)	56
Fig. 42	西新町遺跡第26・30号甕棺 (縮尺1/6)	57
Fig. 43	西新町遺跡第29号甕棺 (縮尺1/6)	58
Fig. 44	西新町遺跡第28号甕棺 (縮尺1/12)	59
Fig. 45	西新町遺跡祭祀遺構出土の上器 (縮尺1/3)	59
Fig. 46	西新町遺跡A地区第1号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	61
Fig. 47	西新町遺跡A地区第2・3・4号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	62
Fig. 48	西新町遺跡A地区第5・6号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	63
Fig. 49	西新町遺跡A地区第7・9・11号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	64
Fig. 50	西新町遺跡B地区第8号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	65
Fig. 51	西新町遺跡B地区第1・2号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	66
Fig. 52	西新町遺跡B地区第3～7号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	67
Fig. 53	西新町遺跡C地区第8号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	68
Fig. 54	西新町遺跡C地区第1号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	69
Fig. 55	西新町遺跡C地区第2・3号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	70
Fig. 56	西新町遺跡C地区第4～7号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	71
Fig. 57	西新町遺跡C地区第9号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	72
Fig. 58	西新町遺跡C地区第10号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	73
Fig. 59	西新町遺跡D地区第1・2・15号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60) ..	75
Fig. 60	西新町遺跡D地区第3・11号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	76
Fig. 61	西新町遺跡D地区第4・5・6号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	77
Fig. 62	西新町遺跡D地区第7号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	78
Fig. 63	西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	79
Fig. 64	西新町遺跡D地区第9・10号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	80
Fig. 65	西新町遺跡D地区第12号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	81

Fig. 66	西新町遺跡E地区第1・2・3号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	82
Fig. 67	西新町遺跡E地区第4号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	83
Fig. 68	西新町遺跡F地区第1・4号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	84
Fig. 69	西新町遺跡F地区第2・3号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	85
Fig. 70	西新町遺跡G地区第3号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	86
Fig. 71	西新町遺跡G地区第1・2号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	87
Fig. 72	西新町遺跡H地区第2・3号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)	88
Fig. 73	西新町遺跡A地区第1号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	90
Fig. 74	西新町遺跡A地区第4号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	91
Fig. 75	西新町遺跡A地区第5号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	92
Fig. 76	西新町遺跡A地区第6号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	93
Fig. 77	西新町遺跡A地区第7号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)	94
Fig. 78	西新町遺跡A地区第7号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)	95
Fig. 79	西新町遺跡A地区第11号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	95
Fig. 80	西新町遺跡B地区第1号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	96
Fig. 81	西新町遺跡B地区第4号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	97
Fig. 82	西新町遺跡B地区第7号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	97
Fig. 83	西新町遺跡B地区第6号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	98
Fig. 84	西新町遺跡C地区第1号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4) (折込み)	
Fig. 85	西新町遺跡C地区第1号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)	99
Fig. 86	西新町遺跡C地区第2号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	101
Fig. 87	西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)	102
Fig. 88	西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)	103
Fig. 89	西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器3 (縮尺1/4)	104
Fig. 90	西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器4 (縮尺1/6)	104
Fig. 91	西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器5 (縮尺1/4)	105
Fig. 92	西新町遺跡C地区第4号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	106
Fig. 93	西新町遺跡C地区第5号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	106
Fig. 94	西新町遺跡C地区第7号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	107
Fig. 95	西新町遺跡C地区第10号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	107
Fig. 96	西新町遺跡C地区第9号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	108
Fig. 97	西新町遺跡D地区第1号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)	110
Fig. 98	西新町遺跡D地区第1号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)	111

Fig. 99	西新町遺跡D地区第1号竪穴式住居跡出土土器 3 (縮尺1/4) ……	112
Fig. 100	西新町遺跡D地区第2号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	113
Fig. 101	西新町遺跡D地区第3号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4) … (折込み)	
Fig. 102	西新町遺跡D地区第3号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4) … (折込み)	
Fig. 103	西新町遺跡D地区第3号竪穴式住居跡出土土器 3 (縮尺1/6) ……	115
Fig. 104	西新町遺跡D地区第4号竪穴式住居跡出土土器 1 (縮尺1/4) ……	116
Fig. 105	西新町遺跡D地区第4号竪穴式住居跡出土土器 2 (縮尺1/4) ……	117
Fig. 106	西新町遺跡D地区第5号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	118
Fig. 107	西新町遺跡D地区第6号竪穴式住居跡出土土器 1 (縮尺1/4) ……	119
Fig. 108	西新町遺跡D地区第6号竪穴式住居跡出土土器 2 (縮尺1/4) ……	120
Fig. 109	西新町遺跡D地区第7号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	122
Fig. 110	西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器 1 (縮尺1/4) ……	125
Fig. 111	西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器 2 (縮尺1/4) ……	126
Fig. 112	西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器 3 (縮尺1/4) ……	127
Fig. 113	西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器 4 (縮尺1/4) ……	128
Fig. 114	西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器 5 (縮尺1/4) ……	129
Fig. 115	西新町遺跡D地区第9号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	130
Fig. 116	西新町遺跡D地区第10号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	131
Fig. 117	西新町遺跡D地区第11号竪穴式住居跡出土土器 1 (縮尺1/4) ……	132
Fig. 118	西新町遺跡D地区第11号竪穴式住居跡出土土器 2 (縮尺1/4) ……	133
Fig. 119	西新町遺跡D地区第13号竪穴式住居跡出土土器 1 (縮尺1/4) ……	134
Fig. 120	西新町遺跡D地区第13号竪穴式住居跡出土土器 2 (縮尺1/4) ……	135
Fig. 121	西新町遺跡D地区第14号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	136
Fig. 122	西新町遺跡D地区第16号竪穴式住居跡出土土器 1 (縮尺1/4) ……	137
Fig. 123	西新町遺跡D地区第16号竪穴式住居跡出土土器 2 (縮尺1/4) ……	138
Fig. 124	西新町遺跡D地区第17号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	139
Fig. 125	西新町遺跡E地区第1号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	140
Fig. 126	西新町遺跡E地区第2号竪穴式住居跡出土土器 1 (縮尺1/4) ……	141
Fig. 127	西新町遺跡E地区第2号竪穴式住居跡出土土器 2 (縮尺1/2) ……	142
Fig. 128	西新町遺跡E地区第3号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	143
Fig. 129	西新町遺跡E地区第4号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	144
Fig. 130	西新町遺跡F地区第1号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	146
Fig. 131	西新町遺跡F地区第2号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4) ……	147

Fig. 132	西新町遺跡F地区第3号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	148
Fig. 133	西新町遺跡G地区第1号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)	149
Fig. 134	西新町遺跡G地区第1号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)	150
Fig. 135	西新町遺跡G地区第3号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	150
Fig. 136	西新町遺跡H地区第2号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	151
Fig. 137	西新町遺跡H地区第3号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)	152
Fig. 138	西新町遺跡A地区第1号土壇出土土器 (縮尺1/4)	157
Fig. 139	西新町遺跡A地区第3号土壇出土土器 (縮尺1/4)	158
Fig. 140	西新町遺跡C地区第1号土壇出土土器 (縮尺1/4)	159
Fig. 141	西新町遺跡C地区第3号土壇出土土器 (縮尺1/4)	160
Fig. 142	西新町遺跡E地区第7号土壇出土土器 (縮尺1/4)	160
Fig. 143	西新町遺跡H地区第2号土壇出土土器 (縮尺1/4)	160
Fig. 144	西新町遺跡C地区第2号土壇出土土器 (縮尺1/4)	161
Fig. 145	西新町遺跡C地区第10号甕棺墓出土只輪の実測図 (縮尺1/2)	163
Fig. 146	西新町遺跡C地区第19号甕棺墓出土の銅剣の切先 (上・実寸大) 西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土の銅剣の銚型 (下・実寸大)...	165
Fig. 147	西新町遺跡竪穴式住居跡出土の鉄器.....	166
Fig. 148	西新町遺跡出土の石錘・土錘 (縮尺1/2)	167
Fig. 149	西新町遺跡出土の砥石 (縮尺1/2)	168
Fig. 150	防塁前の中世木棺墓出土の遺物 (縮尺1/3)	169
Fig. 151	西新町遺跡包含層出土の土器 (縮尺1/4)	170

付図. 1	西新町遺跡遺構配置図 (縮尺1/300)
付図. 2	西新町遺跡出土土器編年図1 (縮尺1/8)
付図. 3	西新町遺跡出土土器編年図2 (縮尺1/8)
付図. 4	西新町遺跡出土土器編年図3 (縮尺1/8)
付図. 5	西新町遺跡出土土器編年図4 (縮尺1/8)

表 目 次

Tab. 1	地下鉄路線内遺跡一覽……………	4
Tab. 2	西新町遺跡壘棺墓の觀察表 1 (第 1 ~ 5 号壘棺墓) ……	47
Tab. 3	西新町遺跡壘棺墓の觀察表 2 (第 6 ~ 13 号壘棺墓) ……	48
Tab. 4	西新町遺跡壘棺墓の觀察表 3 (第 14 ~ 22 号壘棺墓) ……	49
Tab. 5	西新町遺跡壘棺墓の觀察表 4 (第 23 ~ 30 号壘棺墓) ……	50
Tab. 6	西新町遺跡 A 地区堅穴式住居跡觀察表……………	60
Tab. 7	西新町遺跡 B 地区堅穴式住居跡觀察表……………	65
Tab. 8	西新町遺跡 C 地区堅穴式住居跡觀察表……………	68
Tab. 9	西新町遺跡 D 地区堅穴式住居跡觀察表……………	74
Tab. 10	西新町遺跡 E 地区堅穴式住居跡觀察表……………	81
Tab. 11	西新町遺跡 F 地区堅穴式住居跡觀察表……………	83
Tab. 12	西新町遺跡 G 地区堅穴式住居跡觀察表……………	86
Tab. 13	西新町遺跡 H 地区堅穴式住居跡觀察表……………	88
Tab. 14	西新町遺跡 A 地区第 1 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	89
Tab. 15	西新町遺跡 A 地区第 4 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	91
Tab. 16	西新町遺跡 A 地区第 5 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	91
Tab. 17	西新町遺跡 A 地区第 6 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	92
Tab. 18	西新町遺跡 A 地区第 7 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	93
Tab. 19	西新町遺跡 A 地区第 11 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	95
Tab. 20	西新町遺跡 B 地区第 1 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	96
Tab. 21	西新町遺跡 B 地区第 4 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	97
Tab. 22	西新町遺跡 B 地区第 7 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	97
Tab. 23	西新町遺跡 B 地区第 6 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	98
Tab. 24	西新町遺跡 C 地区第 1 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	99
Tab. 25	西新町遺跡 C 地区第 2 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	100
Tab. 26	西新町遺跡 C 地区第 3 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	100
Tab. 27	西新町遺跡 C 地区第 4 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	106
Tab. 28	西新町遺跡 C 地区第 5 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	106
Tab. 29	西新町遺跡 C 地区第 7 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	107
Tab. 30	西新町遺跡 C 地区第 10 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	107
Tab. 31	西新町遺跡 C 地区第 9 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	108
Tab. 32	西新町遺跡 D 地区第 1 号堅穴式住居跡出土土器觀察表……………	109

Tab. 33	西新町遺跡 D地区第 2 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	113
Tab. 34	西新町遺跡 D地区第 3 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	114
Tab. 35	西新町遺跡 D地区第 4 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	117
Tab. 36	西新町遺跡 D地区第 5 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	118
Tab. 37	西新町遺跡 D地区第 6 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	120
Tab. 38	西新町遺跡 D地区第 7 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	121
Tab. 39	西新町遺跡 D地区第 8 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 1	121
Tab. 40	西新町遺跡 D地区第 8 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 2	123
Tab. 41	西新町遺跡 D地区第 8 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 3	124
Tab. 42	西新町遺跡 D地区第 9 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	129
Tab. 43	西新町遺跡 D地区第 10 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	130
Tab. 44	西新町遺跡 D地区第 11 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	131
Tab. 45	西新町遺跡 D地区第 13 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 1	133
Tab. 46	西新町遺跡 D地区第 13 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 2	134
Tab. 47	西新町遺跡 E地区第 14 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	135
Tab. 48	西新町遺跡 D地区第 16 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 1	136
Tab. 49	西新町遺跡 D地区第 16 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 2	138
Tab. 50	西新町遺跡 D地区第 17 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 1	138
Tab. 51	西新町遺跡 D地区第 17 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 2	139
Tab. 52	西新町遺跡 E地区第 1 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	140
Tab. 53	西新町遺跡 E地区第 2 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 1	140
Tab. 54	西新町遺跡 E地区第 2 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 2	143
Tab. 55	西新町遺跡 E地区第 3 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	143
Tab. 56	西新町遺跡 E地区第 4 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 1	143
Tab. 57	西新町遺跡 E地区第 4 号竪穴式住居跡出土土器觀察表 2	145
Tab. 58	西新町遺跡 F地区第 1 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	145
Tab. 59	西新町遺跡 F地区第 2 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	146
Tab. 60	西新町遺跡 F地区第 3 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	147
Tab. 61	西新町遺跡 G地区第 1 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	148
Tab. 62	西新町遺跡 G地区第 3 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	150
Tab. 63	西新町遺跡 H地区第 2 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	151
Tab. 64	西新町遺跡 H地区第 3 号竪穴式住居跡出土土器觀察表	153
Tab. 65	西新町遺跡 土壇觀察表 1	154

Tab. 66	西新町遺跡土壇観察表 2	155
Tab. 67	西新町遺跡土壇観察表 3	156
Tab. 68	西新町遺跡土壇観察表 4	157
Tab. 69	西新町遺跡A地区第1号土壇出土土器観察表	157
Tab. 70	西新町遺跡A地区第3号土壇出土土器観察表	159
Tab. 71	西新町遺跡C地区第1号土壇出土土器観察表	159
Tab. 72	西新町遺跡C地区第3号土壇出土土器観察表	159
Tab. 73	西新町遺跡E地区第7号土壇出土土器観察表	160
Tab. 74	西新町遺跡H地区第2号土壇出土土器観察表	160
Tab. 75	西新町遺跡C地区第2号土壇出土土器観察表	161
Tab. 76	西新町遺跡甕棺墓検出人骨の観察表	171

図版目次

巻頭写真	西新町遺跡出土の甕棺(上)
	「西新町式土器」(下・D地区第3号竪穴式住居跡一括出土、高坏のみ第4号竪穴式住居跡出土)
PL. 1	(上) 甕棺墓遠景・(下) 甕棺墓近景
PL. 2	(上) 第1号甕棺墓と人骨・(下) 第12号甕棺墓と人骨
PL. 3	(上) 第10号甕棺墓と人骨・(下) 第10号甕棺墓の人骨と只輪
PL. 4	(上) 第11号甕棺墓出土の人骨・(下) 第12号甕棺墓出土の人骨
PL. 5	(上) 第13号甕棺墓と人骨・(下) 第19号甕棺墓全景
PL. 6	第19号甕棺墓と銅剣の切先(矢印)
PL. 7	1. 第1号甕棺(上・下)・2. 第2号甕棺・3. 第3号甕棺(上・下) 4. 第4号甕棺(上・下)・5. 第5号甕棺(上・下)
PL. 8	6. 第6号甕棺(上・上・下)・7. 第7号甕棺・8. 第8号甕棺 9. 第9号甕棺(上・下)・10. 第10号甕棺(上)
PL. 9	10. 第10号甕棺(下)・11. 第11号甕棺(上・下) 12. 第12号甕棺(上・下)・13. 第13号甕棺(上・下)・14. 第14号甕棺 15. 第15号甕棺(上)
PL. 10	15. 第15号甕棺(下)・16. 第16号甕棺(上・下) 17. 第17号甕棺・18. 第18号甕棺(上・下) 19. 第19号甕棺(上・下)・20. 第20号甕棺(上)

- PL. 11 20. 第20号堊棺(下)・21. 第21号堊棺
22. 第22号堊棺(上・下)・23. 第23号堊棺
24. 第24号堊棺(上・下)
25. 第25号堊棺(上・下)
- PL. 12 26. 第26号堊棺(上・下)・27. 第27号堊棺(上・下)
28. 第28号堊棺(上・下)
29. 第29号堊棺(上・下)・30. 第30号堊棺(上)
- PL. 13 第30号堊棺(下)・第19号堊棺墓内出土銅剣の切先(表・裏)
第10号堊棺墓内人骨の副葬貝輪(表)
第10号堊棺墓内人骨の副葬貝輪(裏)
- PL. 14 A地区第5号竪穴式住居跡・A地区第11号竪穴式住居跡
- PL. 15 A地区第1号土壇・A地区第3号土壇
- PL. 16 B地区第1号竪穴式住居跡・第1号土壇・第1号堊棺墓
B地区第4号土壇
- PL. 17 C地区第3号竪穴式住居跡・C地区第9号竪穴式住居跡
- PL. 18 D地区第1・15号竪穴式住居跡・D地区第2・3号竪穴式住居跡
- PL. 19 D地区第3・11号竪穴式住居跡・D地区第3号竪穴式住居跡
- PL. 20 D地区第3号竪穴式住居跡・D地区第10号竪穴式住居跡
- PL. 21 D地区第4号竪穴式住居跡・D地区第4号竪穴式住居跡
- PL. 22 D地区第13号竪穴式住居跡・D地区第14号竪穴式住居跡
- PL. 23 F地区第1号竪穴式住居跡・F地区第1号竪穴式住居跡かまど
- PL. 24 F地区第1号竪穴式住居跡かまど断面・F地区第2号竪穴式住居跡
- PL. 25 G地区第1号竪穴式住居跡・G地区第3号竪穴式住居跡
- PL. 26 H地区第3号竪穴式住居跡・H地区第3号竪穴式住居跡
- PL. 27 A地区第1号竪穴式住居跡出土土器・A地区第11号竪穴式住居跡出土土器
B地区第1号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 28 C地区第1号竪穴式住居跡出土土器・C地区第2号竪穴式住居跡出土土器
C地区第3号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 29 C地区第3号竪穴式住居跡出土土器・D地区第1号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 30 D地区第3号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 31 D地区第4号竪穴式住居跡出土土器・D地区第5号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 32 D地区第6号竪穴式住居跡出土土器・D地区第7号竪穴式住居跡出土土器
D地区第8号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 33 D地区第8号竪穴式住居跡出土土器

- PL. 34 D地区第8号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 35 D地区第11号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 36 D地区第13号竪穴式住居跡出土土器・D地区第16号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 37 D地区第17号竪穴式住居跡出土土器・E地区第2号竪穴式住居跡出土土器
E地区第4号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 38 G地区第1号竪穴式住居跡出土土器
H地区第2号竪穴式住居跡出土土器
- PL. 39 H地区第3号竪穴式住居跡出土土器・H地区第2号土壇出土土器
F地区第3号竪穴式住居跡出土土器・A地区第3号土壇出土土器
- PL. 40 F地区第1号竪穴式住居跡出土土器・全体(左)・部分(右)
E地区第3号竪穴式住居跡出土土器・正面より(上左)・上より(上右)
外面の調整拡大(下)
- PL. 41 D地区第8号竪穴式住居跡出土の銅製の鍔型
覆土中出土の鉄器・鉄斧及び鏡
- PL. 42 C地区第9号竪穴式住居跡出土の石鏃
D地区第16号竪穴式住居跡出土の土鏃
拵土中より検出された石鏃
D地区第17号竪穴式住居跡出土の甕形土器の底部
D地区第16号竪穴式住居跡出土の砥石
D地区第17号竪穴式住居跡出土の砥石
- PL. 43 中世木棺墓出土の青磁皿
中世木棺墓出土の土師器の皿及び鉄製の留釘
E地区第2号竪穴式住居跡出土の陶質土器



I . 高速鉄道關係埋藏文化財概要

1. 高速鉄道関係埋蔵文化財概要

2

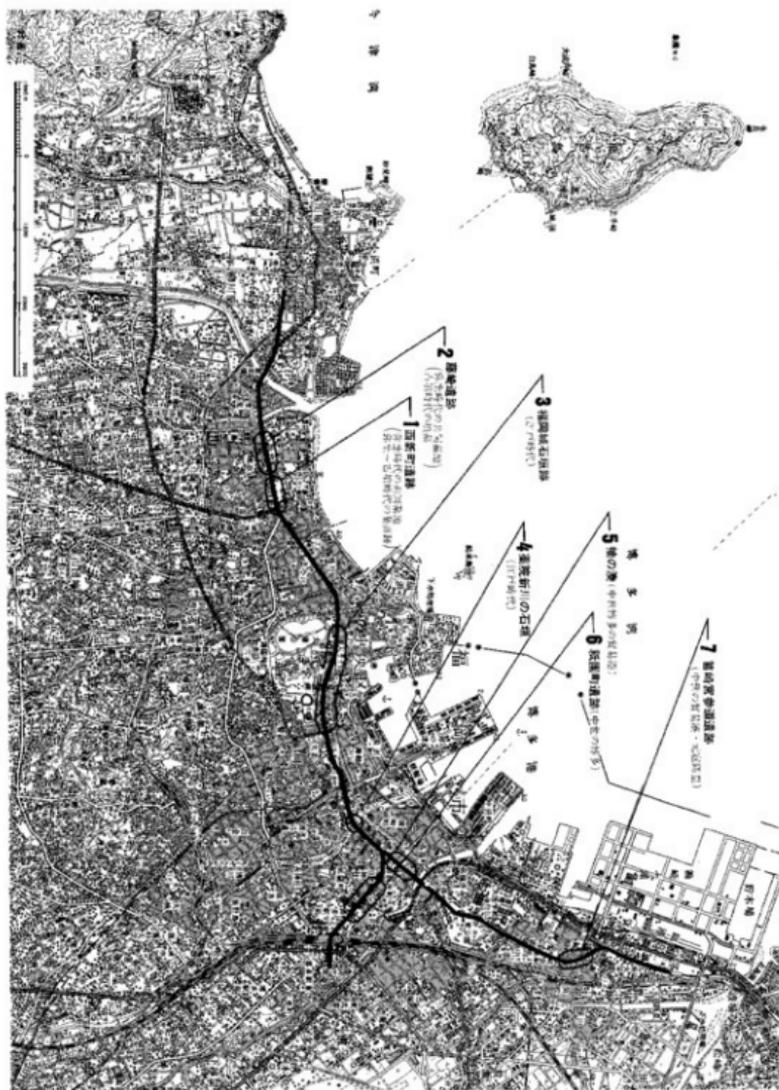


Fig. 1 高速鉄道路線内遺跡地図 (縮尺 1/5万)

第1章 調査に至る経緯

福岡平野は、太古より地理的優位から、大陸の文化を一早く受け入れ、歴史的に活気のある地方として知られる。そして又、その文化流入の窓口である博多湾の海岸線は多くの先学が伝えたとおり、遺跡の宝庫でもある。

その遺跡の宝庫に地下鉄が侵入するという。文化財を愛する人は「千載一遇」といい、新交通システムを一日も早く確保しようとする人は少々迷惑顔である。

文化財の調査は紆余曲折を経て、今日に至っているが、現在は交通局の御理解も得、調査も順調である。以下、調査に至る経緯と調査進行を過去の暦を繰りながら記述する。

昭和49・50年度一地下鉄工事に支障ある埋設管（電信・電話のケーブル、水道管、ガス管、下水道管等）の位置確認工事の立会調査を行う。それと併行して教育委員会と高速鉄道局とで埋蔵文化財の調査について協議がもたれる。協議結果は諸状況から調査体制を整える事は困難であり、工事中発見の埋蔵文化財は教育委員会文化課に届け出る事に決着する。

昭和51年4月一地下鉄工事開始。

昭和51年5月一荒戸工区において、福岡城内堀の石垣を発見する。

昭和51年6月一福岡城石垣を含め、他の周知される遺跡の調査について、両者で再協議される。結論として、3名の文化財専門職員の新規採用を条件に、教育委員会文化課に「地下鉄路線内遺跡調査班」を設けることに落着する。

昭和51年8月一工事に先行して西新町遺跡（修猷館工区）の試掘調査に入る。調査職員2名。

昭和51年9月一3名の文化財専門職員を新規採用する。調査する職員を4名に増やす。

昭和51年11月一修猷館工区の試掘調査終了。調査経験から、遺跡の調査で活用できる工事工程・工法（土留用連続壁やガイドウォール等）の地下鉄工事は遺跡調査に先行する場合もある事を両者で確認する。以下今日までは下表を参照されたい。

調査以来4年有余の歳月が流れ、調査は5年目に入った。調査は「千載一遇」を叫んだ人々の目に充分堪え得る内容と量を提供している。当初の調査予定からして、調査消化率は80パーセント強である。峠を越してあと一息である。しかし調査班の後に託された任は、膨大でしかも内容ある遺跡の調査結果を、現在・未来の人々に伝える遺物整理と報告書作成であり、多難な状況が予想される。

Tab. 1 地下鉄路線内遺跡一覧

遺跡名	所在地	築造時期	遺物	調査時期	調査面積	発掘日数 (1日単位)	備考
藤原遺跡	西戸崎町西地区	奈良時代	瓦葺き	昭和32年4月 ～昭和33年6月	1,950㎡	280 (130)	
藤原工区	西戸崎町	奈良時代 ～古墳時代	土器・瓦葺き	昭和32年12月 ～昭和33年4月	550㎡	41 (13)	藤原と古墳 町に亘る
西戸崎遺跡	西戸崎町西地区	*	瓦葺き	昭和32年6月 ～昭和32年4月	1,230㎡	28 (13)	
福岡城内、石垣	中央区東戸・大戸町・十橋山地区	江戸時代	城石	昭和32年12月 ～昭和33年4月	1,560㎡	25 (13)	
福岡城東区遺跡(石垣)	中央区東戸	*	武家時代の瓦葺き 瓦葺き	昭和32年3月 ～昭和33年4月	520㎡	14 (13)	
地ノ道	博多区十段町・大坂町・高坂 (旧高坂遺跡)	鎌倉 ～室町時代	中世の瓦葺き	昭和33年11月 ～昭和34年2月	200㎡	5 (1)	
北	博多区十段町・大坂町・高坂	*	中世の博多の瓦	昭和33年11月 ～昭和34年2月	1,820㎡	21 (13)	
東	博多区十段町	*	*	昭和33年2月 ～昭和34年12月	4,300㎡	107 (13)	
南	博多区十段町	鎌倉 ～徳川時代	中世の博多の瓦	昭和33年11月 ～昭和34年2月	4,500㎡	122 (13)	
博多駅遺跡	博多区博多駅前	明治時代 ～大正時代	瓦葺き	昭和33年12月	24,105㎡		
天神地区	中央区天神地区	鎌倉 ～昭和時代	瓦葺き	昭和33年4月	451,000㎡		
計					67,830㎡	426 (130)	

第2章 組織の構成

地下鉄路線内の遺跡の調査は交通局の委託を受け、教育委員会が行っているものである。又、調査した結果は膨大にして内容豊富な事が予想され、調査班の浅い経験からくる価値判断能力の限界が考えられたので、多くの学識者を指導委員として、委嘱している。発掘調査には市内各地の方々に参加していただき、そして北は北海道から南は鹿児島にいたるまで、各地の学生に調査の補助をお願いした。紙面の制約から各遺跡の報告書に記載する事でお許し願いたい。

なお、調査体制の整備時に御尽力頂いた古村澄一氏(現在文化庁文化財保護部長)・福岡城の石垣保存の折御配慮願った戸田成一氏(現在文部省教育局特殊教育課長)・事務的な折衝・工程調整等で御迷惑をおかけした清水義彦氏(現在福岡市民会館長)・井上綱紀氏(現在財政局調達課長)・三宅安吉氏(福岡市埋蔵文化財センター所長)・国武勝利氏(現在塩原区画整理部)・木村義一氏(現在教育委員会総務部)には記して感謝の意を表したい。

また、福岡市交通局におかれては、福岡城の石垣保存や工事工程などで、多大な御配慮を頂いた原一夫氏(現在福岡池組大坂本店営業部長)・野田薫一氏(現在教育委員会総務部長)・平山幸生氏(現在都市計画局公園緑地部長)・本田修一氏(現在国鉄)の各氏には、記して感謝申し上げると共に、それぞれの新しい分野での御活躍を、心より期待する次第である。

調査指導委員

考古学

鏡山 猛(九州歴史資料館長)

森貞次郎(九州産業大学教授)

杉原荘介(明治大学教授)

乙益重隆(国学院大学教授)

岡崎 敬(九州大学教授)

賀川光夫(別府大学教授)

横山浩一(九州大学教授)

大塚初重(明治大学教授)

	藤田 等 (静岡大学教授)	白木原和美 (熊本大学教授)
	田中 琢 (奈良国立埋蔵文化財センター長)	
	西谷 正 (九州大学助教授)	三島 格 (元福岡市歴史資料館長)
	藤井 功 (福岡県教育委員会文化課長)	
日本史	筑紫 豊 (福岡県文化財保護専門委員・故人)	
	三宅安太郎 (福岡県文化財保護専門委員)	
	田村圓澄 (九州歴史資料館長・熊本大学教授)	
	川添昭二 (九州大学教授)	
人類学	永井昌文 (九州大学教授)	
岩石学	種子田定勝 (元九州大学教授)	
水工土木学	山内豊聡 (九州大学教授)	
地質学	浦田英夫 (九州大学教授)	
建築学	土田允義 (九州大学助教授)	
歴史地理学	日野尚志 (佐賀大学助教授)	

なお、気さくに調査員を御指導いただいた筑紫豊先生は昭和57年1月1日御逝去された。慎んで、心より御冥福をお祈りすると共に、先生の文化財行政に対する御遺志に応えるよう、今後とも、努力する覚悟である。

福岡市交通局一調査委託・協力

交通事業管理者	大石秀雄		
理事	末藤 洋	松原弘和 (技術部取扱)	
総務部長	石橋秀敏	総務部長 松本 健	
		経理課長 岡部隆浩	
工事部長	米澤福徳	工事課長 豊島 悟	
		第1工務所々長 永松正典	
		第2工務所々長 津高正高	
技術部		計画課長 石田慶男	
		設計課長 静 純一	

なお、現場調整・予算計上の事務取扱いは計画課第1係の次の人で行なわれた。

計画第1係長	吉川豊治
	石部 忠

調査協力団体

各遺跡の調査にあたっては遺跡にかかる1区を受注された会社に御協力願った。記して感謝申し上げる。

藤崎遺跡 佐藤工業㈱福岡支店 取締役支店長 梅木正二 (藤崎工区)

西新町遺跡	青木建設㈱福岡支店 取締役支店長 前田三男 (防塁工区) 戸田建設㈱九州支店 支店長 粟飯原延胤 (修験館工区)
福岡城石跡	清水建設㈱九州支店 取締役支店長 森井哲也 (荒戸工区) 鴻池組㈱福岡支店 五十嵐章 (平和台西工区) 日本国土開発㈱九州支店 伊藤幸郎 (平和台東工区) 大成建設㈱福岡支店 取締役支店長 里見泰男 (赤坂工区) 梅林建設㈱福岡支店 取締役支店長 平岡義孝 (赤坂工区)
薬院新川石垣	間 組㈱福岡支店 常務取締役支店長 西村重信 (那珂川工区)
袖の湊	大日本土木㈱九州支店 取締役支店長 越山萬作 (呉服町工区)
祇園町遺跡	熊谷組㈱福岡支店 常務取締役支店長 勝元 元 (店屋町工区) 三井建設㈱福岡支店 取締役支店長龍岡一巳 (祇園町工区)
博多駅前遺跡	竹中土木㈱九州支店 長野和郎 (博多駅前工区)

教育委員会—調査主体者

教育長	西津茂美
文化部長	志鶴幸弘
文化課長	甲能貞行
埋蔵文化財第1係長	柳田純孝
事務担当	岡島洋一 古藤国生
調査担当	折尾 学 池崎譲二 浜石哲也 山崎龍雄 (西新町遺跡調査主任)

また塩屋勝利、山崎純男、井沢洋一、力武卓治の各氏には調査初の段階大変お世話になった。

記してその労に感謝申し上げます。

第3章 路線内遺跡の調査概要

藤崎遺跡

明治時代から現在まで、数々の報告が出され、海岸砂丘上に存在する数少ない弥生時代の共同墓地である事が知られている。地下鉄工事に伴う調査結果は過去のデータを裏付けるものであるが、路線周辺部(藤崎バスターミナルや再開発ビル)の調査結果とを併せて考える時、以前にも増して、本遺跡の重要性を私達に認識せしめるものである。弥生時代初期から古墳時代初期(方形周溝墓)まで長時間にわたって利用され、三角縁二神龍虎鏡(明治45年)・方格濠文鏡(大正6年)に、新しく三角縁二神二車馬鏡・珠文鏡・乳文鏡等の銅鏡を副葬品として内蔵する事が判明した。

路線内出土の遺構、遺物の詳細は、昭和56年発行の福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集と照

和57年発行の福岡市同報告書第80集で報告している。

西新町遺跡

戦前、修猷館高校付近より弥生時代の甕棺墓等が発見され、弥生時代終末期の「西新町式土器」として編年される。又昭和48年修猷館高校前のアベニューマンション工事で弥生時代中期の甕棺墓が数基確認されている。

調査は修猷館高校前全域6,000㎡を調査対象として弥生時代中期から終末期までの甕棺墓30基、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての住居跡57軒を検出した。

弥生時代の甕棺墓には副葬品を有するものもある。第10号甕棺墓に南方産ゴホウラ製貝輪が副葬され、第19号甕棺墓には細形銅剣の切先部分が検出され、また第1号甕棺墓からはガラス製小玉が検出されている。編年される型式として、第10号甕棺が須久式土器に、第19号甕棺が立岩式土器に、第

1号甕棺が西新町式土器に比定されると考える。第19号甕棺の銅剣切先は副葬品として把えるより刺突されたものとして把える方が自然な感じを受ける。他の発見類例を待ちたい。

57軒の住居跡の特徴として、土器を包含する土壌が砂であるが故に、土器の観察が詳しく把握できる。現在、弥生式土器、土師器の範疇にも入れて頂けない「古式土師器」といわれる一群の研究に新しい視点を与えてくれるであろう。その他、タコ壺や石鍾の発見も数多く、砂丘生活者の生活領域を考える上で興味深い。またD地区第8号住居跡より出土の銅剣銚型片も、伴出の土器が利用された時期の定説に相違するが、砥石として再利用されており、問題はなさそうである。詳細の報告は後章を参照されたい。

福岡城石垣（内堀の外壁石垣）

奈良・平安時代にかけて大宰府鴻臚館が城内にあった。城の中にある平和台球場建設の時、多量の古代瓦と共に越州窯系・龍泉窯系磁器が数多く発見された。現在福岡市立歴史資料館に収納されている。



Fig. 2 西新町遺跡（弥生時代甕棺墓）



Fig. 3 西新町遺跡（古墳時代住居跡）

本城の築城は黒田如水・長政父子でなされるが、本城築城以前は名島城（東区名島）に筑前52万石の大名として居城していた。しかし時の情勢からして名島は矛盾多き城と判断した黒田父子は、福崎の地（旧那珂郡警固村・現福岡城）に新城を構築した。新福岡城構築から現在までを年譜を追記述する。

慶長6（1601）年、朝鮮の晋州城（韓国慶尚南道晋州市）をモデル（異説を唱える人もある）に、福崎（旧那珂郡警固村）に新城構築開始。慶長12（1607）年、新城と城下町を完成し、黒田家曾祖父高政の居住地の備前国邑久郡福岡の名をとり「福岡城」と名づける。明治43（1910）年、第13回九州沖繩8県連合共進会が開催され、道路拡張と市内電車（旧福博電車、元西鉄電車）敷設のため、福岡城内堀の北側石垣が埋められる。昭和32（1957）年、福岡城は国の「史跡」に指定される。昭和51（1976）年、

地下鉄工事に伴う堀の石垣の調査を始め、同52（1977）年、調査を終了する。調査で確認された石垣線は450mであるが調査対象は延1km（荒戸・平和台西・平和台東・赤坂の各工区にかかる）にも及び、限られた調査員故に、受注された工事関係者との工程調整の日に明け暮れたが、調査開始の時定めた目的である石垣線の復元、石積の技術、岩石の分析等をそれぞれ充たした結果を得ている。文献では、堀幅50m、深さは地表3.5m、石垣の原材料を西区唐泊の玄武岩に求めたとあるが、それを今回の調査は裏付けた。しかし石材は玄武岩以外にも相当数含まれ、搬出場所は他にも求めねばならないであろう（元寇防塁転用との御教示を指導委員より得ている）。

議論沸騰した石垣保存については、赤坂地区の石垣が保存状態良好を理由に、屋体をつけ現状保存がなされており、希望者には公開されている。

調査の報告書は、後日刊行する予定である。



Fig. 4 福岡城の濠の石垣



Fig. 5 福岡城の濠の石垣
(赤坂工区公開保存部分)

薬院新川の西岸石垣

前述の石垣と同様、福岡城になくはならない石垣である。櫓形門につながる石垣で、福岡の武家街と中世から財を貯えてきた博多町人の街とを分けた石垣として、地元では知られている。江戸期には博多の街から城下が望めないように高く築かれていたが、明治になって現在の路面にまで下げられたものである。本地点より南側の石垣は保存整備され旧福岡県庁の東側の石垣として活用され、本地点北側は東急ホテルの東側に埋められていると聞くが定かではない。

調査結果から、城の内堀石垣に比べて堅固で、東側の侵攻に対しての十分な配慮がうかがえる。本城には外堀は存在しないが、博多湾や薬院新川等の河川がその任を果たしたものと考えられる。

なお本地点検出の石垣は、協議により、工事の時撤去し、隧道完成後、旧状に復元し保存する事にした。

博多の街の調査

中世の博多、それは「他の時代に類のない国際性をもち、東アジアにおける日本の役割を代弁する存在であった。平安末期から戦国期に至る4世期半の間はすこぶる活気に満ち、開放的で、国際色豊かな時代であった。」しかし「中央権力や領城権力の権益争奪の対象として、戦乱を重ね、荒廃をくりかえし、往時を再現する手掛りの多くを知っている。」(川添昭二「中世の博多」朝日新聞西部本社企画部編「古代を掘る」所収)その失われた中世博多の手掛りを埋もれた遺跡に求める事が、現在も続けられる発掘調査班に託された使命である。

古代律令体制健在の頃、博多地方の対外交易は大宰府鴻臚館(現在の福岡城内平和台球場バックスクリーン附近。出土品は福岡市立歴史資料館にある)においてなされていた。それが平安時代も末期になると律令体制がゆらぎ、社寺・国衙・荘園などを平氏が家人化し、博多湾沿岸の社寺を支配したといわれている。そこで平氏は対外交易を権力的に統括する意味であろうか、現在の呉服町交差点附近を「袖の湊」として整備し、貿易港にしたと伝えられる。この湊を中心として北は博多湾に平行して走る長浜通り、南は馬場新町交差点と住吉神社を結ぶ通りまで、西は那珂川と博多川、東は御笠川の上流である石堂川附近(江戸時代新設)までが中世博多の街であったとも指摘される。

また鎌倉期、博多の宗教文化は、天台・真言の旧仏教と、香椎、宮崎、楠田、住吉等の大社に、聖福寺、承天寺、勝福寺、顕孝寺などの臨濟禅が受け入れられた。これらの社寺がまた対



Fig. 6 福岡城薬院新川の石垣

外貿易の拠点にもなっていた。

中世の博多で忘れてはならない歴史事実には蒙古襲来すなわち文永・弘安の合戦がある。蒙古が博多を襲撃の目的として選んだのは恐らく、貿易商人の口問きと長年の対外交渉の経験からであろう。蒙古の大軍を防備する為博多湾岸に延々と元寇防塁が築かれている事も周知の事である。合戦後、鎌倉幕府は防衛体制を整備することと、九州で裁判を専決する機関として、博多に鎮西探題（『太平記』、『博多日記』、『九州軍記』、『筑前国統風土記』などの記述からして現在の櫛田神社周辺にあったのだろうか）をおいた。形式的には政教の中心地は大宰府にあったが、九州の政治、司法、軍事の最高機関が博多に移ってきたのである。

博多の街の歴史を考える時、日本における対外貿易の拠点という事もあって、忘れてはならない事実には中国人の存在がある。1195年、宋西禅師は聖福寺を開山するが、鎌倉幕府に対する上申書で「宋人百堂」の跡地に仏寺建立を願い出ている。この事実は聖福寺建立時のみならず、博多の発生から全盛期までの対外交渉に中国人の活躍があり、そしてかれらの住居が群をなしていた事を想像するにたかたかでないであろう。

文献上に述べられた中世博多の概略は先述した如くであるが、過去に見えられた考古学的資料は元禄11年（1698年）、享保元年（1716年）、同8年（1723年）、多量の金銀器・金銀貨・銀銚等が壺に収められた状態で発見され、更に宝永年間と宝暦8年（1758年）、朱椀50個、瓷器27個などが発見されている（『石城志』、『筑前国統風土記』）。更に加えて戦後検出された越州窯系の褐釉水注は地元衆目の知るところである（岡崎敬「福岡市“博多”聖福寺発見の遺物について」九州文化史研究所紀要所収）。また昭和27年、袖の湊と推定される呉服町交差点横で東邦生命ビルの建設工事が行なわれた折、棧橋らしき遺構と、深さ6～7mの砂層より多数の青磁やその他の遺物が発見されている（奥村武「博多袖の湊“博多大丸百貨店の地”」文化財発掘報告書 福岡県教育委員会文化課蔵）。目を博多湾海中に移せば、陶磁器片が多数引き上げられており、その中墨書が見うけられる「張綱」銘の天目碗（張は所有者を綱は中国輸送集団を意味するといわれる）は人々の知るところである。そして又、蒙古礎石と称される巨石が湾内や旧海岸砂丘下より20数例報告されており、現在も旧海岸線に近接する地帯の再開発ビル工事の現場より引き揚げられている。（柳田純孝「今津元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財報告書・昭和44年）。これら過去の報告はいずれもが、意図された調査結果ではなく、それ故に、遺構の発見までには至っていない。そのような点で、緊急調査とはいえ、中世博多発掘調査の発端となった地下鉄の調査をはじめ周辺の開発に伴う調査に、文献・考古を問わない先学の熱い視線が向けられている。

昭和52年11月、地下鉄路線内における中世博多の調査は始められた。今年で5年目である。それと併せて、地下鉄における調査の成果が膨大なもの故に、文化財行政として路線外も注目せざるを得なくなり、現在再開発行為に伴う調査も継続中である。そのような状況下で掘り出

した資料を5年たった今もゆっくり手にすることは許して貰えない。自信のないところであるが、今回は概略を申し述べることにし、舌足らずは将来に期するところである。

博多湾は、那珂川を中心に東の志賀島に連なる中道と西の糸島半島によって、あたかも鶴が大きく羽ばたき、海を包んでいるような感じを人々に与え、玄海の荒波を和らげ、古代より現代まで、天然を利用した良港をその中にたたかき抱擁してきた。中世博多の街は、湾の中央部に位置する砂丘上に形成されたもので、那珂川と石堂川（御笠川の上流）とに挟まれ、現在の博多駅の北西域一帯に在ったと考えられている。現在の博多の街並は、主軸を西へ38度にとった、ほぼ碁盤目の状態を呈している。現在の街並は戦国時代の後荒廃した街を見、心を動かした豊臣秀吉が復興整備させ、今の世まで伝わっているものである。

中世博多の考古学的調査の発端となった福岡市の地下鉄工事は、この博多の街の真ん中を、オープンカット工法で「T」字型に走り抜ける。東西の路線は国道202号線（旧電車通り）を、南北の路線は大博通りの呉服町付近から博多駅方向（一部トンネルに似たシールド工法の為調査不能）に走る訳である。

調査の対象地域はこの「T」字型路線全てであるが、国道202号線を東西に走る所は想定「袖の溝」であるが故に、全面を掘る訳にもいかず、その路線を横断するようなトレンチ区を任意に三本設ける事とした。以下調査地点ごとに、その成果を概略申し述べる。

呉服町（推定・袖の溝）

国道202号線に平行して東西に走る路線内に南北に幅5mの調査トレンチ3本を任意に設定した。調査期間は工事と並行する事も手伝って、昭和53年9月から昭和54年5月までの月日を要し



Fig. 7 呉服町交差点



Fig. 8 呉服町遺跡の作業風景

た。調査結果は濠と思われる資料の検出は出来なかったが、先述した奥村武氏の報告した層序を裏付けるものを得たが、呉服町交差点に設定したトレンチ北端で、真北に方位を定める溝が、小石で区画した状態で検出された。溝内からは11～12世紀と考えられる青磁碗を出土している。この事実は、呉服町交差点付近は「袖の濠」ではなく生活の場を示して興味深い。その他、地下6m（標高マイナス3m）の地点より、古墳時代のタコ壺が数個、貝殻を付着した生々しい状態で出土し、又地下3m位の地点の包含層より、奈良時代のもと思われる遺物を検出している。

紙園町遺跡（御供所町・馬場新町）

東長寺（大同元年806年、僧空海の創建による真言密教の名刹）の前から南の方向へ約400m全面を調査対象とし、面積は約6,000㎡である。成果は、特筆すべき遺構として、大小深浅の様々な溝があって、現在の街並（太閤の街割）に並行するもの9条、真北に方位を定める、東西南北の溝27条があげられる。各溝の時期は整理を待つとしても、中世の街の草創期を考える上で重要である。又、墓塚とおもわれる遺構が500を下らない数で検出され、その形態も、隅丸長方形のもの、その上に小石を配するもの、円形のもの、円形のものの中で火葬しそのまま埋葬するもの、その上に小石を配するもの、火葬の後集骨して、壺に納めるものなどである。

又、火葬人骨で驚かされたものでは約110体の首級のみ（九州大学医学部・永井教授の御指摘による）が火葬された人骨群であろう。これは余りにも『博多日記』の記述に付合したが為、南北朝菊地一族の悲惨な最期ではないかと騒がれている。その他の遺構としては100を下らない井戸がある。それらは奈良時代から近世までの井戸の変遷が辿れておもしろい。又、建物の跡としては柱穴があげられるが組織的には把握できず残念なところである。遺構として付け加えるに、馬の埋葬例があ



Fig. 9 サコナラ路面電車

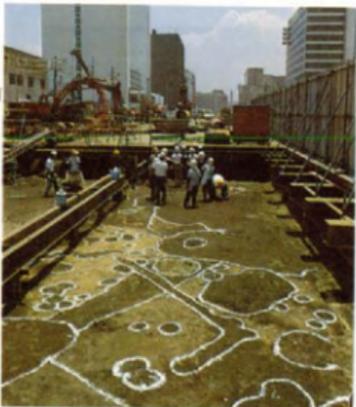


Fig. 10 紙園町遺跡の調査風景

る。恐らく10体は下らないと考えるが、1体は手筈充分なものである。

遺物は大陸系の青磁・白磁、中国鑄造古銭（唐代の開元通宝から北宋代の宣和通宝まで出土）、土師器皿、石鍋、銅器など大量である。なかでも青・白磁は10万点をはるかに超えるものである。青・白磁のもので調査中に目に触れたものを列記すると以下のようになる。



Fig. 11 店屋町遺跡出土の輸入陶磁器

白磁……碗・皿を主とし四耳壺・水注・瓶・小壺形の合子を含む。

青磁……龍泉窯系のもも含めて皿・碗など優品な感じのものや、合子・燈明皿なども含む。

雑軸陶器……黄軸盤で広・細縁の鉄絵のあるものが多い。又同形の緑軸のものがある。黄軸の深鉢も含まれる。

褐軸陶器……水注・瓶・甕・鉢・皿の水堊級の大器の破片

その他……天目茶碗・朝鮮李朝期の粉青沙器（象嵌で高麗青磁の退化形態）・安南（ヴェトナム）の陶磁器で、軸下黒彩のもの。

それらの陶磁器の底部には墨で、花押状や梵字状の文字・人名・数字などが書かれたものも数多く出土している。その中でも「丁綱」銘入りの磁器が数十例ある。これは先に触れた、博多湾海中出土の「張綱」銘の天目碗が意味するところと同様、興味あるところである。その他の遺物としては、不動明王と思われる粘土質の塑像・滑石製鍋やその再加工品、そして土馬らしきものがあげられる。

以上が中世に関する遺構、遺物であるが、弥生時代の甕棺や古墳時代の石棺、土壘墓、そして住居跡なども中世遺構の削平をまぬがれ、微かに残存する。この事實は、中世博多が忽然と現われたものではなく、歴史的蓄積を前提としていることを示すものであろう。

博多駅前

駅前300 mは河砂で占められていることが調査により確認された。このことは中世博多の街の南限を示しているといえよう。

地下鉄関係の調査成果は先述の如くである。地下鉄の調査と並行して博多市街の再開発関係の調査も行なっている。東長寺・万行寺境内、冷泉町3ヶ所、祇園町1ヶ所を既に調査し、今

後も次々に開発申請が提出され、忙殺の憂き目が予想される。これらの調査の成果と各遺構の考察を、幅のスペースの制約から述べられない事を残念に思い乍ら、この稿は閉じ、将来に期することとする。

今後の調査

昭和57年3月現在、路線内に予定された発掘面積に対する既発掘面積は90パーセントである。残された調査地点は馬出・宮崎宮参道地区となっている。

なお、博多駅南は弥生時代から古墳時代の集落址が考えられたが、予想された古代の微高台地は発見できず、河川の氾濫源の発見で終った。馬出・宮崎宮参道の遺跡は元寇防塁と宮崎宮を中心とした門前のにぎわいを発見できればと考えている。昭和40年代に今津・生の松原・西新地区までの元寇防塁の調査は学界の英知を集め史跡整備の基礎資料となったが、箱崎地区の防塁発見の折は往時に一步でも接近したいと考えている。なお本地区の防塁構築は薩摩国が行ったとされる。

II. 西新町遺跡の調査

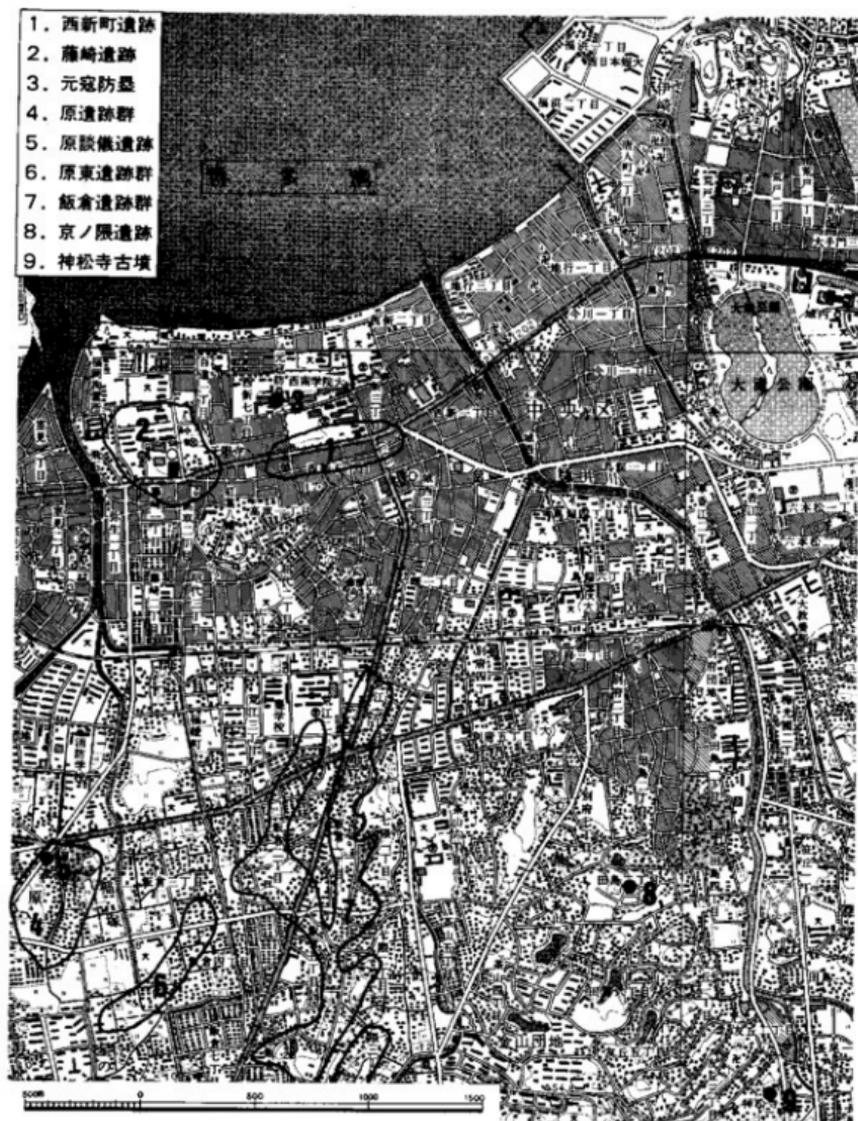


Fig. 12 周辺の遺跡 (1/2万5千)

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 立地

西新町・藤崎遺跡は、福岡市の西南に広がる早良平野の東北端近くの博多湾に面した古砂丘上に立地する。

早良平野は東を平尾丘陵、南を背振山系、西を背振山地から派生した叶岳を経て博多湾に没入する山地によって囲まれている。北は博多湾に面する。この平野の中央を、雷山の東麓に源を発する室見川が、支流を集めて貫流する。早良平野の大部分が、この室見川を中心に、西から十郎川、名納川、金屑川、樋井川などの沖積作用によって形成されたものである。また室見川河口兩岸には愛宕山、五塔山、龜原山などの第3紀の独立丘陵が存在する。

一方、博多湾に面した北部沿岸には、湾内の左転回流によって、弓状砂丘が形成されている。長承から小戸にかけての生ノ松原、室見川河口から樋井川河口にかけての百道松原がそれにあたる。また愛宕山の西側にあたる姪浜にも砂丘の形成をみる。このうち百道松原、姪浜の南端は標高1m位の低地が広がり、古代においてはラグーンをなしていたと考えられる。

西新町・藤崎遺跡は百道松原の南端、現在の西区役所前の国道202号線を中心に、東西約1km、南北約310mにわたって広がると考えられる。現標高を国道202号線上に求めれば、遺跡の西端で約3m、東端で約5mである。遺跡の南には独立丘陵の皿山(栄山) (標高28.8m)が龜原山(標高32.36m)と連なり、北側に向かってやや張り出している。遺跡の北端から北方約70mに元寇防塁が築かれており、さらに約400mで現在の海岸汀線に至る。西側は約170mで金屑川に、東側約500mで樋井川にぶつかる。

西新町・藤崎遺跡で最も低い標高3mの等高線をこの地区で追えば、樋井川河口附近から元寇防塁の少し北側を西に向って延び、室見川河口の手前で南転し、遺跡の西端をかすめ、皿山・龜原山の裾を通り、また樋井川の方へと向う。この中で独立丘陵を除けば龜原山の北側にあたる修猷館高校附近の砂丘が一番高く、ここに西新町遺跡が存在する。そこより北・東・西の三方面に傾斜している。この3mの等高線の南側には標高1m前後しかなく、藤崎遺跡の南側から入江になり、東に向ってラグーンを形成していたことを想定させる。文献には藤崎の西側に明治の初頭頃まで袖ノ松原と称する松林があったこと、また龜原山の東側に慶長年間まで塩浜が作られていたことが記されており、かなり新しい時期まで内海的な様相を示していたのではないかと思われる。(1981年既報告書より)

註 福岡県早良郡役所『早良郡志』大正12年

貝原益軒『筑前国統風土記』元禄16(1703)年

2. 遺跡の発見と研究

これまで弥生終末をさす型式名として「西新式」といわれてきた土器群をセットで捉えることは、弥生時代から古墳時代へと移行する時期の様相を究明するうえで重要である。「西新町遺跡」出土の遺物を分類、編年するにあたり、先学の業績を顧みることが意義深い。以下、研究史を概括し、問題を提起しておきたい。

北部九州における弥生後期の土器編年は、1935年、森本六爾氏によって「東郷式」と提唱された。その後1938年に刊行された「弥生式土器集成図録」と翌39年の解説篇において、後期は「高三瀬式」と「東郷式」とに分けられた。その中で「東郷式」は土器底部が一律に丸底化する特徴をあげ、むしろ土師器としての理解を促している。ここで「高三瀬式」として示されたのは、福岡県三瀬郡高三瀬と福岡市西新町出土の土器であった。

遠賀川立屋敷遺跡の調査において杉原莊介氏は、後期を「伊佐座式」と「水巻町式」とに分けた。基準になった層位は、河川の再堆積ともいわれるが、以後「日本農耕文化の生成」や「弥生式土器集成」にも、この編年名は用いられ、今日まで定着している。

その間、森貞次郎氏は、後期の土器編年を第7～9式に分類した。そのなかで第7式は「高三瀬（伊佐座）式」として後期前半に、第8式は「下大隈式」として後期中頃に比定された。第9式には「雑餉隈式」が使われた。この型式は杉原氏によって「水巻町式」につづくものとして提唱され、後に資料的に不十分との理由から撤回された。「雑餉隈式」にかわるものとして充てられたのが「西新式」であり、杉原氏の「農業の発生と文化の変革」では「西新町（雑餉隈）式」として後期の最も新しい段階に位置づけている。さらに森氏は、弥生後期を「高三瀬」・「下大隈」・「西新」とに三区区分し、「弥生の下限を西新期より下げることはできない」とした。ここに「西新式」は弥生時代終末をさす概念として定着したといえる。論中、森氏は弥生後期後半の土器について言及している。すなわち「下大隈式」は、「二重口縁が内側に反転しつつ弯曲するもので、底部は平底をなす」とした。「西新式」の段階では、「器面の整形にあたってつけられた、横あるいは斜めの敲き条痕が消されずに残存するものがある。短く外弯する口頸部の口縁端部および頸部の突帯にあらく大きな斜めあるいは斜格子の刻目文を入れることは壺形壺形に共通する点であり、底部はほとんど丸底となる」と論じた。しかし「下大隈」・「西新」の両者とも、一群のセットで捉えられていなかったことは、資料の増加に伴い、問題となっていった。「西新式」の指標となった土器は、旧藤崎刑務所内より出土したもので、現在九州大学教養部玉泉館に保管されている（Fig. 13）。出土の状況などは不明で、雑餉隈出土のものと併せて器種の組合せが設定されていた。壺型土器の胴部は卵形を呈し、外弯して伸びる口縁端部と頸部の薄い粘土帯に、ハケの小口によると思われる動目を施している。肩部は張り気味で、底部は丸底化している。壺型土器は器高の中ほどに最大径を有する胴部に

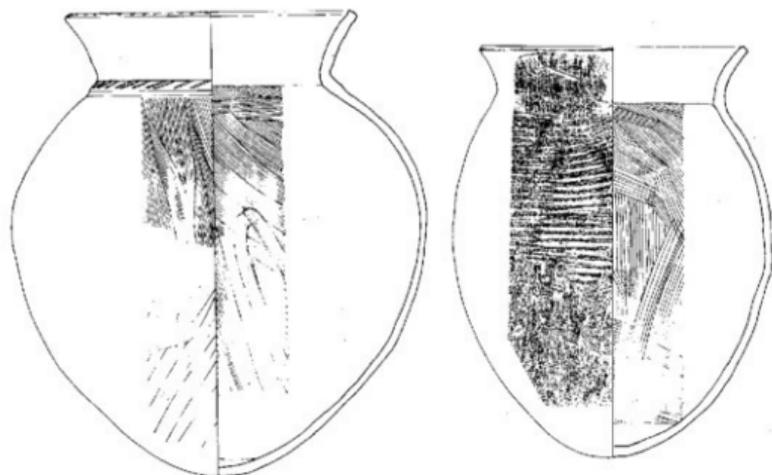


Fig. 13 旧藤崎刑務所内出土の土器（九州大学教養部玉泉館蔵 縮尺1/4）

緩く立ちあがる口縁部を有している。胴部外面には、タタキによる成形の後、ハケによるナデ調整を加えている。口縁部内側はナデ、胴部内面は、ハケが施されており、底部は実測図には表現し難いが、僅かに残っていた。

武末純一氏は、これら二個体の土器について、最古式土師器まで下りうる可能性を指摘しているが、各個体の位置づけについては第4章の論考において述べることにしたい。

60年代の後半までの間、北部九州の弥生後期後半の研究は、「下大隈式」とそれに続く「西新式」という編年が示されたものの、資料的には具体性を欠いていた。

そして弥生終末から古式土師器の時期の一括資料は、筑後平野では「孤塚遺跡」⁽¹⁾において検出されたが、福岡、早良の両平野においては、後の行政調査に委ねられる結果となった。

注

- (1) 1977年度、高速地下鉄道の建設に伴って出土した遺物および従来西新町周辺において出土した資料をさす。
- (2) 森本六爾「考古学」歴史教育講座 第2輯 1935年
- (3) 森本六爾・小林行雄編「弥生式土器集成図録」1938年
小林行雄「弥生式土器集成図録 解説」1939年

- (4) 杉原荘介「遠賀川 筑前立屋敷遺跡調査報告」1943年
- (5) 杉原荘介「日本農耕文化生成の研究」1963年
- (6) 小林行雄・杉原荘介「弥生式土器集成本編1」1964年
- (7) 森貞次郎「日本考古学講座 4」1955年
- (8) 杉原荘介「古代前期の文化」新日本史講座 1950年
- (9) 杉原荘介「農業の発生と文化の変革」世界考古学大系 2 1960年
- (10) 森貞次郎「九州」日本の考古学Ⅱ 1966年
- (11) 北九州古文化図鑑 九州考古学会 1950年
- (12) 武末純一「付録 弥生終末期土器参考資料 (1). 古文化談義 第3集 1976年
- (13) 狐塚遺跡調査団「狐塚遺跡 福岡県筑後市上北島集落遺跡の調査」1970年
小田富士雄「狐塚遺跡出土の土器」土師式土器集成 本編1 1971年

3. 周辺の歴史的環境

早良平野の歴史的環境については、これまで何度となく論述されてきている。今回の調査の主体をなす弥生時代に関しても、①海岸の砂丘地帯の後背地、②山麓の丘陵地帯や扇状地、③室見川の広い沖積平野の三つの地域に遺跡が分布するとされる。さらに、遺跡が自然環境をもとにして地域的密集をなすという視点から、(Ⅰ)西新・藤崎地区、(Ⅱ)有田・小田部地区(含飯倉)、(Ⅲ)千隈・梅林・野芥地区、(Ⅳ)拾六町地区、(Ⅴ)金武・都地区、(Ⅵ)旧早良郡地区、(Ⅶ)樋井川流域の七つの密集グループが設定されている。

西新町・藤崎遺跡は立地の項ですでに述べたように古砂丘上に位置する。そして弥生時代の西新町・藤崎周辺の地形を復元すれば、北に博多湾、西に入江、南に低湿地(ラグーン)、東に樋井川といわば独立した島状のものを想定させる。この地で現在判明している弥生時代に属する遺跡は、西新町・藤崎の両遺跡だけで、ともに壘棺墓を中心とした共同墓地である。

西新町遺跡は昭和の初め、現在の修猷館高校の校庭に当たる場所より壘棺墓が発見され、以後周知されることとなった。また弥生時代終末の土器型式として設定されている西新町式土器¹⁹は、この遺跡の名を冠している。近年ビル建設や高速鉄道建設などにより、この遺跡も徐々にその姿を失いつつある。弥生時代の遺構としては、中期の壘棺墓が29基発見されている。壘棺墓は北西-南東の列をなす傾向にあり、そのなかに祭祀遺構を伴う。壘棺墓にはゴホウラ製の腕輪3個をつけた人骨を残存するもの、また銅剣先を遺存したものがあつた。この他に銅剣鍔型片が表土層で出土している。このような状況は、同じ墓制をとりながらも藤崎遺跡とは著しい質的相違を感じさせる。この後、弥生終末~古墳時代にかけての竪穴式住居跡57軒が営まれる。またこの時期の壘棺墓も1基発見されており、棺内より人骨と共にガラス製丸玉の出土をみた。

同じく古砂丘上に立地する遺跡としては、藤崎遺跡から室見川をはさんで西側にあたる浜浜新町がある。これまでに40余基の壙墓が調査され、その時期は中期初頭から後期前半におよぶ。また壙墓の棺外副葬の可能性の強いとされる石剣が一点出土している。この他に弥生中期から後期の包含層があり、丹塗りのものを含めた土器類が出土している。

この他、樋井川の東側にあたる鳥飼八幡宮附近でも壙墓が出土したというし、十郎川の西側に当る生ノ松原附近でも弥生時代の遺跡が見つかっており、博多湾に面した古砂丘において弥生時代かなりの営みがなされたことがうかがわれる。とくに長期間にわたる共同墓地の形成は、早良平野においては特異なものである。

この古砂丘上に対し、山麓の丘陵地や扇状地あるいは沖積平野といった地域における弥生時代の遺跡は、数としてはかなり多い分布を示している。その時期も前期から終末におよんでいる。しかし弥生時代を通じて継続的に営まれたのは有田遺跡ぐらいにしかすぎず、他の遺跡はほとんど短い時期に限定される。これは早良平野における調査がまだ十分に進んでいないという現状があり、今後の調査に待つべき所が大きい。

この地において現在まで判明している弥生時代の墳墓遺跡の数は20に満たない。さらにこれを壙墓が盛行した前期～後期前半までにしぼると、遺跡数はさらに減じる。この時期の墳墓は、有田・小田部地区の沖積台地、飯倉地区の低丘陵、室見川が平野に出る内野・入部地区、室見川左岸の丘陵に位置する古武地区、その対岸の四箇地区などに集中している。

有田・小田部地区には数ヶ所に壙墓がみられる。小田部1丁目の將軍神社の北側では、昭和4年、30年の二度にわたって壙墓(中期)が発見され、細形銅剣・細形銅戈が出土したと云う。また現西福岡高校内より明治31年に壙墓群が発見され、昭和24年に9基の壙墓が調査された。その時期は前期末から中期中頃におよび、前期末の第2号壙墓より銅戈が出土した。昭和55年の福岡市教育委員会による調査では、小田部5丁目より中期の壙墓が2基出土している。この地区は弥生時代以後の営みが継続してみられ、壙墓もまたそれによって破壊された可能性もある。15街区などで出土した壙墓片などがそれをうかがわせる。

飯倉地区では昭和38年現飯倉6丁目にて細形銅剣を副葬した前期末の壙墓が発見された。昭和54年には同4丁目にて福岡市教育委員会が調査を行い、中期前半～後半におよぶ壙墓が出土している。

内野・入部地区では長峰・黒塔・内野熊山・中通などで壙墓が発見されている。うち中通・内野熊山では弥生中期の壙墓が10基以上出土したというし、また長峰・内野熊山では壙墓の他に時期はわからないが箱式石槨墓が出土している。この地区における調査はまだ行なわれていない。

この地区の北側に位置する四箇地区では、かつての四箇船石遺跡の支石墓の近くから中期の壙墓が表採されていたが、昭和55年の福岡市教育委員会の調査で、J-10f地点から中期の壙墓8基が出土した。

古武地区では樋渡・高木・金武の遺跡が知られているが、調査を行った例はまだない。高木からは1950年代に前期末の甕棺墓が発見され、また樋渡では弥生前期末～中期の甕棺墓が発見され現地には現在もその時期の甕棺片が多量に散布している。

この他に十郎川の西側にあたる畑ヶ尾遺跡・道隈遺跡からも甕棺が出土したということが詳細は不明である。また早良平野の東側の丘陵地帯に立地するカルメル修道院遺跡・片江遺跡でも甕棺墓などが発見されている。特にカルメル修道院では 甕棺墓に切られた土甕墓より銅剣3点が出土している。

以上早良平野のいわば内陸部における弥生時代の墳墓（特に甕棺墓）をみてきたが、古砂丘上に立地する藤崎遺跡などとは明らかに様相を異にする。各遺跡の甕棺墓は20基を越えず、またその造営時期も短いものが多い。しかし、有田・小田部・飯倉にみられるように青銅器の副葬がみられることは、この地区でもかなりの権力が優位性をもっていたことを表わしていると思われる。これらの内陸部の遺跡と古砂丘上の遺跡とが如何なる関係にあったのかはまさに今後の大きな課題といえよう。

弥生時代の後期から古墳時代前期にかけての遺跡として、早良平野では、野方¹¹⁾・同塚原¹²⁾・拾六町宮ノ前¹³⁾・湯納¹⁴⁾・有田¹⁵⁾等々の遺跡が上げられる。これら内陸部の遺跡と海岸砂丘にある西新町遺跡との関係を、生産構造・集落構造・土器製作様式の面から比較検討を行う事は今後の重要な課題となろう。

註

- (1). 森貞次郎「むすび」『有田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第2集 1968年
- (2). 下條信行「弥生時代の早良平野」『宮の前遺跡(A-D地点)』福岡県労働者住宅生活協同組合 1971年
- (3). 鏡山益・永倉松男「筑前国福岡市発見の甕棺」考古学1—5・6 1930年
- (4). 1974年マンション建設に伴って福岡市教育委員会調査。また1976—1978年にわたり高速鉄道(地下鉄)工事に伴って約6,000㎡の発掘調査を行った。
- (5). 福岡市教育委員会「近ヶ尾町遺跡調査報告」『下山門遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 1973年。この他1979年度福岡市教育委員会が下水管の切換工事に伴って発掘調査を行った。
- (6). 生ノ松原遺跡、下山門遺跡がある。
- (7). 九州大学考古研究室編「有田古代遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集 1967年
九州大学考古学研究室編「有田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集 1968年
福岡市教育委員会「有田周辺遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集 1977年
坂高憲雄・力武幸次・廣山邦雄「有田遺跡」(札幌)福岡市教育委員会 1978年
福岡市教育委員会「有田・小田部」第1集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集 1980年
- (8). 森貞次郎「有田発掘遺跡の発掘と研究」『有田遺跡』1968年
- (9). 森貞次郎「無倉の甕棺と埋銅銅剣」『有田遺跡』1968年
他に福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表(総集編)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1971年
- (10). 福岡市教育委員会「野方中泉遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974年
- (11). 近く報告の予定である。
- (12). 下條信行「有田宮」1971年
- (13). 福岡市教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第1集 1970年 第4集1976年 第5集1977年
- (14). 九州大学考古学研究室編「前編書」(7)

この節を書くにあたっては文化課諸氏から多くの御教示をいただいた。

第2章 調査の経過

高速鉄道路線内の遺跡の概要は第1章の調査に至る経緯でも触れたが、再度、ここで地下鉄内の調査開始時の状況を記し、西新町遺跡の調査開始までの経過を述べることにする。

昭和51年4月、地下鉄工事は開始されたが、交通局（当時は高速鉄道建設局という）と教育委員会との調査に関する協議は不調に終り、工事の折見見される埋蔵文化財は教育委員会文化課に交通局が届け出る事に帰結した。

昭和51年5月、荒戸工区の石垣を工事中に発見した事により、昭和51年6月に、全ての路線内の遺跡の発掘調査の対応がせまられ、教育委員会内で文化財専門職員を3名採用することとし、教育委員会文化課内に「地下鉄路線内遺跡調査班」が設けられた。

西新町遺跡は昭和51年8月から2名の職員で、工事に先行して工区の中央部分に巾5m長さ300mの試掘トレンチを設定し、遺跡の密度の状態を確認する事から始められた。途中、昭和51年9月に3名の文化財専門職員が新規採用され、調査する職員は4名とされたが、この試掘調査は昭和51年11月に無事完了した。試掘調査の結果は、弥生時代の甕棺墓を主体とする共同墓地と、弥生時代の終りから古墳時代始めの竪穴住居跡を主体とする集落跡が、予想に反して保存状態良好をもって確認される事となった。

この西新町遺跡の試掘調査は文化財にとって、道路の中央を調査することといい、鋼矢板を打ち込むことといい、H鋼を桁掛けや張りを使用することといい、初体験であったが、この体験は交通局、教育委員会相方にとって、将来の調査に好結果を招来する事となる。それは建設工事で役立つものは調査に先行して行い、時間や経費の節減に努めようとする姿勢が、素直に率直に相方から出される結果を生むわけである。建設工事、調査の工程調整として、土留用連続壁やガイドウォール工事は、工事の為に試掘トレンチの立会の文化財側が行ったあと、調査に先行する事が相方で確認された。そして本調査は工事の工程で採用される桁掛け覆鋼板掛けの前に行う事とされた。工事に関しては全くの素人ではあるが、先述の工事・調査工程の調整結果、文化財が工事に与える時間的な影響は2～3ヶ月の遅れであったと聞き及んでいる。

本遺跡の調査の工区で言えば修験館工区の全面300mと同工区の西に隣接する防塁工区150m、延長450mが対称地域で、H・G・A・B・C・D・E・F区とし各区を50mの長さで区切った（ただしH区のみ100m）。調査は国道202号線という性格から、道路専有の問題が生じ、各調査区を、工事用の中間H鋼杭を分岐線として把え、ある所は2分括、ある所は3分括とされた。この分断された千鳥足調査方法は将来、実測図面や写真の合成で困難が予想されたので、航空実測の方法が採用された。

調査結果は弥生時代の甕棺墓30基が南北を軸として検出され、弥生時代の終末から、古墳時代の前期にかけての竪穴式住居跡57軒が確認された。西新町遺跡の全体像は人体把握できたに

ても、正確には遺跡を挟んだ南北の隣接地の調査を待たねばならないであろう。しかし、西新町遺跡の弥生時代の甕棺墓に副葬品として南方産のゴホウラ製貝輪があり、青銅の剣先がその使用方法に解釈が分れるにしても存在している事、弥生時代の終末から古墳時代前期にかけての住居跡の保存良好な土器群等々は、将来学術資料として先学諸兄の目に充分耐えるものと確信する。

末尾ではあるが、調査に協力されたみなさまには記して感謝する次第である。

発掘作業員

梅津静江・真鍋秀子・夏鍋政江・米島ハツネ・清水文代・総力チヨエ・高宮ノブエ・高島久子・海津和子・杉村文子・森永史子・藤 タケ・高田ヒサノ・能美須賀子・西原年枝・塩手真・野上英治・浜地成敏

整理作業員

真鍋恵美子・牧 洋子・木田京子・佐藤裕子・佐藤正恵・竹田弘子・木村厚子・伊藤裕子・中岡佳公恵・栗原由美子・岡部直美・今村淳子・高木正子・野口政伸・撫養久美子・土生裕子・崎村芳子・川尻真知枝・三芳高子・田代昌子・川畑悦子・田子森牧子・豆田陽子・村田喜代美・百歩裕子

調査・整理補助員

武蔵野美術大学—三島光子

大 正 大 学—石井 穂

日 本 大 学—須賀京子

桐朋 短期大学—坂田美土里・松田美知子・池崎温子（旧姓市来）・浜石正子（旧姓小沢）

早 稲 田 大 学—常松幹雄

明 治 大 学—石川むつみ（旧姓和田）・高橋和子・坪多正裕・高倉浩一・菅野 都・夏原敬子・青木和明

静 岡 大 学—長沼 孝（現・北海道庁文化課勤務）・小木曾隆・郷堀英司・佐藤正知・富田和夫

熊 本 大 学—山本京子・平野芳英（現・鳥根県文化課勤務）・渡辺一夫（現・山口県文化課勤務）・田中寿夫（現・福岡市文化課勤務）・田中克子（旧姓安部）・山崎賀代子（旧姓小川）・井上加代子（旧姓瀬戸）・増喜緑子・菊川ひづる・中島玲子・酒井晴子・平石教子

九 州 大 学—田崎博之・藤尾慎一郎・藤井伸幸（現・佐賀県文化課勤務）

カ メ ラ マ ン—白石公高

なお、学生諸氏の調査派遣に快く御承諾いただいた、調査指導委員および各大学の先生方にはかさねて感謝申し上げる次第である。

調査の内容と結果

1. 壙棺墓

調査の結果、30墓におよぶ壙棺墓とそれに伴う祭祀遺構が確認された。分布の状況は、C地区より28墓、B地区とH地区より各々1墓が検出された。

壙棺の時期は、B地区の1号壙棺墓が弥生時代終末に属する他は、中期から後期初頭で捉えられるものである。これは、C地区を中心として営まれていた共同墓地が、後期初頭を境に途絶え、住居跡との切り合い関係から、終末になると完全に放棄されてしまうことを示している。またH地区出土の小児棺はC地区から約150m西側に位置しているため、個別に埋葬されたと考えるのが妥当であろう。当遺跡の西300mに隣接する藤崎遺跡においても弥生時代の墳墓が確認されており、前期から終末に至る共同墓地についての報告がある。弥生前期から後期後葉にかけての生活空間は今後検討の余地はあるが、これら両遺跡において壙棺墓の消長は、時期的にはほぼ同様の傾向を示しているといえよう。編年については高島忠平氏の型式名を用いた。

註

- (1) 福岡県教育委員会「高速地下鉄道関係調査報告書Ⅰ藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集1981年
 (2) 福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会「立岩遺跡」1977年

壙棺 番号	挿図・ 図版番号	主軸方向	埋置の 角度	上下	器種	法 費 (cm)			特 徴	編年	
						口徑	蓋高	壙底高			
K-1	Fig. 30 PI. 7	N-29°-E	23°	上	壙	33.6	—	45.0	内脩する櫛歯口縁。蓋部及び頸部下部に際子目の刻目状を有する。蓋部の内径は約2mmのハケが充ちられる。褐色灰土。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	西 新 町 式	
				下	壙	40.8	66.0	52.8	ゆるくひろく口縁。胎部に短冊状の溝。不安定な形状。実蓋及び口縁部が平く、胎土はハケ。頸は2mm。褐色灰土。胎土は砂粒を含み、焼成良好。胎土よりガラス玉を抽出。		
K-2	Fig. 31 PL. 7	N-34°-W	—	—	高杯	22.8	杯部高	6.0	—	須 玖 式	
K-3	Fig. 31 PI. 7	N 82°-W	17°	上	鉢	28.4	16.3	23.6	この平底口縁、口縁部以下を欠く。内外ともに削面されている。両面褐色。胎土の内面は丹塗り。胎土は赤褐色の砂粒を含み、胎土は砂粒を含み、胎土は良好である。	立 石 式	
				下	壙	31.3	34.6	28.5	この平底口縁、口縁部及び頸部内面は丹塗り。胎土の内面は丹塗りのハケ。ハケ目は1cmあたり6〜7本。両面褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、胎土は良好である。		
K-4	Fig. 31 PI. 7	N-58°-E	19°	上	壙	41.0	現古高	28	26.7	内脩する逆し字状口縁、口縁部及び頸部内面は丹塗り。胎土の内面は丹塗りのハケ。胎土は砂粒を含み、胎土は良好である。	須 玖 式
				下	壙	31.2	39	29.5	内脩する逆し字状口縁、口縁部及び頸部内面は丹塗り。胎土の内面は丹塗りのハケ。ハケの単位は1.5mm間に11本程度。両面褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、胎土は良好。胎土は砂粒を含み、胎土は良好である。		
K-5	Fig. 32 PL. 7	N 143°-E	2.5°	上	壙	—	—	50.9	頸部より上を打ち欠く。胎部に2本の刻目状を有する。胎土は丹塗りのハケ。胎土は砂粒を含み、胎土は良好である。	立 石 式	
				下	壙	45.3	57.7	46.4	内脩する逆し字状口縁、口縁部及び頸部内面は丹塗り。胎土の内面は丹塗りのハケ。胎土は砂粒を含み、胎土は良好である。		

Tab. 2 西新町遺跡壙棺墓の観察表1 (第1~5号壙棺墓)

塚名 番号	採穴・ 図版番号	主軸方向	傾度の 角度	上下	形様	法 量 (cm)			特 徴	備考
						口径	器高	器底 最大径		
K-6	Fig. 33 PL. 8	N-24°-W	26.5°	上	高杯	24	—	—	甌先口縁、頸部を欠く。内面内外面とも底のへつ折面、内面はナテ。片甲り、胎土は砂粒を含み、焼成良好。	ト 上 壁 は 須 玖 式
				変	31	31.5	28.5	内幅する半円口縁、口縁下に胴部にM字状突帯帯1条。内面はナテ調整、外面は砥削の面、淡黄褐色の胎土に口縁部より外面にかけて方を穿る。胎土は細かき砂粒を含み、焼成良好。底部を欠く。		
K-7	Fig. 33 PL. 8	N-33°-E	13°	上	單 杯	40.8	47.2	38.5	上の字状口縁、口縁下に1条の三角突帯、口縁部及び胴部にナテ、胴部外面はハテ。胎土は1cmあたり3-4条、淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	板 の 馬 場 式
				変	33.2	40.9	32.4	上蓋がやや丸扁をもつての字状口縁。口縁部はハテ。胎土は1cmあたり2-3条、胴部内面に放射状の調整痕あり。		
K-8	Fig. 33 PL. 8	N-125°-E	25°	上	變	31.5	33	28.4	くの字状口縁、口縁及び内面はナテ、胴部外面はハテ。胎土は1cmあたり6-7条、淡黄褐色を以し内面は底部より胴部にかけて重なる帯色胎土を以す。外面は磨削面を以て、口縁部上部は砥削色の胎土あり。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	立 壁 式
				下	變	33	35.5	30.7	くの字状口縁、口縁及び内面はナテ、胴部外面はハテ。胎土は1cmあたり6-7条、淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。胴部中に径9cm程度の凹痕有り。	
K-9	Fig. 34 PL. 8	N-173°-E	10°	上	變	30.7	32	28.0	内幅する短丁字状口縁、口縁下にコの字状突帯1条。胎土は1cmあたり3-4条、淡黄褐色。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好。	須 玖 式
				下	變	30.5	32.3	28.0	内幅する短丁字状口縁、口縁部は横ナテ、外面はハテ。胎土は1cmあたり3-4条、淡黄褐色。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好。二壁とはほぼ同形。	
K-10	Fig. 35 PL. 8	N-3°-W	8:5°	上	鉢	62.4	43.4	—	やや外幅する丁字状口縁、口縁下にコの字状突帯1条。胎土はナテ。淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	須 玖 式
				下	變	68	108	63	内面に磨削した跡し字状口縁、口縁下に内面帯1条。胴部上半にコの字状突帯2条、口縁部及び突帯は横ナテ。胎土はナテ。胎土はナテ。ゴウツツ製鉄3つを有する。	
K-11	Fig. 35 PL. 9	N-174°-E	3.5°	上	盃	76	80.8	63.2	甌先口縁、頸部には2条、胴部に1条のM字状突帯、口縁部及び突帯部にナテ。淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	須 玖 式
				下	變	74	114.8	71.6	丁字状突帯、口縁下にM字状突帯1条、胴部下半にコの字状突帯2条、口縁部及び突帯は横ナテ。その他の部分はナテ。淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	
K-12	Fig. 36 PL. 9	N-162°-E	4.5°	上	鉢	69.5	39	—	外幅する丁字状口縁、口縁下にやや歪れた丁字状突帯の3の字状突帯。口縁部は横ナテ。胎土はナテの胎土あり。淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	須 玖 式
				下	變	79	115	72.5	やや外幅する丁字状口縁、内面に調整した跡、口縁下に1条、胴部中央部に2条の歪れた形跡の3の字状突帯、口縁部は横ナテ。胴部はハテの胎土あり。淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	
K-13	Fig. 36 PL. 9	N 30°-E	21°	上	盃	63.8	71	33.2	外幅する甌先口縁で、内面にのみ磨削。口縁部は二重の目、胴部に1条、胴部に2条のM字状突帯、淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	須 玖 式
				下	變	69.8	111	64	やや外幅する丁字状口縁、口縁下に2条の突帯1条、胴部中にM字状突帯1条、淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	

Tab. 3 西新町道跡甌先墓の観察表2 (第6~13号甌先墓)

塚形 番号	葬園・ 図版番号	主軸方向	塚形の 角度	上 下	器種	法 量 (cm)			特 徴	編年
						口径	器高	胴径		
K-14	Fig. 34 PL. 9	N-3°-E	12.5°	単 椁	壺	41.9	56.8	41.7	逆し字状口縁。平底。口縁直下に三角突帯1条。口縁部から突帯直下にかけては若干の口縁部内面はハケを施した様、ナリ肌。器体内面はナリ。器体外面は淡いハケ。黄褐色を呈し、外面は黒色。石灰、赤土粒を多く含む。焼成は良好。	板の馬場式
K-15	Fig. 37 PL. 9, 10	N 74°-E	7.5°	上	壺	—	40.5	37.4	口縁部欠片。胴部に傾いた角突帯1条。胴部上段に十字状突帯が2条。淡黄褐色を呈し、外面はスチス付着。粘土は細かく焼成は良好。	立 岩 式
				下	壺	32.5	39	31.2	上部がやや丸味を持つ。字状口縁。口縁部内面は横ナリ。口縁部、器体内面はナリ。器体外面は黄褐色1cmに2-3本の入く淡いハケ。淡黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好。	
K-16	Fig. 37 PL. 10	N-102°-E	4°	上	高 杯	26.4	6.7	—	壺状口縁。杯部は浅い。内外ともにへつ凹部を施し、杯部は。粘土は細かく焼成は良好。	須 玖 式
				下	壺	30.7	50.3	38.7	外縁する器先口縁。頸部が短く、胴部もややつまみで頸部が膨らむ。胴部に三角突帯1条。胴部十字状突帯2条。淡黄褐色を呈し、外面には煤付着。粘土は細かく焼成は良好。	
K-17	Fig. 37 PL. 10	N-87.5°-E	—	單 椁	壺	32.8	39	31.4	内縁する逆し字状口縁。平底。口縁部、器体内面はナリ。器体外面は淡いハケ目。単位は3cmに15条程。器体内面は凹部が浅く。淡黄褐色を呈し、粘土は細かく砂粒を多く含む。焼成は良好。	須 玖 式
K-18	Fig. 38 PL. 10	N 96°-E	—	上	鉢	43.6	25.9	—	逆し字状口縁。口縁下に三角突帯1条。口縁部及び口内面はナリ。器体外面は淡いハケ。単位は1cmあたり5条。淡黄褐色。粘土は細かく多く含む。焼成は良好。	上 縁が板の馬場式 下 縁が板の馬場式
				下	壺	42.0	56.8	43.8	やや内縁するの字状口縁。口縁直下に三角突帯1条。平底。口縁。突帯部横ナリ。器体内面はナリ。器体外面はハケ。淡黄褐色で緑が砂粒を多く含む。焼成は良好。	
K-19	Fig. 39 PL. 10	N-19° E	6°	上	壺	46	65.8	45.8	くの字状口縁。口縁下に三角突帯1条。口縁部及び口内面はナリ。器体外面は淡いハケ。黄褐色。砂粒を多く含む。焼成は良好。	上 縁が板の馬場式 下 縁が立岩式
				下	壺	62	100	73	内縁する字状口縁。口縁下に1条。胴部直下に2条の十字状突帯。淡黄褐色。粘土は砂粒を多く含む。焼成は良好。内面より胴部の可成り突出された。	
K-20	Fig. 38 PL. 10, 11	N-63°-E	8°	上	壺	28	32	25.6	内縁乳鉢の発達した逆し字状口縁。口縁部及び内面はナリ。器体外面はハケ。単位は1cmあたり3-4条。淡黄褐色。粘土は砂粒を多く含む。焼成は良好。底面近くは黒褐色を有す。	須 玖 式
				下	壺	28.5	31.5	26.6	内縁乳鉢の発達した逆し字状口縁。口縁部及び内面はナリ。器体外面はハケ。単位は1cmあたり3-4条。淡黄褐色。粘土は砂粒を多く含む。焼成は良好。底面近くは黒褐色を有す。	
K-21	Fig. 40 PL. 11	N-64°-W	5°	單 椁	壺	43.9	52.8	44.1	逆し字状口縁。口縁下に断面三角形の突帯1条。胴部は膨らむ。胴部外面はハケ目肌。単位は3mm。色調は淡黄褐色を呈し、粘土は細かく多く含む。焼成良好。外面に煤を付す。全体の3分の1を保存する。	立 岩 式
K-22	Fig. 40 PL. 11	N-128°-W	29.5°	上	壺	25.2	27.5	24.3	内縁する逆し字状口縁。口縁部及び器体内面はナリ。器体外面は1.5mm幅のハケ目肌を呈す。黄褐色を呈し、粘土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。底面近くは黒褐色を有している。	須 玖 式
				下	壺	31	34.9	28.2	逆し字状口縁。口縁部及び器体内面はナリ。器体外面は1.5mmのハケ目肌を呈す。淡黄褐色を呈し、粘土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。底面近くは黒褐色を有している。	

Tab. 4 西新町遺跡塚形墓の観察表3 (第14~22号塚形墓)

発掘番号	採図・図版番号	主軸方向	傾度の角度	上下	器種	法量 (cm)			特徴	編年
						口縁	器高	器口径		
K-23	Fig. 40 PL. 11	-	-	風摺?	甕	18.6	20	18.5	くの字状口縁。口縁及び胴部内部に「ナ」を施す。胴部外面に2-3個のハケを施す。淡赤褐色。胎土は砂粒を多量含む。焼成は良好である。	採の馬橋式
K-24	Fig. 41 PL. 11	N-38.5°-W	25°	上	壺	-	-	40	口縁部及び底縁部を打欠く。胴部に1条の三角突帯。胴部に3条のコの字状突帯。胴部は横位の丹塗焼成が施される。以下胴部は横ナ。内面はナを施されてあり、胴部が濃い。淡黄褐色。胎土は良質で焼成良好。	立岩式
				下	壺	-	-	-	口縁部を打欠く。胴部に1条、胴部に2条の断面形状の突帯を有する。胎土は横ナ。内面は全面ナ。胴部内部に突帯を有する。淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を多量含む。焼成はやや軟弱で胴部に凹痕を有する。	
K-25	Fig. 41 PL. 11	N 75.5°-E	7°	上	鉢	30.8	21.2	-	逆し字状口縁。口縁部及び内面はナ。胴部外面は横2-3mmとの間のハケを、淡赤褐色を呈す。胎土は細かな砂粒を含み、焼成は良好である。胴部に凹痕を有する。	須玖式
				下	甕	30.5	35.0	28.0	逆し字状口縁。口縁は横ナ。胴部内面はナ。胴部外面は斜め1つ。胎土は1cmあたり5条。淡黄褐色を呈す。胎土は細かな砂粒を含み、焼成は良好。外蓋は透孔付を採いて底を穿通している。	
K-26	Fig. 42 PL. 12	N-95° E	2°	上	壺	29.4	31.8	29.8	外反する口縁部を有す。器体の外面及び口縁部内面に横位のハケを施す。胴部内面はナ。淡黄褐色を呈し、外蓋及び口縁部の内面は丹を施す。胎土は細かな砂粒を多量含む。焼成は良好である。胎部に凹痕を有す。	立岩式
				下	壺	37.2	48.7	42.6	外反する口縁部を有す。胴部に三角突帯1条。胴部に1mm幅突帯2条を施す。胎土は下に2mmを穿す。口縁部の内外及び胴部は横ナ。以下内外ともに1条を穿す。淡黄褐色で焼成は良好。外蓋に凹痕を有す。	
K-27	Fig. 39 PL. 12	N-140.5°-E	7.5°	上	甕	66.0	-	-	内傾する逆し字状口縁。胴部打欠く。口縁部は横ナ。胴部外面はナ。内面はナ。明褐色。胎土は石稜粒を含み、焼成は良好。	須玖式
				下	甕	80.4	117.0	67.8	逆し字状口縁。口縁部下に「コ」の字突帯1条。胴部に短突帯2条。口縁部及び胴部は横ナ。淡黄褐色。細かな砂粒を含み、焼成は良好。	
K-28	Fig. 44 PL. 12	N-155°-E	3°	上	甕	-	59.8	-	大口径の上部を打欠いたものである。胎土に赤い突帯の「コ」の字状突帯2条。淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	須玖式
				下	甕	70.4	105.8	69.8	逆し字状口縁。口縁下に三角突帯2条。胴部下に逆し字状突帯2条。口縁部、完全な横ナ。胎土は断面全体にわたるナ。淡黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成良好。	
K-29	Fig. 43 PL. 12	N-46.5°-E	7.5°	上	甕	44.8	-	-	くの字状口縁。口縁下部に三角突帯1条。胴部上下打欠く。口縁部及び内面はナ。胴部外面はハケのあとナ。淡黄褐色。胎土は石稜粒を含み、焼成良好。	採の馬橋式
				下	甕	43	61.3	48	くの字状口縁。口縁下に三角突帯1条。口縁部及び内面はナ。胴部外面はハケ。胎土は1cmあたり6-7条。明黄褐色。胎土は石稜粒を含み、焼成良好。胴部に凹痕を有す。	
K-30	Fig. 42 PL. 12, 13	N-175°-W	8°	上	甕	29	38.9	27.6	内傾気味の逆し字状口縁。口縁及び内面はナ。胴部外面はハケ。胎土は1cmあたり4-5条。赤味を帯びた黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。	須玖式
				下	甕	29.2	40.5	28.4	内傾気味の逆し字状口縁。口縁部及び内面はナ。胴部外面はハケ。胎土は1cmあたり4-5条。赤味を帯びた黄褐色。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。	

Tab. 5 西新町遺跡発掘墓の観察表4 (第23~30号壺棺墓)

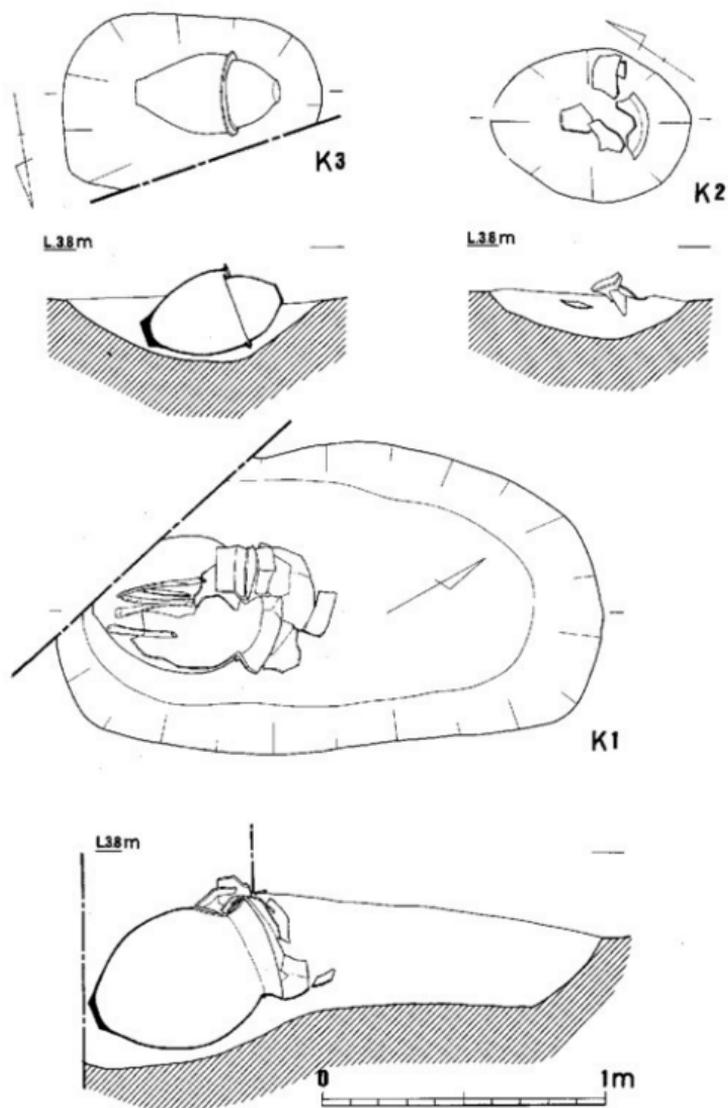


Fig. 14 西新町遺跡第1号～3号墓の実測図（縮尺1/20）

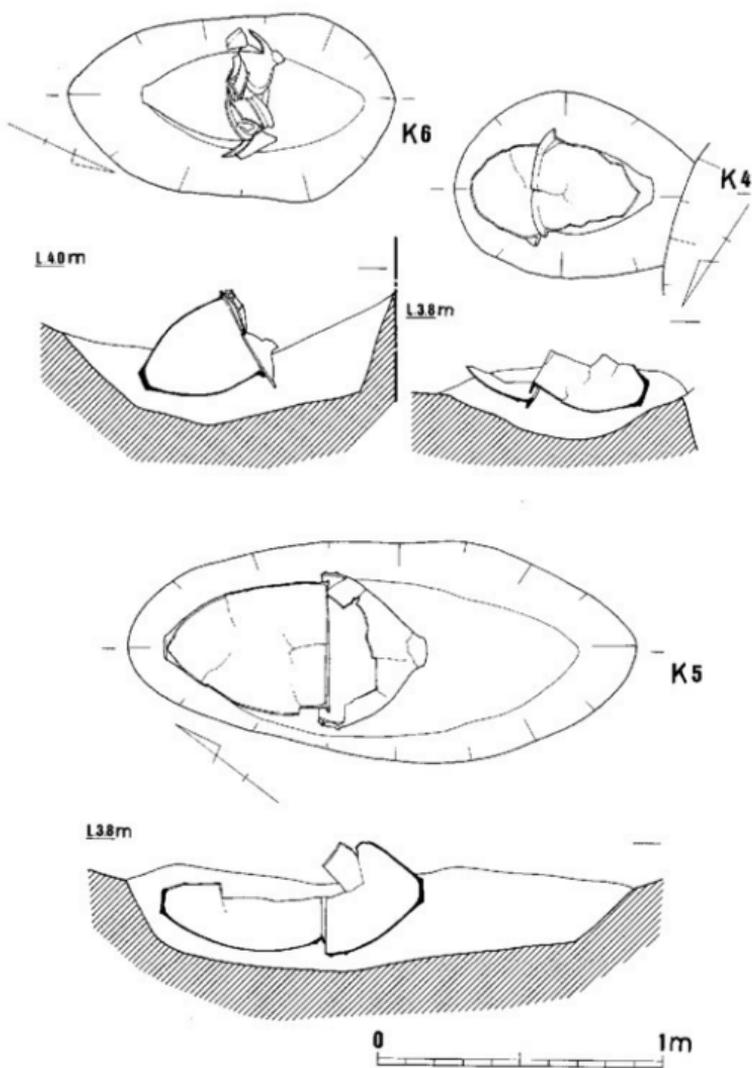


Fig. 15 西新町遺跡第4号～6号壘形墓の実測図（縮尺1/20）

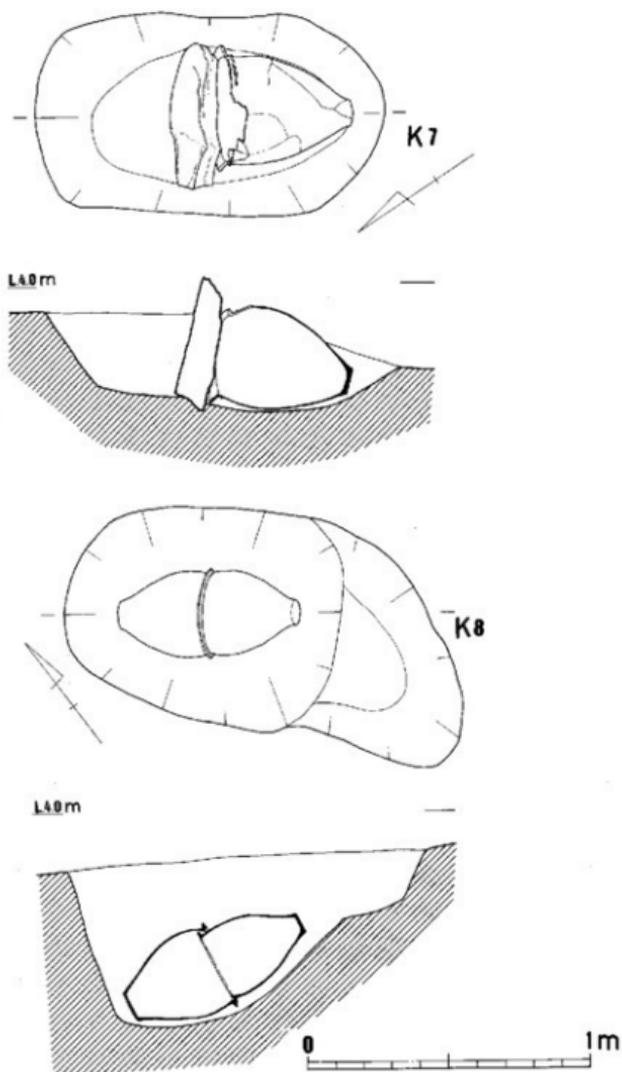


Fig. 16 西新町遺跡第7・8号奥棺墓の実測図 (縮尺1/20)

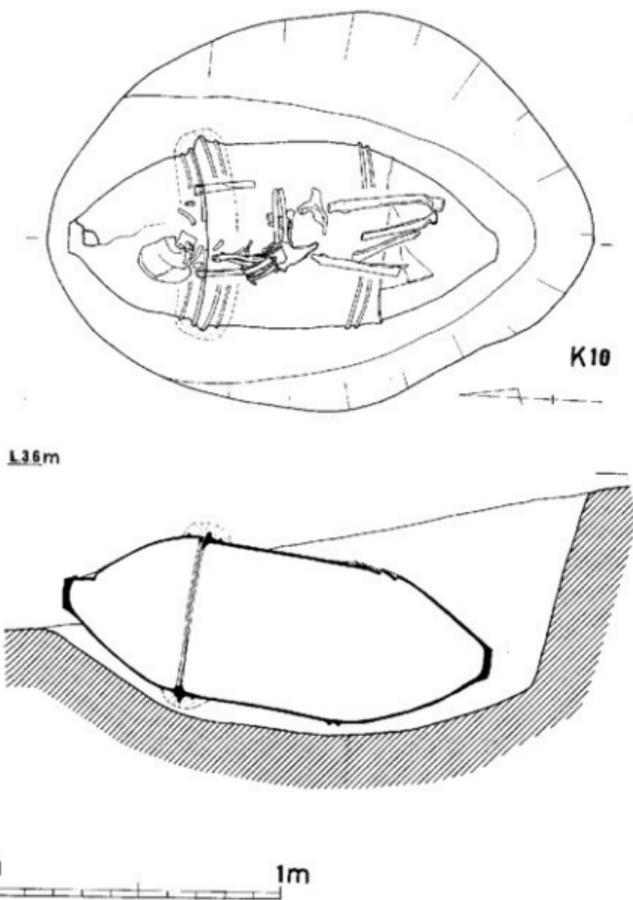


Fig. 17 西新町遺跡第10号葬棺墓の実測図（ゴホウラ製貝輪を著装 縮尺1/20）

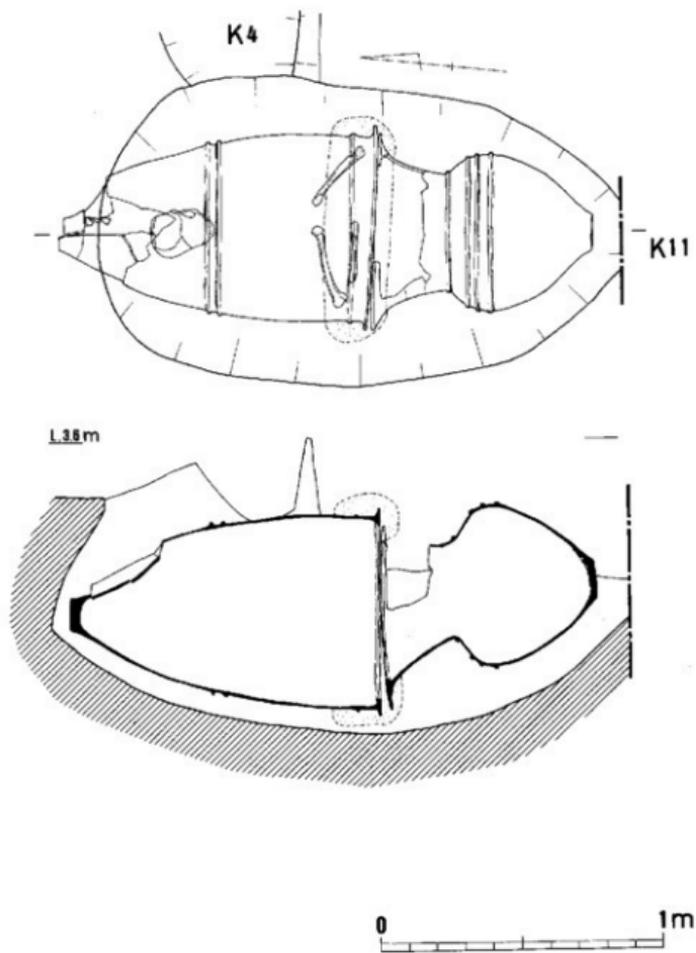


Fig. 18 西新町遺跡第11号瓦棺墓の実測図 (縮尺1/20)

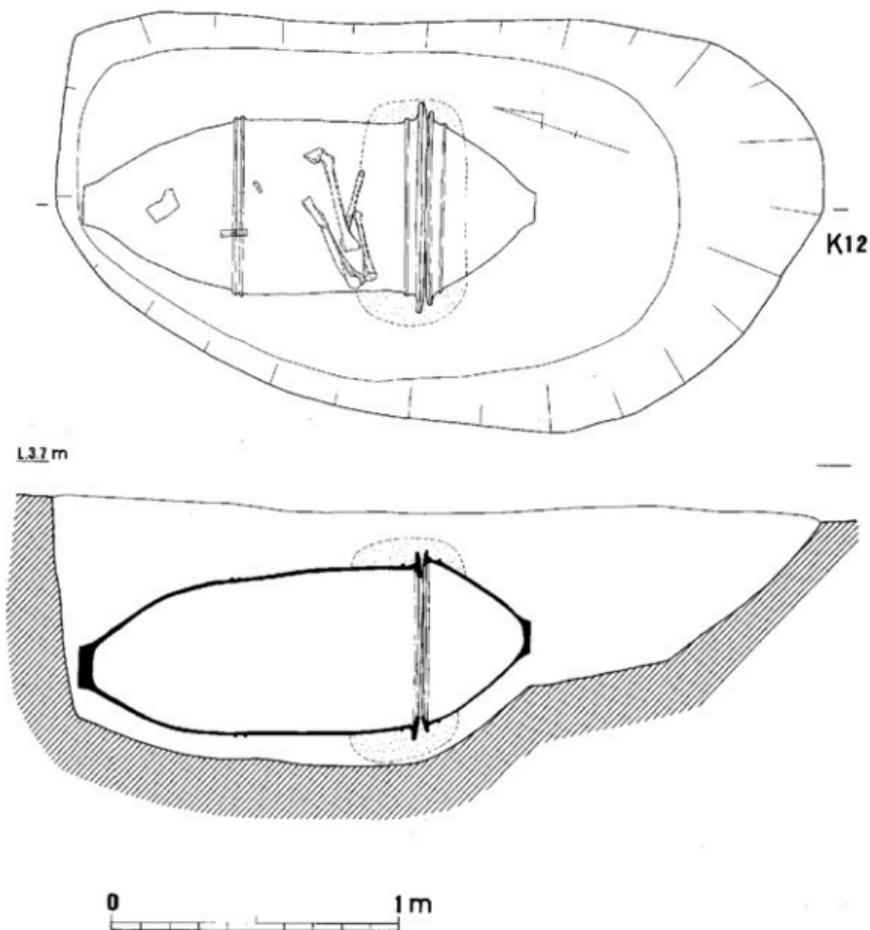


Fig. 19 西新町遺跡第12号墓棺墓の実測図 (縮尺 1/20)

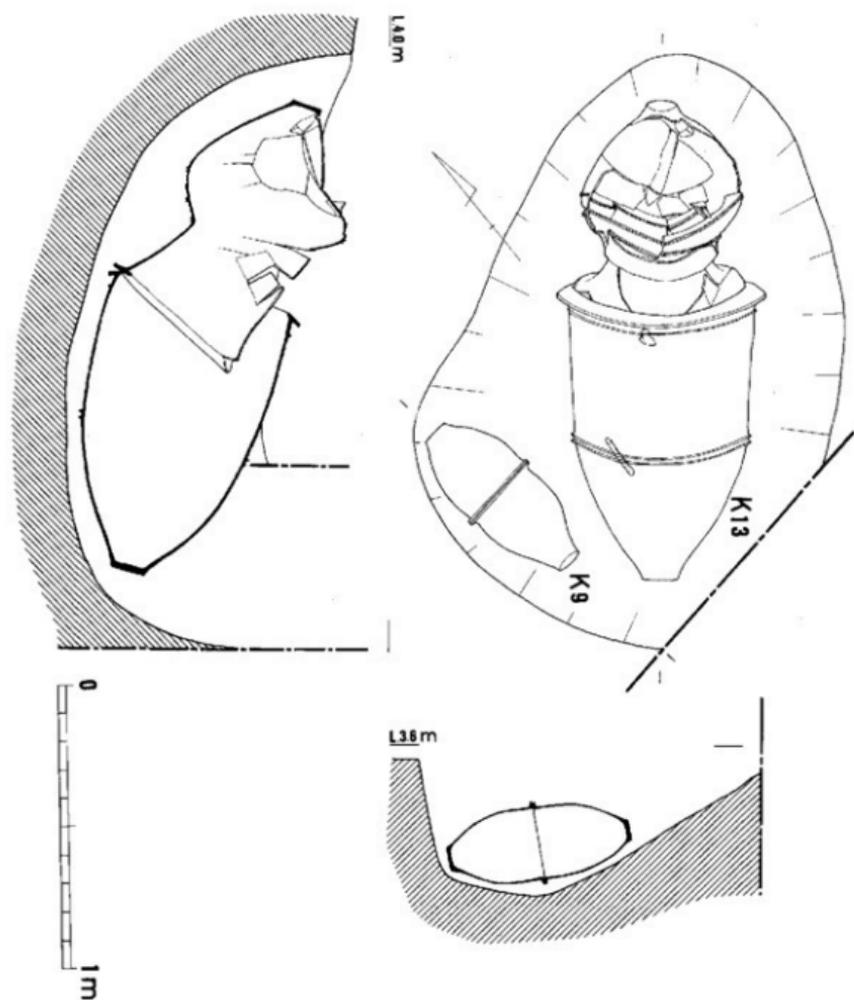


Fig. 20 西新町遺跡第9・13号妻棺墓の実測図（縮尺1/20）

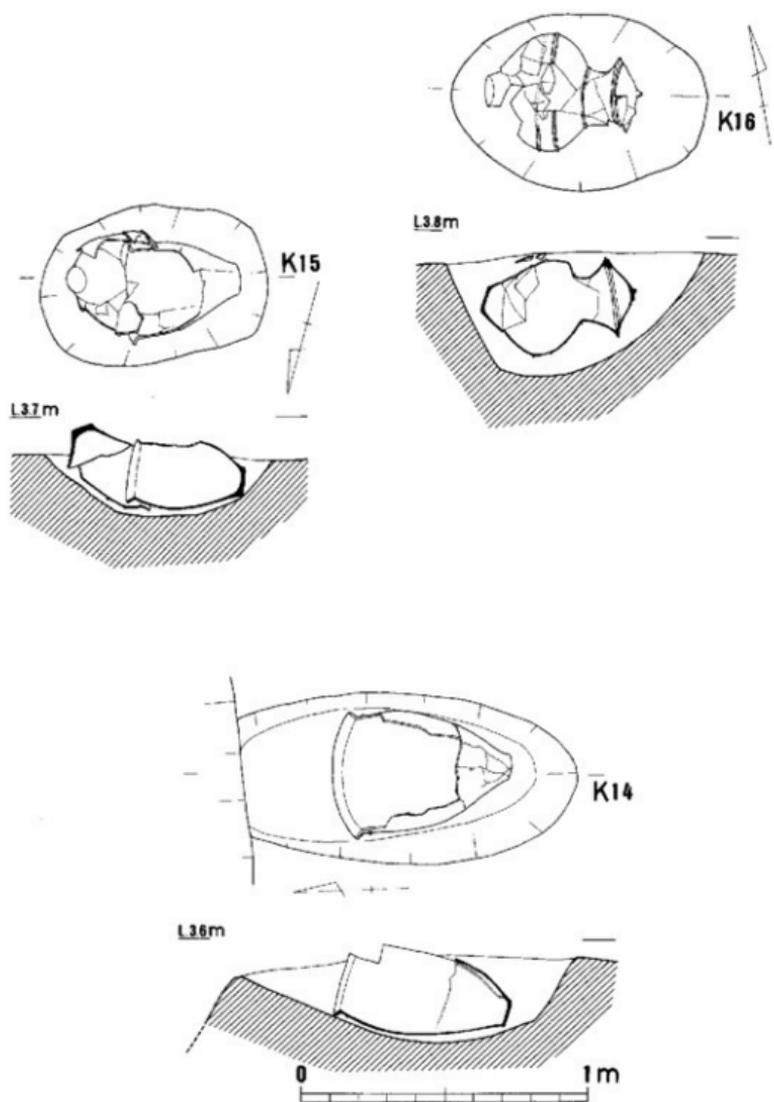


Fig. 21 西新町遺跡第14~16号壙棺墓の実測図 (縮尺1/20)

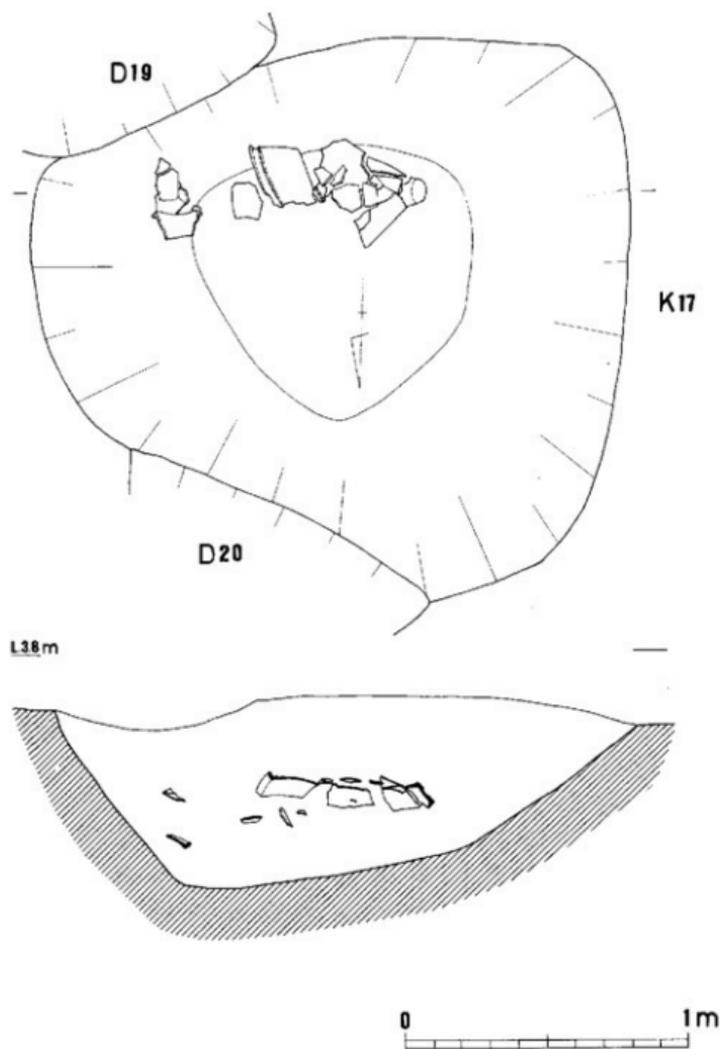


Fig. 22 西新町遺跡第17号妻柩墓の実測図 (縮尺 1/20)

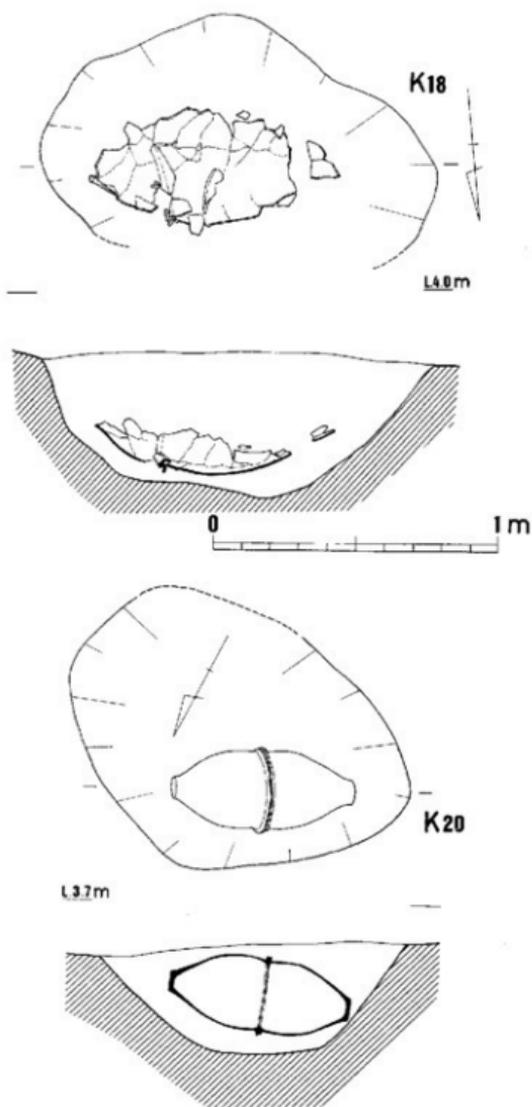


Fig. 23 西新町遺跡第18・20号寢棺墓の実測図 (縮尺1/20)

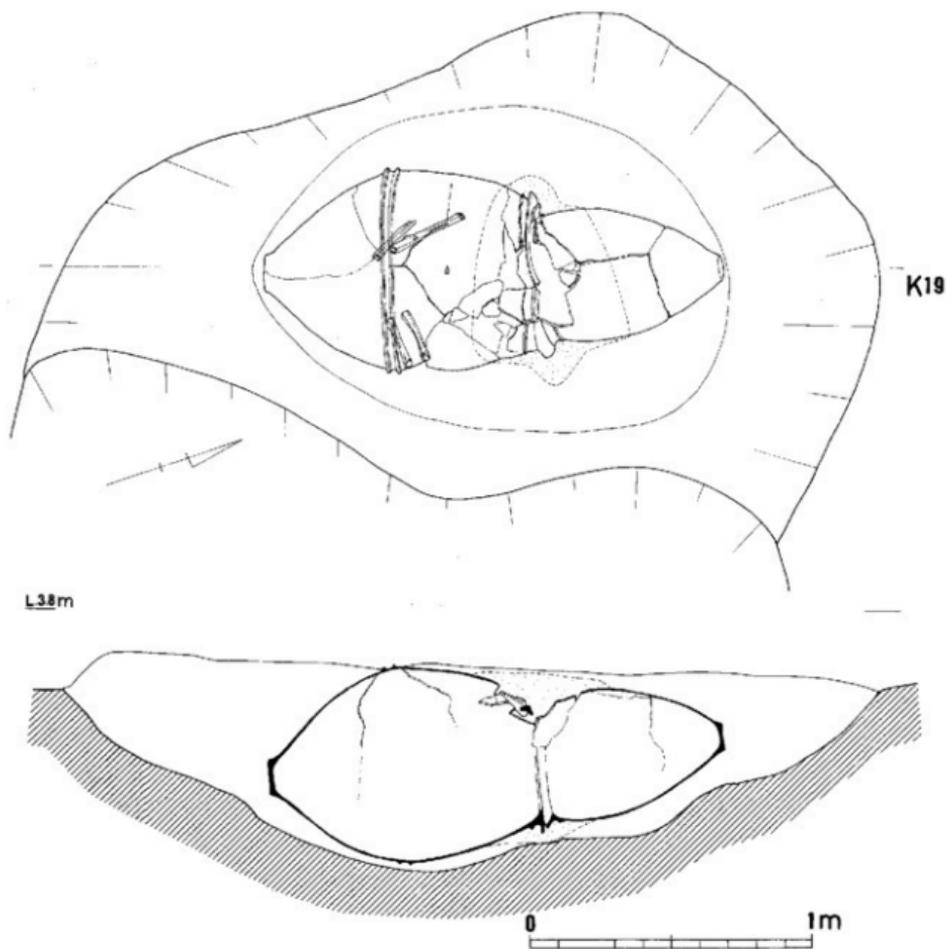


Fig. 24 西新町遺跡第19号壙棺墓の実測図 (縮尺1/20・腰骨付近検出の銅刺先)

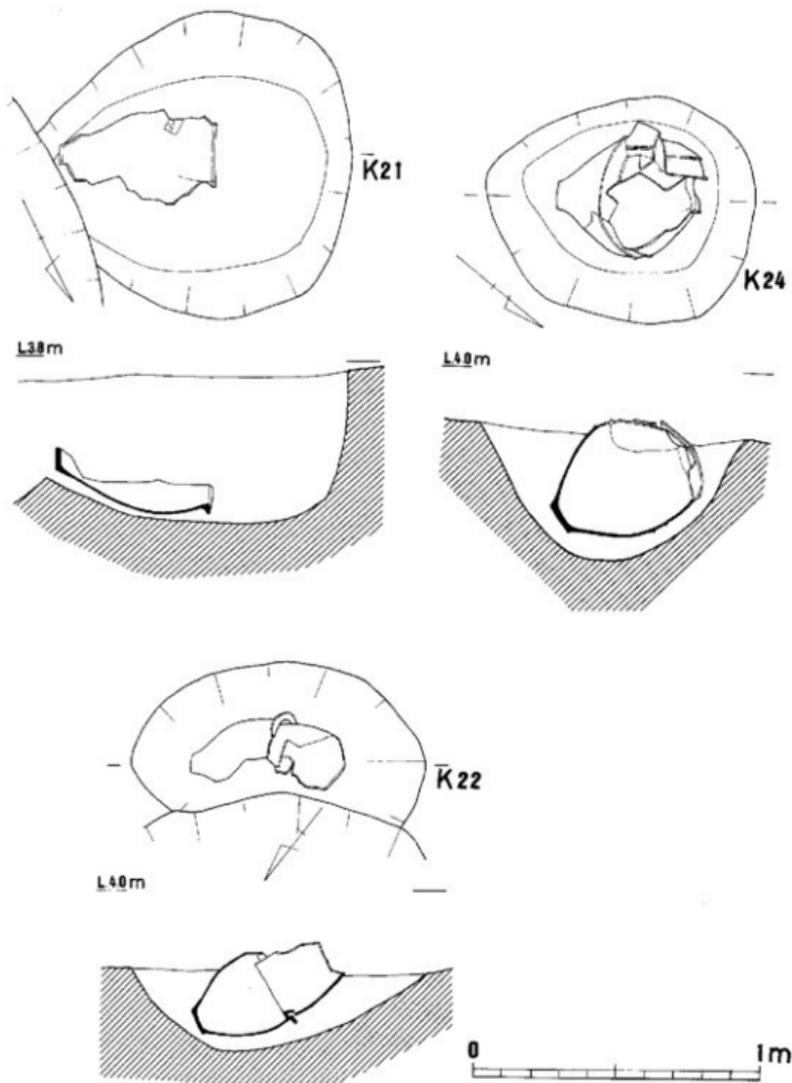


Fig. 25 西新町遺跡 第21・22・24号殉葬墓の実測図 (縮尺 1/20)

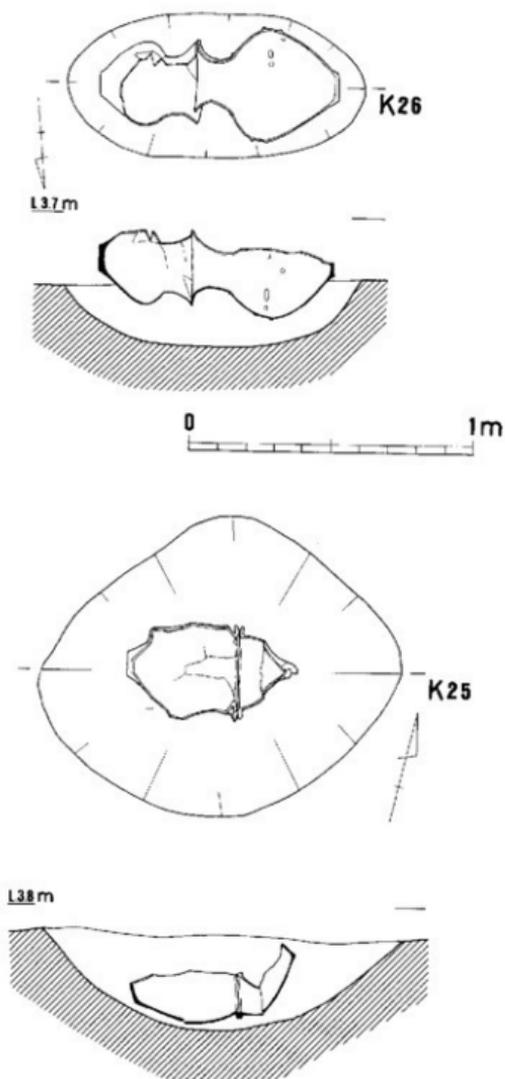


Fig. 26 西新町遺跡第25・26号壙棺墓の実測図 (縮尺1/20)

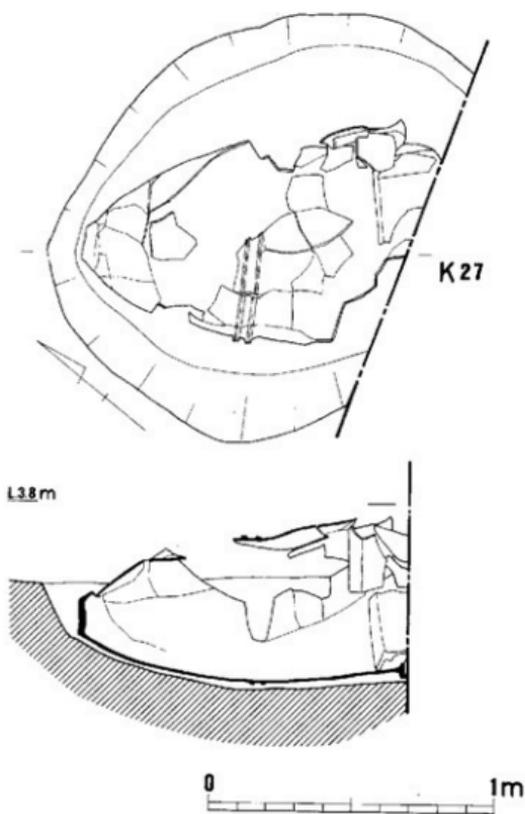


Fig. 27 西新町遺跡第27号妻棺墓の実測図 (縮尺 1/20)

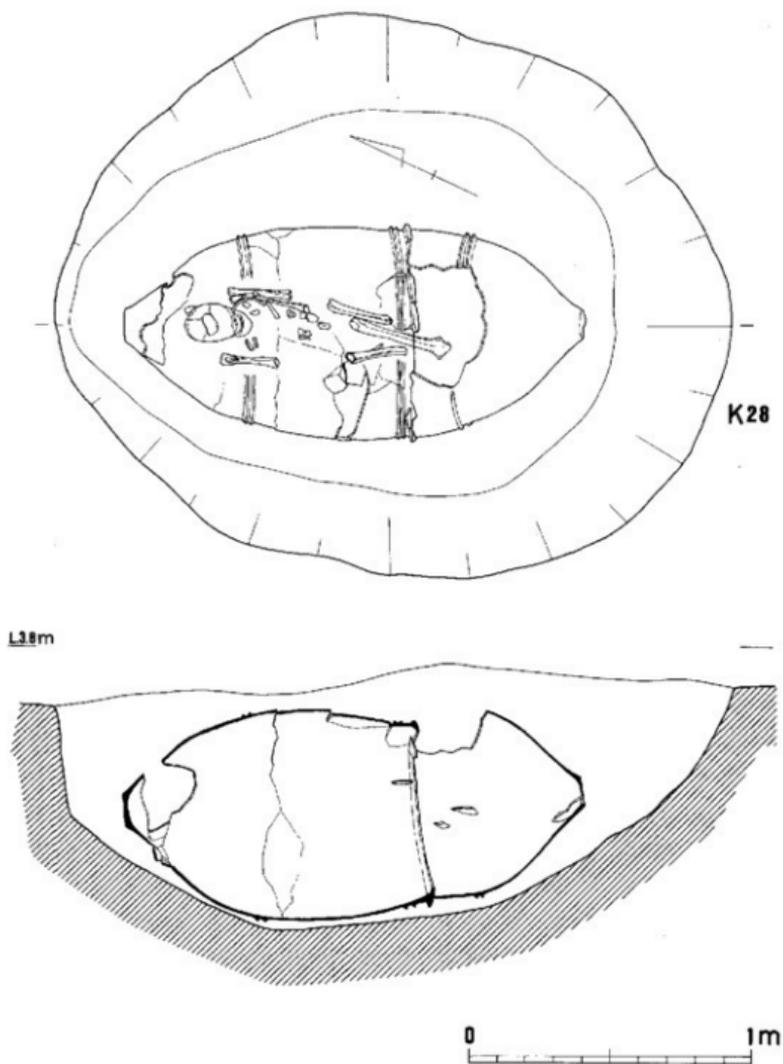


Fig. 28 西新町遺跡第28号墓の实测図 (縮尺1/20)

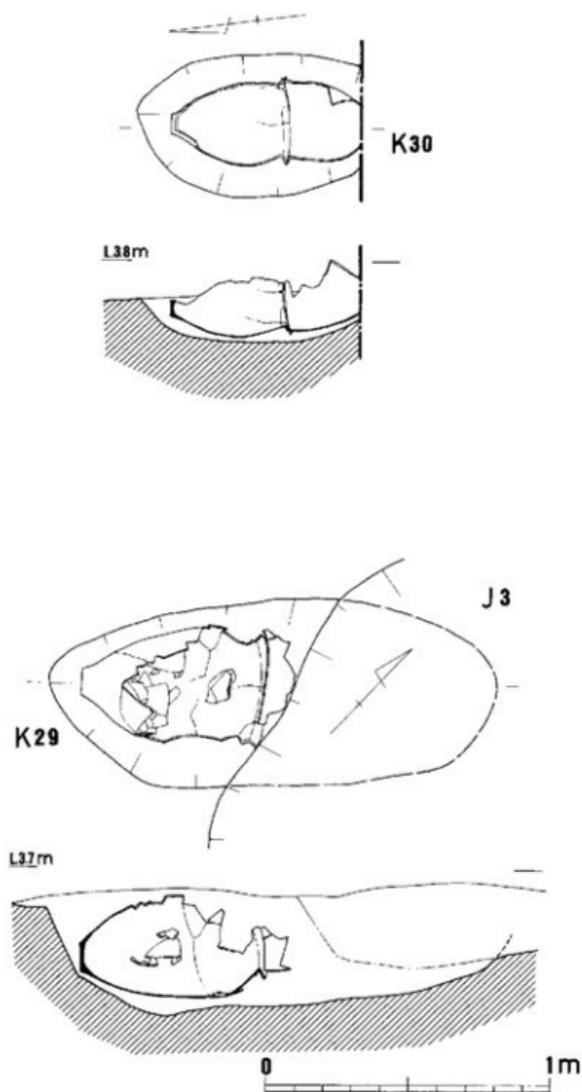


Fig. 29 西新町遺跡第29・30号墓棺墓の実測図 (縮尺1/20)

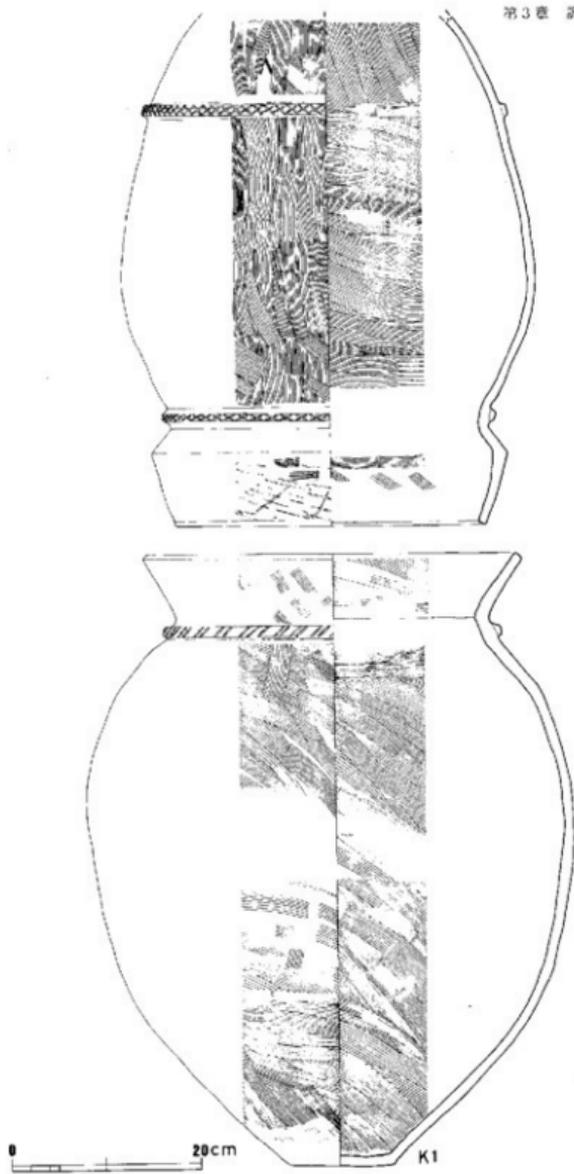


Fig. 30 西新町遺跡第1号葬棺 (縮尺1/6)

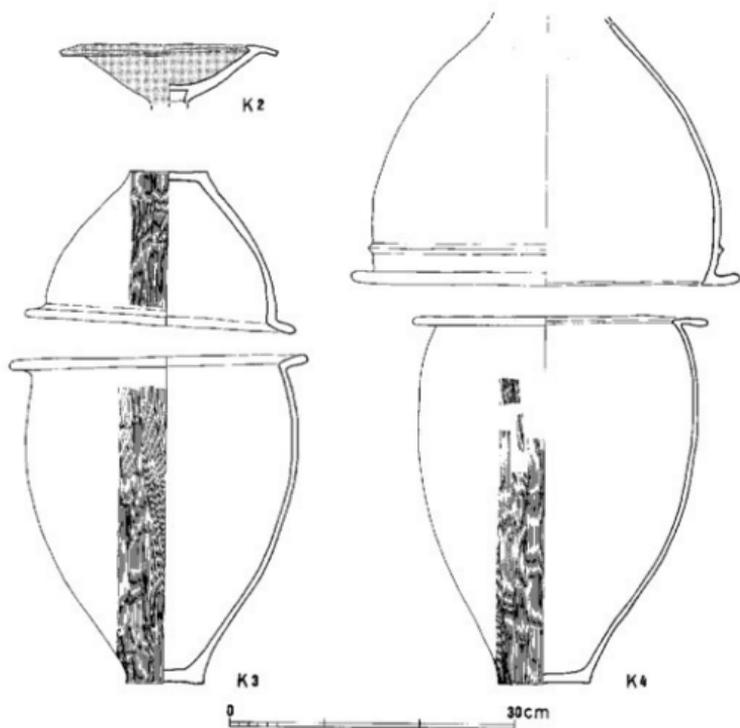


Fig. 31 西新町遺跡第2・3・4号要館 (縮尺1/6)

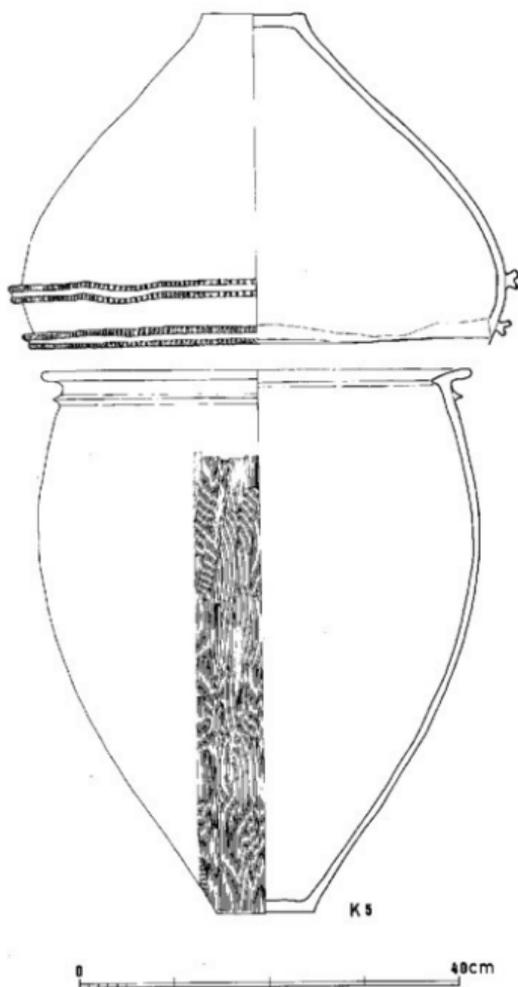


Fig. 32 西新町遺跡第5号甕棺 (縮尺1/6)

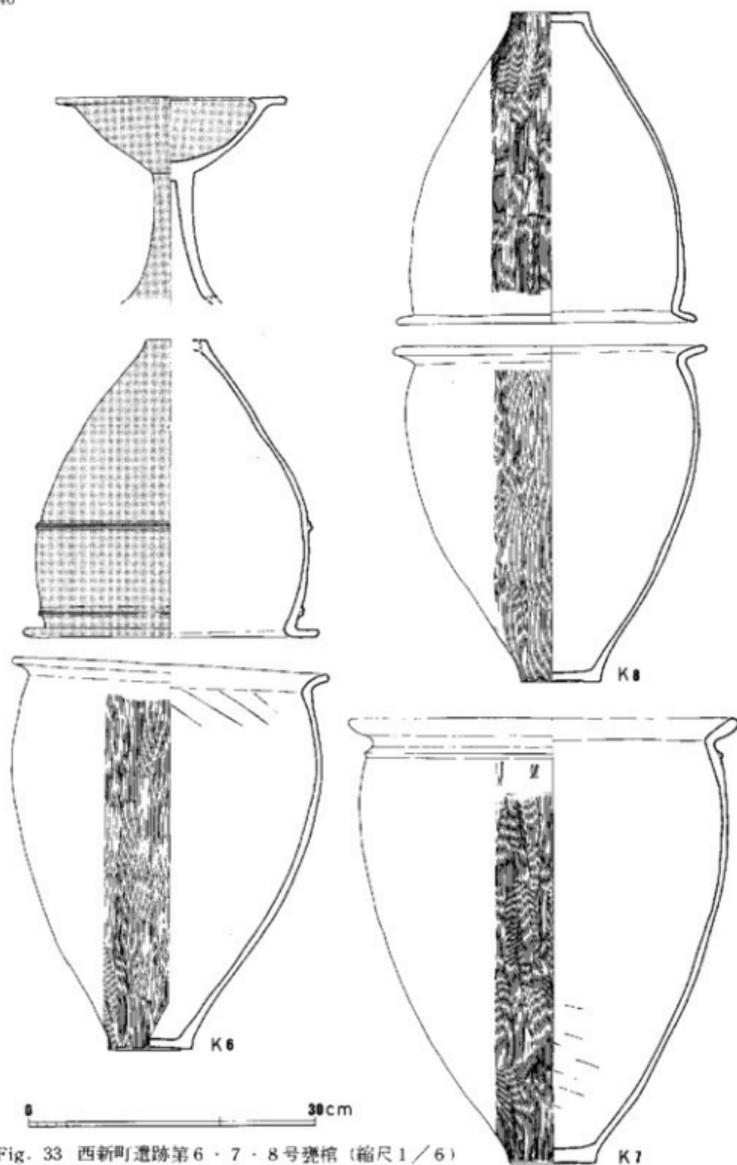


Fig. 33 西新町遺跡第6・7・8号甕棺 (縮尺1/6)

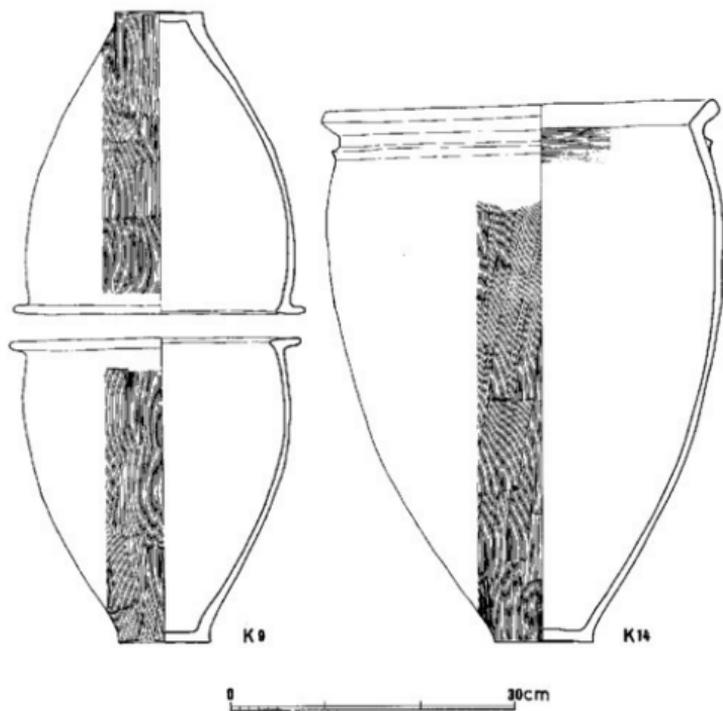


Fig. 34 西新町遺跡第9・14号甕棺 (縮尺1/6)

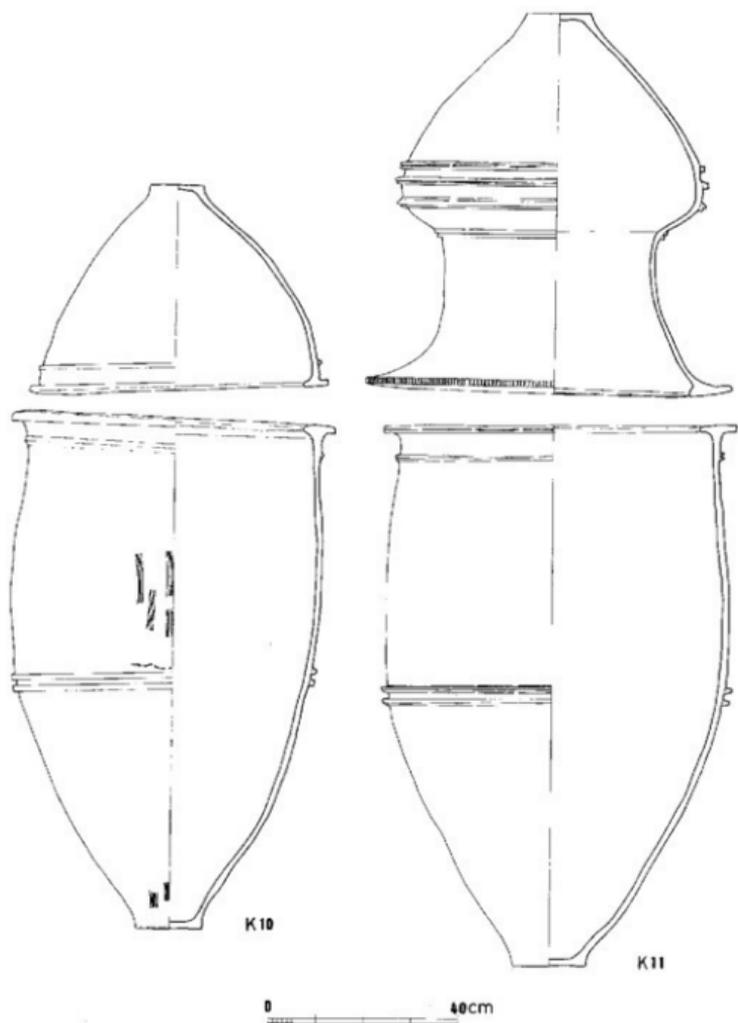


Fig. 35 西新町遺跡第10・11号瓷棺 (縮尺1/12)

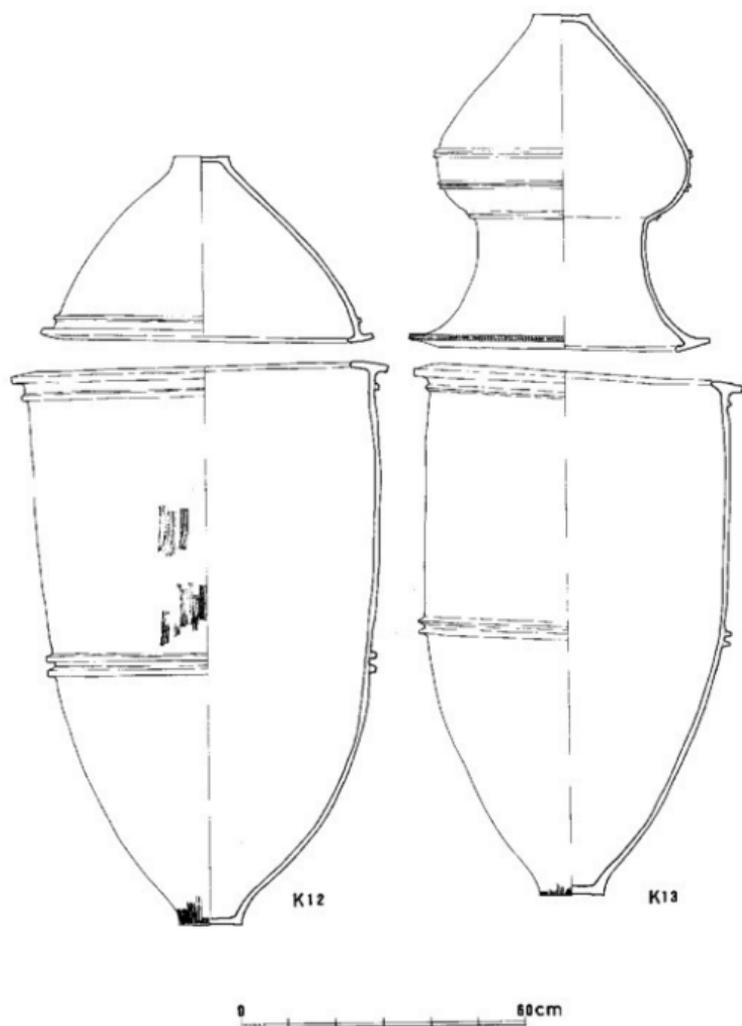


Fig. 36 西新町遺跡第12・13号甕瓮 (縮尺1/12)

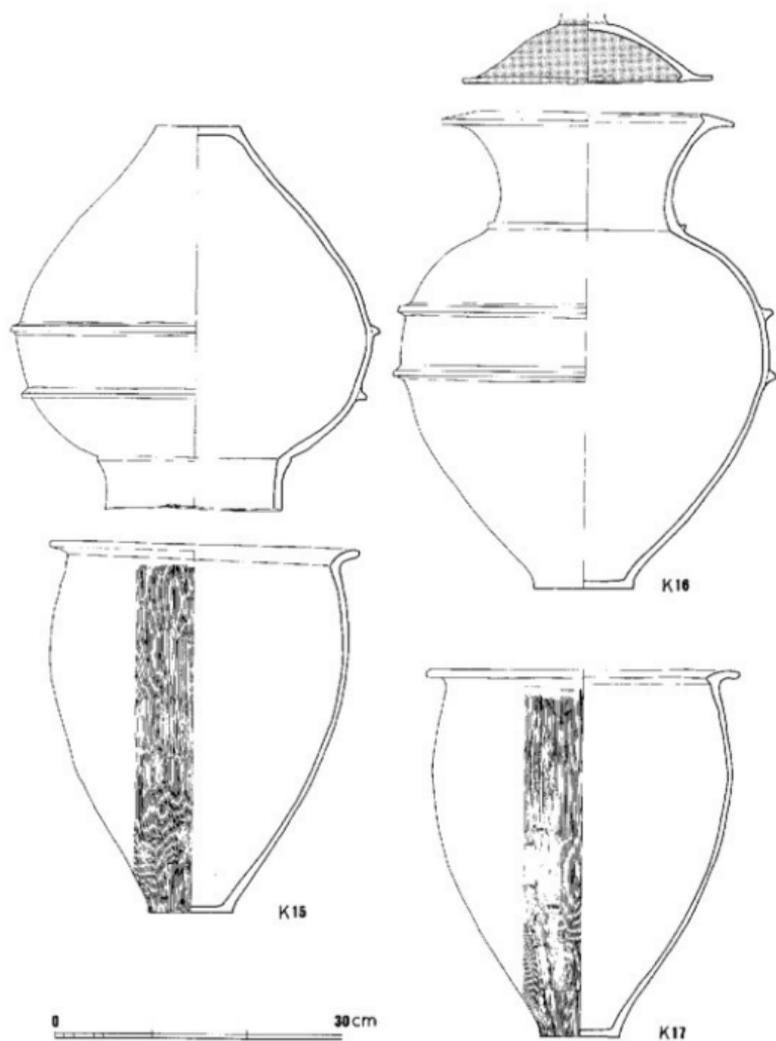


Fig. 37 西新町遺跡第15・16・17号壺棺 (縮尺1/6)

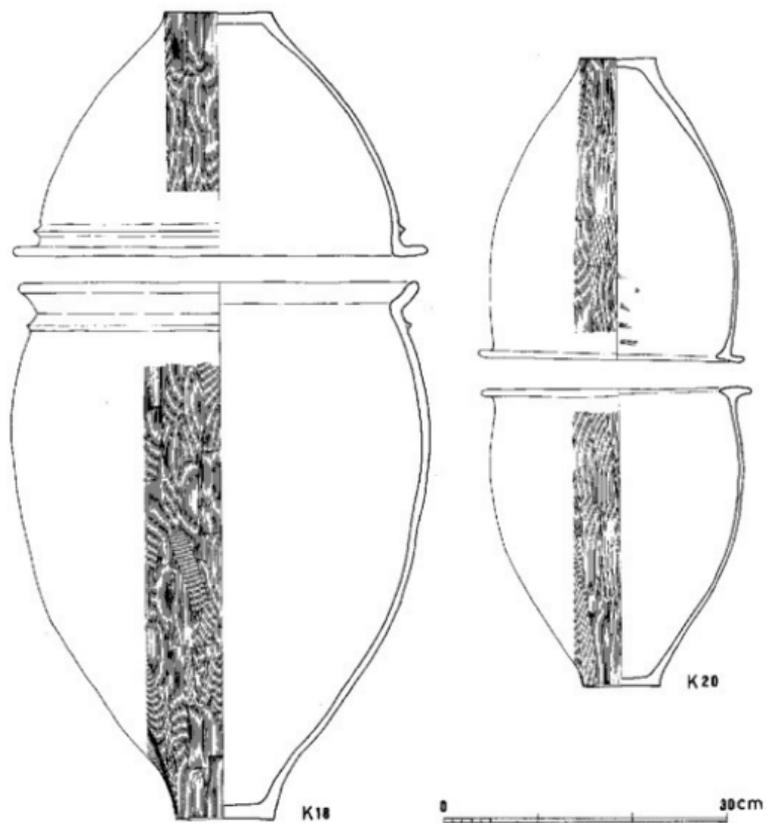


Fig. 38 西新町遺跡第18・20号壺棺 (縮尺1/6)

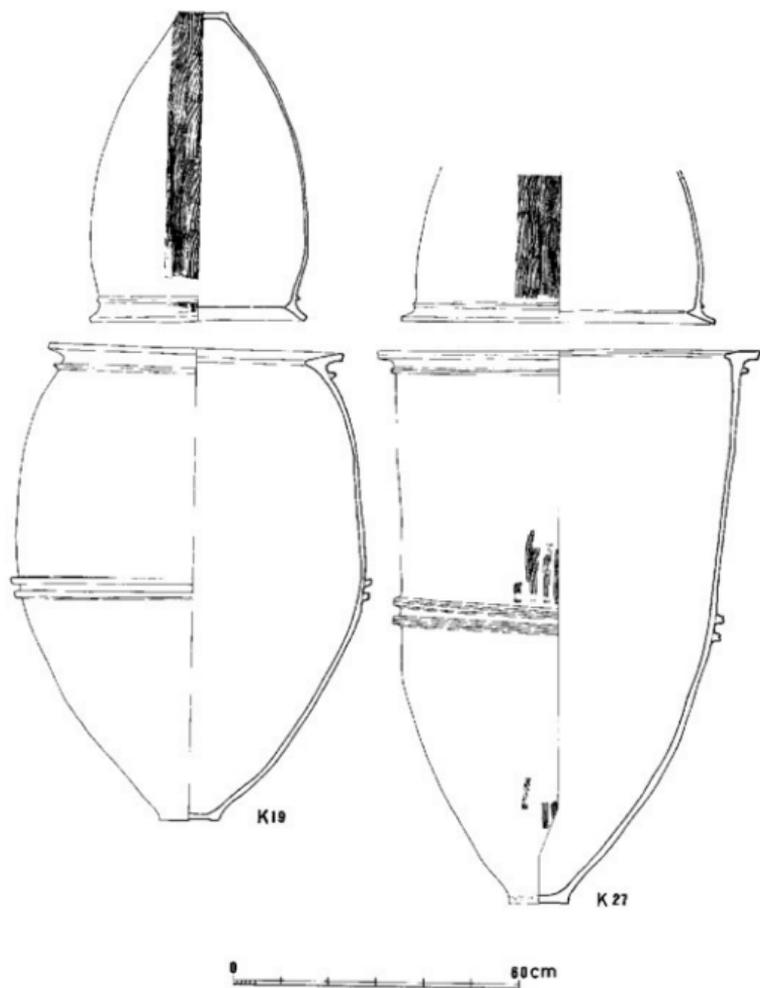


Fig. 39 西新町遺跡第19・27号焼棺 (縮尺 1/12)

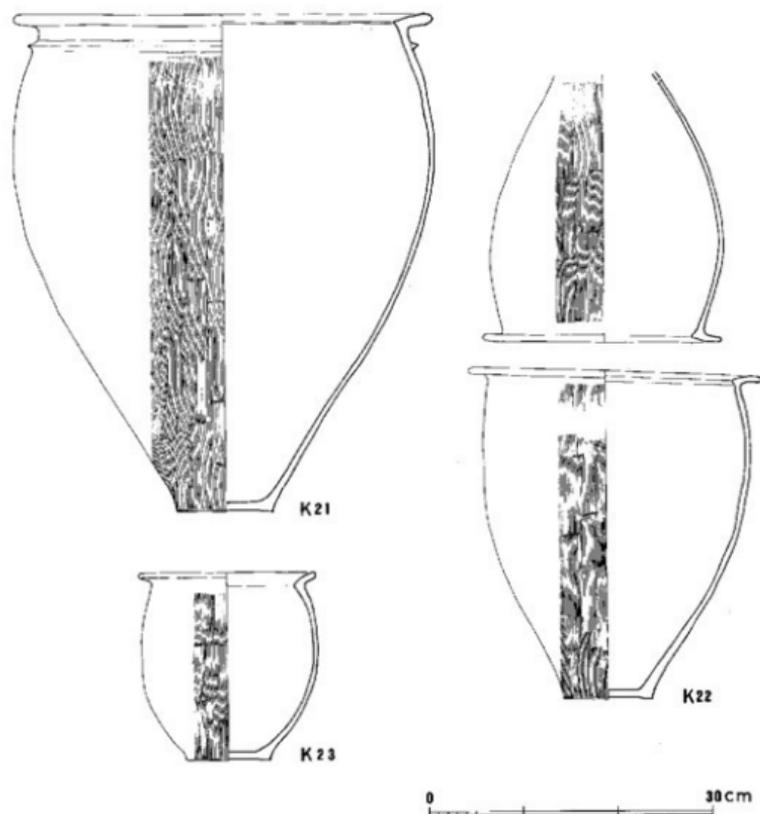
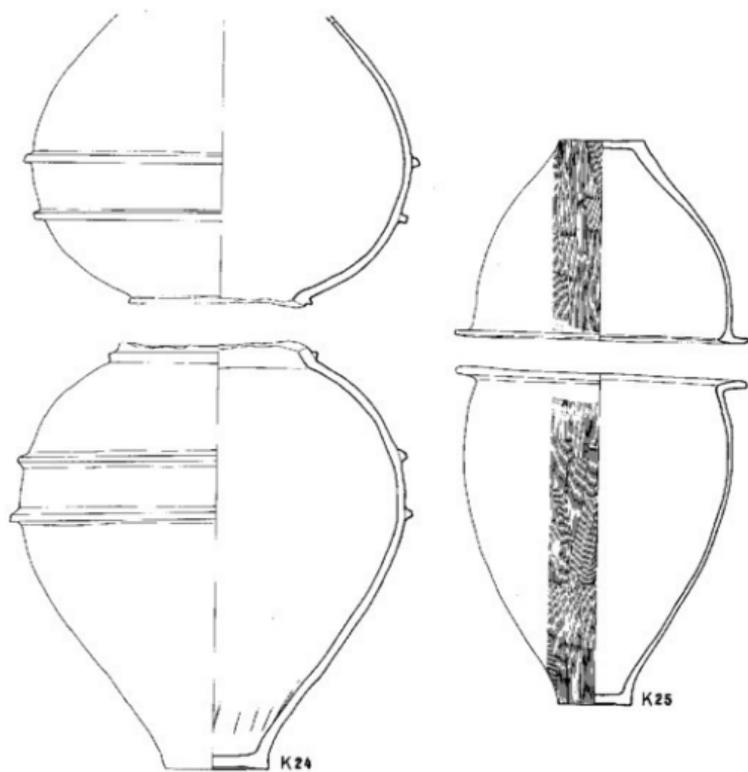


Fig. 40 西新町遺跡第21・22・23号甕棺 (縮尺 1/6)



0 30cm

Fig. 41 西新町遺跡第24・25号壺棺 (縮尺1/6)

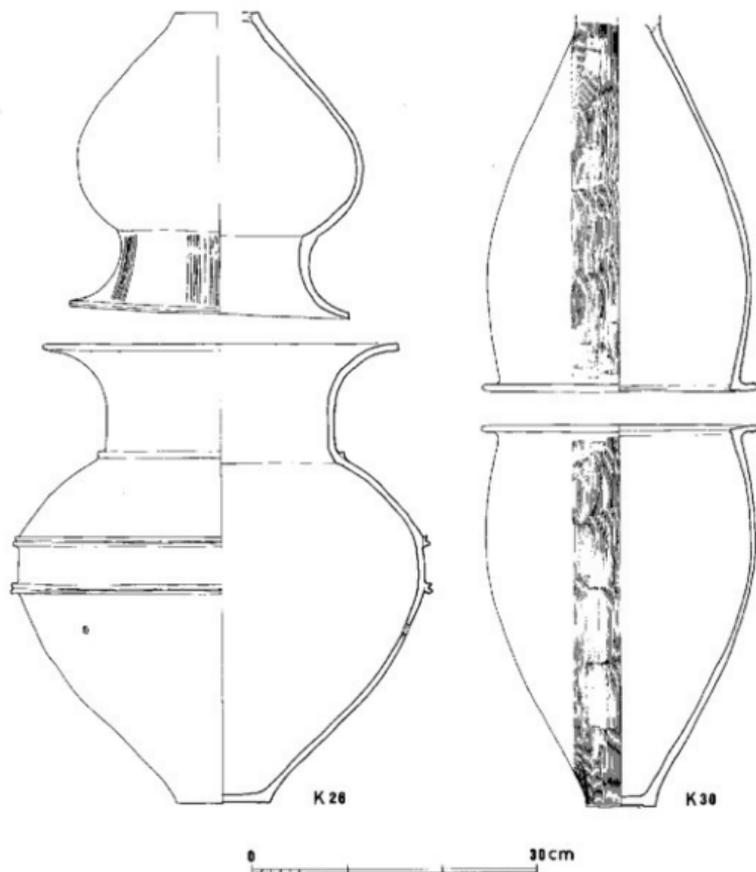


Fig. 42 西新町遺跡第26・30号壺棺 (縮尺1/6)

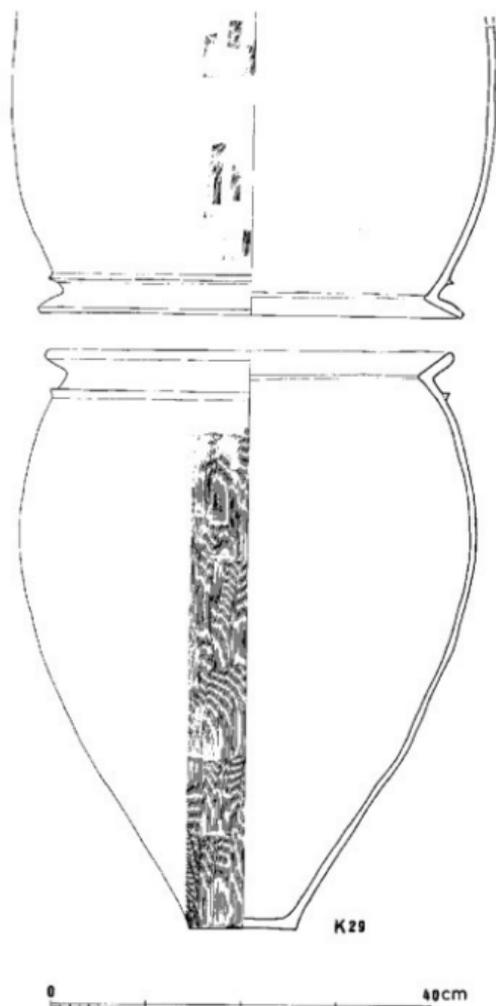


Fig. 43 西新町遺跡第29号甕棺 (縮尺 1/6)

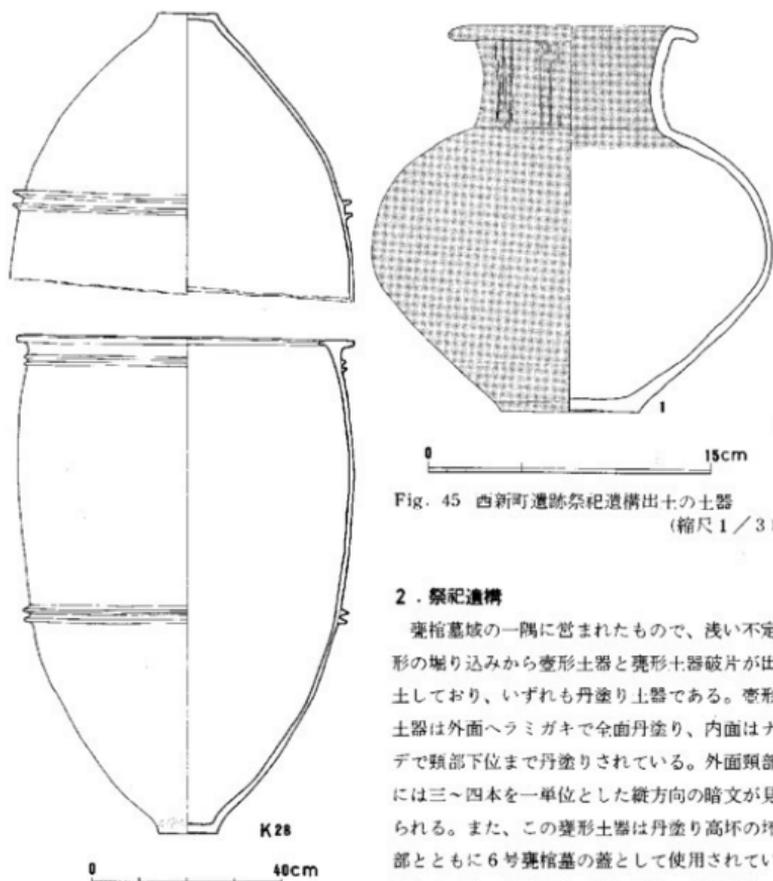


Fig. 44 西新町遺跡第28号甕棺
(縮尺 1/12)

と接合する。よって6号甕棺の埋葬時、周辺の地表面付近から採集しえた丹塗り土器破片を用いたと考えられ、このことから祭祀遺構は6号甕棺の埋葬時以前の所産であるといえる。弥生中期中葉頃に位置づけられよう。また祭祀の対象が、個別の墓であるか全体かはわからない。

Fig. 45 西新町遺跡祭祀遺構出土の土器
(縮尺 1/3)

2. 祭祀遺構

甕棺墓域の一隅に営まれたもので、浅い不定形の堀り込みから壺形土器と甕形土器破片が出土しており、いずれも丹塗り土器である。壺形土器は外面へラミガキで全面丹塗り、内面はナデで頸部下位まで丹塗りされている。外面頸部には三〜四本を一単位とした縦方向の暗文が見られる。また、この壺形土器は丹塗り高坏の坏部とともに6号甕棺墓の蓋として使用されているもの (Fig. 33) と同一個体であり、接合する。さらにこの甕棺墓の高坏も4号土坑出土の脚部

3. 竪穴式住居跡

検出した竪穴式住居跡は57軒である。時期的には、第4章で述べる土器編年によると、「西新町Ⅰ～Ⅳ式土器」の時期に属し、遺跡の西側の住居跡が古い傾向がある。遺構の分布は、C、D地区を中心として、ほぼ平坦な砂丘上に営まれ、西はH地区の東端まで分布する。F地区の東方を試掘したが、黒色砂層の文化層がうすく認められる程度で、遺構は検出されず、集落はF地区でおおると考えられ、西新町遺跡の弥生時代初頭の集落は、H地区東端からF地区におよぶ、東西350mの幅を持っていたと考えられる。風と海水による削平のために、いずれの竪穴式住居跡も現存壁高は10～30cm程度であった。平面プランは、方形と隅丸方形の2者があるが、時期差は認められなかった。規模的には、1辺が5mを前後するものと、3mを前後するものがある。柱穴は、検出が困難で、確実に柱穴を検出した例から、多くは2本柱の住居と考える。また、屋内施設としては、約4分の1の住居跡で伊跡が認められ、F地区の住居跡では北側隅にかまどが、D地区第1号住居跡ではベッド状遺構が検出された。特に、かまどは住居跡の壁中央に設けられるのが通例であり、時期的にも「西新町Ⅲ～Ⅳ式土器」の時期であり、今後の検討が必要である。以下、各住居跡の詳細は遺構観察表を参照とされたい。

地区	遺構番号	挿図番号	遺構状態	平面プラン	規模(m)		柱穴	屋内施設	遺物出土状況・その他	編年
					長軸	短軸				
A	J-1	Fig.46	完 壁	方形	5.55	4.87	2	中央に伊跡あり	南西側から跡が一括して流れ込んだ状況で出土。	Ⅲ
	J-2	Fig.47	J-3、4と切り合う	方形?	-	-	-	-	ナ シ	-
	J-3	Fig.47	J-2、4と切り合う	方形?	-	-	-	-	ナ シ	-
	J-4	Fig.47	J-2、3と切り合う	方形?	-	-	-	-	覆土中から出土。	I'
	J-5	Fig.48	南側の一部は調査区域外のため未調査	方形	-	-	-	中央に伊跡あり	床面からやや浮いた状況で、壁2個体が一括して出土。	Ⅲ
	J-6	Fig.48	南側の大半は調査区域外のため未調査	方形	4.64	-	-	-	覆土中から出土。	Ⅲ
	J-7	Fig.49	南側の一部は遺構状態が悪く検出できず	隅丸方形	4.07	-	-	-	覆土中から出土。	Ⅱ
	J-8			欠					番	
	J-9	Fig.49	南側の大半は調査区域外、東側は遺構状態が悪く検出できず	方形?	-	-	-	-	覆土中から出土。	-
	J-10	-	大部分は調査区域外のため未調査	方形?	-	-	-	-	ナ シ	-
	J-11	Fig.49	完 壁	方形	-	-	1	-	南側隅で床面からやや浮いた状況で一括して出土。	Ⅱ
	J-12	-	大部分は調査区域外のため未調査	方形?	-	-	-	-	覆土中から出土。	Ⅱ

Tab. 6 西新町遺跡A地区竪穴式住居跡観察一覧表

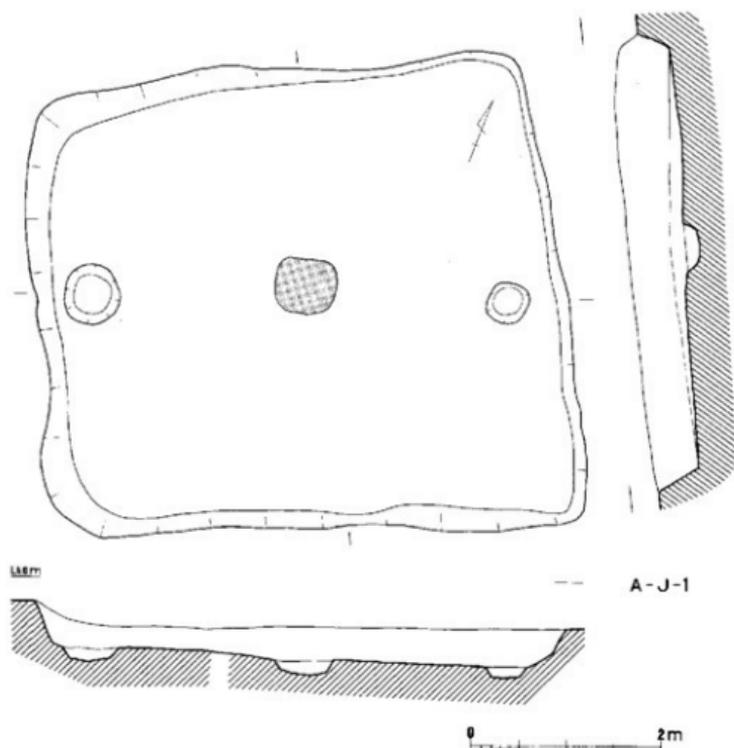


Fig. 46 西新町遺跡A地区第1号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

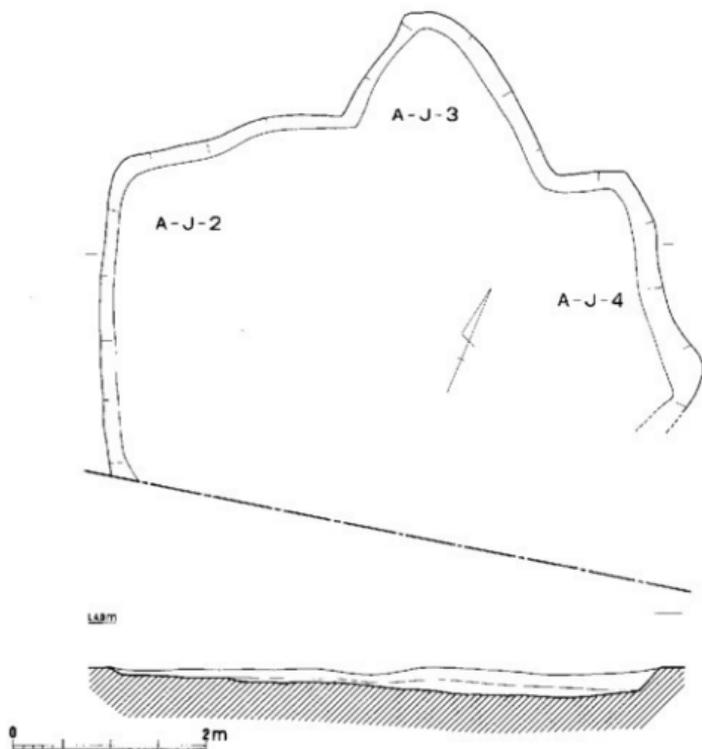


Fig. 47 西新町遺跡A地区第2・3・4号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

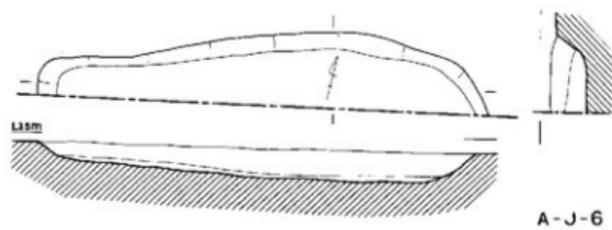
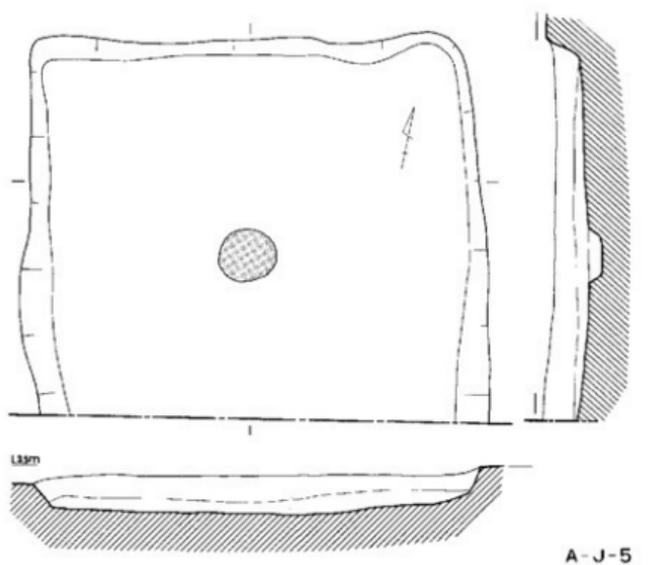


Fig. 48 西新町遺跡A地区第5・6号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

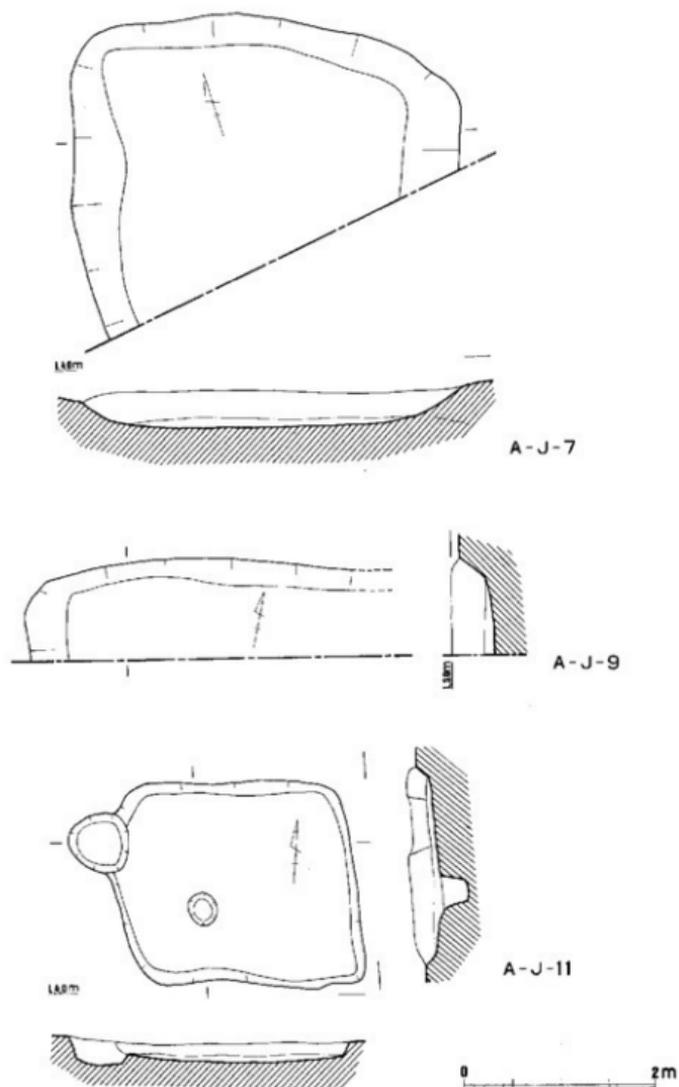


Fig. 49 西新町遺跡A地区第7・9・11号竪穴式住居跡の実測図（縮尺1/60）

地区	遺構番号	採図番号	遺構状態	平面プラン		柱穴	屋内施設	遺物出土状況・その他	層年
				形状	規模(m) 長軸 短軸				
B	J-1	Fig.31	D-2に切られる完	方形	5.40 -	-	ほぼ中央に平礎あり	覆土中から出土。	III
	J-2	Fig.51	南側半分は調査区域外のため未調査	方形	4.73 -	-	-	ナ シ	-
	J-3	Fig.52	完 礎	隅丸方形	2.80 2.52	-	-	ナ シ	-
	J-4	Fig.32	北側は遺構状態が悪く仔細不明	隅丸方形	2.65 -	-	-	覆土中から出土。	II?
	J-5	Fig.52	南側半分は調査区域外のため未調査	方形	2.28 -	1	-	ナ シ	-
	J-6	Fig.52	北側半分は調査区域外のため未調査	方形	5.20 -	-	-	西側。中央に大きなピットあり、東側床面に貼り付いた状態で出土。他は覆土中から出土。	II
	J-7	Fig.52	南側は遺構状態が悪く仔細不明	方形?	3.50 -	-	-	覆土中から出土。	II?
	J-8	Fig.50	北側半分は調査区域外のため未調査	方形	3.14 -	-	南東隅に平礎あり	ナ シ	-

Tab. 7 西新町遺跡B地区竪穴式住居跡観察表

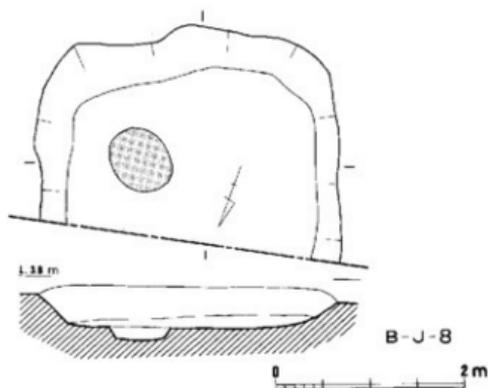
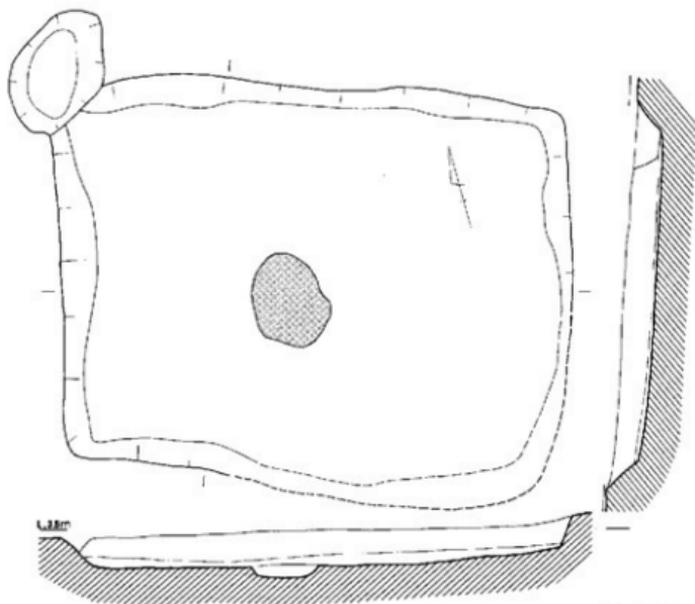
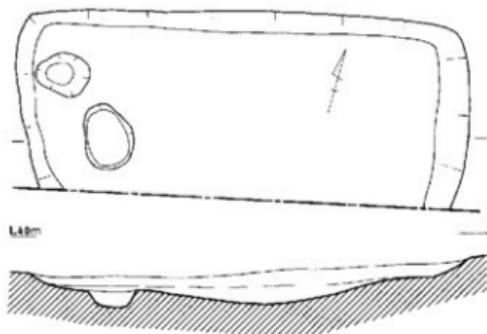


Fig. 50 西新町遺跡B地区第8号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)



B-J-1



B-J-2

0 2m

Fig. 51 西新町遺跡B地区第1・2号竪穴式住居跡の実測図（縮尺1/60）

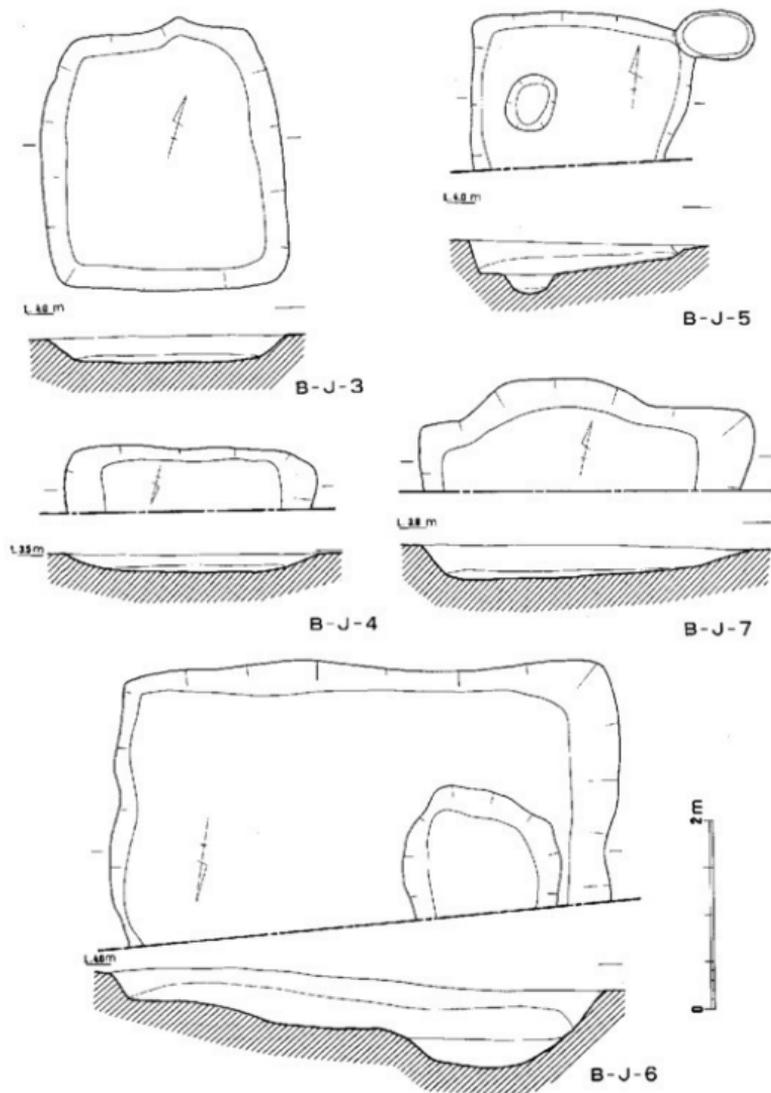


Fig. 52 西新町遺跡B地区第3～7号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

地区	遺構番号	図面番号	遺構状態	平面プラン	規模(m)		柱穴	屋内施設	遺物出土状況・その他	編年
					長軸	短軸				
C	J-1	Fig.54	D-3、5に切られる。南側は下水道のため未調査	方形	6.37	4.4	-	中央のやや西側に柱跡あり		
	J-2	Fig.55	完 整	不整形方形	4.30	2.50	-	北側にまたよって伊勢あり。	床面にほぼ貼り付いて出土。	
	J-3	Fig.55	K-29を切る。ほぼ中央に下水道のため未調査部分あり	隅丸方形	3.91	2.78	-	-	北東隅を中心として、一括して廃棄した状況で出土。	
	J-3	Fig.56	一部下水道のため、未調査部分あり。南西隅付近は遺構状態が悪く、詳細不明	隅丸方形	3.01	2.88	-	-	覆土中から出土。	
	J-5	Fig.56	J-6と切り合う。南側は調査区域外のため未調査	隅丸方形	3.70	-	-	-	覆土中から出土。	
	J-6	Fig.56	J-5と切り合う。南側の大部分は調査区域外のため未調査	方形?	-	-	-	-	ナ シ	
	J-7	Fig.56	南側の大部分は調査区域外のため未調査	方形	3.70	-	-	-	覆土中から出土。	
	J-8	-	北側半分は調査区域外のため未調査。	隅丸方形?	5.12	-	-	-	ナ シ	
	J-9	Fig.57	完 整	長方形	7.38	4.90	1	中央、西よりに柱跡あり	ほぼ中央の北側と北東隅付近にかたまつて出土。	
	J-10	Fig.58	完 整	方形	5.15	4.14	2	-	覆土中出土。	

Tab. 8 西新町遺跡C地区竪穴式住居跡観察一覽表

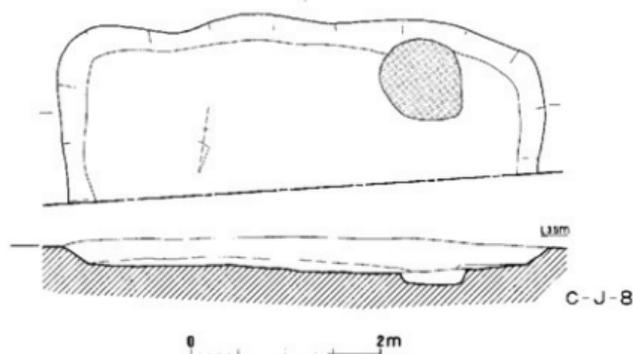


Fig. 53 西新町遺跡C地区第8号竪穴式住居跡の実測図(縮尺1/60)

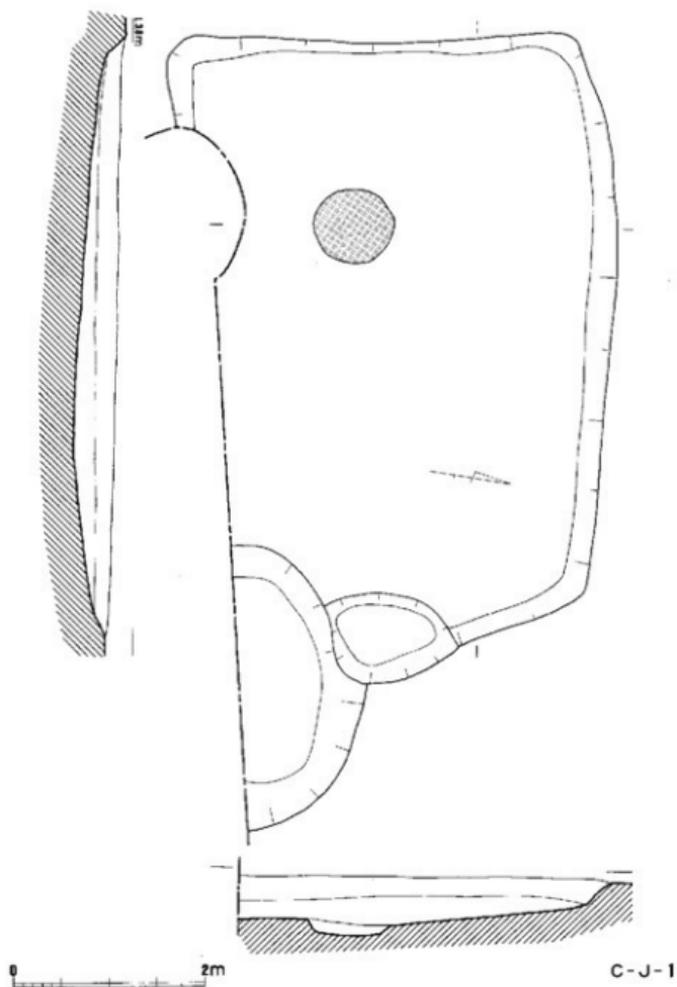


Fig. 54 西新町遺跡C地区第1号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

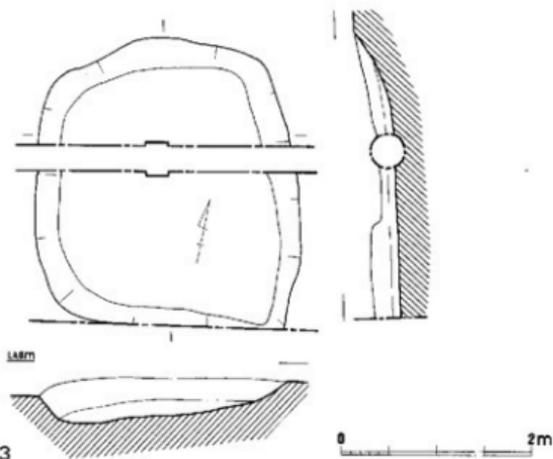
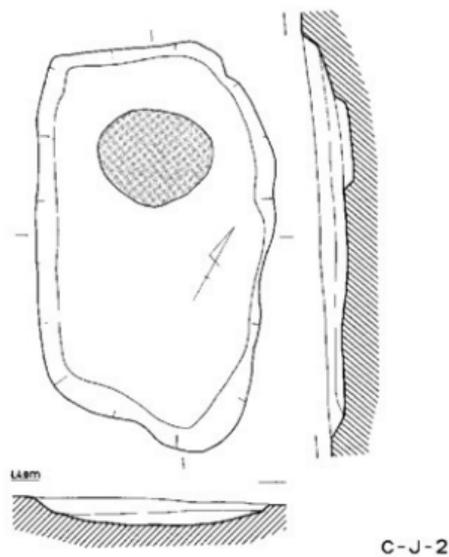


Fig. 55 西新町遺跡C地区第2・3号竖穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

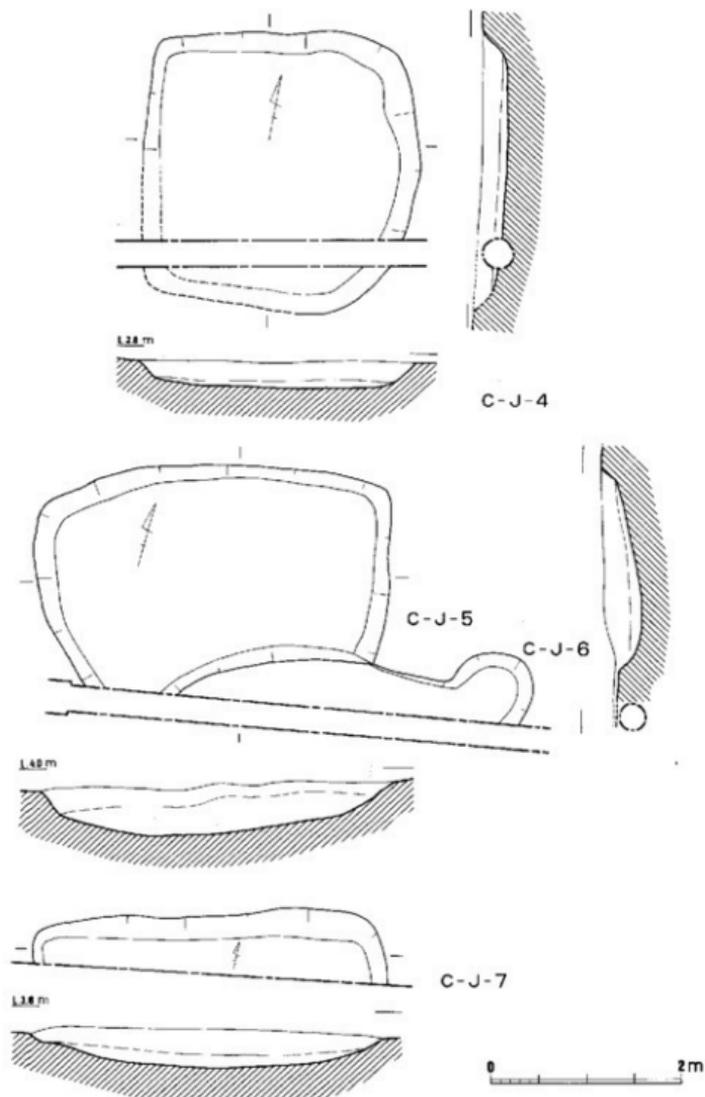
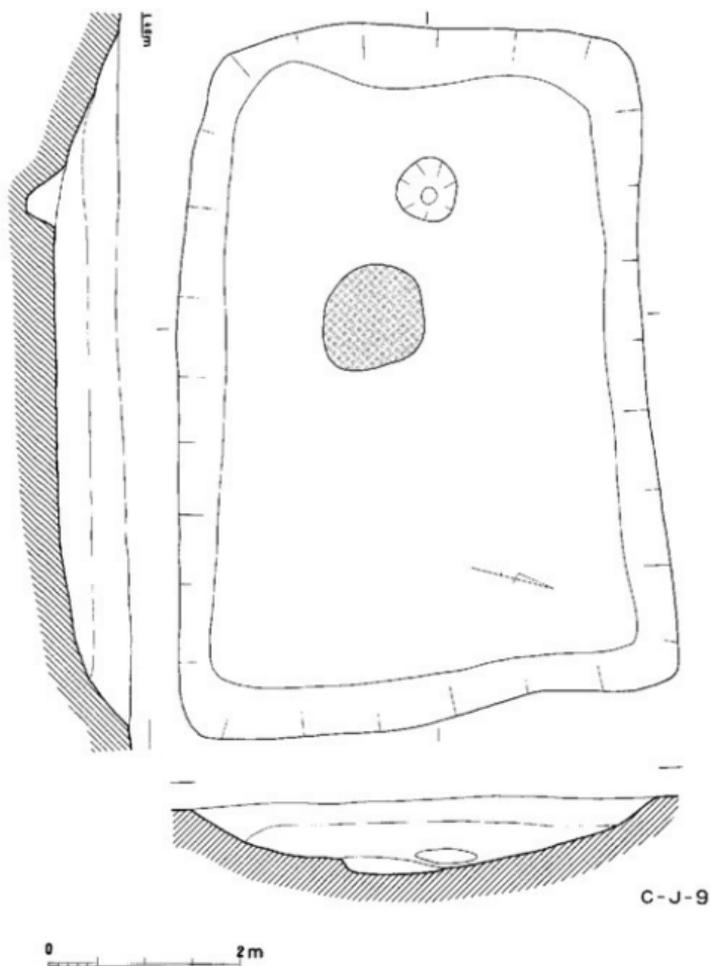


Fig. 56 西新町遺跡C地区第4～7号竪穴式住居跡の実測図（縮尺1/60）



C-J-9

Fig. 57 西新町遺跡C地区第9号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

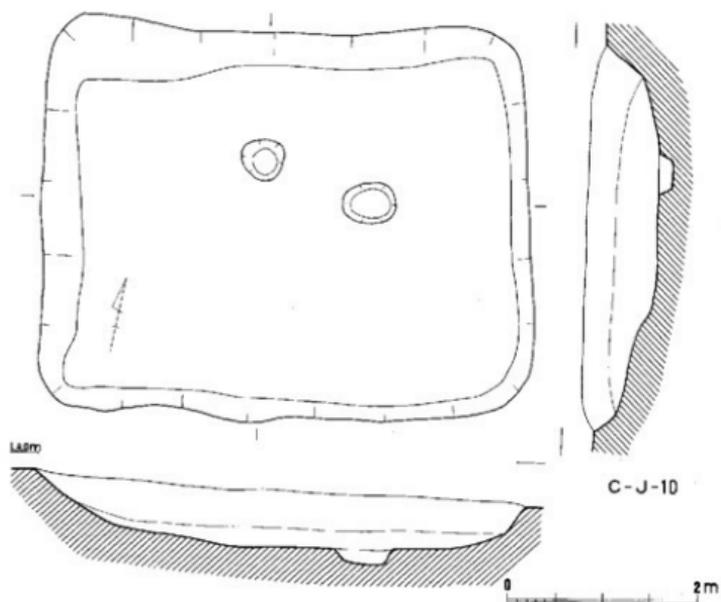


Fig. 58 西新町遺跡C地区第10号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

地区	遺構番号	探洞番号	遺構状態	平面プラン	規模(m)		柱穴	屋内施設	遺物出土状況・その他	編年	
					長軸	短軸					
D	J-1	Fig.59	J-15を切る。完結。	隅丸方形	6.50	4.75	-	北壁に沿ってベ ッド状遺構あり。	床面から若干浮いた状況で一括して出土。	Ⅲ	
	J-2	Fig.59	南側は遺構状態が悪く仔細不明。	隅丸方形	2.08	-	-	-	床面から若干浮いた状況で一括して出土。	Ⅳ	
	J-3	Fig.60	D-4、J-11に切られる。	隅丸方形	4.77	3.15	-	中央より北側よりに伊路あり。	火災をうけ、遺物は炭化材とともに一括して出土。	Ⅲ	
	J-4	Fig.61	完 結	隅丸方形	2.08	2.14	-	-	西側から一括して崩壊された状況で出土。	Ⅲ	
	J-5	Fig.61	南側の大半は調査区域外のため未調査。	隅丸方形	1.85	-	-	-	覆土中から出土。	Ⅲ	
	J-6	Fig.61	完 結	隅丸方形	3.53	3.10	-	-	覆土中から出土。	Ⅲ	
	J-7	Fig.62	完 結	不整形	4.89	4.10	-	南西隅付近に伊路あり。	覆土中から出土。	Ⅲ	
	J-8	Fig.63	南側は調査区域外のため未調査。部、下水道にかかるとのため未調査。	隅丸方形	5.95	-	-	西側隅付近に伊路あり。	床面から若干浮いた状況で出土。焼土出土。	Ⅲ	
	J-9	Fig.64	完 結	隅丸方形	7.03	5.88	-	-	覆土中から出土。	Ⅲ	
	J-10	Fig.59	北側は調査区域外のため未調査。	隅丸方形	2.40	-	-	-	床面から若干浮いた状況で出土。	Ⅳ?	
	J-11	Fig.60	J-3を切る。	隅丸方形	4.57	3.47	-	中央、やや東より2カ所に伊路あり。	床面からやや浮いた状況で出土。	Ⅲ	
	J-12	Fig.65	北側は調査区域外のため未調査。	隅丸方形	4.25	-	1	ほぼ中央に伊路あり。	+	シ	-
	J-13	-	J-16を切る。北側の一部は調査区域外のため未調査。	方 形	4.50	-	-	中央、東より2カ所に伊路あり。	一部、床面に貼りついた状況で出土。		Ⅲ
	J-14	-	北側の一部は遺構状態が悪く仔細不明。	方 形	2.70	-	-	ほぼ中央に伊路あり。	東側隅から壁出土。		Ⅳ
	J-15	-	J-1に切られる。	不整形	2.51	1.70	-	-	+	シ	Ⅲ
	J-16	-	J-13に切られる。北側は調査区域外のため未調査。	隅丸方形	10.80	-	-	-	覆土中より出土。		Ⅲ
	J-17	-	完 結	方 形	2.96	-	2	中央、東よりに伊路あり。	覆土中より出土。		Ⅳ

Tab. 9 西新町遺跡D地区竪穴式住居跡観察一覽表

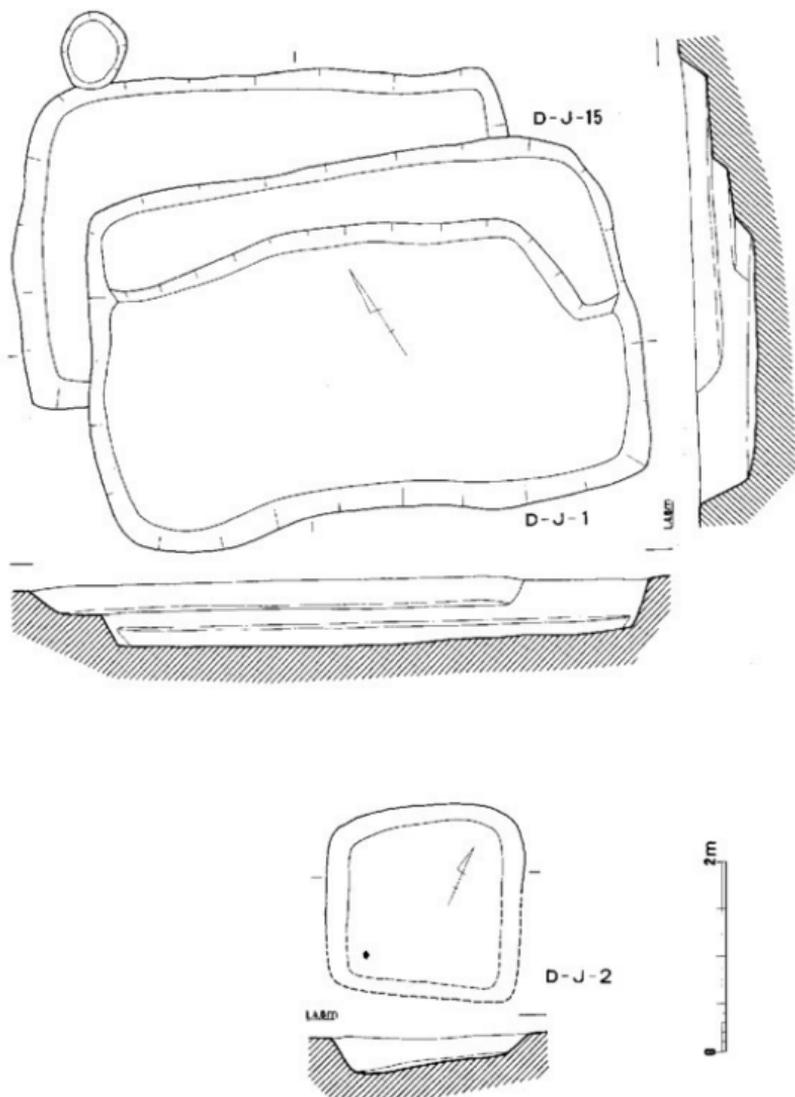


Fig. 59 西新町遺跡D地区第1・2・15号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

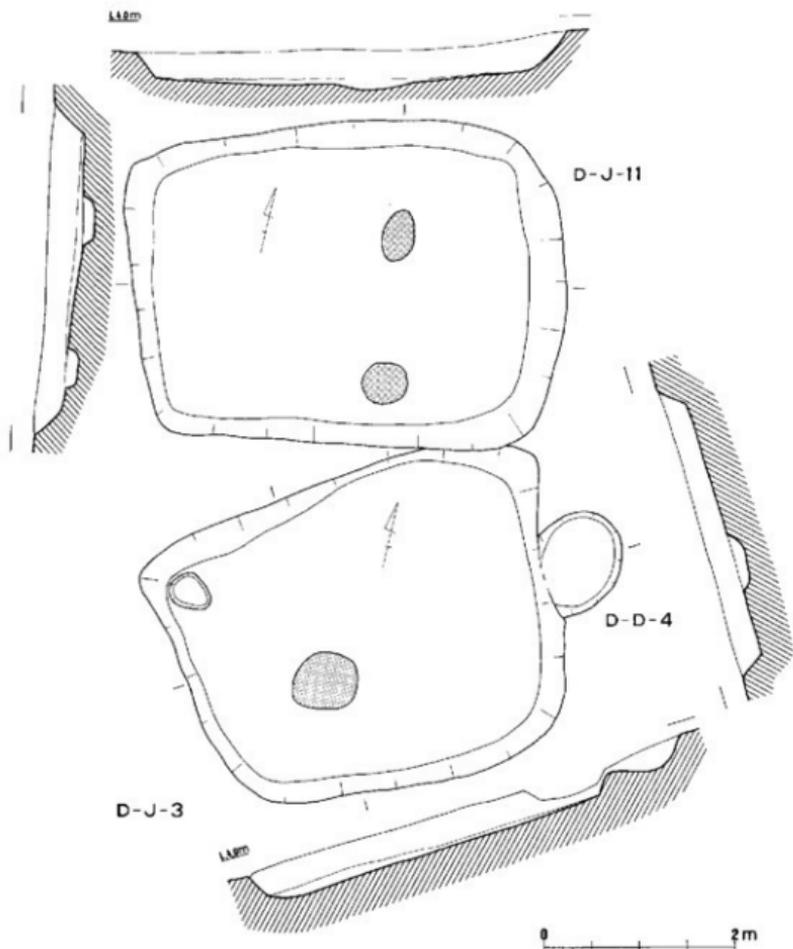


Fig. 60 西新町遺跡D地区第3・11号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

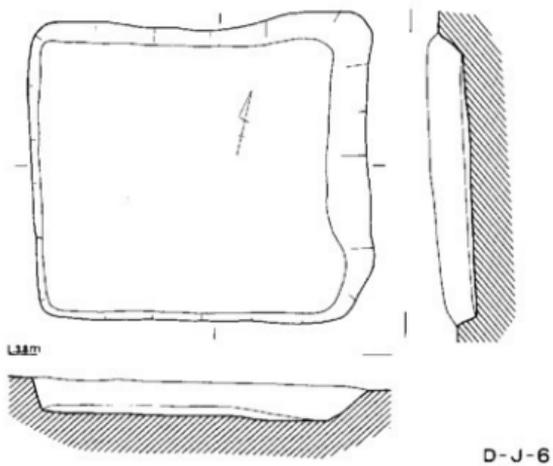
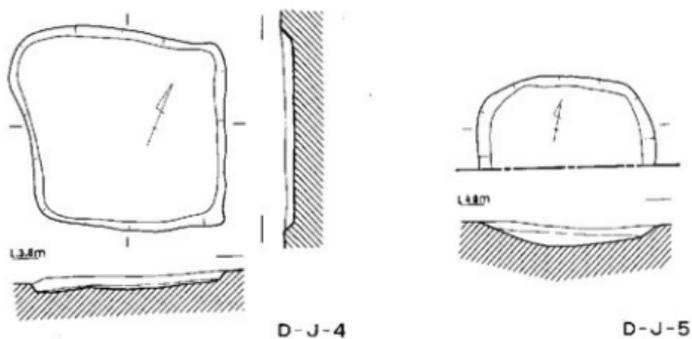


Fig. 61 西新町遺跡D地区第4・5・6号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

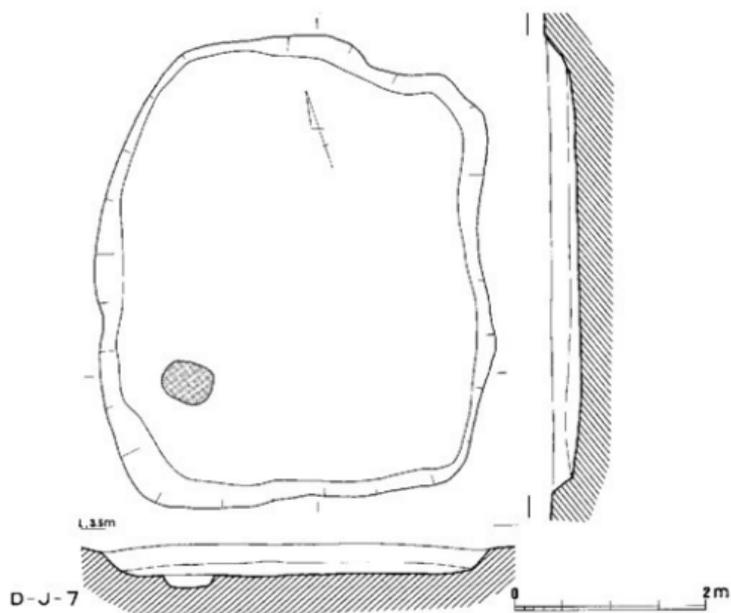


Fig. 62 西新町遺跡D地区第7号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

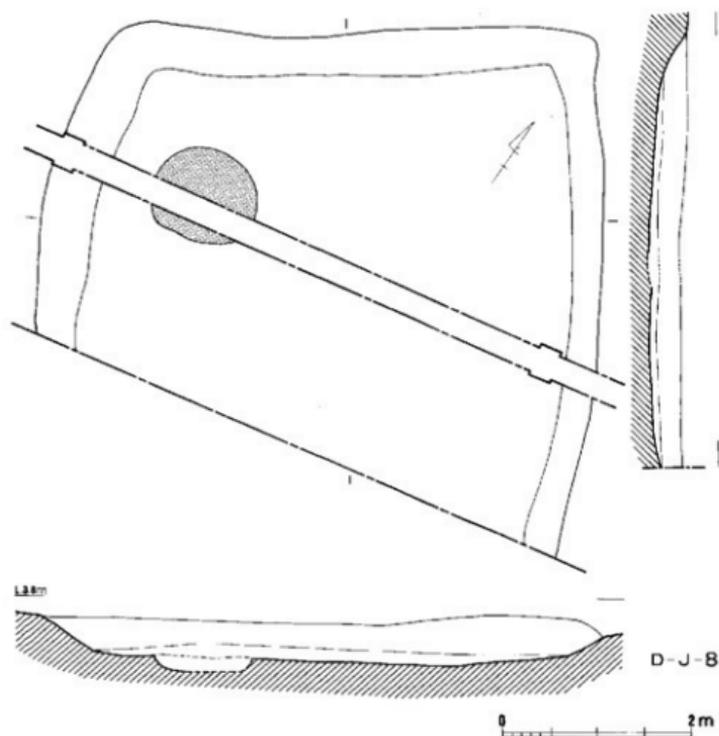


Fig. 63 西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

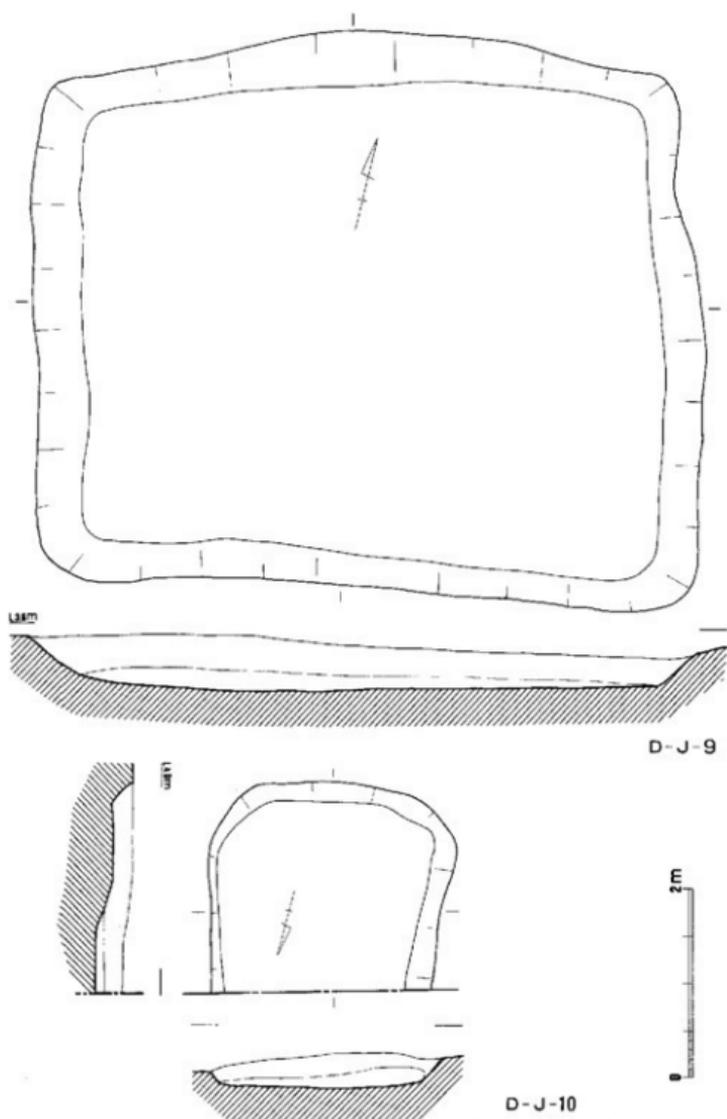


Fig. 64 西新町遺跡D地区第9・10号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

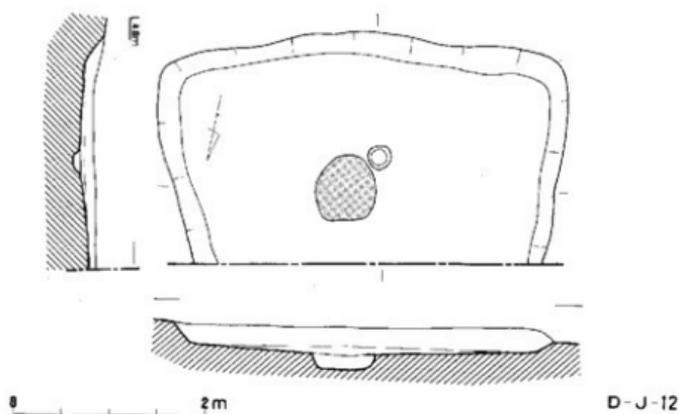


Fig. 65 西新町遺跡D地区第12号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺 1/60)

地区	遺構番号	詳細番号	遺構状態	平面プラン	規模(m)		柱穴	屋内施設	遺物出土状況・その他	編年
					長軸	短軸				
E	J-1	Fig.66	南側は遺構状態が悪く仔細不明。	隅丸方形	3.40		-	-	覆土中から出土。	III
	J-2	Fig.66	J-3と切りあう。	方形	5.55	4.10	-	北側隅付近に印跡あり。	覆土中から出土。	IV
	J-3	Fig.66	J-2と切りあう。	方形	2.65	1.20	I	-	覆土中から出土。	II
	J-4	Fig.67	完盛	方形	2.67	1.50	--	-	覆土中から出土。	III

Tab. 10 西新町遺跡 E地区竪穴式住居跡観察一覧表

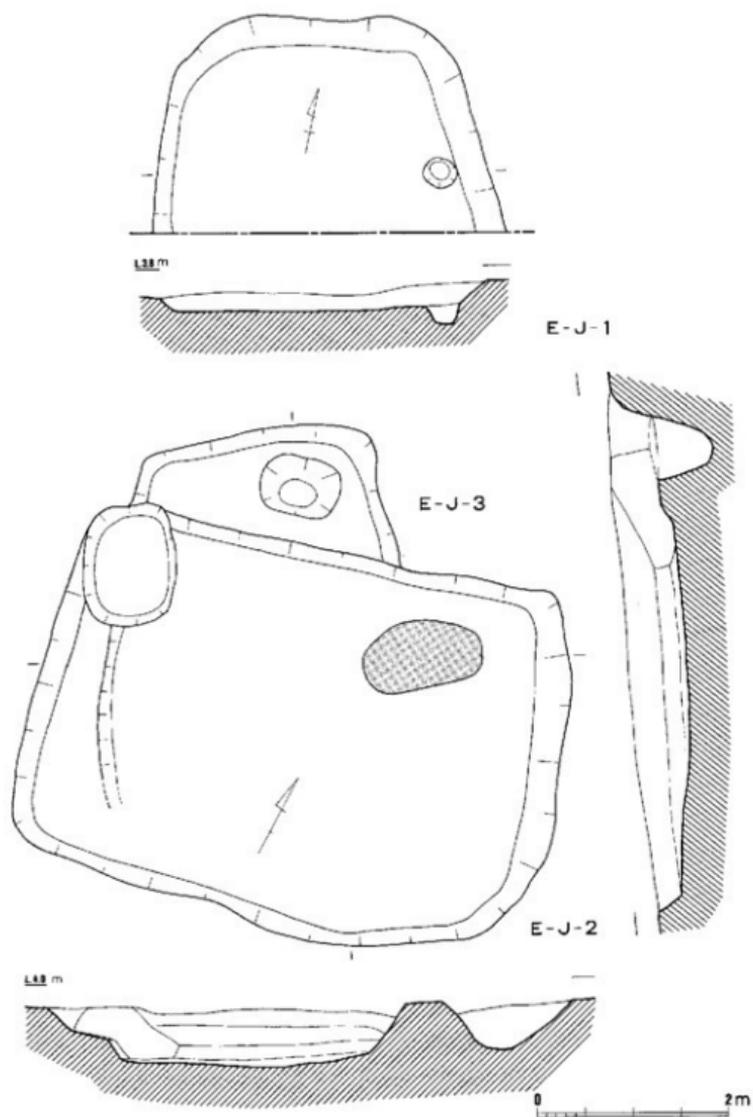


Fig. 66 西新町遺跡E地区第1・2・3号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

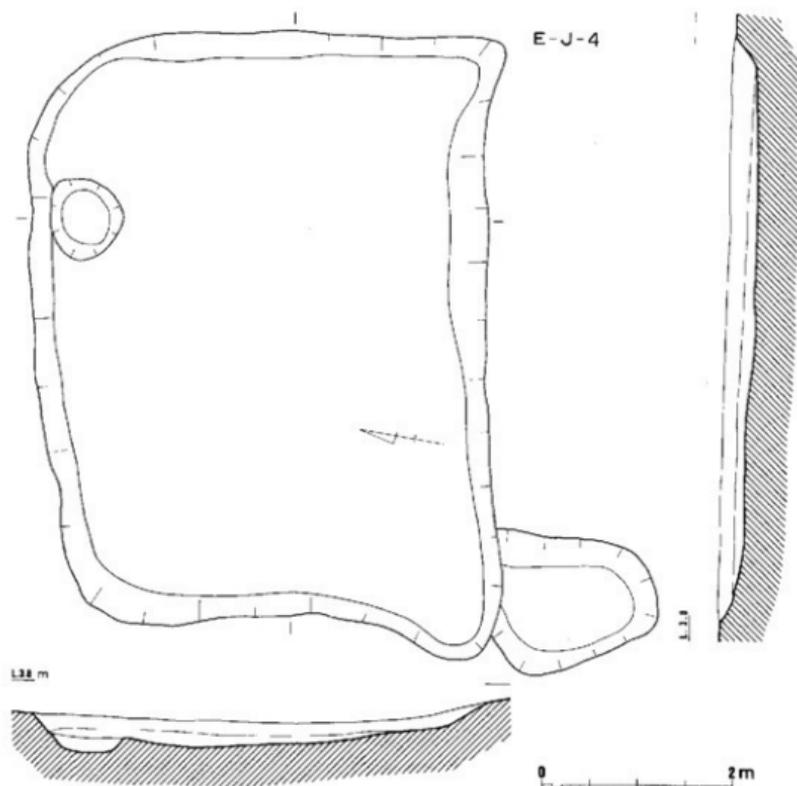
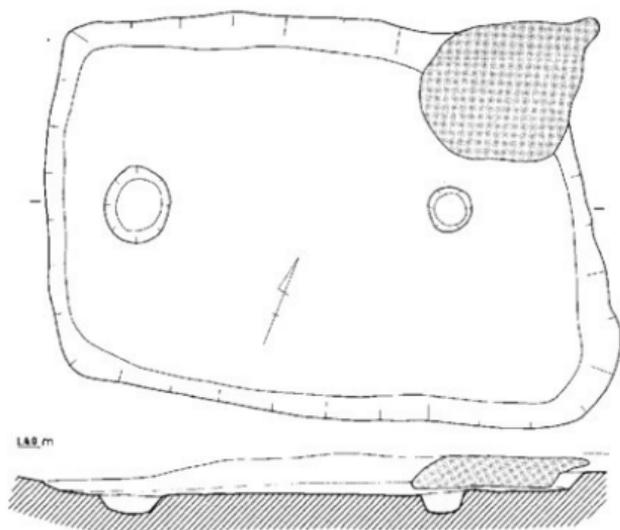


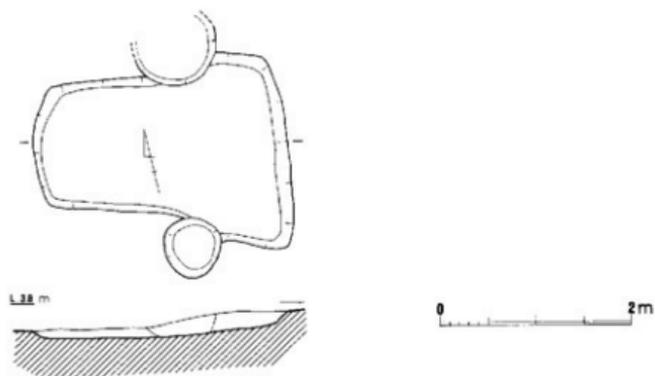
Fig. 67 西新町遺跡E地区第4号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺 1/60)

地区	遺構番号	検出番号	遺構状態	平面プラン	規模(m)		柱穴	屋内施設	遺物出土状況・その他	層年
					長軸	短軸				
F	J-1	Fig. 68	完型	方形	5.82	4.23	2	北側壁にかまどあり。	層土中から出土。「室内式」の竈 (Fig. 130, 3) は、住居内のピットから出土。	Ⅲ
	J-2	Fig. 69	J-3を切る。	隅欠方形	6.76	4.96	2	北側壁にかまどあり。	層土中から出土。	Ⅳ
	J-3	Fig. 69	J-2に切られる。	隅欠方形	-	-	-	-	層土中から出土。	Ⅳ
	J-4	Fig. 68	D-17, 18に切られる。	不整形	2.67	1.50	-	-	層土中から出土。実測不可。	-

Tab. 11 西新町遺跡F地区竪穴式住居跡観察表



F-J-1



F-J-4

Fig. 68 西新町遺跡F地区第1・4号堅穴式住居跡の実測図（縮尺1/60）

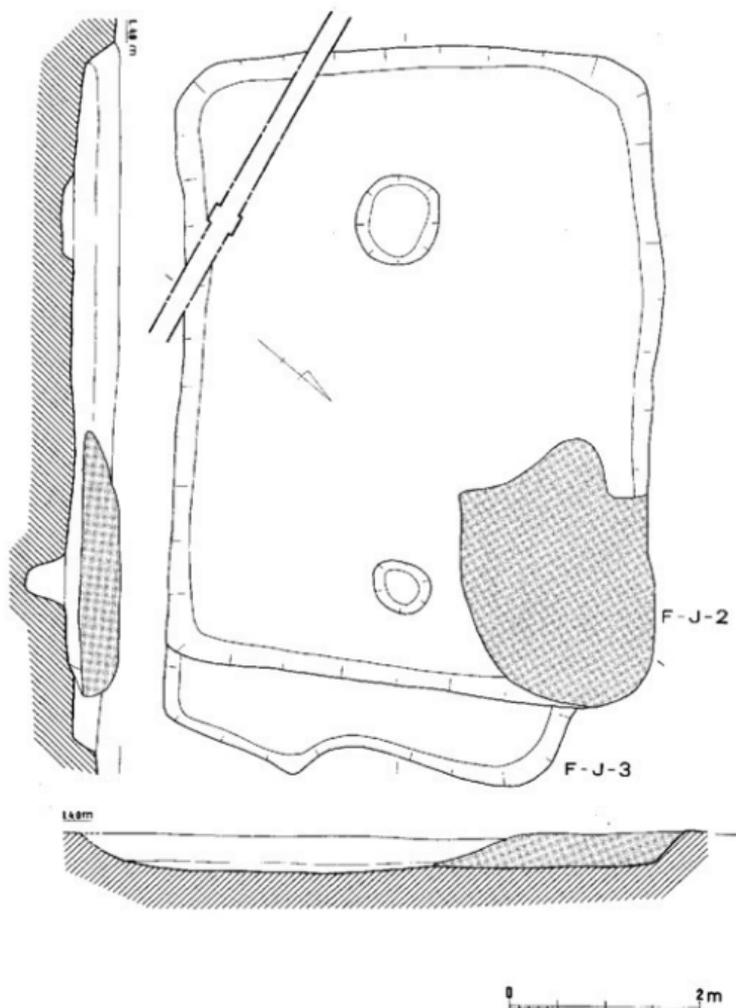


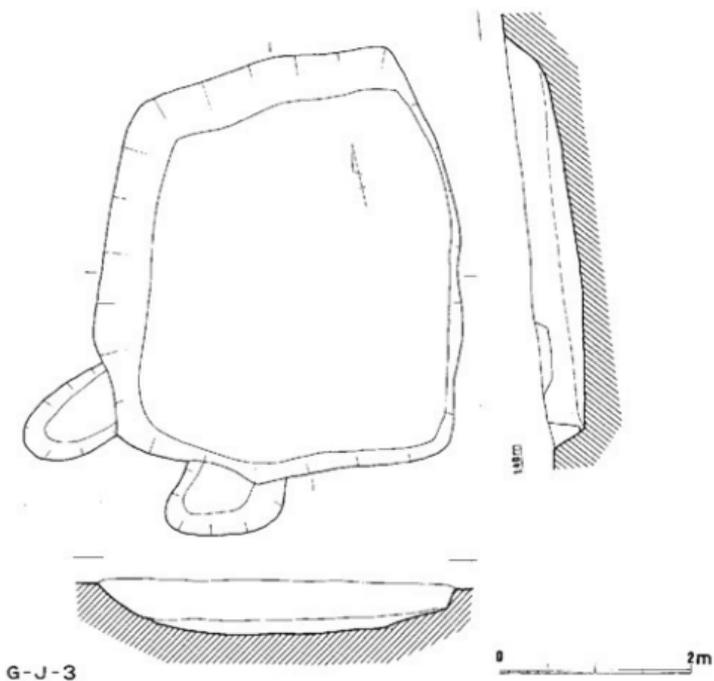
Fig. 69 西新町遺跡F地区第2・3号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺1/60)

II. 西新町遺跡の調査

86

地区	遺構番号	採図番号	通構状況	平面プラン	規模(m)		柱穴	屋内施設	遺物出土状況・その他	編年
					長	幅				
G	J-1	Fig.71	南側は調査区域外のため調査。	隅丸方形		—	—	—	床面に3枚貼り付いた状態で出土。	II
	J-2	Fig.71	北側半分は調査区域外のため未調査。	方形	3.94	—	2	多数のピットを検出。	覆土下から出土。実測不可	—
	J-3	Fig.70	完 備	不整形方形	4.45	3.75	—	—	北側にある不整形のピット内から出土。	II

Tab. 12 西新町遺跡G地区竪穴式住居跡観察一覧表



G-J-3

Fig. 70 西新町遺跡G地区第3号竪穴式住居跡の実測図 (縮尺 1/60)

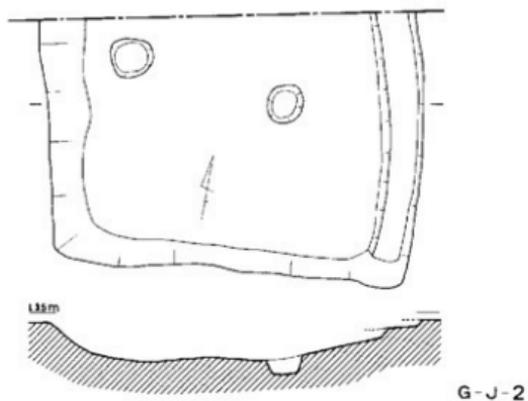
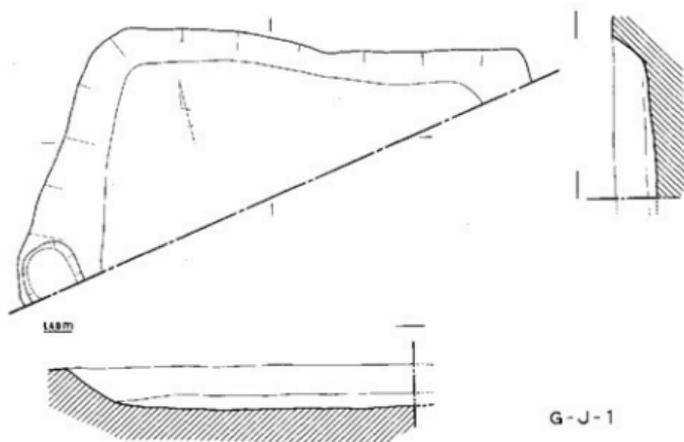
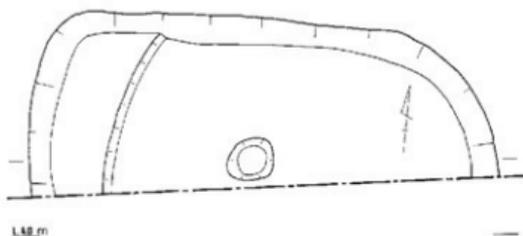


Fig. 71 西新町遺跡G地区第1・2号竪穴式住居跡の実測図（縮尺1/60）

地区	遺構番号	区域番号	遺構状態	平面 プラン	規模(m)		柱 穴	屋内施設	遺物出土状況・その他	編年
					長軸	短軸				
	J-1		欠							
H	J-2	Fig. 72	南側半分は埋蓋区域外。	隅丸方形	4.87	-	1	-	すべて版土中出土。	II
	J-3	Fig. 72	南側半分は深溝区域外。	隅丸方形	4.55	-	-	-	床面に貼り付いた状態で出土。	I

Tab. 13 西新町遺跡H地区竪穴式住居跡観察表



1.50 m



H-J-2



1.50 m



H-J-3

0 2m

Fig. 72 西新町遺跡H地区第2・3号竪穴式住居跡の実測図(縮尺1/60)

4. 竪穴式住居跡出土の土器

竪穴式住居跡出土の土器で本報告に図化したものは約450点に及ぶ。これは各遺構ごとに器種のバリエーションや時期的な幅を追求するうえで、小片にいたるまで実測した結果である。

そして在地系の甕形土器や壺形土器の型式変化を基に、四つの様式を設定したが、大半の遺構において、土器の組成は、一もしくは二様式以内で捉えられた。このことは、遺物の堆積がほぼ単一の時期で、一括資料として認められることを示している。中でもD地区第3号竪穴式住居跡は、焼失したと思われる竪穴式住居跡で、土器の遺存状態もよい。

在地の土器に加えて、他の地方の影響を強くうけたり、搬入されたと思われる土器が各様式に見うけられるのも当遺跡の特徴である。H地区第2号竪穴式住居跡より検出された甕形土器の底部の破片は、畿内地方より搬入された可能性があり、C地区第3号竪穴式住居跡出土の二重口緑の甕形土器も山陰的傾向が強い。また陶質土器も、E地区第2号竪穴式住居跡の土器に伴出しており、朝鮮半島との関係も興味深い。

砂地に営まれた遺構であるため、土器の器壁も粗れておらず、調整の技法を知るうえでも良質な資料を提供しているといえよう。

図号 (整理番号)	器種	型式 分類	図		線画 色	土	備考	様式	
			外	内					
Fig. 72 1	甕	A-II	あれが著しく仔細不明。	あれが著しく仔細不明。	良好	赤褐色	粗砂粒多し。	小片のため断面に疑問。	Ⅱ
2	甕	A-III	胴部尖頭高橋ナデ。胴部ハケメ(5本/1cm)僅ナデ。	胴部橋ナデ。胴部ナデ。	良好	淡黄褐色	粗砂粒多し。	片ほどの破片。	Ⅱ
3 (R-005) (R-012)	甕		口縁部橋ナデ。胴部ハケメ後、胴の下方のケンナ。	口縁部橋ナデ。胴部ハケメ後、ナデ。ハケメ4口縁を覆す口縁ナメ。	良好	黄褐色	砂粒を少量含む。	ほぼ完整。胴部あり。	Ⅱ
4 (R-004)	甕		口縁部橋ナデ。胴部ハケメ(4〜5本/1cm)僅ナデ。胴部下ナメナリ。	口縁部ハケメ。胴部ハケメ後、ナデ。胴部ナメナリ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。	ほぼ完整。	Ⅱ
5 (R-010)	甕		口縁部橋ナデ。胴部ハケメ(4本/1cm)。胴部下ナメナリナリ。	口縁部ナメナリ後、ハケメ。胴部ナメナリナリ。	良好	黄褐色	砂粒多し。	片ほどの破片。	Ⅱ
6 (R-009)	甕		胴部上平ナメナリ後、ハケメ(5本/1cm)僅ナデ。胴部下ナメナリ。あれハケメ(4本/1cm)に多い。底縁、厚縁している。	胴部上平ハケメ(4本/1cm)。胴部下ナメナリナリ。	良好	赤褐色	砂粒多し。粗砂。	口縁部欠失。	Ⅱ
7 (R-015)	甕	II-II	口縁部橋ナデ。胴部ハケメ(10本/1cm)。	口縁部橋ナデ。胴部ハケメナリ。	良好	暗褐色	粗砂	片ほどの破片。外面に磨耗。	Ⅱ
8	甕	II-II	橋 ナ デ	口縁部橋ナデ。胴部ハケメナリ。	良好	暗褐色	粗砂粒多し。	片ほどの破片。	Ⅱ
9	甕	II-II	橋 ナ デ	口縁部橋ナデ。胴部ハケメナリ。	良好	淡黄褐色	粗砂粒多し。	小片	Ⅱ
10	甕		ハケメ(5本/1cm)。	ハケメ後、橋ナデ。	良好	淡黄褐色	粗砂粒多し。	片ほどの破片。	Ⅱ
11 (R-011)	鉢	F	橋 ナ デ	橋 ナ デ	良好	赤褐色	粗砂粒多し。	手拉ね。ほぼ完整。	Ⅱ
12 (R-005)	鉢	F	ナ デ	ナ デ	良好	赤褐色	砂粒を少量含む。	ほぼ完整。断面に磨耗。	Ⅱ
13 (R-005)	鉢	F	ナ デ	ナデ。底部に内橋を覆す。	良好	赤褐色	砂粒を少量含む。	ほぼ完整。外面磨耗。	Ⅱ
14 (R-017)	鉢	E-I	口縁部ハケメナリ。胴部ナメナリ。	ナ デ	良好	暗褐色	粗砂	ほぼ完整。	Ⅱ
15 (R-001)	鉢		ナ デ	ナ デ	良好	赤褐色	粗砂粒多し。	完整。外面に磨耗。	Ⅱ
16 (R-005)	壺		口部ハケメ後、ナデ。胴部ハケメ(8本/1cm)後、たるくナデ。	胴部ナデ。胴部下平ナデ。胴部下ハケメ(6本/1cm)。	良好	淡黄褐色	粗砂	胴部に厚い穿孔。	Ⅱ
17 (R-010)	壺		ハケメ後、橋ナデ。	橋 ナ デ	良好	黄褐色	砂粒少なし。	ほぼ完整。外面磨耗。	Ⅱ

Tab. 14 西新町遺跡A地区第1号竪穴式住居跡出土土器観察表

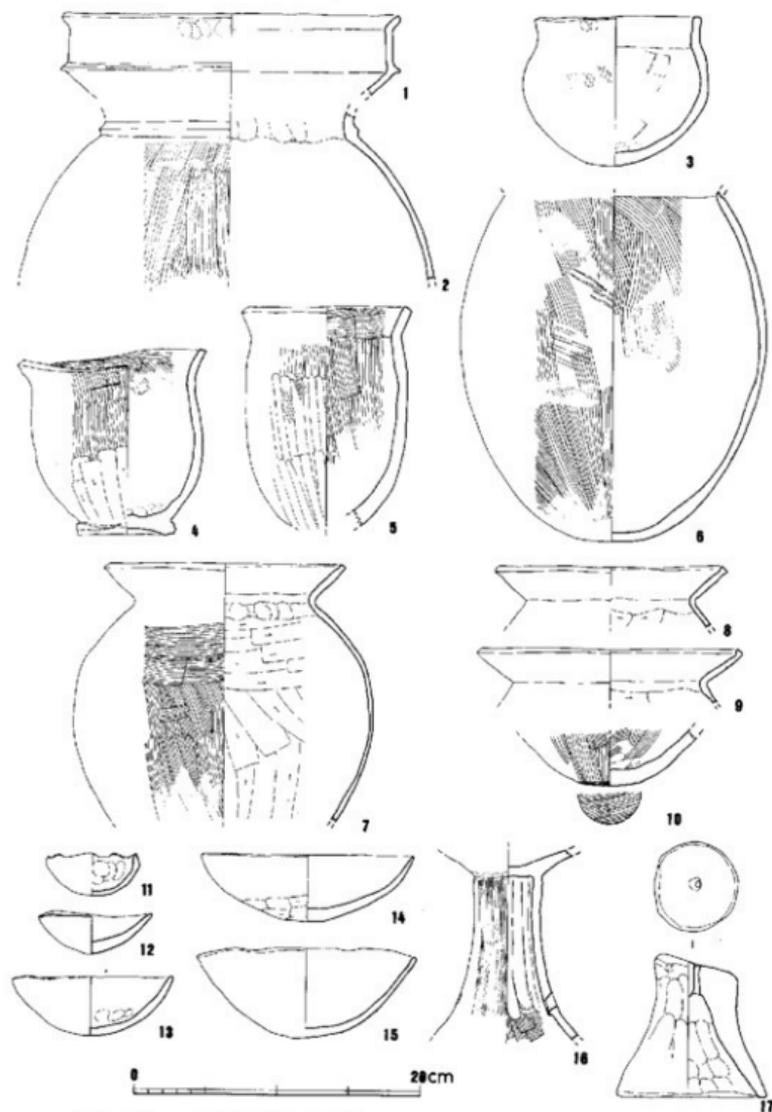


Fig. 73 西新町遺跡A地区第1号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	装		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 74 1	壺	A-II	口縁部ハケメ(6~7本/1cm)、胴部上半ハケメ、胴部下半、或るハケメ(クズりに近い)。口縁部につけ懸付式に保護層を施す。	口縁部ハケメ。胴部ナダ。底部部オサエ後、ナダ。	良好	褐色	砂粒多し。	ほぼ完全。口縁部から胴部上半に欠け。	II'

Tab. 15 A地区第4号壺穴式住居跡出土土器観察表

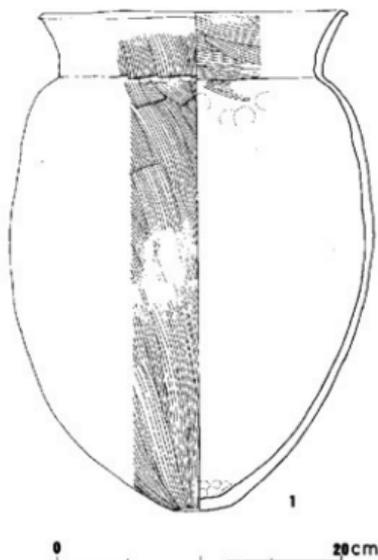


Fig. 74 西新町遺跡A地区第4号壺穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	装		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 76 1 (R-1)	壺	2	口縁部横ナダ。胴部上半ハケメ(7~8本/1cm)横横ナダ。胴部下半ハケメ(中央4本/1cm、下半7~8本/1cm)。	口縁部横ナダ。胴部ハケメ(3~4本/1cm)。	良好	褐色	砂粒多し。	胴部外壁に3寸くぼみが付着。	
2	壺	2	口縁部横ナダ。胴部ハケメ(4~5本/1cm)横ナダ。	口縁部横ナダ。胴部ハケメ。胴部下半ハケメ。	良好	褐色	砂粒多し。	底部付道は2次的な式を打っている。	
3	鉢	ナ	ナ	ナ	良好	暗褐色	良好	脚台をもつものか。	
4 (R-3)	成坏		あるいは著しく仔細不明(ナダか?)	非常に丁寧なナダ。	良好	褐色	砂粒を少量含む。	胴部欠失。	III

Tab. 16 西新町遺跡A地区第5号壺穴式住居跡出土土器観察表

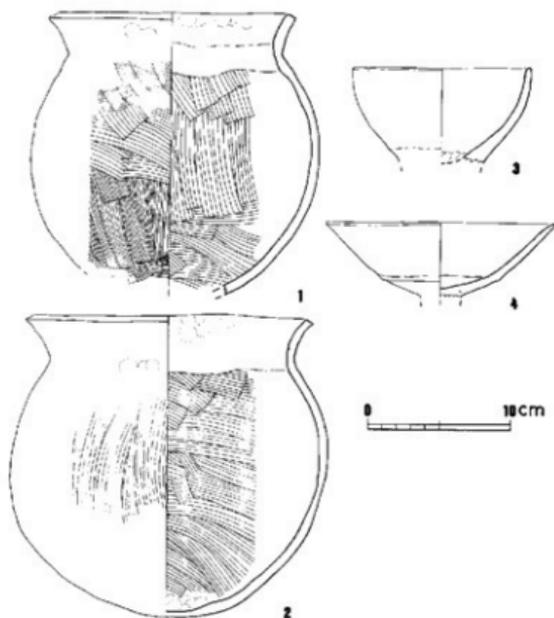


Fig. 75 西新町遺跡A地区第5号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	出式 分期	調 整		焼成	色 調	印 十	備 考	様 式
			外 面	内 面					
下層76	1	Ⅱ	あれが著しく仔細不明。	あれが著しく仔細不明。	良好	淡黄色	粗・細砂粒多し。	小	Ⅱ
Ⅱ	高杯	A	ハケメ(5本/1cm)。	浮部ハケメ後ナシ。細砂粒多シ。	良好	淡黄色	粗砂粒多シ。		
3	Ⅱ	A	ハズリ	細砂粒ナシ後ハケメ(10本/1cm)。高部ナシ。	良好	淡黄色	粗砂粒多シ。		底部破片。外面全面に厚付層。
4	鉢	B	ヘラナデ。ヘラ工具痕を残す。	ナ	良好	淡赤褐色	粗良粘土を用い、砂を欠く。		

Tab. 17 西新町遺跡A地区第6号竪穴式住居跡出土土器観察表

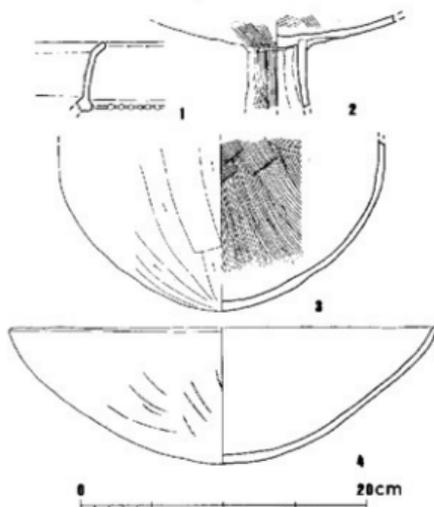


Fig 76 西新町遺跡A地区
第6号竪穴式住居跡出土土器
(縮尺1/4)

種別番号 (整理番号)	図号	形式 分類	調 査		地味	色 調	胎 土	備 考	種 式
			外 形	内 容					
Fig.77 1	遺		表れが著しく仔細不明。部分的にハケメ(5本/1cm)が残る。	ケンマ	良好	淡黄褐色	横切されているが胎粒は多い。	小 片	
2	産	C	ハケメ(8本/1cm)後、胎粒のケンマ。	胎粒部ナメ。胎粒ハケメ後、残ナメ。	良好	淡黄褐色	砂粒をほとんど含まず。	小 片	
3	産	A	胎粒部ハケメ(4本/1cm)。下半は表れが悪い。突部付のケンマ。胎粒ハケメ。	胎粒部ハケメ。胎粒ナメ。	良好	淡黄褐色	粗・細砂粒多し。		
4	産	A-II	口縁部横ナメ。胎粒ハケメ(4-5本/1cm)。	ハケメ(4-5本/1cm)。	良好	赤褐色	粗・細砂粒多し。	写ほどの破片。	II
5	産	A-II	口縁部横ナメ。胎粒ハケメ(4-5本/1cm)。	ハケメ(4-5本/1cm)。	良好	淡赤褐色	砂粒を含む。	写ほどの破片。	II
6	産	A-II	口縁部ハケメ(5本/1cm)後、横ナメ。後半はハケメ。口縁部のつけ根付近のみハケメ後胎粒ナメ。	ハケメ(5本/1cm)。	良好	赤褐色 淡黄褐色	粗・細砂粒多し。	写ほどの破片。外面に部分的に保存。	II
7	産	A-II	口縁部ハケメ(7-8本/1cm)後、横ナメ。胎粒ハケメ。	口縁部ハケメ。胎粒ナメ。	良好	淡赤褐色	砂粒を含む。	写ほどの破片。	II
8	産	A-II	ハケメ(4-5本/1cm)。	ハケメ(口縁部4-5本/1cm。胎粒8本/1cm)。	良好	淡赤褐色	細砂粒多し。	写ほどの破片。	II
9	産	A-II	ハケメ(5本/1cm)。口縁部と口縁部つけ根付近はハケメ後、横ナメ。	ハケメ(5本/1cm)。	良好	淡赤褐色	砂粒多し。	写ほどの破片。	II
10	産	A-II	口縁部横ナメ。胎粒ハケメ(5-6本/1cm)。	ハケメ(口縁部4本/1cm。胎粒5-6本/1cm)。	良好	淡赤褐色	横切・細砂粒多し。		II
11	産	A-II	口縁部ハケメ(5-6本/1cm)後、横ナメ。胎粒ハケメ後、ナメ。	口縁部ハケメ。胎粒ハケメ後、ナメ。下半は表れが悪い。仔細不明。	良好	黄褐色 淡黄褐色	粗・細砂粒多し。		II
Fig.78 37	産	A-II	表れが著しく仔細不明。	丁寧ナメ。	良好	赤褐色	粗・細砂粒多し。	写欠失。	II
13	産		胎粒なしがキ。	ミガキ、増文。	良好	淡黄褐色	胎粒をほとんど含まず。	小 片	
14	産	A-II	胎粒部ハケメ(タズリに足りない)。	ナメ(ハケメが先行か?)	やや良好	赤黄褐色 淡赤褐色	粗・細砂粒多し。	瓦部破片。破片は胎粒付底面。	II
15	産	A-II	胎粒部ハケメ(タズリに足りない)。	ハケメ(4本/1cm)後、ナメ。胎粒部ナメ。	良好	淡黄褐色 淡赤褐色	粗・細砂粒多し。	胎粒破片。	II
16	産	A-II	胎粒部横ナメ。胎粒部ナメ。	表れが著しく仔細不明。部分的にハケメ(6本/1cm)が残る。	良好	淡黄褐色 淡赤褐色	粗・細砂粒多し。	胎粒破片。	II

Tab. 18 西新町遺跡A地区第7号竪穴式住居跡出土土器観察表

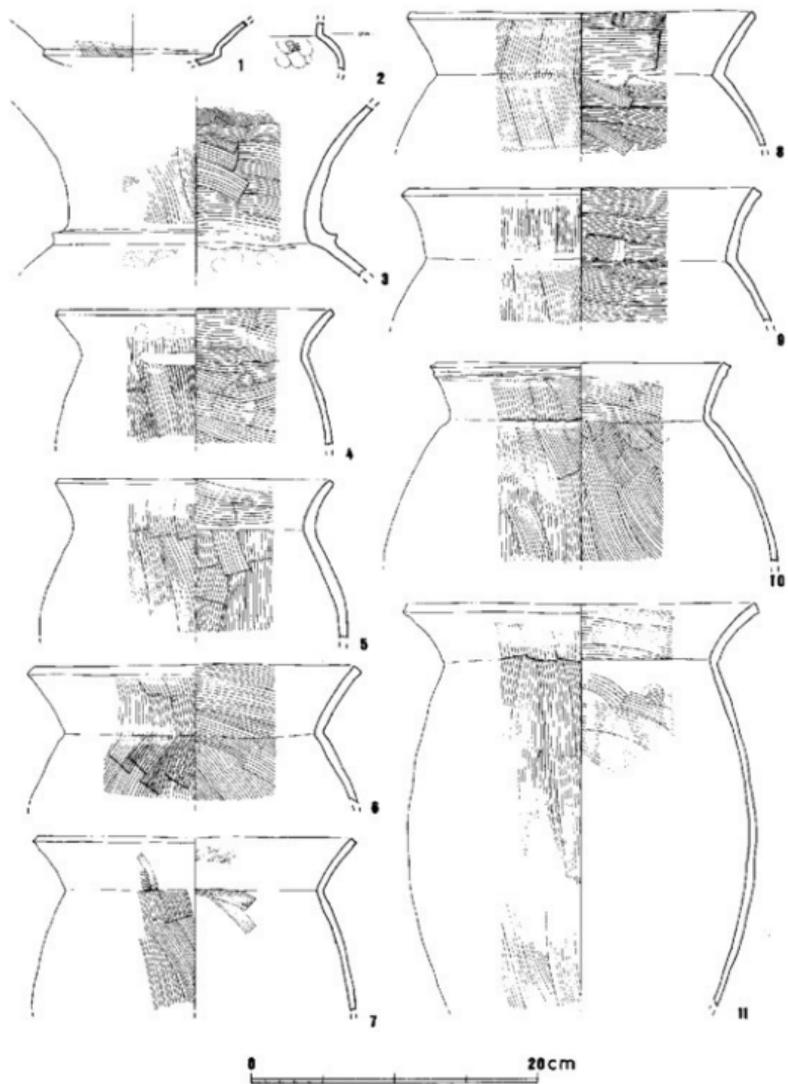


Fig. 77 西新町遺跡A地区第7号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

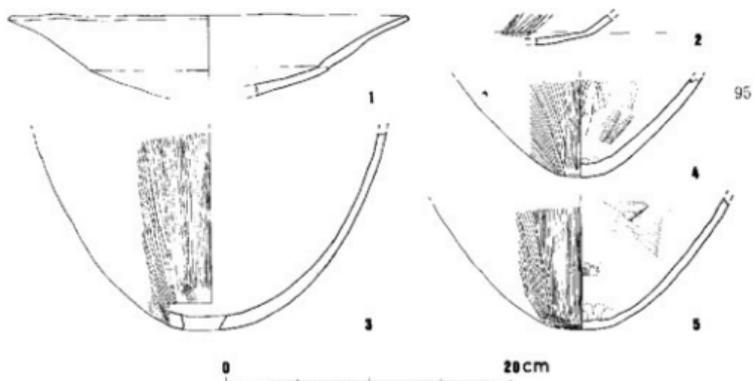


Fig. 78 西新町遺跡A地区第7号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種 分類	型式		地味	色調	胎土	備考	様式	
		外	内						
Fig. 79 1 R-2	甕	A II	口縁部ハケメ(5本/1cm) 地、横ナデ。上縁部は根 付迄は四ヨリヌ。4部上平 ハケメ。下縁部ヌリ。	口縁部-胴部ハケメ(3- 6本/1cm)。底部ナデ。	良好	淡褐色	砂粒と少量含む。	ほぼ完形。	II
2 (R-3)	甕	C II	口縁部横ナデ。胴部上平ナ デ。下平且踵部ハケメ(ケ ズリに近い)。	口縁部ハケメ(6-7本/ 1cm)地、横ナデ。胴部ハ ケメ。底縁部ナデ。	良好	褐色	粗-粗粒多し。	ほぼ完形。	II
3 (R-4)	鉢	D II	口縁部-胴部上平ナデ。胴 部下平-底縁部ケズリ。	口縁部ナデ。胴部-底縁部ハ ケメ(4-5本/1cm)。	良好	淡褐色	粗粒多し。	欠欠。	II
4 (R-1)	鉢	B II	口縁部横ナデ。胴部ナデ 横ナデ。	口縁部-胴部ハケメ(5- 6本/1cm)。底部ナデ。粗 粒多し。	やや 不良	暗褐色	粗-粗粒多し。	ほぼ完形。	III

Tab. 19 西新町遺跡A地区第11号竪穴式住居跡出土土器観察表

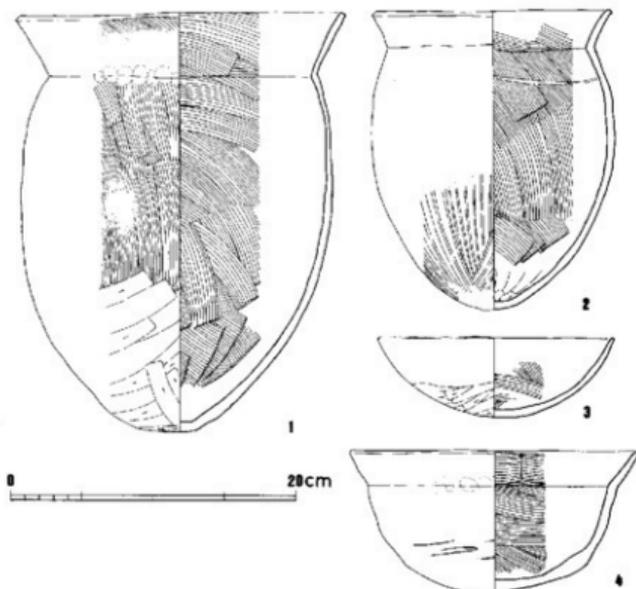


Fig. 79 西新町遺跡A地区第11号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調		構成	色調	胎土	曜青	様式
			外	内					
1	鉢	F	口縁部横ナデ。胴部一辺斜 ハケメ(ケズリに近しい)。		口縁部横ナデ。胴部ナデ。	良好	褐色	砂粒を含む。	
			横ナデ		横ナデ	良好	淡黄赤色	粗・細砂粒多し。	小片
2	甗	G-II	上部ハケメ横ナデ。底部 横ナデ。		天井部ハケメ。胴部横ナデ。	良好	褐色	砂粒多し。	
3	甗								
4	甗	A-II	口縁部横ナデ。口縁部つけ 横付直に指形跡。胴部上半 ハケメ(4-5本/1cm) 横ナデ。胴部下半ケズリ。 口縁部横ナデ。胴部上半ハ ケメ横ナデ。胴部下半ケ ズリ横ナデ。		口縁部指オケム横。横ナデ。	良好	灰褐色	雄砂粒多し。	外面全面に煤付着。
5	甗	I-II	口縁部横ナデ。胴部ナデ。 口縁部ナデ。胴部ナデ。 口縁部ナデ。胴部ナデ。		口縁部ケズリ。胴部ナデ。 口縁部ナデ。胴部ナデ。	良好	褐色	もみを食った。	外面に煤付着。

Tab. 20 西新町遺跡B地区第1号竪穴式住居跡出土土器観察表

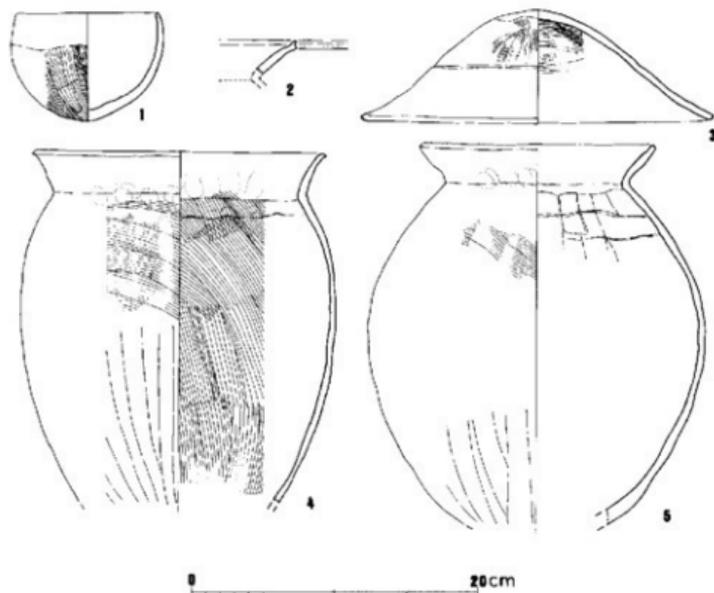


Fig. 80 西新町遺跡B地区第1号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	器 身		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig.81	壺	B-II	アタリ段、ハケメ。	ハケメ様、ナデ。	良好	帯灰黄褐色 の暗黄褐色	粗・粒粒状、非常に多い。	外面には煤付着。	II

Tab. 21 西新町遺跡B地区第4号竪穴式住居跡出土土器観察表

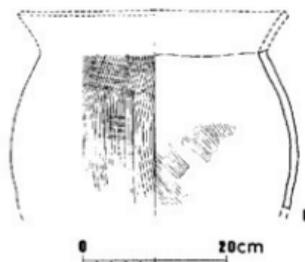


Fig. 81 西新町遺跡B地区第4号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	器 身		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig.82	壺		胴部一帯加土平、縦方向のヒガキ。胴部土キズあり。	胴部結ナデ。14部ナデ。	良好	暗黄褐色	粗・粒粒状多し。		
2	高杯	A	おれが著しく仔細不明。	杯底ハケメ(5本/1cm)、胴部ナデ。	やや良好	淡黄土色	砂粒を含む。		

Tab. 22 西新町遺跡B地区第7号竪穴式住居跡出土土器観察表

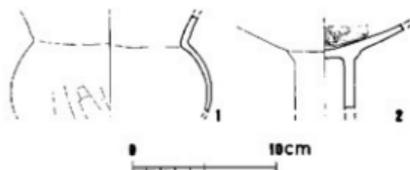


Fig. 82 西新町遺跡B地区第7号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

探出番号 (整理番号)	器種	形式 分類	調 査		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 83 1	甕	A-II	口縁部破ナシ。胴上1/3平ハケメ(1本/1cm)。胴部下1/3平ハケメ(2本/1cm)。(ケツリがエビノカク?)	口縁部ハケメ薄。ナシ。胴部ハケメ、表裏同ナシ。	良好	深褐色	砂粒多シ。	胴部中央に半月形の瓦葺跡。	Ⅱ
2	鉢	F-II	口縁部破ナシ。胴部一辺平ハケメ(1本/1cm)。ケツリ。	ナシ。器身割にヘラ状上1/3による破損を憚リ。	良好	淡褐色	砂粒を含む。	瓦葺跡あり。	Ⅱ
3	鉢	E ₂	口縁部破ナシ。胴部一辺平ハケメ(2本/1cm)。	口縁部破ナシ。胴部ハケメ、表裏同ナシ。	良好	淡褐色	砂粒を含む。	胴部に横割の瓦葺跡。	
4	高杯	A-E	口縁上平ハケメナシ。口縁下平ハケメ。	ハケメ(10本以上/1cm)横。ヘケミガキ。破文。	良好	暗褐色	砂粒を含む。		Ⅲ
5	高杯	A-E	口縁上平ハケメナシ。ナシ。口縁下平ハケメ。	口縁部目立ミダリ横。横ナシ。他はミダキ。破文無。	良好	黄褐色	砂粒を含む。	つくりは頗である。	Ⅱ

Tab. 23 西新町遺跡B地区第6号竪穴式住居跡出土土器観察表

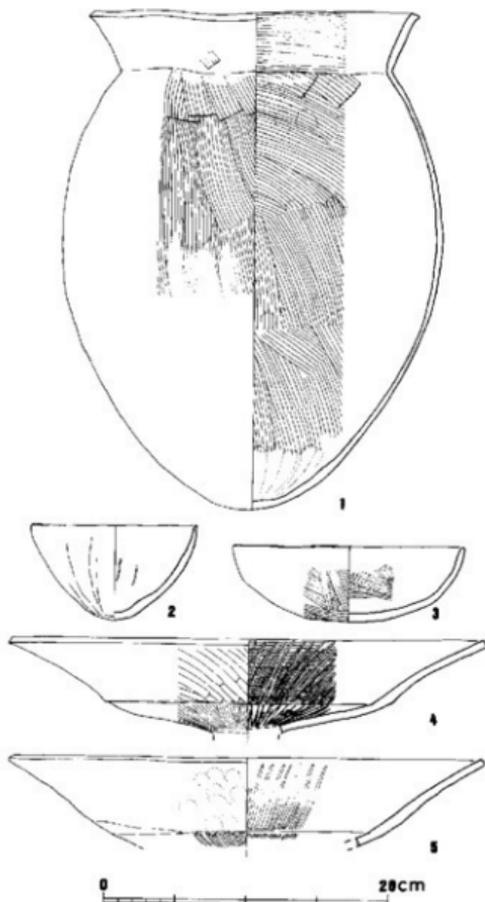


Fig. 83 西新町遺跡B地区第6号竪穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

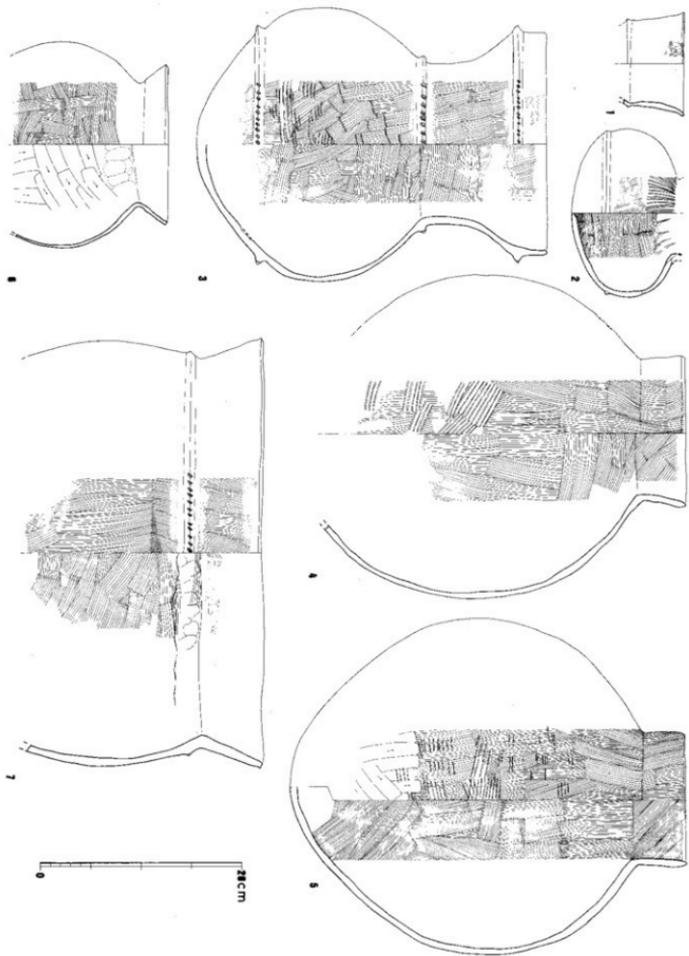


Fig. 84 西新町遺跡C地区第1号室六次住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

図号(番号) (整理番号)	器種	型式 分類	型		焼成	色 調	胎 土	備 考	種 式
			外 面	内 面					
Fig. 84 1 (R-3)	甕	G-II	ハケメ(7~8本/1cm)後、縦方向のケレン。	指オキム後、横ナデ。	良好	淡黄褐色	黒砂粒多し。		II
2 (R-4)	甕	H-II	肩落ケレン。短文。口部ハケメ(7~8本/1cm)。横ケレン。底部、裏面、裏れが著しく仔細不明。	肩部横ナデ。胴部一帯部ハケメ(7~8本/1cm)。	良好	淡黄褐色 赤褐色	黒砂粒を少量含むのみ。	胴部と外底部に不整形の黒炭部。	III
3 (R-1)	甕	A-II	口縁部とハケメ(5~6本/1cm)後、横ナデ。胴部一帯部。ケレン(2~3本/1cm)後、ハケメ。底部ナデ。	口縁部ハケメ後、横ナデ。胴部一帯部ハケメ。底部、指オキム後、ナデ。	良好	淡黄褐色 赤褐色	黒砂粒多し。	胴部中心の対称的な位置に不整形の黒炭部。ほぼ完成。	II
4 (R-5)	甕	A-II	口縁部横ナデ。胴部一帯部上半ハケメ(5本/1cm)。胴部下半ケナキ(3本/1cm)後、ハケム。	胴部一帯部上半ハケメ。胴部下半ナデ。	良好	淡黄褐色なし。淡赤黄色	黒・黒砂粒多し。	胴部中心の成り範囲に不整形の黒炭部。	II
5 (R-7)	甕	A-II	口縁部横ナデ。胴部一帯部ハケメ(6本/1cm)。胴部中心、タキ後、ハケム。胴部下半一帯部ケナキ。	胴部一帯部ハケメ。底部ナデ。	良好	暗赤褐色	黒粒を少量含む。	胴部と胴部下半の対称的な位置に黒炭部。	II
6 (R-2)	甕	H-II	口縁部横ナデ。胴部ハケメ(9~10本/1cm)。	口縁部横ナデ後、横ナデ。胴部、指オキムを残す。胴部ハケメリ。	良好	淡黄褐色	黒砂粒多し。	外面全面に横ナデ。	II
7	鉢	A	口縁部ハケメ(5本/1cm)後、横ナデ。胴部ハケム。	口縁部横ナデ。胴部ハケム。	良好	淡黄褐色 赤褐色	黒砂粒多し。	胴部に黒炭部が明確に残る。	
Fig. 85 8	鉢	F	ナ	ナ	良好	暗赤褐色	黒粒を少量含む。		
9	鉢	D	ナ	ナ	良好	暗赤褐色	砂粒を少量含む。		
10	鉢	F	ハケメ(7~8本/1cm)後ナデ。	ナ	良好	暗赤褐色	砂粒を少量含む。		
11	鉢		ハケメ(10本/1cm)。胴部横ナデ。	胴部ナデ。胴部ハケム。	良好	淡黄褐色	黒粒を少量含む。	縦方向ナデ。	

Tab. 24 西新町遺跡C地区第1号竪穴式住居跡出土土器観察表

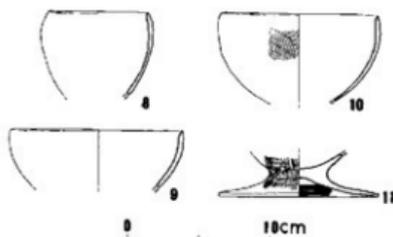


Fig. 85 西新町遺跡C地区第1号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

採回番号 (整理番号)	型式 分類	調		構成	色	質	胎	土	備考	様式
		外	内							
Fig. 86 1 (R-3)	窯 C-II	口縁部灰質ナマ。口縁部一 周浮上ナメタケ (3.5cm/1 cm) 後、ナマ。胴部平 底ナメタケ。	口縁部ハケメ (6.5cm/1cm)、 胴部、足跡のハケメ (ケ ズリに近い)。底部灰ナメ。	良好	黄褐色 ①黄褐色	細砂多し。			ほぼ正常。外面に 厚付着。	II
2	窯 A-II	口縁部ハケメ (1.5cm/1cm) 後、横ナメ。胴部ハケメ (5 cm) 後、ナマ。胴部平 底ナメタケ。	口縁部ハケメ後、横ナメ。 胴部ハケメ (5-6.5cm/1 cm)。	良好	黄褐色 ①黄褐色	砂粒多し。			外面に灰あり。	II
3 (R-7)	窯 A-II	胴部平底ナメ。胴部上平ハケメ (5.5cm/1 cm)。胴部下半、足跡ナメ (ケズリに近い)。底、砂 質のナマ。	口縁部灰ナメ。ハケメ。 胴部ハケメ後、ナマ。底部 には灰質を残す。	良好	黄褐色	細砂多し。			外面、特に口縁部 一帯中に灰質に集中 の厚付着。	II
4 (R-4)	鉢 D-II	口縁部平底ナメ。胴部上平 ハケメ (6-7.5cm/1cm)。 胴部下半ハケメ後、ナマ。	ハケメ (7-8.5cm/1cm)。	良好	赤褐色	砂粒多し。				II
5 (R-2)	鉢 F	ナ	ナ	良好	黄褐色	砂粒多し。			欠片。	
6 (R-1)	支脚	ナ	ナ	良好	暗褐色	砂粒多し。				
7 (R-5)	器台 C-II	ハケメ (7-8.5cm/1cm) 後、ナマ。	上半部ナマ。下半ハケメ (7 cm/1cm)。	良好	暗褐色	砂粒多し。				
8	器台 C-II	上半部ナマ。下半ハケメ (9 -10cm/1cm) 後、ナマ。	ハケメ。口内には平底工 具痕を残す。	良好	黄褐色	砂粒を含む。				II
9 (R-8)	器台 C-II	上半部ナマ。下半ハケメ (9 -10cm/1cm) 後、ナマ。	上半部へくびり部指ナメ。 下部ハケメ。	良好	黄褐色	粗砂粒を含む。				II

Tab. 25 西新町遺跡C地区第2号竪穴式住居跡出土土器観察表

採回番号 (整理番号)	型式 分類	調		構成	色	質	胎	土	備考	様式
		外	内							
Fig. 87 1 (R-5)	壺 C	口縁部ハケメ (6.5cm/1cm) 後、横ナメ。胴部一帯部ハ ケメ。	口縁部ハケメ。胴部ハケメ 後、ナマ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。			外面に厚付着。	
2 (R-15)	壺 C	胴部一帯部ハケメ (7.5cm) 後、横ナメ。胴部、 横方向のケム。	胴部一帯部上平ハケメ後、 ナマ。胴部下半ハケメ。	良好	黄褐色	粗砂粒を含む。				
3 (R-5)	壺 D-I	口縁部ハケメ (6-8.5cm/1 cm)。胴部上平ナメ。胴部 下半一帯部ハケメ。	口縁部ハケメ。胴部上平ナ メ。胴部下半ハケメ。	良好	黄褐色	砂粒を少量含む。			口縁部灰質に欠 片。	I
4	壺 A-II	口縁部ハケメ (6.5cm/1cm) 後、横ナメ。胴部ハケメ。	口縁部一帯部上平ハケメ。 胴部下半、それが黄化した の厚付着。	良好	黄褐色	砂粒を含む。				II
5 (R-6)	壺 A-II	口縁部ハケメ後、横ナメ。 胴部ハケメ。	口縁部一帯部ハケメ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。				II
6 (R-18)	壺 A-II	口縁部ハケメ (4-5.5cm/1 cm) 後、横ナメ。胴部一帯 部ハケメ。	口縁部横ナメ。胴部上平ハ ケメ。胴部下半ハケメ後、 ナマ。底部に指痕を残す。	良好	黄褐色	砂粒多し。			外面全面に厚付着。	II
Fig. 88 7 (R-10)	壺 A-II	口縁部ハケメ (4.5cm/1cm) 後、横ナメ。胴部上平ハケ メ。胴部下半ハケメ後、ナ マ。	口縁部ハケメ。胴部ハケメ 後、ナマ。底部、指オマツ。	良好	黄褐色	砂粒を少量含む。			口縁部一帯部中に 厚付着。	II
8 (R-3)	壺 A-II	口縁部ハケメ (4.5cm/1cm) 後、横ナメ。胴部上平ハケ メ (5-6.5cm/1cm)。胴部 下半、足跡のハケメ (ケ ズリに近い)。	口縁部一帯部上平ハケメ後 ナマ。胴部下半ナマ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。				II
9 (R-17)	壺 A-II	口縁部一帯部上平ハケメ (5.5 cm/1cm) 後、横ナメ。 胴部上平ハケメ。	口縁部ハケメ。胴部、足跡 のハケメ (ケズリに近い) 後、ナマ。	やや 良好	黄褐色	砂粒多し。				II
Fig. 89 10	壺 D	口縁部ハケメ後、横ナメ。 胴部ナメタケ後、ハケメ。胴 部ハケメ。	口縁部ハケメ (10.5cm/1 cm) 後、横ナメ。胴部ハ ケメ。底部には指痕を残 す。	良好	黄褐色	砂粒多し。			外面の一部に厚付 着。口縁部外面に は灰質の厚層に 残る。	
Fig. 90 11	壺 D	口縁部ハケメ (8-7.5cm/1 cm)。胴部ナマ (3.5cm/1 cm) 後、ハケメ。底部、 足跡のハケメ (ケズリに近 い)。	口縁部一帯部ハケメ。底部 付近ハケメ後、ナマ。	良好	黄褐色	砂粒多し。			上部変着にはハケ メ。口内には灰質 の厚層を残す。	
Fig. 91 12	壺 E-II	口縁部平底ナメ。胴部ハケメ (10.5cm/1cm)。	口縁部横ナメ。胴部ハケメ ナマ。	良好	黄褐色	砂粒を少量含む。				II
13 (R-7)	鉢 D-II	口縁部横ナメ。胴部一帯部 灰質ハケメ (ケズリに近い)。	口縁部横ナメ。胴部一帯部 灰質のケム。	良好	暗褐色	砂粒多し。				II
14 (R-4)	鉢 D-II	口縁部横ナメ。胴部上平ハケ メ。胴部下半一帯部、足跡 のハケメ (ケズリに近い) 後、からくナマ。	口縁部ハケメ (5-5.5cm/1 cm) 後、横ナメ。胴部一 帯部ハケメ (5-7.5cm/1 cm)。	良好	黄褐色	砂粒多し。				II
15 (R. 12)	鉢 E-I	口縁部横ナメ。胴部一帯部 ナマ。	口縁部横ナメ。胴部一帯部 ナマ。	良好	黄褐色	粗砂粒を含む。				II
16 (R-13)	鉢 B-I	口縁部横ナメ。	ハケメ (6.5cm/1cm)。	良好	黄褐色	砂粒を含む。				II
17 (R-1)	器台 A-II	胴部上平ハケメ (10-12cm/1 cm) 後、ナマ。胴部下 半、足跡のケム。胴部ハ ケメ。	胴部ハケメ後、ケム。足 跡。胴部ナマ。胴部ハケ メ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。			胴部に灰質の厚 層。底部に灰 質。	II
18 (R. 11)	器台 A-II	胴部上平ナマ。胴部ハケメ (10cm/1 cm) 後、ナマ。胴部、 灰質を残す。	胴部上平ハケメ後、ケム。 足跡。胴部ナマ。胴部ハ ケメ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。				II
19	器台 A-II	ハケメ (4-5.5cm/1cm) 後、ナマ。	横ナメ。胴部ハケメ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。				II

Tab. 26 西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器観察表

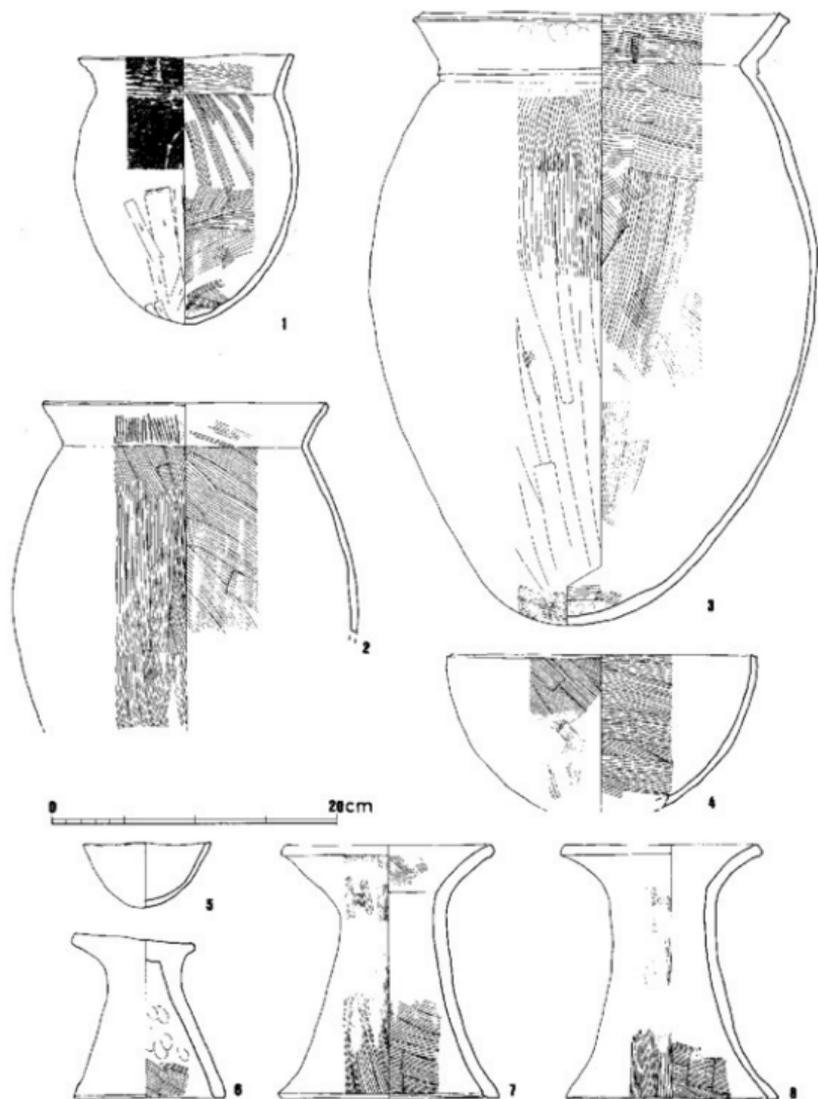


Fig. 86 西新町遺跡C地区第2号壑穴式住居跡出土土器 (縮尺 1/4)

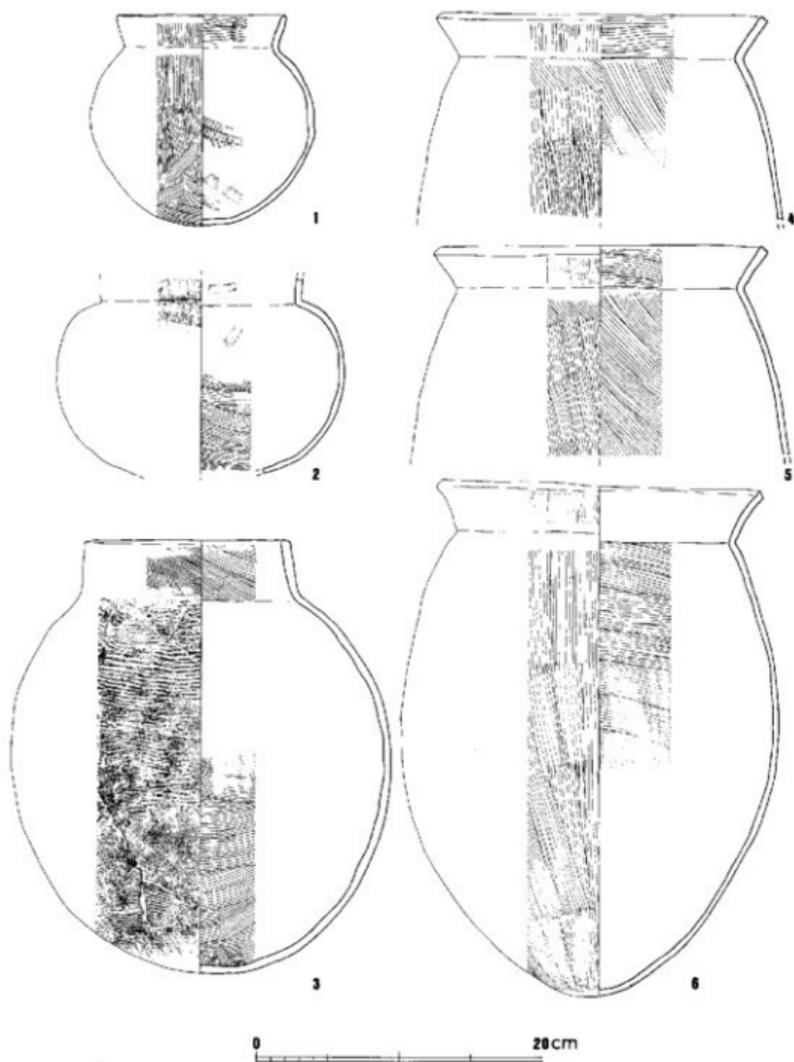


Fig. 87 西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

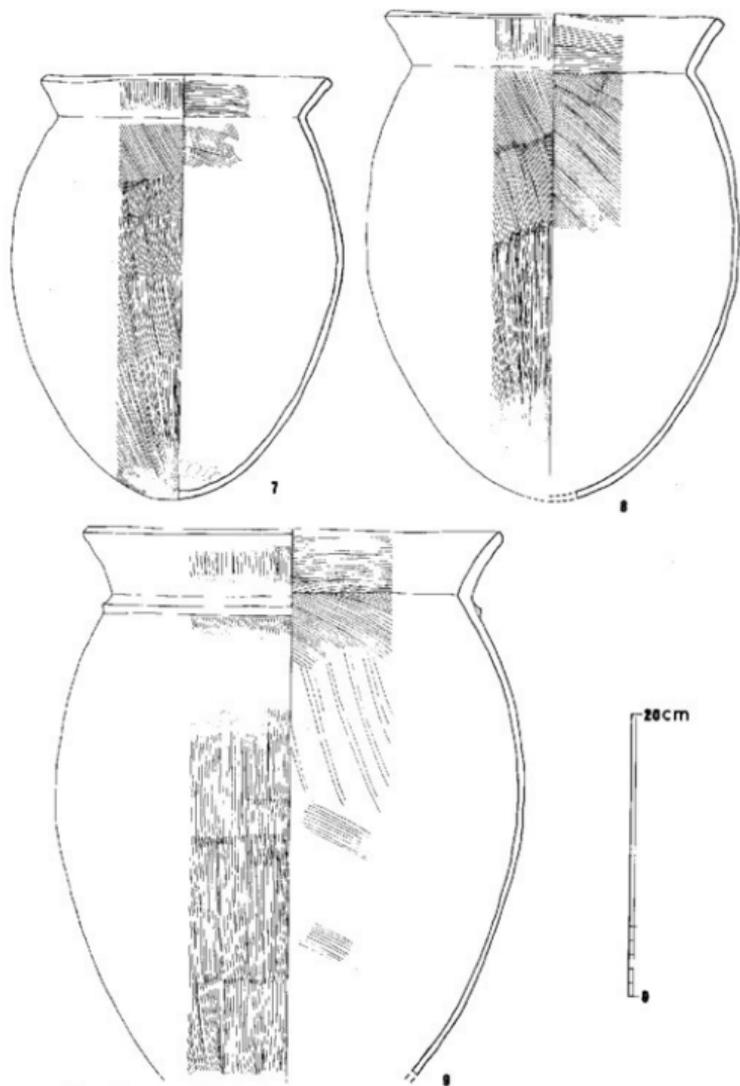


Fig. 88 西新町遺跡C地区第3号堅穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

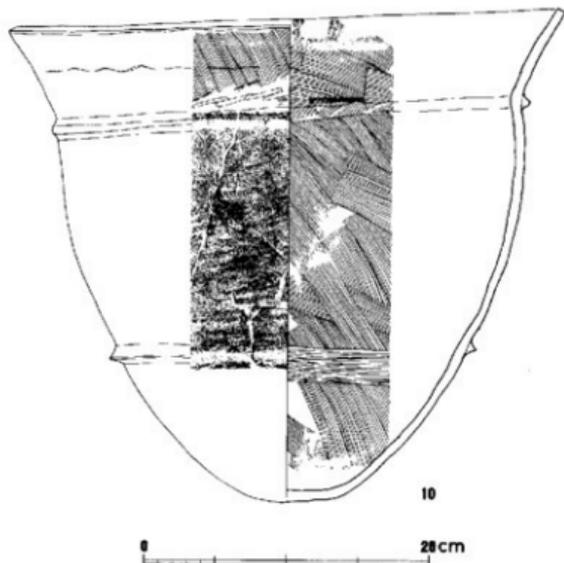


Fig. 89 西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器3 (縮尺1/4)

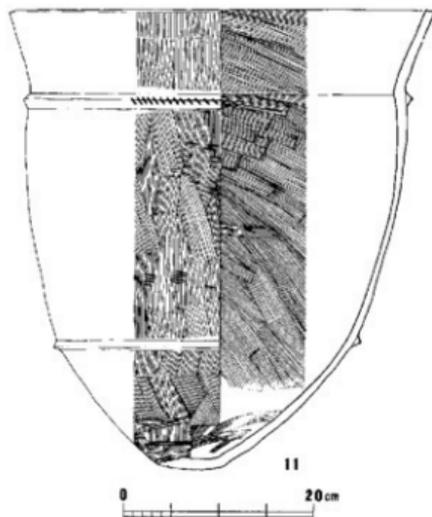


Fig. 90 西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器4 (縮尺1/6)

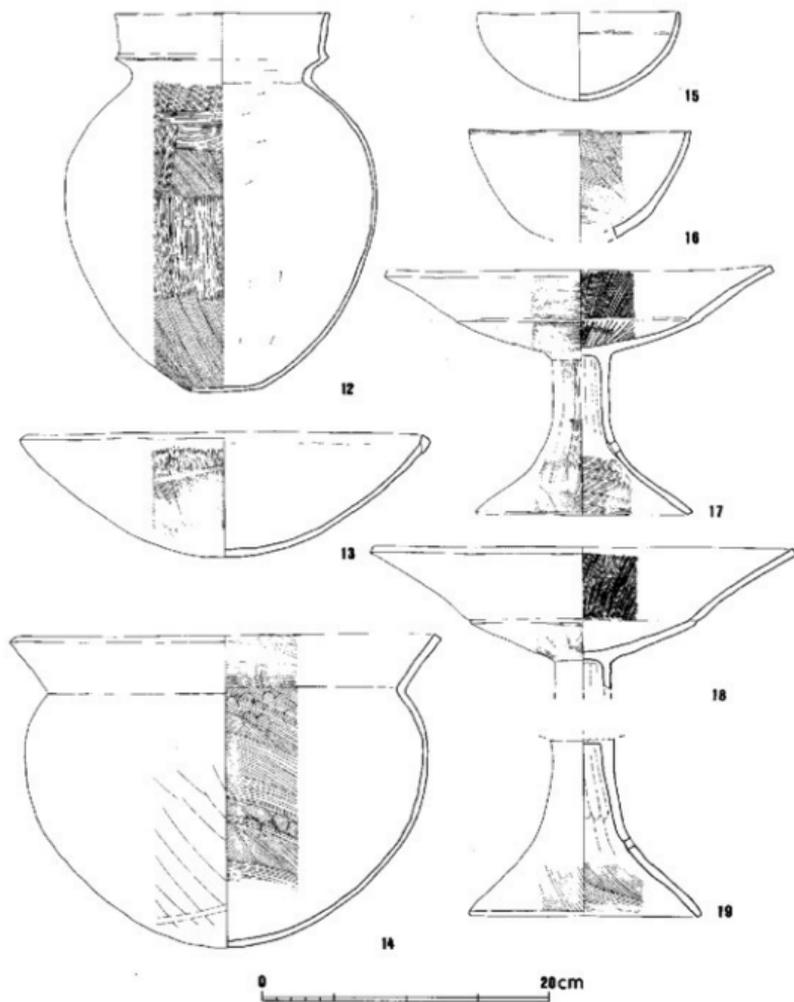


Fig. 91 西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡出土土器5 (縮尺1/4)

発掘番号 (整理番号)	器種 分類	調 査		焼成	色 調	粉 土	備 考	様 式
		外 面	内 面					
Fig. 92 1	高坏 A-II	胴部ハケメ後、ケンマ。脚部、縦方向のケンマ。	胴部ハケメ後、ナア。胴部上半に部分的に鳩文を施す。脚部縦ナア、脚部縦ハケメ。	良好	黄褐色	粗良粘土を用いる。		Ⅱ

Tab. 27 西新町遺跡C地区第4号竪穴式住居跡出土土器観察表

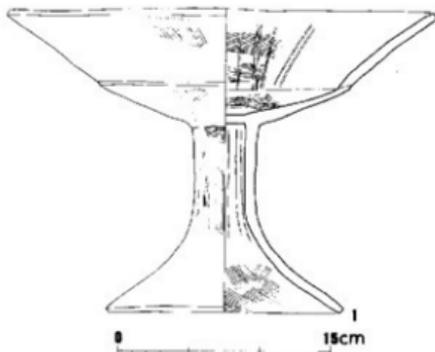


Fig. 92 西新町遺跡C地区第4号
竪穴式住居跡出土土器
(縮尺1/4)

発掘番号 (整理番号)	器種 分類	調 査		焼成	色 調	粉 土	備 考	様 式
		外 面	内 面					
Fig. 93 1 (R-2)	鉢 D-II	に厚縁付。おねが著しく 仔細不明。胴部下半～底部 ハケメ。	ハケメ(4~5本/1cm)。 部分内にハケメ小口部噴を 残す。	良好	黄褐色	砂多し。		Ⅱ
2 (R-3)	鉢 D-II	口縁粘土ナア。胴部ハケメ (4~5本/1cm)。胴部下 半～底部ハケメ後、ケズリ。	ハ ケ メ	良好	黄褐色	粗・細砂多し。		Ⅱ
3 (R-1)	高坏 A	ハケメ(10本/1cm)。上半 は一部へらで面取りをして いる。	上半部粘土ナア。胴部ハケメ (6~7本/1cm)。	良好	暗褐色	粗良粘土を用いる。		

Tab. 28 西新町遺跡C地区第5号竪穴式住居跡出土土器観察表

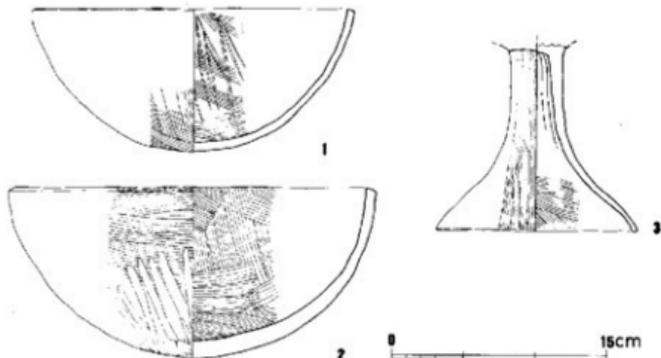
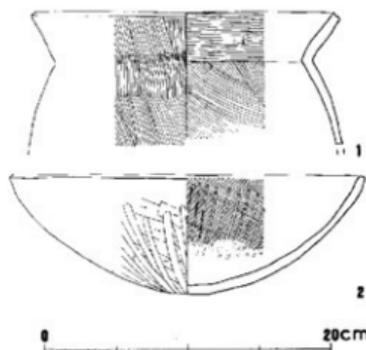


Fig. 93 西新町遺跡C地区第5号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

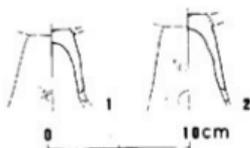
調査番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調 整		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 94 1	甕	A-II	ハケメ(1～3本/1cm) 口縁部横ナド。胴部～底部 ケメリ。	ハケメ横、からくナド。 口縁部横ナド。胴部ハケメ (5～9本/1cm)横、短 文。縦部マツが著しい。	良好	赤黄褐色	砂粒を多。		II
2	鉢	B-II			良好	赤褐色	砂粒多し。		II

Tab. 29 西新町遺跡C地区第7号竪穴式住居跡出土土器観察表

Fig. 94 西新町遺跡C地区第7号
竪穴式住居跡出土土器
(縮尺1/4)

調査番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調 整		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
上述 第 1	甕	ハケメ横、ケシマ。		ナ ア	良好	赤黄褐色	粘質粘土を用いる。		
2	蓋鉢	ハケメ横、ケシマ。		ナ ア	良好	赤黄褐色	粘質粘土を用いる。		

Tab. 30 西新町遺跡C地区第10号竪穴式住居跡出土土器観察表

Fig. 95 西新町遺跡C地区第10号竪穴
式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

発掘番号 (整理番号)	器種 分類	型式	調 整		焼成	色 調	加 上	備 考	様 式
			外 形	内 面					
Fig. 96 1 (R-3)	甕	A	口縁部ハケメ(5本/1cm)後、横ナデ。胴部ナデ。	ハケメ	良好	茶葉灰色	赤粒をまじ。	全体にあげが施し。	
2 (R-2)	甕	A-II	口縁部ハケメ(4本/1cm)後、横ナデ。胴部ハケメ。胴部下半部、乱雑なハケメ(ケズリに近しい)後、ナデ。	口縁部ハケメ後、横ナデ。胴部ハケメ後、ナデ。	良好	黄灰色	赤粒を少量含む。	外面に煤付着。	II'
3 (R-2)	甕	A-II	口縁部→胴部上半、ハケメ(4本/1cm)。胴部下半部、乱雑なハケメ(ケズリに近しい)。	口縁部ハケメ。胴部ハケメ後、ナデ。	良好	暗褐色	黒粒・赤砂粒を含む。	外面に煤付着。	II'
4 (R-4)	鉢	D-II	口縁部→胴部上半、ハケメ(4本/1cm)胴部下半部。ヘラ状工具によるナデ(ケンマとは異なる)。	あれが著しく仔細不明。ハケメが部分的に残る。	良好	淡黄褐色	赤粒まじ。		II'

Tab. 31 西新町遺跡C地区第9号竪穴式住居跡出土土器観察表

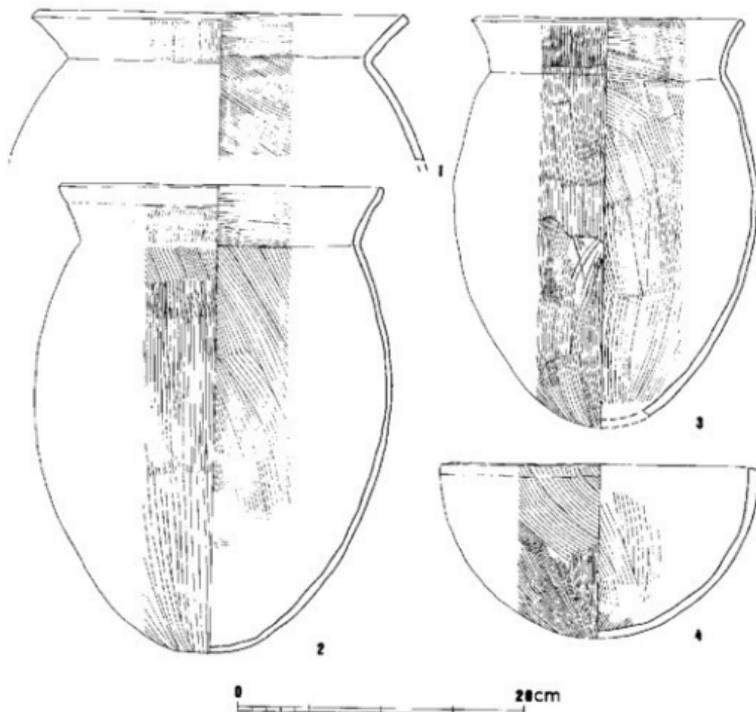


Fig. 96 西新町遺跡C地区第9号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

検体番号 (物理番号)	器種	型式 分類	調 査 内 容		構成	位 土	腐 考 考	鑑 考 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 97-1	底		あれが著しく仔細不明。	口縁部一箇部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	赤褐色褐色 砂赤褐色	微細-細砂多し。		Ⅲ
2 (R-2)	底	F-II	ハケメ(5本/1cm)後、横ナデ。	ハケメ(5-6本/1cm)後、横ナデ。	良好	黄褐色	粗粒粘土を用いる。		Ⅲ
3 (R-1)	底	E-III	口縁部ハケメ(6本/1cm)後、横ナデ。胴部ハケメ。	口縁部横ナデ後、横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	淡黄褐色	細砂多し。	胴部の広い範囲に 穿孔あり。	Ⅲ
4 (R-5)	底	F ₁ -III	口縁部横ナデ。胴部、あれが著しく仔細不明(ハケメか?)。	口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	やや不良	黄褐色	微細砂多し。	胴部に5本の横溝 沈澱をめぐらす。	Ⅲ
5 (R-16)	底	F ₂ -III	横 ナ デ	口縁部一箇部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	やや不良	淡黄褐色	粗 良		Ⅲ
6 (R-16)	底		口縁部横ナデ。胴部ハケメ(4本/1cm)。	口縁部ハケメ後、横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	暗黄褐色	砂粒を少量含む。		
7 (R-9)	底	A	ハケメ(6本/1cm)後、横ナデ。	ハケメ後、横ナデ。	良好	褐色	砂粒を少量含む。	口縁部に刻み目を 施す。	
8 (R-8)	底	A ₁ -II	口縁部横ナデ。胴部上半ハケメ(4-5本/1cm)。胴部下半ナデ。	口縁部ハケメ後、横ナデ。胴部ハケメ後、ナデ。	良好	暗褐色	砂多し。	外面全面に横溝を 施す。	II
9 (R-9)	底	A-II	口縁部ハケメ(5本/1cm)後、横ナデ。胴部ハケメ。	口縁部横ナデ。胴部ハケメ。	良好	褐色 赤黄褐色	粗・細砂多し。		II
10 (R-7)	底	A-II	口縁部ハケメ(3本/1cm)後、横ナデ。胴部ハケメ(4-5本/1cm)後、か らくナデ。	口縁部横ナデ。胴部ハケメ(4-5本/1cm)後、か らくナデ。	良好	黄褐色	砂多し。	外面全面に横溝を 施す。	II
Fig. 100 11 (R-2)	底	A ₁ -II	口縁部横ナデ。胴部、あれが著しく仔細不明(ハケメか?)。	ハケメ横ナデ後、横ナデ。 縁文。	良好	赤褐色 暗黄褐色	微細砂多し。	胴部にあらわ つてある。	II
12	底	A ₁ -II	口縁部横ナデ。胴部、ハケメ後、ナデ。胴部下半部分的に縁文を施す。	口縁部横ナデ。胴部上半、ハケメ。	良好	暗褐色	粗粒粘土を用いる。		II
13 (R-20)	底	A ₁ -II	口縁部横ナデ。胴部、ハケメ後、ナデ。胴部下半部分的に縁文を施す。	口縁部横ナデ。胴部上半、ハケメ。	良好	暗褐色	粗粒粘土を用いる。		II
14 (R-21)	底	A ₁ -II	口縁部横ナデ。胴部、ハケメ後、ナデ。胴部下半部分的に縁文を施す。	口縁部横ナデ。胴部上半、ハケメ。	良好	暗褐色	粗粒粘土を用いる。		II
15	底	A ₁ -II	口縁部横ナデ。胴部、ハケメ後、ナデ。胴部下半部分的に縁文を施す。	口縁部横ナデ。胴部上半、ハケメ。	良好	暗褐色	粗粒粘土を用いる。		II
16	底	A ₁ -II	口縁部横ナデ。胴部、ハケメ後、ナデ。胴部下半部分的に縁文を施す。	口縁部横ナデ。胴部上半、ハケメ。	良好	暗褐色	粗粒粘土を用いる。		II
17 (R-15)	底		胴部中央ハケメ後、5本の縁文を施す。胴部下半ハケメ。	ハケメが著しく仔細不明。	不良	暗褐色	粗砂多し。	胴部に横溝穿孔 あり。	Ⅲ
18 (R-17)	底	E ₁ -III	ナ デ	ナ デ	良好	暗褐色	砂粒を少量含むのみ。		Ⅲ
19 (R-3)	底	F ₂	ナ デ	ハラメ(10本以上/1cm)後、ナデ。	良好	暗黄褐色	粗・細砂多し。		Ⅲ
20 (R-4)	底	F ₂	ハケメ後、ナデ。微細砂を施す。	ハケメ(5-6本/1cm)後、ナデ。	良好	淡黄褐色	粗・細砂多し。		Ⅲ
21 (R-2)	底	B	あれが著しく仔細不明。	横 ナ デ	良好	淡黄白色	微砂を含む。		Ⅲ
22 (R-1)	底	B	あれが著しく仔細不明。	胴部、あれが著しく仔細不明。胴部ハケメ(8-10本/1cm)後、横ナデ。	良好	淡黄褐色	微細砂多し。	胴部に3本の横溝 穿孔の穿孔。	Ⅲ
23 (R-5)	底	C-III	上半ハケメ(5本/1cm)後、下半ハケメ後、ナデ。指節を施す。	ハケメ後、ナデ。くびれ部に集中的に指節を施す。	良好	暗褐色	粗粒を含む。		Ⅲ
24 (R-4)	底	C-II	ハケメ(5本/1cm)後、胴部にナデ。	ハケメ。くびれ部付近にハケメを施して横ナデ。	良好	淡黄褐色	粗・細砂多し。		Ⅲ
Fig. 100 25	底	F	口縁部一箇部横ナデ。胴部ハケメ。	口縁部一箇部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。		Ⅲ

Tab. 32 西新町遺跡D地区第1号竪穴住居跡出土土器観察表

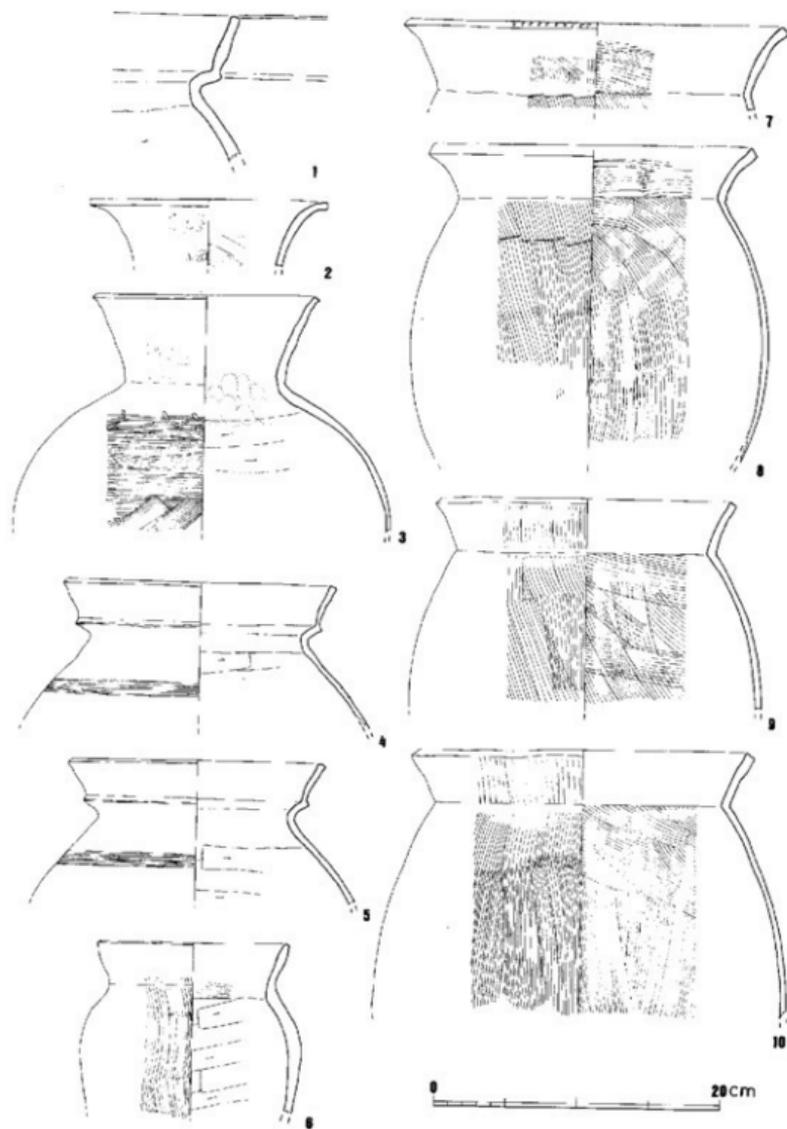


Fig. 97 西新町遺跡D地区第1号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

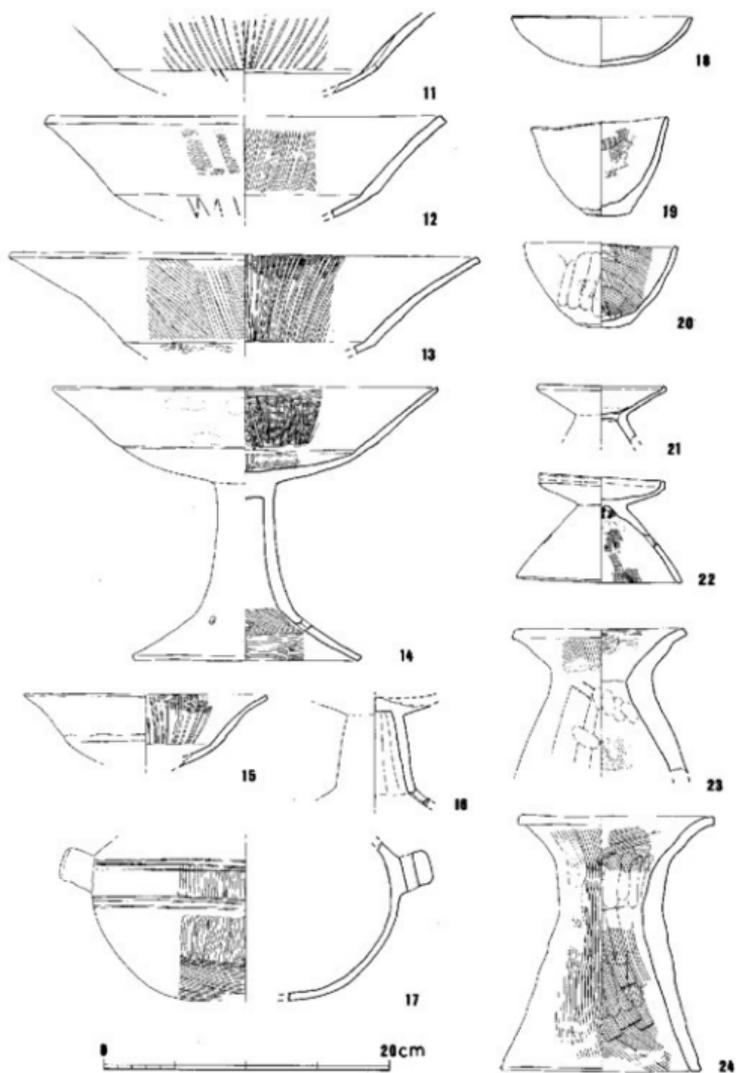


Fig. 98 西新町遺跡D地区第1号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

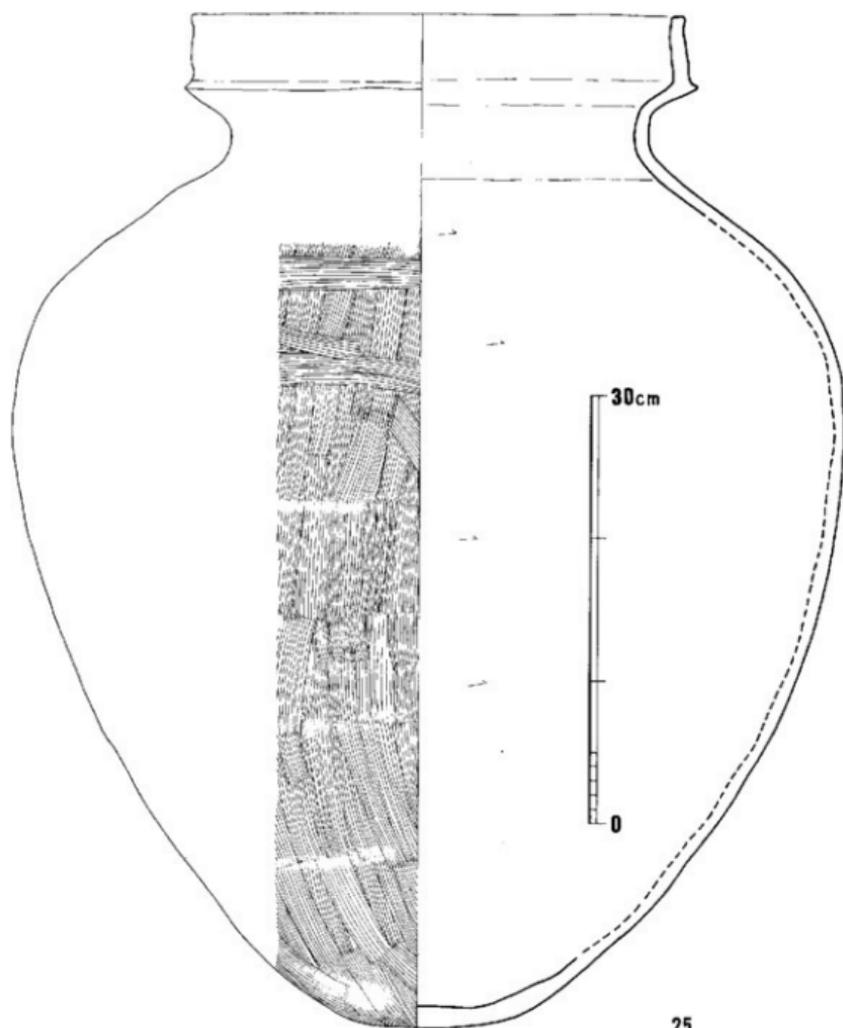


Fig. 99 西新町遺跡D地区第1号竪穴式住居跡出土土器3 (縮尺1/4)

種別番号 (原簿番号)	器種 分類	型式	土		焼成	色	調	胎	土	備考	様式
			外	内							
Fig.100 1	甕	A	口縁部横ナガ。口縁ハケム後、ナダ(ハケム)小口部縦土織りのみ。	口縁部横ナダ。胴部、肩ナダ、ハケム(5本/1cm)横ナダ。	良好	淡黄褐色		菊彫-縞彫が多い。		外面を全面覆付。	
2 (R-4)	鉢	R-II'	口縁部横ナダ。胴部一筋部、ナダナリ。	横ナダもしくはナダ。	良好	褐色		粘土粘土を用いる。			II'
3 (R-2)	鉢	F	口縁部横ナダ。胴部ハケム(6-7本/1cm)。	ナ	良好	黄褐色		砂粒を含む。			
4 (R-6)	高杯		ナ	ナ	良好	赤褐色		縞彫を含む。			
5	高杯		横方向の丸縁立ナダ。	横ナダ	良好	赤褐色		横溝されている。			
6 (R-1)	高杯	A-II	口縁ハケム(5本/1cm)後、ケンマ、暗文、彫部、縦方向のケンマ。厚縁彫横ナダ。	円部、不定方向のケンマ。胴上半部しぼり後、横ナダ。厚縁部、横ナダ後、ハケム(8-10本/1cm)。	良好	淡黄褐色		横溝され、砂粒をほとんど含まない。		口縁部由に部分的に赤色顔料を認める。	II

Tab. 33 西新町遺跡D地区第2号竪穴式住居跡出土土器観察表

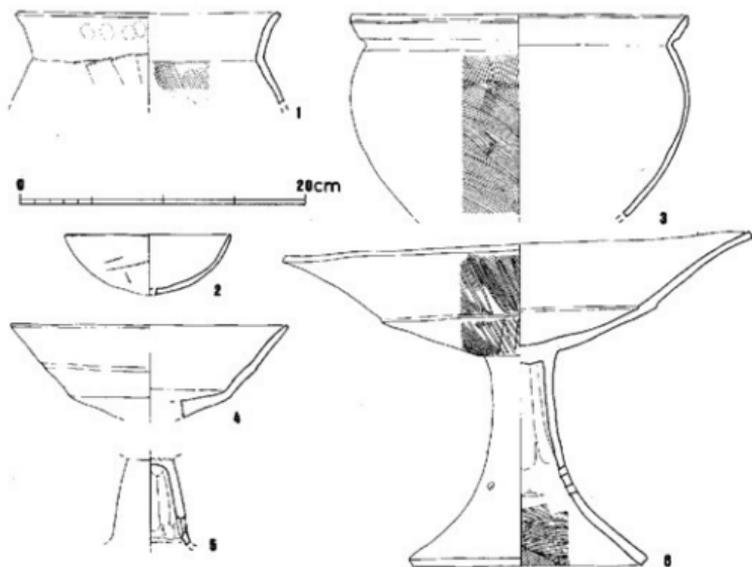


Fig. 100 西新町遺跡D地区第2号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

I. 西新町遺跡の調査

114

検出番号 (整理番号)	器種	型式	器 身		構成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 101 (R-1)	罎	A-II	口縁部ナデ、胴部ハケム(6本/1cm)。	口縁部ナデ、胴部ハケム(6-7本/1cm)。	良好	暗黄褐色	粗・細砂粒多し。	外面には、部分的に傷が付きしている。	II
2 (R-14)	罎	A-III	口縁部、突帯付に横ナデ、胴部一帯部上半ハケム(7-8本/1cm)、胴部下半一帯部ハケム(4本)。	口縁部ナデ、頸部一帯部上半ハケム、胴部下半ハケム後、ナデ。胴部には横帯突が残る。	良好	淡黄褐色	粗・細砂粒多し。	胴部と頸部の2か所に不整形の黒変部あり。	II
3 (R-11)	罎	C-II	口縁部、風船ケンマ、横文、胴部上半ハケム(7本/1cm)、胴部下半一帯部、尾端ハケム(5本/1cm)。	口縁部一帯部上半ハケム(5-6本/1cm)、底部付五、横ナデ後、ナデ。	良好	赤褐色赤色 暗黄褐色	粗粒多し。	胴部と胴下半の対称的な位置に黒変部あり。内面に黒付層。	II
4 (R-1)	罎	C-II	口縁部ハケム(8本/1cm)後、横ナデ、胴部ハケム、ナデ。胴部一帯部、前方のケンマ。	口縁部ハケム(6本/1cm)後、横ナデ。胴部ハケム(3本/1cm)、底部付近ケンマ。	良好	暗黄褐色	横帯されている。	口縁部一帯部と胴部下半の対称的な位置に黒変部あり。	II
5 (R-6)	罎	D-II	口縁部一帯部上半、ハケム(5-6本/1cm)、胴部下半一帯部、尾端ハケム、ナデ、突帯付横ナデ。	口縁部一帯部ハケム、底部付近ケンマ。	良好	黄褐色	粗・細砂粒多し。	胴部下半に不整形の黒変部あり。外面全面にうすく黒付層。	II
6 (R-12)	罎	C-II	口縁部ハケム(6本/1cm)後、横ナデ、胴部ハケム。	ハケム(5-6本/1cm)。	良好	淡黄褐色	粗・細砂粒多し。	胴部不整形の黒変部あり。	II
7 (R-7)	罎	A	口縁部ハケム(3本/1cm)後、横ナデ、胴部ハケム(5-6本/1cm)。	口縁部ハケム(3本/1cm)後、横ナデ、胴部ハケム(5-6本/1cm)。	良好	暗褐色	粗砂粒多し。	外面全面に黒付層。	II
8 (R-2)	罎	B-II	口縁部一帯部上半、ハケム(5本/1cm)、胴部下半一帯部ハケム(5本/1cm)。	口縁部一帯部ハケム後、部分的にナデ、底部付近ケンマ。	良好	暗黄褐色	粗・細砂粒多し。	外面全面に黒付層。	II
9 (R-5)	罎	A-II	口縁部ハケム(5本/1cm)後、横ナデ、胴部上半ハケム、胴部下半一帯部ナメリ、ナデ。	口縁部ハケム後、横ナデ、胴部上半ハケム。胴部下半ナデ。	良好	赤褐色	粗・細砂粒多し。	外面に部分的に黒付層。	II
Fig. 102 (R-18)	罎	A-II	ハケム後、ナデ。	ナ	良好	淡黄褐色	粗粒多し。	外面全面に黒付層。	II
11 (R-6)	罎	D-II	口縁部ハケム(7本/1cm)後、横ナデ。胴部上半ハケム(7本/1cm)、下半ハケム(5-6本/1cm)後、ナデ。	ハケム(7-8本/1cm)、胴部に黒変部を明瞭に残す。	良好	黄褐色	砂粒多し。	胴部の対称的な位置に黒変部あり。	II
12 (R-7)	高杯	A-II	あれが遺く仔細不明。	ハケム(7本/1cm)後、ケンマ、横文。	良好	淡黄褐色	砂粒を少量含む。		II
13 (R-9)	高杯	A-II	胴部上半ハケム(6本/1cm)後、ナデ。胴部下半、前方部の横ナデ。	ハケム後ケンマ、横文。	良好	暗褐色	粗粒をほとんど含まない。		II
14 (R-8)	高杯	A-II	ハケム(5本/1cm)後、ナデ。	ハケム(7本/1cm)後、ケンマ、横文。	良好	淡黄褐色	黒細砂粒を少量含む。		II
15 (R-17)	高杯	A	ハケム(11本/1cm)後、ケンマ、横文。	ハケム後ケンマ、横文。	良好	赤褐色	粗砂粒を含む。		II
16 (R-10)	鉢	E-R	口縁部ナデ、胴部下半一帯部ナメリ、ナデ。	ハケム(5-6本/1cm)。	良好	淡黄褐色	粗粒粘土を用いる。	外面付近に黒変部あり。	II
17 (R-12)	鉢	A-II	口縁部ハケム(4本/1cm)、胴部上半タタキ(2本/1cm)後、ハケム。胴部下半一帯部ハケム(ケズリに近す)。	口縁部ハケム(4本/1cm)、胴部ハケム(3本/1cm)、底部ナデ。	良好	暗黄褐色赤褐色 暗褐色	粗・細砂粒多し。	外面に不整形の黒変部あり。内面に部分的に黒付層。	II
18 (R-13)	鉢台	C-II	上縁横ナデ。横ハケム(4本/1cm)。	上縁横ナデ、くびれ部付横ナデ、横ハケム。	良好	暗黄褐色	砂粒多し。		II
19 (R-4)	鉢台	C-II	上縁横ナデ。横ハケム(4本/1cm)後、ハケム(4本/1cm)。	上半部横ナデ。下半部横ナデ。横ハケム。	良好	暗黄褐色	粗・細砂粒多し。		II
Fig. 103 (R-2)	罎	D	口縁部ナデ、胴部一帯部ハケム。胴部付近ケンマ、突帯付横ナデ。	口縁部ハケム後、横ナデ。胴部ハケム。	良好	暗黄褐色	砂粒を少量含む。	口縁部外面に横帯の成状状横文をのこす。	II
21	罎	A-II	口縁部一帯部上半、ナデ(2-3本/1cm)後、ハケム。胴部下半ナメリ。	ハケム。底部付近ケンマ。	良好	暗黄褐色	粗粒を少量含む。		II

Tab. 34 西新町遺跡D地区第3号竪穴式住居跡出土土器観察表

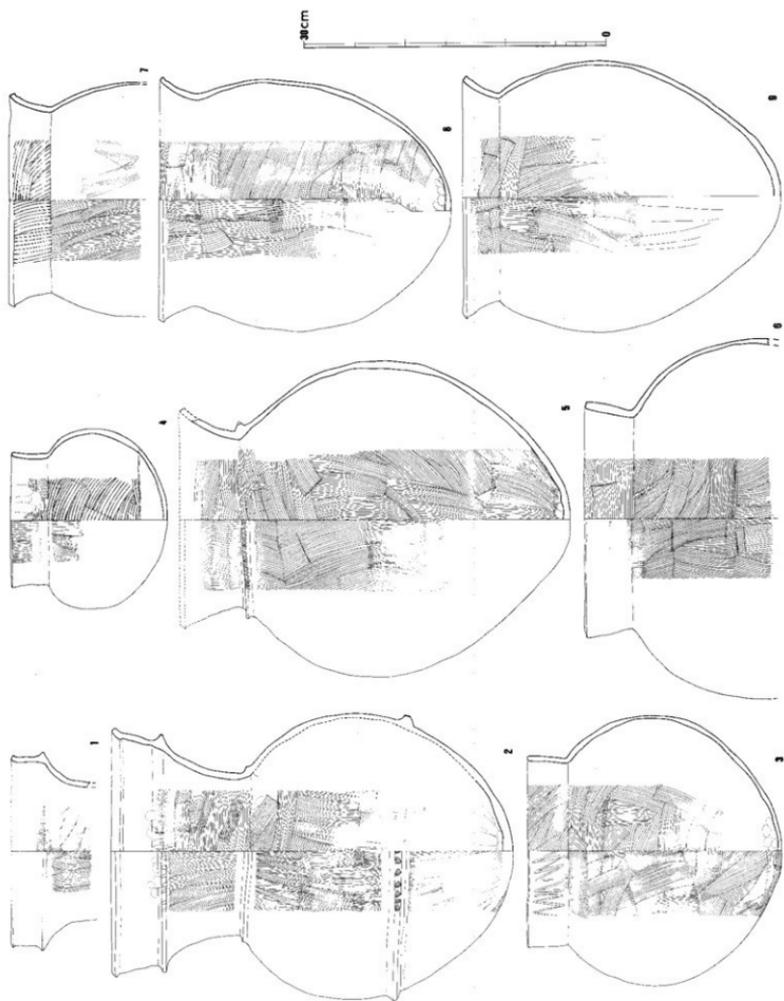


Fig. 101 西新町遺跡D地区第2号至6号式土器出土土器1 (縮尺1/4)

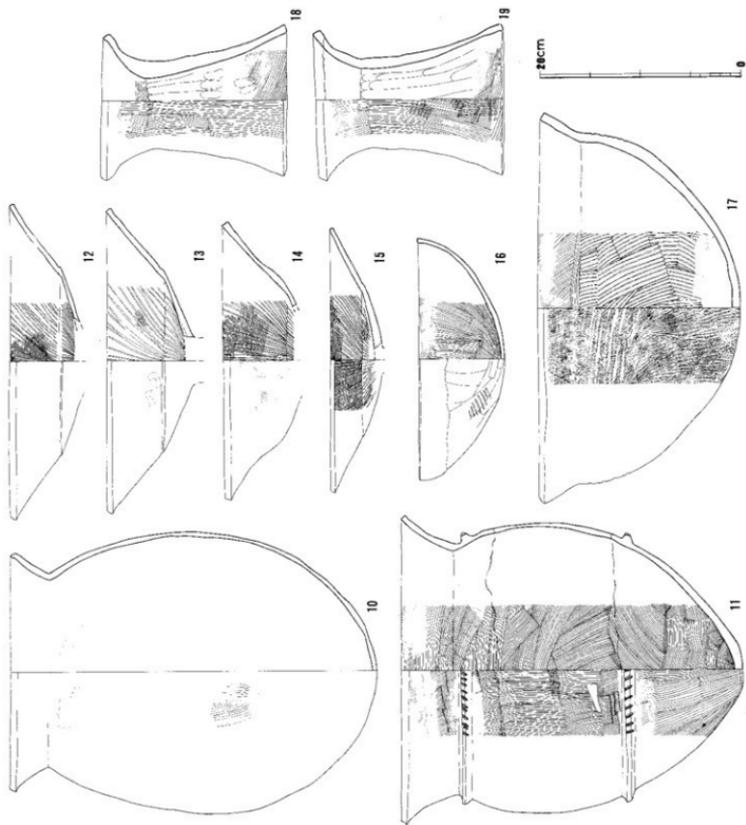


Fig. 102 西野町遺跡D地区第3号室六式土器跡出土土器2 (縮尺1/4)

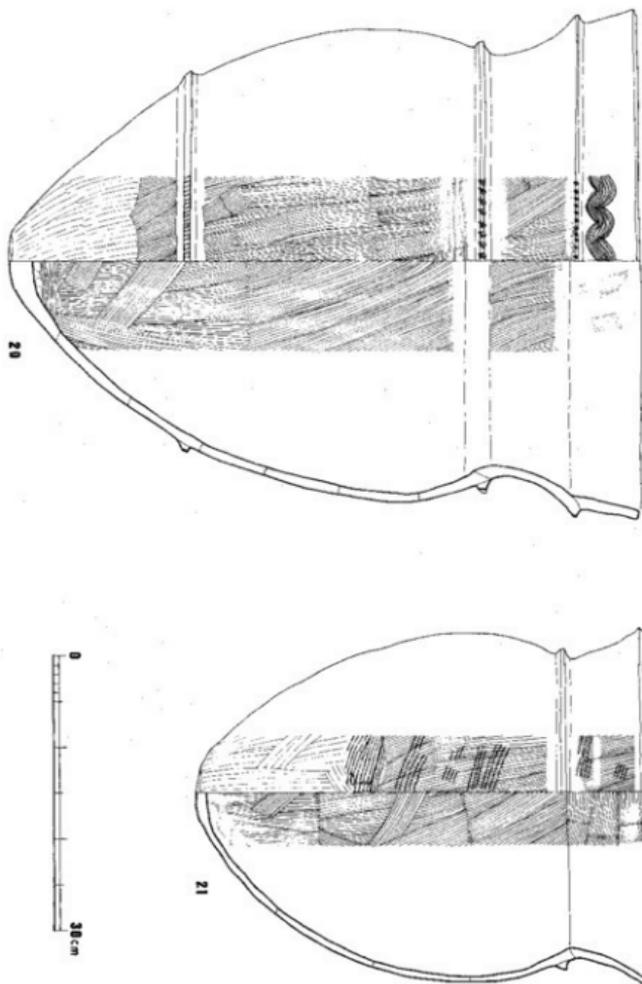


Fig. 103 西新町遺跡D地区第3号竪穴式住居跡出土土器3 (縮尺1/6)

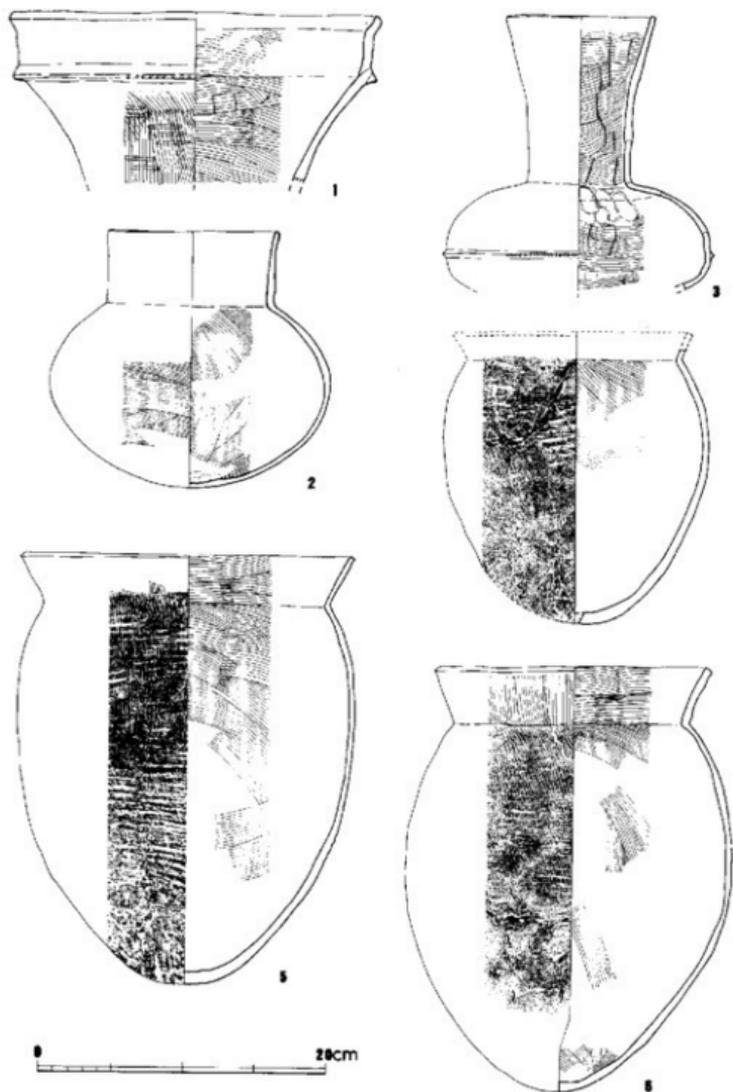


Fig. 104 西新町遺跡D地区第4号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

種別番号 (整理番号)	型式 分類	調 査		焼成	色 調	胎 子	備 考	様 式		
		外	内 面							
Fig. 101 (R-10)	壺	A-II	口縁部横ナゲ。胴部タテタテ(2条/1cm)後、ハケメ(4本/1cm)。	口縁部ハケメ後、横ナゲ。胴部ハケメ(4-5本/1cm)。	良好	淡茶褐色	磨面が粗多し。	III		
2 (R-6)	壺	B-II	口縁部横ナゲ。胴部-胴部 縦方向のケンマ。胴部下半 -底部ハケメ(5本/1cm) 後、ナゲ。	口縁部横ナゲ。胴部ハケメ (5-6本/1cm)後、ナゲ。 胴部には粗胎子を残す。	良好	緑黄褐色	磨面をほとんど含まない。	胴部下半に横付者	II	
3 (R-9)	表	C-II	口縁部-胴部、縦方向の短 文風のケンマ。突帯付近横 ナゲ。胴部下半、横方向の ケンマ。	口縁部ハケメ(5-6本/ 1cm)、胴部横ナゲ。胴部ハ ケメ。	良好	淡茶褐色	磨面をほとんど含まない 胎子粘土を用いる。	III		
4 (R-2)	壺	C-III	口縁部横ナゲ。胴部上平タテ タテ(2条/1cm)後、ハケ メ(5-6本/1cm)。胴 部下半ハケメ(5本/1cm)。	口縁部横ナゲ。胴部ハケメ 後、ナゲ。	良好	黄赤褐色 或時茶褐色	粗胎子多し。	外面に横付者。	II	
5 (R-7)	壺	B-III	口縁部ハケメ(5-6本/ 1cm)後、横ナゲ。胴部 タテタテ(2条/1cm)後、ハ ケメ。胴部付近ナゲ。	口縁部-胴部ハケメ(5- 6本/1cm)、胴部下半ナゲ。	良好	黄赤褐色 或時茶褐色	粗胎子多し。	外面全面に横付者。 胴部には粗胎子に びずり。	II	
6	壺	D-III	口縁部ハケメ(5本/1cm)。 胴部上平タテタテ(2条/1 cm)後、ハケメ。胴部下半 -底部、ナゲ付近ナゲ。	口縁部ハケメ。胴部ハケメ 後、ナゲ。	良好	淡黄褐色	粗・細胎子多し。	胴部上半を中心に 横付者。	II	
Fig. 102 (R-11)	鉢	D-II	不定方向のナゲ付。	ナ	ナ	良好	淡黄褐色	粗・細胎子多し。	胴部下半に横付者 の穿孔1。	II
8 (R-8)	鉢	D-III	胴部上半ナゲ。胴部下半、 不定方向のナゲ付。	ハケメ(5本/1cm)、胴部 付近、横ナゲ。	良好	淡茶褐色	粗・細胎子多し。	胴部付近に横付者	II	
9 (R-3)	高杯	A-III	口縁部上平ハケメ(6本/ 1cm)、胴部下半、縦あるいは 斜方向のケンマ。磨面、縦 方向のやあらケンマ。 磨面部、横方向のケンマ。	口縁部ハケメ後、ケンマ、磨 文。胴部横ナゲ。胴部横ナ ゲ。	良好	黄 褐色	粗胎子を用いる。	II		
10 (R-4)	高杯	D-III	口縁部、横方向のケンマ。胴 部ハケメ(10本/1cm)後、 ナゲ。	口縁部ケンマ、磨文、磨面、 横ナゲ。胴部ハケメ。	良好	淡茶褐色	粗胎子を用いる。	II		

Tab. 35 西新町遺跡D地区第4号竪穴式住居跡出土土器観察表

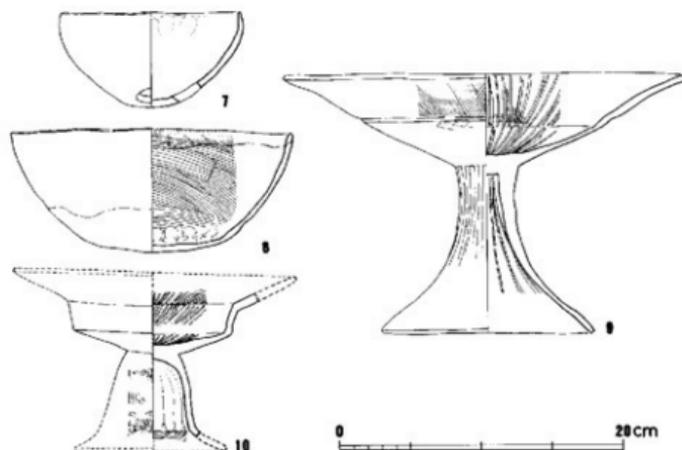


Fig. 105 西新町遺跡D地区第4号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

探出番号 (整理番号)	器種 分類	型式	要 素		構成	色 調	土 質	備 考	様 式
			外	内					
Fig. 106 1 (R-2)	甕	I	横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	淡灰白色	砂粒を含む。		
2 (R-7)	甕		ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(15本/1cm)。	良好	赤褐色	粗・細砂粒を含む。		
3 (R-1)	甕	Ⅱ	口縁部、横ナデ。胴部一局部、ハケメ(15本/1cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	町色	砂粒を含む。		III
4 (R-6)	甕	Ⅲ	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(12本/1cm)横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。		IV
5 (R-8)	甕	Ⅳ	口縁部一局部、横ナデ。胴部、ハケメ(16本/1cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、ウツミ豆。	良好	淡黄褐色	細砂・粗砂粒多し。		III
6 (R-10)	鉢	Ⅰ	ケンマ。	ケンマ。	良好	赤褐色	砂粒を含む。		
7 (R-5)	鉢	Ⅱ	口縁部、ハケメ(12本/1cm)横ナデ。胴部一局部、ケズリ。	ナデ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。		III
8 (R-9)	高坏	Ⅰ	口縁部、ハケメ(12本/1cm)以上/1cm。後、部分的にケンマを施し、粘又焼に仕上げる。	ナデ。	良好	黄褐色	砂粒多し。	彫内付鉢	IV
9 (R-3)	高坏		ハケメ(12本以上/1cm)後、部分的にケンマを施し、粘又焼に仕上げる。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ。	良好	淡黄褐色	細砂粒を含む。		
10	高坏		口縁部のケンマ。	ハケメ(5本/1cmと9本/1cmの2型がある)。	良好	赤褐色	明灰土を用いた。		

Tab. 36 西新町遺跡D地区第5号竪穴式住居跡出土土器観察表

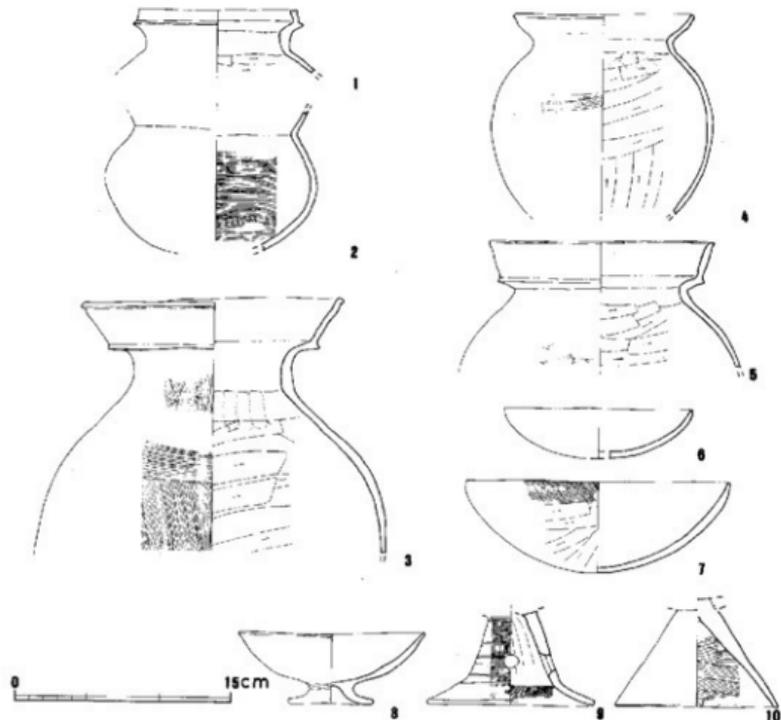


Fig. 106 西新町遺跡D地区第5号竪穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

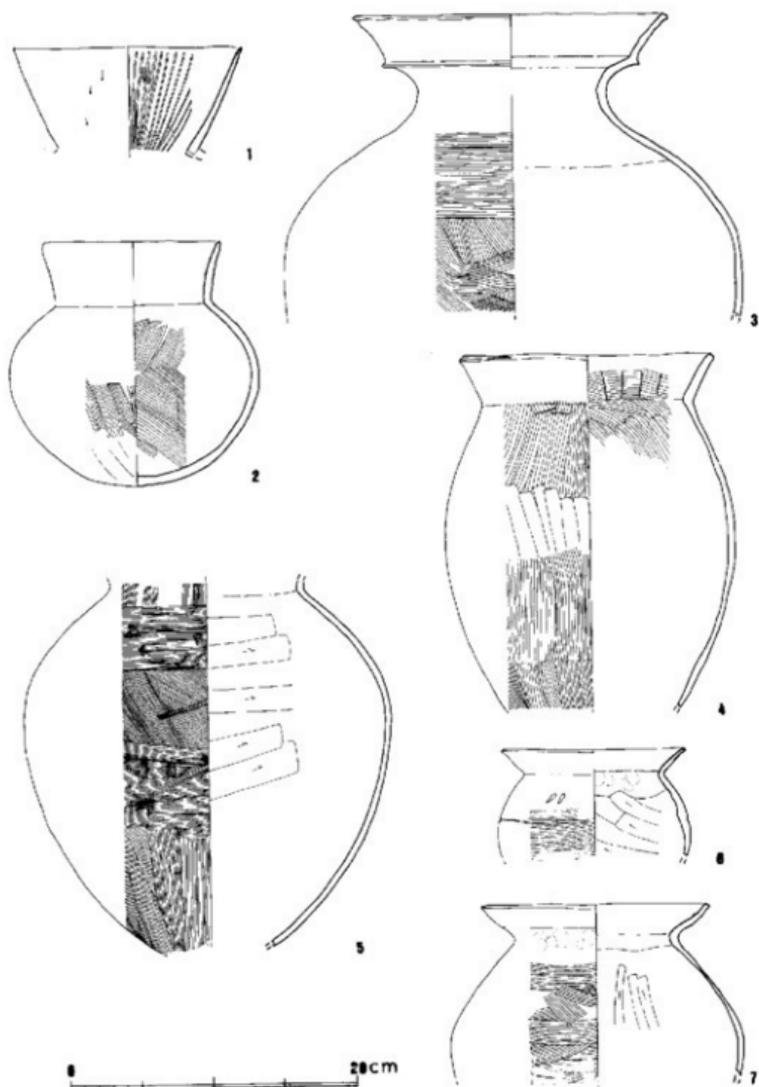


Fig. 107 西新町遺跡D地区第6号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

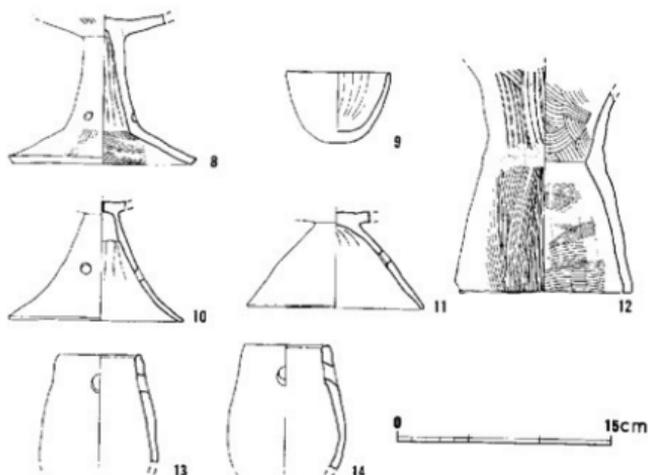


Fig. 108 西新町遺跡D地区第6号竈穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

種別番号 (整理番号)	図録 分類	器 型				構成	色 調	胎 土	装 飾	模 式
		外	底	内	蓋					
Fig. 107 1 (R-13)	蓋		ハケメ後、東方向のケンマ。	ハケメ後ケンマ、片文。	良好	明褐色	精製粘土を用いる。			
2 (R-5)	壺	C _a	口縁部一帯の上平、ケンマ、 胴部中程、ハケメ、胴部下 半一帯部、ケズリ捺す。	口縁部、横ナデ、胴部、ハ ケメ、底面付返、ナデ。	良好	淡黄褐色	砂粒を少量含む。	胴部一帯部の広い 範囲に黒変部あり		
3 (R-1)	壺	C _a II	口縁部、ナデ、胴部、ハ ケメ。	口縁部、横ナデ、胴部、ハ ケメ。	良好	淡黄褐色	砂粒を含む。		III	
4 (R-10)	壺	A _a II	口縁部、横ナデ、胴部、ハ ケメ。ただし中位には部分 的「ケズリ」を施す。	口縁部、ハケメ後横ナデ、 胴部、ハケメ捺す。	良好	暗黄褐色	砂粒を少量含む。		II	
5 (R-12)	壺	I-III	頸部付立、横ナデ、胴部 ハケメ(5cm/1cm)。	ヘラケズリ。	良好	灰黄色	細砂粒を含む。		III	
6 (R-15)	壺	II-III	口縁部一帯出、横ナデ、胴 部、ハケメ。	口縁部一帯部、横ナデ、胴 部、ヘラケズリ。	良好	黄褐色	細砂粒を含む。	胴部に20-30網の刺 突文、胴部上半に 瓦面を施すのみ。	III	
7 (R-4)	壺	II-III	口縁部一帯部、横ナデ、胴 部、ハケメ(5cm/1cm)。	口縁部、横ナデ、胴部、ハ ケメ後捺す。	不良	淡黄褐色	細砂粒を含む。		II	
Fig. 108 8 (R-15)	壺	IV	底面ハケメ。	胴部、しほり捺すナデ、胴 部、ハケメ。	良好	赤褐色	砂粒を含む。			
9 (R-12)	鉢	F	ナデ。	ケズリ後ナデ。	良好	暗黄褐色	細砂粒を含む。			
10 (R-8)	器台		ナデ。	ヘラケズリ後ナデ。	良好	淡黄褐色	精製粘土を用いる。	胴部に横変部1-3 cmの隆起。		
11 (R-7)	器台	R	あしが著しく行進不明。		不良	淡褐色	細砂粒を含む。			
12 (R-3)	器台	C	ハケメ(3cm/1cmと6cm/1cm の2者があがる)。	ハケメ(5-6cm/1cm)、 口縁部付返のみナデ。	良好	明褐色	砂粒を含む。			
13 (R-9)	器台		ナデ。	ナデ。	良好	暗褐色	砂粒多し。			
14 (R-14)	器台		ナデ。	ナデ。	やや 良好	赤褐色	細砂粒多し。			

Tab. 37 西新町遺跡D地区第6号竈穴式住居跡出土土器観察表

縄目番号 (整理番号)	器種	形式 分類	胴		構成	色 澤	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 109 1 (R-6)	壺	II-B	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(7本/1cm)後がらくナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	黄褐色	細砂粒多し。	胴部に、4本程度のハケメをほぼ等間隔に施すほど。	III
2 (R-5)	壺	II-B	口縁部～胴部、横ナデ。胴部、ハケメ(7～8本/1cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	黄褐色	細砂粒を含む。	胴部に4本の沈線が施されている。	IV
3 (R-1)	壺	II-B	口縁部～胴部、横ナデ。胴部、ハケメ(8～9本/1cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	深黄褐色	微砂粒多し。	胴部に4本の沈線が施されている。	III
4 (R-2)	壺	II-B	口縁部～胴部、横ナデ。胴部、ハケメ(9～10本/1cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、横ナデ後ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	淡黄褐色をいし、淡褐色	粗粒多し。	外側に厚層を吹きこぼれの跡を残す。胴部に6本の平行の沈線と3本の沈線の沈線が施されている。	III
5 (R-9)	壺	II-B	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ後横ナデ。胴部、ハケメ。	口縁部、横ナデ。胴部、横ナデ後ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	暗黄褐色	細粒を含む。	胴部に、ハケメの小細線による列点文を施す。	III
6 (R-4)	壺	II-B	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	淡黄褐色	細粒多し。	胴部に4本の沈線が施されている。	III
7 (R-3)	高坏	A-II	肩部以上、ハケメ(5本/1cm)後ナデ。口以下、ナデ。胴部、能方向のケンマ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。杯部、ケンマ、埴文。胴部より粗粒多し。肩輪部、ハケメ(6本/1cm)。	良好	灰褐色	微細砂粒多し。		II
8 (R-7)	胎台	B	ナデ。	ナデ。	良好	茶褐色	細砂粒を含む。	胴部に3つの構成部を区別する。	
9 (R-8)	胎台	B	ナデ。	ハケメ(12本以上/1cm)後ナデ。	良好	灰褐色	細砂粒を含む。	胴部に3つの構成部を区別する。	

Tab. 38 西新町遺跡D地区第7号竪六式住居跡出土土器観察表

縄目番号 (整理番号)	器種	形式 分類	胴		構成	色 澤	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 110 1 (R-1)	壺	F-B	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(8～9本/1cm)後ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、横ナデ。	良好	暗黄褐色	細砂粒を含む。		II
2 (R-4)	壺	F-B	横 ナ デ	口縁部、横ナデ。胴部、横ナデ。	良好	黄褐色	粗粒を含む。		II
3 (R-19)	壺	F-B	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ後ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	暗黄褐色	細砂粒多し。	胴部にハケメの痕を残す。	II
4 (R-45)	壺	F-B	横 ナ デ	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	暗褐色	細粒を含む。	胴部に、ハケメ小による列点文を施す。	II
5 (R-18)	壺	F-B	口縁部、横ナデ。胴部～胴部、ハケメ後ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	淡褐色をいし、淡黄褐色	微細砂粒多し。	内外面に部分的にうすく厚層を吹く。	III
6 (R-20)	壺	F-B	口縁部～胴部、横ナデ。胴部、ハケメ(8本/1cm)後ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	淡黄褐色	粗・細砂粒多し。	うすく厚層を吹く。	II
7 (R-7)	壺	E	口縁部、ハケメ(8～9本/1cm)後横ナデ。胴部、ハケメ(5～6本/1cm)後ナデ。	口縁部、ハケメ(8～9本/1cm)後ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	黄褐色	粗砂粒多し。		II
8 (R-8)	壺	E-II	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(4～5本/1cm)後ナデ。	口縁部、ハケメ後、横ナデ。胴部が粗く、部分的にハケメを施しているのみ。	良好	淡黄褐色	粗・細砂粒多し。	部分的に厚層を吹く。	II

Tab. 39 西新町遺跡D地区第8号竪六式住居跡出土土器観察表1

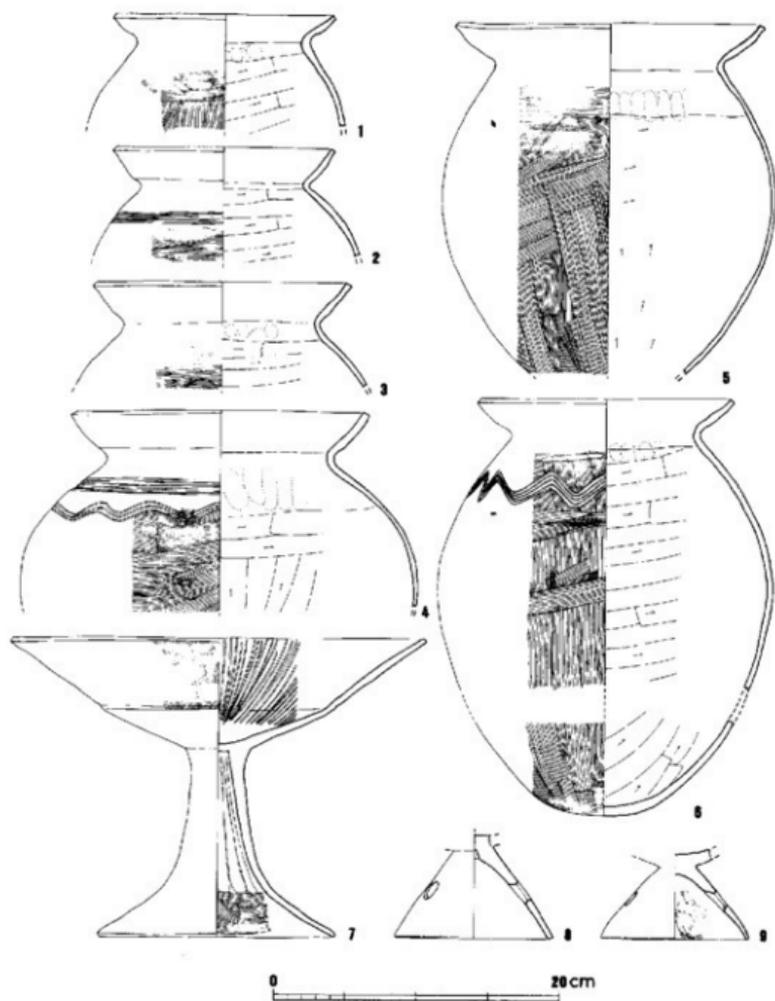


Fig. 109 西新町遺跡D地区第7号竖穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

種別番号 (整理番号)	種別	型式 分類	簡 単		焼成	色 調	粒 土	備 考	構 式
			外 面	内 面					
Fig.111 9	香	H	ハケメ(9~10本/1cm)後積方向のケンマ。	ハケメ(5本/1cm)、同部上半は、その後ナダ。底部、横をササエ。	良好	茶 黄 色	砂粒をほとんど含まず。		
10 (R-27)	香	Cy-B	口縁部、ハケメ(5本/1cm)後積ナダ。胴部上半、ハケメ、胴部下半~底部ケズリ後ナダ。	口縁部、ハケメ(5本/1cm)、胴部ハケメ(6本/1cm)。	良好	黄 緑 色	粗砂粒多し。	胴部の対称的な位置に黒点あり。	目
11 (R-67)	鉢	G-B	口縁部~胴部上半、ケンマ。胴部下半あれば若しくは仔細不明。	ハケメ(10本/1cm)後ナダ。	良好	黄 灰 色	横良粘土を用いる。		目
12 (R-40)	鉢	G-D	口縁部、横ナダ。胴部、ハケメ後、ケンマ。	口縁部~胴部、ナダ。胴部ハケメ(7本/1cm)。	良好	黄 色	横良粘土を用いる。		目
13 (R-39)	鉢	G-D	ハケメ後ナダ。	口縁部、横ナダ。胴部、ハケメ後ナダ。	良好	緑 黄 色	精選されている。		目
14 (R-47)	鉢	G-D	胴部上半、ハケメ。胴部下半、ケンマ。	ナダ。	良好	緑 黄 色	精選されている。		目
15 (R-38)	鉢	G-D	横方向のケンマ。	口縁部、ハケメ。胴部、丁重ナダ。	良好	淡 黄 色	横良粘土を用いる。		目
16 (R-41)	鉢	G-D	ケンマ。	口縁部、横ナダ。胴部、丁重ナダ。	良好	黄 色	精選されている。		目
17 (R-45)	鉢	H-D	ケンマ。	口縁部、横方向のケンマ。胴部、やや広帯状ケンマ。口縁部、横ナダ。胴部、ハケメ後、部分的にナダ。	良好	黄 緑 色	粗砂粒を少量含む。		目
18 (R-63)	鉢	H-B	ハケメ後、最狭ハケメ。		良好	黄 茶 色	精選されている。	外面全面に煤付着。	目
19 (R-9)	鉢	H-B	口縁部、横方向のケンマ。胴部上半、ハケメ(10本/1cm)後、横方向のケンマ。胴部下半、ケンマ。	口縁部、横ナダ。胴部、ナダ。	良好	淡黄褐色	砂粒をほとんど含まず。		目
20 (R-10)	鉢	H-D	口縁部~胴部上半、ハケメ(6~7本/1cm)後積方向のケンマ。胴部下半、ハケメ後ナダ。	口縁部~胴部、横方向のケンマ。胴部下半、ハケメ後ナダ。	良好	赤 黄 色	精選されている。		目
21 (R-64)	鉢	H-B	横方向のケンマ。	口縁部、横方向のケンマ。胴部、横ナダ後積ナダ。	良好	淡茶赤色	横良粘土を用いる。		目
22 (R-12)	鉢	H-B	横方向のケンマ。	横方向のケンマ。	良好	赤 茶 色	砂粒を含まず。		目
23 (R-11)	鉢	H-B	口縁部~胴部、横方向のケンマ。底部、不定方向のケンマ。	口縁部、指ササエ後積ナダ。胴部、ナダ。	良好	茶 赤 色	砂粒をほとんど含まず。		目
24 (R-13)	鉢	E	口縁部~胴部、ハケメ後積方向のケンマ。胴部、ハケメ後ナダ。	ハケメの後積方向のケンマ。	良好	肌 色	砂粒を少量含むのみ。		目
25 (R-43)	鉢	E	ナダ。	ナダ。	良好	淡 黄 色	横良粘土を用いる。		目
26 (R-28)	鉢	E	ナダ。	ハケメ(9本/1cm)。	良好	黄 黄 褐色	微細砂粒を含む。		目
27 (R-4)	鉢	D ₁	ナダ。	ハケメ(6本/1cm)。	不良	淡黄褐色	砂粒をほとんど含まず。		目
28 (R-26)	鉢	D ₂	ハケメ(5本/1cm)。一部ナダ。	ハケメ	良好	淡黄褐色	砂粒を少量含む。		目
29 (R-2)	高14	F ₁ -D	ナダ。	ナダ。	良好	黄 灰 色	精選されている。		目
30 (R-44)	高14	F ₁ -E	ハケメ後ナダ。	ナダ。	良好	淡 黄 色	横良粘土を用いる。		目
31 (R-61)	高14	E	胴部つけ付付近、ヘラケズリ。残はヘラナダ。	胴部、ハケメ(8~9本/1cm)。	良好	橙 黄 色	精選されている。		目
Fig.112 32	高	A-B	ハケメ、突脚付足、横ナダケタキ先行。	ナダ。	良好	黄 黄 色	砂粒を含む。		目
33 (R-54)	高	A-E	口縁部、ハケメ(5本/1cm)後積ナダ。胴部、ハケメ(4本/1cm)。	ハケメ(8~9本/1cm)、胴部、ハケメ(4~5本/1cm)。	良好	黄 黄 色	粗~細砂粒多し。		目
34 (R-5)	高	G-B	口縁部、横ナダ。胴部、ケタキ後、部分的にハケメ。	口縁部、横ナダ。胴部上半ハケメ。胴部中央以下、ヘラケズリ。	不良	黄 黄 色	微細砂粒多し。	外面全面に煤付着。	目
35 (R-1)	高	H-B	口縁部~胴部、横ナダ。胴部、ケタキ(4~5本/1cm)後ハケメ(8~9本/1cm)。	口縁部、横ナダ。胴部、ヘラケズリ。	良好	緑茶褐色	微細砂粒多し。	外面に部分的に煤付着。	目
36 (R-3)	高	H-B	口縁部、横ナダ。胴部、ハケメ(6本/1cm)後積ナダ。胴部、ハケメ(8~9本/1cm)。	口縁部、横ナダ。胴部、ヘラケズリ。	良好	淡黄褐色をいし淡褐色	粗~細砂粒多し。		目

Tab. 40

西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器観察表2

神田番号 (整理番号)	器種 型式 分類	製 造 地			構成	色 調	粒 土	装 考	保 式
		外	内	内 面					
Fig. 112 37 (R-53)	甕 H-II	1: 樽部、横ナデ、胴部、ナ デ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、横 ナデ、横ナデ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、横 ナデ、横ナデ。	良好	黄褐色	細砂粒多し。		Ⅲ
38 (R-51)	甕 H-III	1: 樽部、横ナデ、胴部、ナ デ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	良好	暗褐色	細砂粒多し。		Ⅲ
39 (R-2)	甕 H-II	1: 樽部、横ナデ、胴部、ナ デ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	良好	淡黄褐色	砂粒多し。	肩部に波状沈線を 1条めぐらす。外 面にうすく残付る。	Ⅲ
40 (R-4)	甕 H-III	1: 樽部、横ナデ、胴部、ナ デ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	良好	暗褐色	細砂粒多し。	肩部に、一筆が の沈線を3〜4回 めぐらす。	Ⅲ
41 (R-52)	甕 H-III	横ナデ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	良好	淡黄褐色	粗・細砂粒多し。		Ⅲ
Fig. 113 42 (R-6)	甕 H-II	1: 樽部、横ナデ、胴部、ハ ケメ横ナデ(タナキが先行 ナデ)。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ、下部は、その後ナ デ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ、下部は、その後ナ デ。	良好	暗黄褐色	砂粒多し。	外面全面に残付る 肩部に1条の沈線 をめぐらす。	Ⅲ
43 (R-16)	甕 G-III	1: 樽部、横ナデ、胴部、ハ ケメ横ナデ(タナキ(4 〜5本/1cm)を認め る)。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	良好	赤黄褐色 暗褐色	砂粒多し。	外面全面に残付る 肩部に波状沈線1 条をめぐらす。	Ⅲ
44 (R-5)	甕 H-III	1: 樽部、横ナデ、胴部、ハ ケメ横ナデ(タナキ(4 〜5本/1cm)を認 める)。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	1: 樽部、横ナデ、胴部、ヘ ラケズリ。	良好	褐色	細砂粒多し。	外面全面に残付る。	Ⅲ
45 (R-32)	フシ	ハケメ。	ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	良好	黄褐色	精製されている。	結片の多い浮孔状 不明。	
46 (R-17)	高杯	ハケメ横ナデ。	タンマ、短文。	タンマ、短文。	良好	暗黄褐色	精製されている。		
47 (R-18)	高杯	あれが著しく仔細不明。	あれが著しく仔細不明。	あれが著しく仔細不明。	良好	淡黄褐色	細砂粒を含む。		Ⅲ
48 (R-60)	高杯	横方向のケンマ。	ケンマ、短文。	ケンマ、短文。	良好	茶褐色	精製されている。		Ⅲ
49 (R-30)	高杯	横方向のケンマ。	あれが著しく仔細不明。部 分的には短文が残る。	あれが著しく仔細不明。部 分的には短文が残る。	良好	暗黄褐色	精製されている。		Ⅲ
50 (R-58)	高杯	ハケメ横ナデ。	横ナデ、胴部、ハケメ (6本/1cm)	横ナデ、胴部、ハケメ (6本/1cm)	良好	暗褐色	砂粒を少量含む。	肩部に波状沈線孔。	
51 (R-59)	高杯	横ナデ。	あれが著しく仔細不明。	あれが著しく仔細不明。	良好	黄褐色	精製されている。		Ⅲ
52 (R-15)	高台	1: 6本、横方向のケンマ、胴部 ハケメ横方向のケンマ。	胴部、横方向のケンマ、胴 部、しぼり横ナデ。	胴部、横方向のケンマ、胴 部、しぼり横ナデ。	良好	茶褐色	砂粒をほとんど含 まず。		Ⅲ
53 (R-57)	タコ	ナデ。	ナデ。	ナデ。	良好	黄褐色	砂粒多し。		
54 (R-55)	タコ	ハケメ(7本/1cm)。 ナデ。	ナデ。	ナデ。	良好	黄褐色	細砂粒を含む。		
55 (R-56)	タコ	ナデ。	ナデ。	ナデ。	良好	灰褐色	細砂粒多し。		
Fig. 114 56	高台	横ナデ。	下半部、横ナデ、下半部、 ヘラケズリ。	下半部、横ナデ、下半部、 ヘラケズリ。	良好	黄褐色	砂粒を少量を含む。 の。		Ⅲ
57 (R-26)	高台	横方向のケンマ。	横方向のケンマ。	横方向のケンマ。	良好	暗褐色	精製されている。		Ⅲ
58 (R-23)	高台	1: 横ナデ。	上半部、横ナデ、下半部、 ヘラケズリ。	上半部、横ナデ、下半部、 ヘラケズリ。	良好	淡黄褐色	砂粒をほとんど含 まず。		Ⅲ
59 (R-24)	高台	1: 横ナデ。	くびれ部短文、ヘラケズリ。 以外に横方向のあらひケンマ。	くびれ部短文、ヘラケズリ。 以外に横方向のあらひケンマ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。	上下底の可動性 あり。	Ⅲ
60 (R-22)	高台	横ナデ。	横ナデ。	横ナデ。	良好	淡黄褐色	砂粒を含む。		Ⅲ

Tab. 41 西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器観察表3

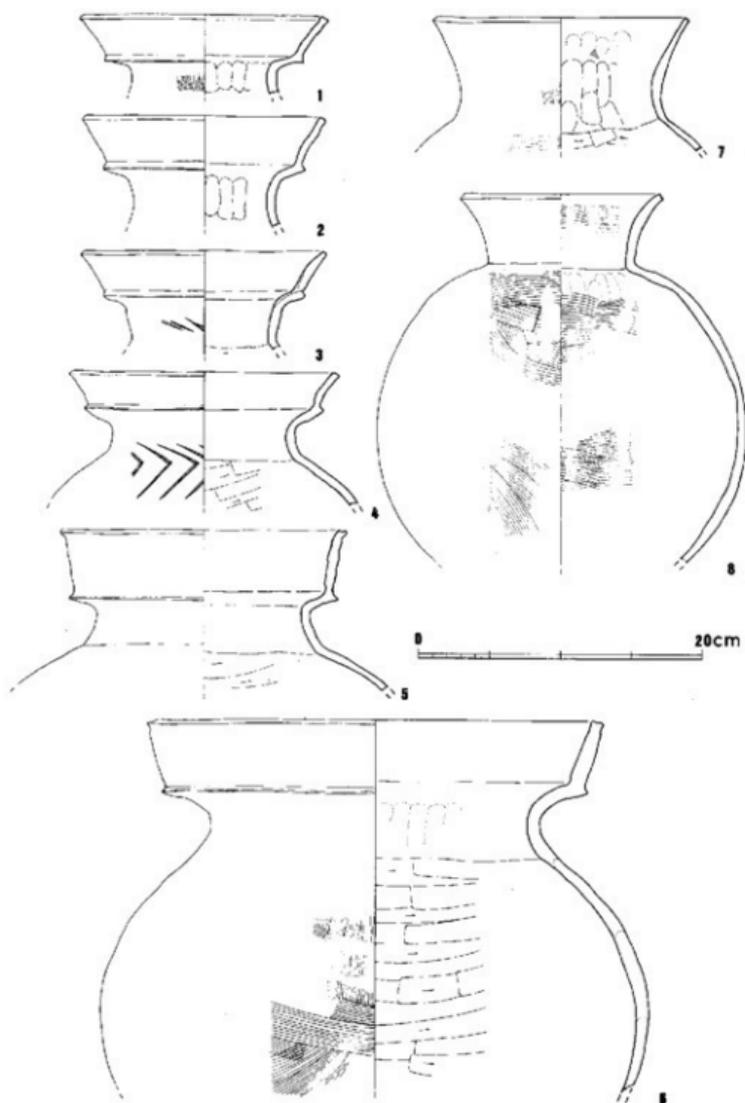


Fig. 110 西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

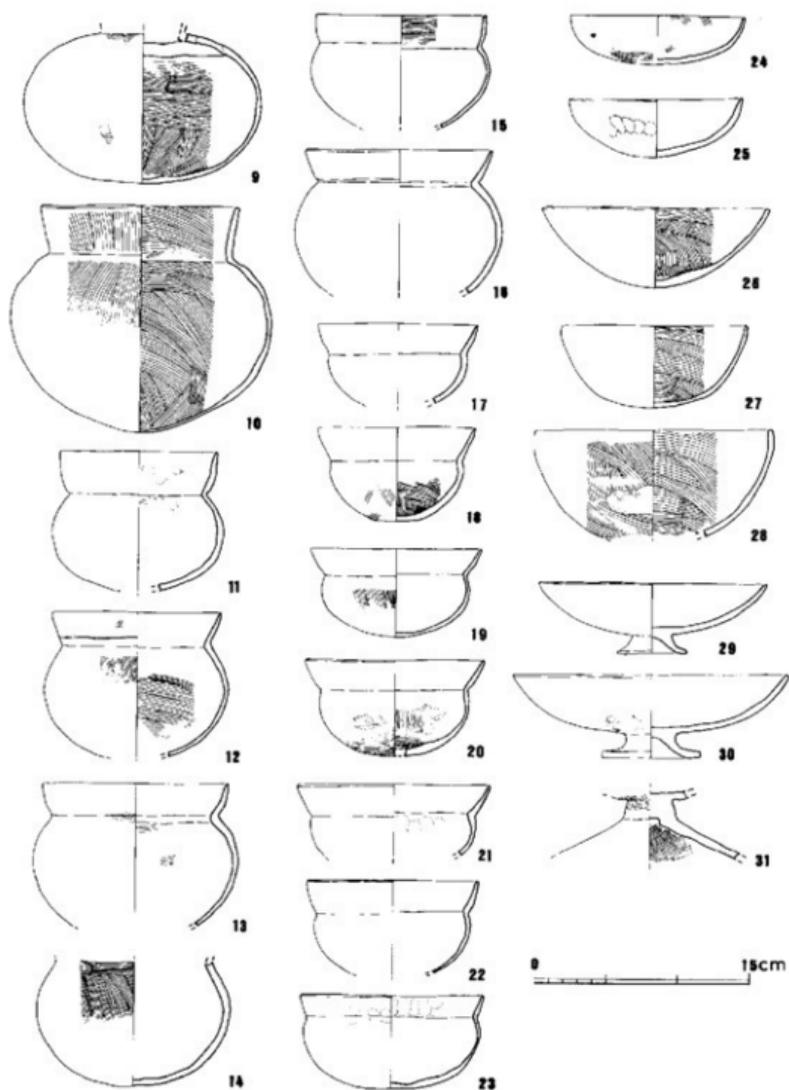


Fig. 111 西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

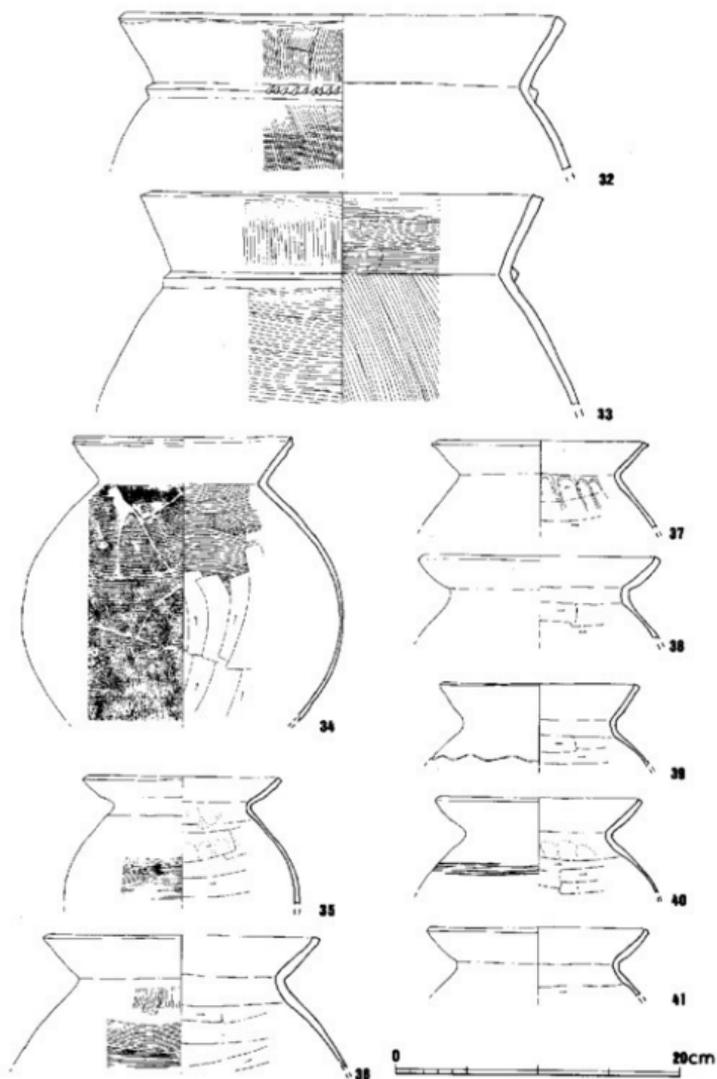


Fig. 112 西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器3 (縮尺1/4)

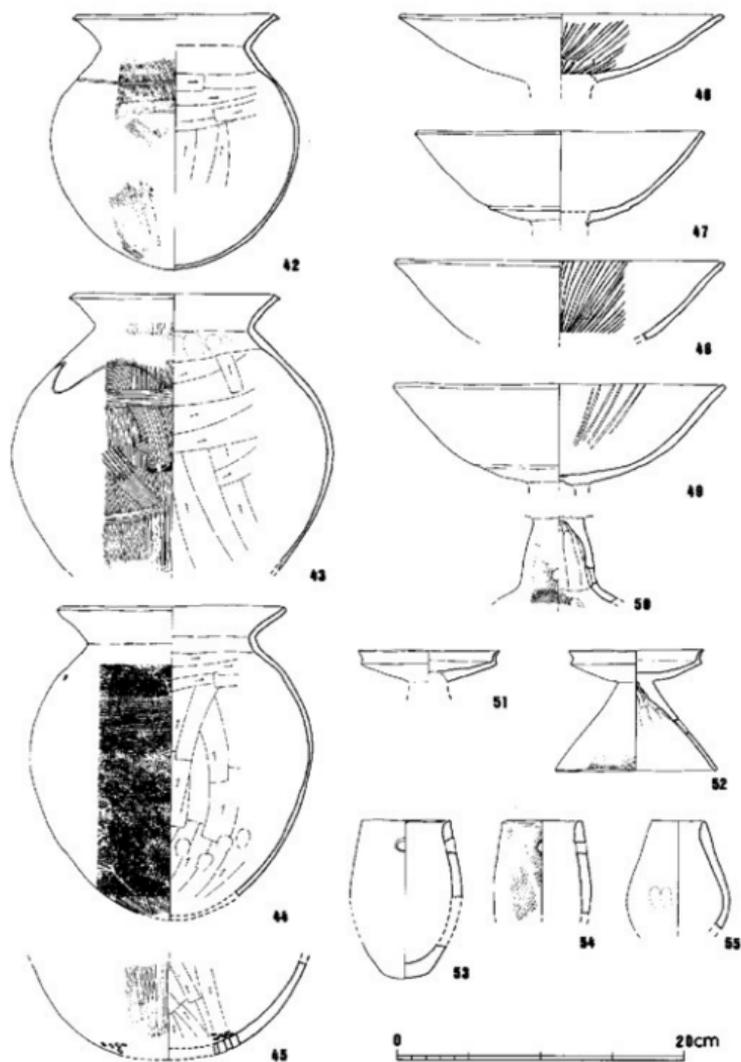


Fig. 113 西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器4 (縮尺1/4)

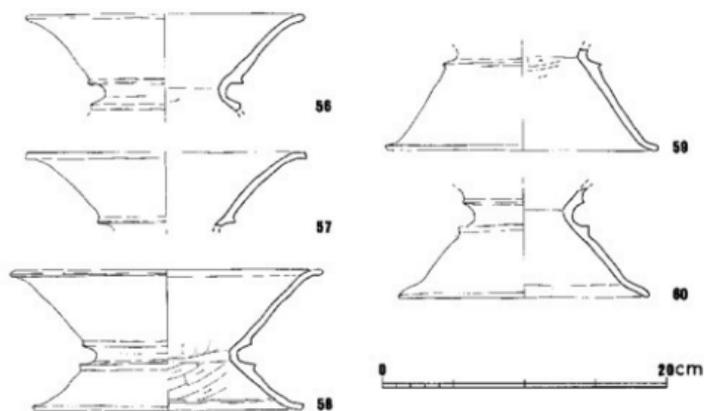


Fig. 114 西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土土器5 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種 分類	器 型		地産	色 調	胎 土	備 考	様 式
		外 面	内 面					
Fig.115 1	甕	横方向のケンマ。	ナデ。	良好	淡黄褐色	精選されている。	内面に接合線を明確に残す。	
2	甕	横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	淡黄褐色	微塵・細砂粒多し。		
3	甕	F ₁ 型 横ナデ。	横ナデ。	良好	暗褐色	微塵・細砂粒多し。	胴部に彩陶文をへう掘りする。全面に輝けず。	Ⅲ
4	甕	F ₂ 型 横ナデ。	横ナデ。	良好	淡黄褐色	微塵・細砂粒多し。		Ⅲ
5	甕	H ₁ 型 横ナデ。	横ナデ。	良好	淡黄褐色	細砂粒多し。		Ⅲ
6	甕	I ₁ 型 口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(9~10本/1cm)後ハケメ(5本/1cm)、突帯付足。	口縁部、ハケメ。胴部、ヘラケズリ。	良好	淡黄褐色	細砂粒を含む。		Ⅲ
7	甕	タテキ(2本/1cm)後ハケメ(5本/1cm)、突帯付足。	ハケメ。刺刺が著しい。	良好	淡黄褐色	微・細砂粒多し。		
8	高杯	ハケメ後横方向のケンマ。	ハケメ(9~10本/1cm)後ケンマ。足欠。	良好	淡黄褐色	砂粒をほとんど含まず。		
9	鉢	ケンマ。	横ナデケンマ。	良好	淡茶赤色	砂粒をほとんど含まず。		
10	高杯	F ₁ 型 ナデ。	ナデ。へう掘り具痕を残す。	良好	淡黄褐色	細砂粒多し。		
11	高杯	E ₁ 型 丁寧な横ナデ。	ハケメ後横ナデ。	良好	淡黄褐色	精選されている。		
12	鉢	D ₁ 型 横方向のケンマ。	横ナデ。	良好	淡黄褐色	砂粒をほとんど含まず。		
13	ナベ	ナデ。	ナデ。ハケメ状の微塵をほとんど含む。	良好	赤褐色	砂粒を含む。		

Tab. 42 西新町遺跡D地区第9号竪穴式住居跡出土土器観察表

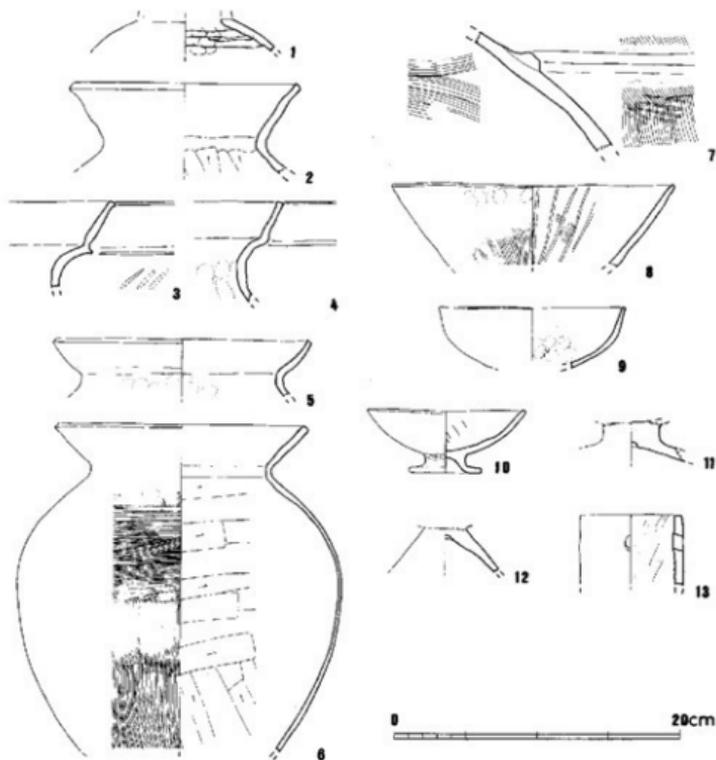


Fig. 115 西新町遺跡D地区第9号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	装		底状	色 調	胎 土	備 考	器 式
			外 面	内 面					
Fig.116 1	甕	A	口縁部、ハケメ襷ナデ、胴部、ハケメ:4~5本/1cm	口縁部、ハケメ襷ナデ、胴部、ハケメ襷ナデ。	良好	淡黄土色	砂粒を含む。	外面に襷付帯。	
2	甕	A、B	口縁部ハケメ(3~4本/1cm) 襷ナデ。胴部、ハケメ襷ナデ。	ハケメ襷ナデ。	良好	淡黄土色	砂粒を含む。	外面に襷付帯。	II'
3	鉢	F	襷ナデ。	襷ナデ。	良好	淡黄褐色	砂粒多し。		
4	鉢	F	襷ナデ。	襷ナデ。	良好	淡黄褐色	砂粒多し。		

Tab. 43 西新町遺跡 D地区第10号竪穴式住居跡出土土器観察表

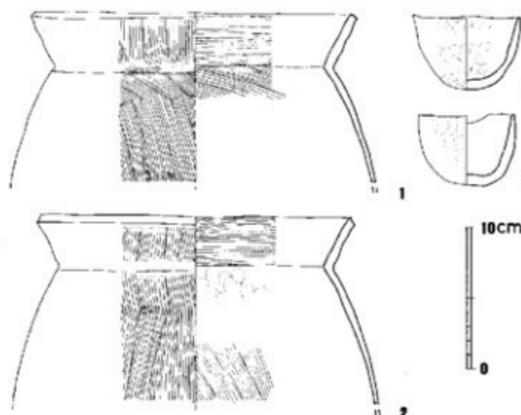


Fig. 116 西新町遺跡D地区第10号竪穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種 分類	調 整		焼成	色 調	胎 土	装 者	特 式
		外 面	内 面					
Fig. 117 1 (R-17)	甕 C ₂ II	ハケメ(12本以上/cm)横、 縦力線のケツマ。	高ナデ流下掌ナデ。	良好	赤褐色	埋砂粒を含む。	胴部下すに黒塗部。	Ⅱ
2 (R-5)	甕 J-II	口縁部、横ナデ。胴部上半 ハケメ(8~10本/cm)、彫部、 彫下ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、 ヘラケズリ。	良好	暗褐色	粗面粘土多量。	外面にうすく黒付 部。	Ⅱ
3 (R-3)	甕 Cr II	ハケメ(12本/cm)横、 縦力線のケツマ。	口縁部、横ナデ彫文。	良好	赤褐色	細砂粒を含む。		Ⅱ
4 (R-8)	甕 H	下掌を横力線のエンマ。	横ナデハケメ。	良好	赤褐色	赤粒を含む。	内面には黒塗部を 明瞭に焼す。	Ⅱ
5 (R-13)	甕 F ₂ II	横ナデ。	横ナデ。	良好	暗黄褐色	砂粒を含む。		Ⅱ
6 (R-15)	甕 F ₂ II	横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、 ヘラケズリ。	良好	暗黄褐色	砂粒を含む。		Ⅱ
7 (R-1)	甕 F ₂ II	口縁部、横ナデ。胴部、 ハケメ(10本/cm)、彫部、 タケナ(4~5本/cm)横ハケメ。	口縁部、横ナデ。胴部、 ヘラケズリ。	良好	暗褐色	埋砂粒多し。	口縁部付近にうすく 黒付部。	Ⅱ
8 (R-1)	甕 F ₂ II	口縁部、横ナデ。胴部、 ナデ。 口縁部~胴部上半、ハケメ (8~9本/cm)、胴部下 ナデ、ケツマ。	口縁部、横ナデ。胴部、 ヘラケズリ。	良好	赤褐色	埋砂粒多し。	胴部に黒塗部。	Ⅱ
9 (R-9)	甕 A ₂ I		胴部、ハケメ(7~8本/cm) 横ナデ。	良好	暗黄褐色	埋砂粒。	外面全面にうすく 黒付部。	Ⅱ
10 (R-10)	甕 C ₂	口縁部、タケナ横ナデ。 胴部上半、タケナ(2本/cm)、 彫部下半、黒塗部ハケメ (ケツマ)に彫文。	口縁部、ハケメ(6本/cm) 胴部、ハケメ(7~8本/cm) 横ナデ。	良好	暗黄褐色	粗・埋砂粒多し。	外面全面にうすく 黒付部。	Ⅱ
Fig. 118 11 (R-14)	甕 H-II	口縁部、横ナデ。胴部、 ハケメ(12本/cm)横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、 ヘラケズリ。	良好	黄褐色	埋砂粒を含む。		Ⅱ
12 (R-6)	甕 II II	口縁部、横ナデ。胴部、 ハケメ(10本/cm)横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、 ヘラケズリ。	良好	暗黄褐色	赤粒をあまり含ま ない。	外面にうすく黒付 部。	Ⅱ
13 (R-7)	甕 II II	口縁部、横ナデ。胴部、 ハケメ(10本/cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、 ヘラケズリ。	良好	赤褐色	埋砂粒多し。	外面にうすく黒付 部。胴部に、ゆる ゆるな黒塗部を焼 洗部1部をめぐら す。	Ⅱ
14 (R-11)	甕	口縁部~胴部下す、ハケメ (5本/cm)横ナデ。胴 部下半、ケツマ。	ハケメ(5本/cm)、彫部付 近、ナデ。	良好	黄褐色	砂粒多し。		Ⅱ
15 (R-4)	鉢 F	口縁部~胴部、ナデ。胴部 ケツマ。	ナデ。	良好	淡黄褐色	粗・埋砂粒多し。		Ⅱ
16 (R-4)	鉢 F	ナデ。	ナデ。	良好	黄褐色	埋砂粒多し。		Ⅱ
17 (R-20)	鉢 F	横ナデ。	横ナデ。部分的にヘラケズリ を残す。	良好	黄褐色	埋砂粒を含む。		Ⅱ
18 (R-1)	鉢 F	口縁部、横ナデ。胴部~彫 部、ケツマ。	ナデ。	良好	黄褐色	埋砂粒を含む。		Ⅱ
19 (R-6)	鉢台 C-II	上半部、ハケメ(4本/cm) 横ナデ。	上半部、ハケメ。横ナデ	良好	赤褐色	砂粒多し。		Ⅱ

Tab. 44 西新町遺跡D地区第11号竪穴式住居跡出土土器観察表

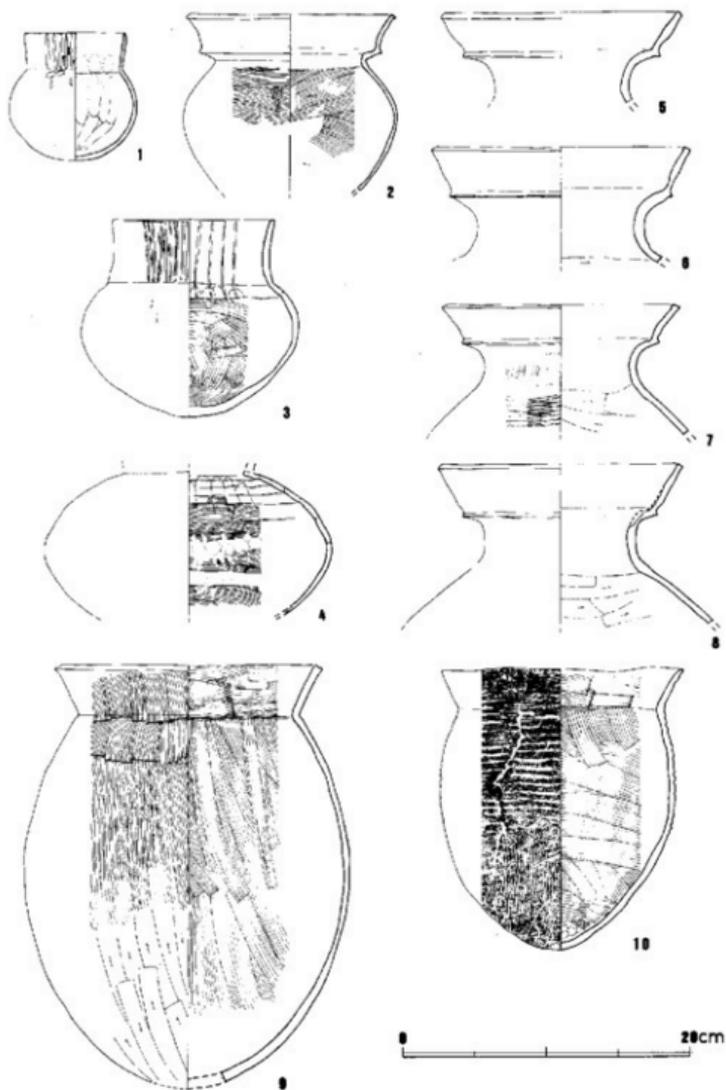


Fig. 117 西新町遺跡D地区第11号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺 1/4)

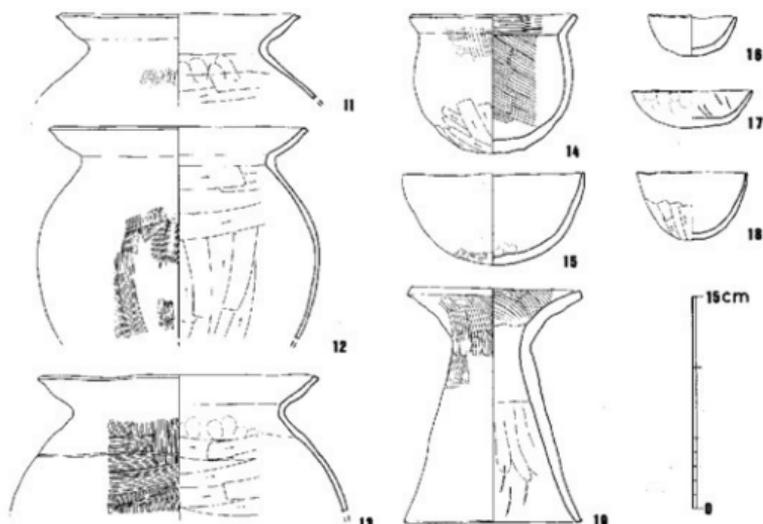


Fig. 118 西新町遺跡D地区第11号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

図号番号 (整理番号)	器種	型式 分類	装		構成	色	調	胎	土	備	考	様
			外	内								
Fig.119 1 (R-1)	壺	I-II	口縁部~肩部、横ナデ、横溝、ハケメ。胴部下は、その横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ。	良好	暗黄灰色	砂粒を含む。	口縁部~肩部に厚く、厚付高。				II
2 (R-3)	壺	II	ハケメ後横方向のケンマ。	ハケメ。底辺付否、ナデ。	良好	明褐色	硝子粒を含む。					II
3 (R-19)	壺	G-II	口縁部、ケンマ。胴部上平ハケメ後ケンマ。胴部下平ハケメナデ。	口縁部、ハケメ(7本/1cm)彫刻、ナデ。	良好	赤褐色	硝子粒を含む。					II
4 (R-16)	壺	F-II	横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメナデ。	良好	黄褐色	硝子粒を含む。					II
5 (R-17)	壺	F-II	横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメナデ。	良好	黄灰色	硝子粒を含む。					II
6 (R-7)	壺	F-II	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(10本/1cm)横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメナデ。	良好	淡黄褐色	硝子粒を含む。					II
7 (R-2)	壺	F-II	口縁部~肩部、横ナデ。胴部、ハケメ後ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメナデ。	良好	淡黄褐色	硝子粒を含む。					II
Fig.120 8	壺	H	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ後横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメナデ。	不良	結晶色	砂粒を含む。					II
9 (R-14)	壺	II-II	口縁部、横ナデ。胴部、あれが著しく粗不揃。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメナデ。	良好	黄褐色	硝子粒を含む。					II
10 (R-8)	高坏	B-II	口縁部、横方向のケンマ。胴部、ハケメ後、ケンマ、硝子。	口縁部、ハケメ後ケンマ、硝子。胴部、ナデ。	良好	赤褐色	硝子粒多し。					II
11 (R-5)	鉢	F	あれが著しく粗不揃。	ナデ。	不良	淡黄褐色	硝子粒を含む。					II

Tab. 45 西新町遺跡D地区第13号竪穴式住居跡出土土器観察表 1

1. 西新町遺跡の調査

134

検出番号 (整理番号)	器種 分類	形式	調 査		造 成	色 調	胎 土	備 考	格 式
			外 面	内 面					
Fig.109 13 (R-4)	鉢	F	ナデ。	ナデ。	良好	暗茶褐色	精選されている。		
13 (R-11)	百合	B II	ナデ、ヤシマ、調部、ハケメ (10-11本/1cm)焼ナデ。	ナデ、焼ナデ、調部、ハケ メ焼ナデ。	良好	淡赤褐色	細粒多量とんどき ます。		II
14 (R-13)	ナコ壺		ハケメ焼ナデ。	ナデ。	良好	茶褐色	細砂粒多し。		
15 (R-6)	アコ壺		山埴田、焼ナデ、調部～高 部、焼ナデ。	山埴田、ハケメ、調部、ナ デ、意匠に包砂痕を残す。	良好	灰黄色	粗・細砂粒多し。		
16 (R-12)	ナコ壺		ナデ。	ナデ。	不良	暗黄褐色	粗細砂粒多し。		
17 (R-10)	アコ壺		ハケメ(7本/1cm)焼ナデ。	ヘラ状工具による調整。	不良	暗茶褐色	粗砂粒多し。		
18 (R-14)	アコ壺		ナデ。	ナデ。	良好	黄褐色	細砂粒多し。		
19 (R-9)	ナコ壺		ナデ。	ナデ。	良好	黄褐色	砂粒多し。		

Tab. 46 西新町遺跡D地区第13号竪穴式住居跡出土土器観察表2

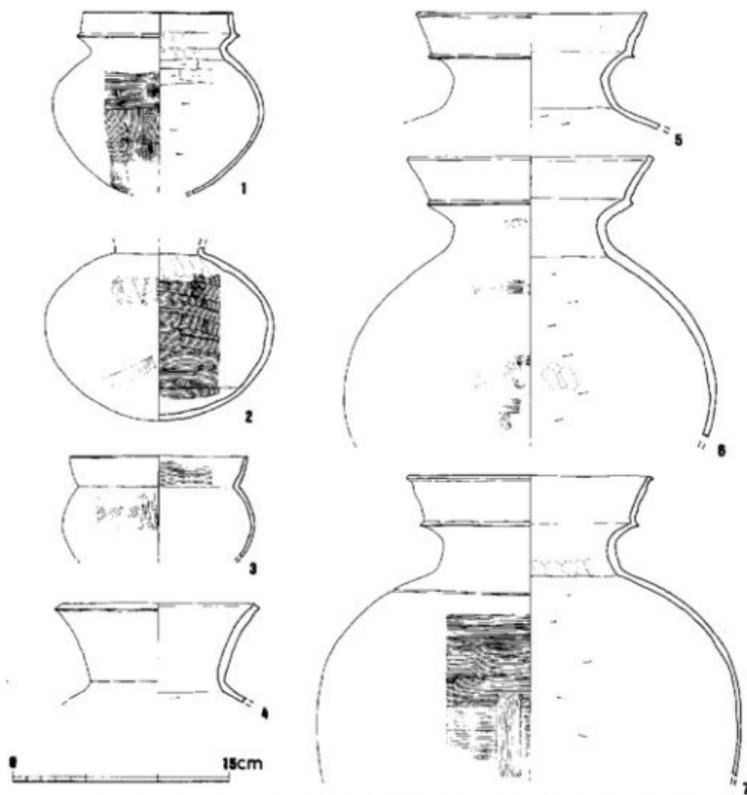


Fig. 119 西新町遺跡D地区第13号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

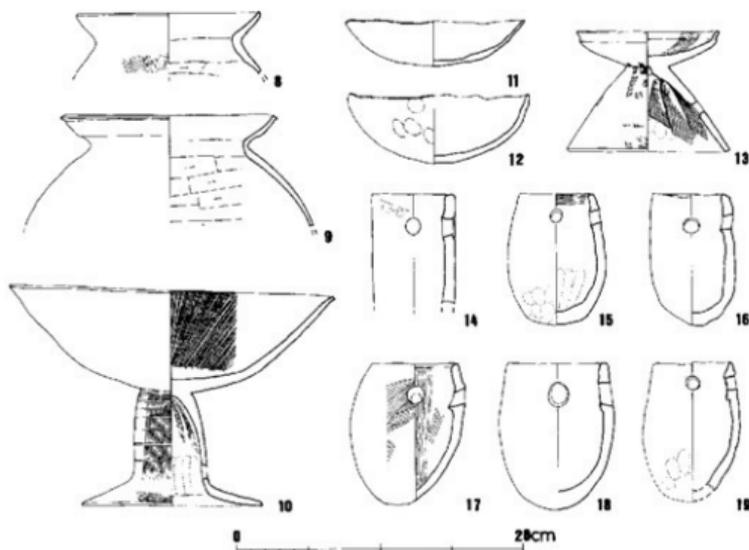


Fig. 120. 西新町遺跡D地区第13号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	切欠 分類	周		地味	色	陶	胎	土	備 考	様 式
			外	内							
Fig. 121 1 (R-4)	甕	C ₁	口縁部、ハケメ(5本/1cm) 後縁ナデ。胴部、ハケメ後 ハケメナデ。	ハケメ。	良好	暗赤褐色	粗	粗砂粒多し。		口縁部・胴部中程 に集中した厚付層	
2 (R-2)	甕		口縁部一貫部、ハケメ後縁 ナデ。胴部、ヘラ状工具に よるナデ。	口縁部、ハケメ後縁ナデ。 胴部、ヘラケメリ。	良好	暗 灰 色		砂粒を含む。			
3 (R-5)	甕	A	口縁部、ハケメ後縁ナデ。 胴部、ハケメ(7~8本/1 cm)。	口縁部、ハケメ後縁ナデ。 胴部ハケメ。	良好	暗黄褐色		砂粒を含む。	外面に厚付層。		
4 (R-1)	甕	A	口縁部、ハケメ(4~5本 /1cm)後縁ナデ。胴部、ハ ケメ後ナデ。	ハケメ。	良好	赤 褐色		砂粒を含む。			
5 (R-3)	甕	A ₂ B'	口縁部、ハケメ後縁ナデ。 胴部上半、ハケメ(5~6 本/1cm)胴部下半、混陶ハ ケメ(ケズリに多い)。	口縁部、ハケメ、胴部、ハ ケメ後ナデ。	良好	暗黄褐色		砂粒を含む。	外面に厚付層。		B'

Tab. 47 西新町遺跡E地区第14号竪穴式住居跡出土土器観察表

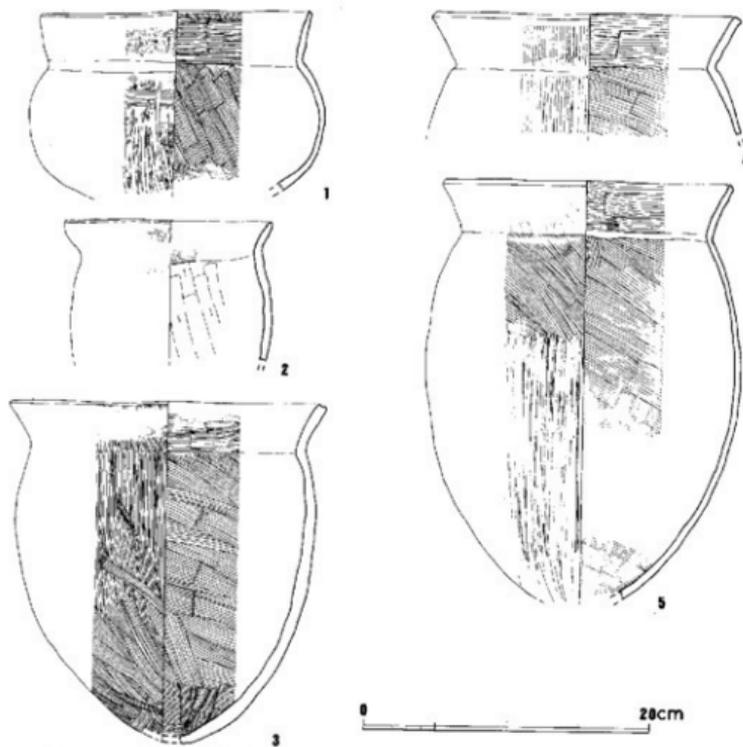


Fig. 121 西新町遺跡D地区第14号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺 1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	器 身		焼成	色 変	粘 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig.121 1 (R-2)	甕	F-10	横ナデ。	横ナデ。	良好	淡黄褐色	黒砂粒多し。	口縁部付近黒変。	Ⅱ
2 (R-13)	甕	F-10	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメ(9本/1cmと11本/1 cmの2層がある)。	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメナリ。	良好	淡黄褐色	黒砂粒多し。		Ⅱ
3 (R-4)	甕	F-10	口縁部、横ナデ。胴部上半 部ナメ後ハケメ。胴部下半 部ハケメ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメナリ。	良好	淡黄褐色 西段黄褐色	黒砂粒多し。	胴部に口縁の沈積 を乱雑にめぐらす 層付層。	Ⅱ
4 (R-12)	甕	F-10	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメ後横ナデ。胴部ハケメ (5本/1cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメナリ。	良好	淡黄褐色	粗・細砂粒多し。	胴部にも染の沈積 をめぐらす。	Ⅱ
5 (R-1)	甕	F-10	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメ(5本/1cm)後 横ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメナリ。	良好	淡 黄 色	黒砂粒多し。		Ⅱ
6	甕	F-10	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメ後横ナデ。胴部、ハケ メ。	口縁部、横ナデ。胴部、横 ナデ後横ナデ。胴部、ハケ メナリ。	良好	淡黄褐色	粗粒をきむ。	胴部にハケ小口部 による列点文を施 す。	Ⅱ

Tab. 48 西新町遺跡D地区第16号竪穴式住居跡出土土器観察表 1

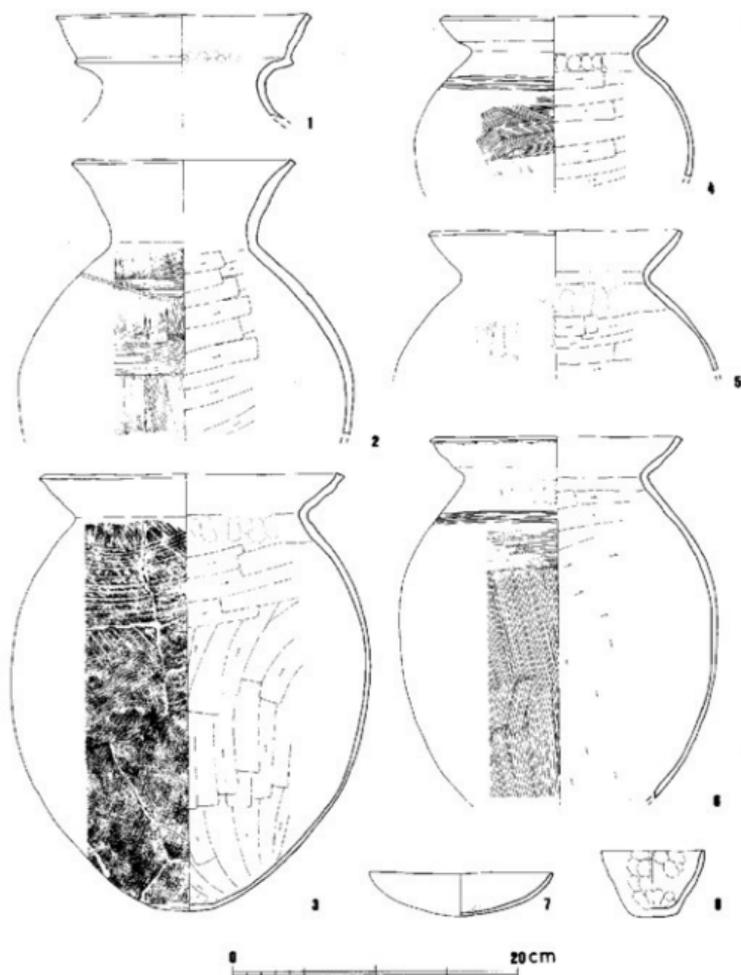


Fig. 122 西新町遺跡D地区第16号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

発掘番号 (整理番号)	器種	型式 分類	器 形		産成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 122 7	鉢	E	口縁部、横ナデ、胴部、ハクメ(16本/1cm)、肩台部、横ナデ	鉢部、ナデ、肩台部、横ナデ	良好	淡黄褐色	横糸粘土を用いる。		
8	鉢	D	横方向のケンマ。	ハクメ(10本/1cm)。	良好	赤褐色	細砂粒を含む。		
Fig. 123 9	高杯	E-II	肩台部、ヘラで取れりを含む。頸部、ハクメ(横ナデ)。	ハクメ(8-9本/1cm)後、胴部を横ナデ。	良好	黄褐色	細砂粒を含む。		Ⅱ
10 (R-4)	高杯	F-I	ハクメ(5本/1cm)後、横方向のケンマ。	ハクメ(横ナデ)、略文。	良好	茶褐色	焼成されている。		Ⅱ
11 (R-15)	高杯	E-II	横方向のケンマ。	ハクメ(8-9本/1cm)後、ケンマ、略文。	良好	茶褐色	焼成されている。	肩台付鉢	Ⅱ
12 (R-10)	高杯	E-II	口部、横方向のケンマ。胴部上平、横方向のケンマ。肩以下、ハクメ。	口部、ハクメ(12本/1cm)、胴部、しぼり波を残す。横ハクメ横ナデ。	良好	赤褐色	細砂粒を含む。	肩台付鉢	Ⅱ
13 (R-3)	高杯	D-I	口縁部、横ナデ、胴部以下、丁家金ナデ。	ハクメ横ケンマ。	良好	茶褐色	横糸粘土を用いる。		Ⅱ
14 (R-6)	高杯	B-II	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	茶褐色	細砂粒を含む。		Ⅱ
15 (R-11)	高杯	C-II	口縁部、横ナデ、胴部下平、ハクメ。	ナ デ	良好	黄褐色	砂粒を含む。		Ⅱ

Tab. 49 西新町遺跡D地区第16号竪穴式住居跡出土土器観察表2

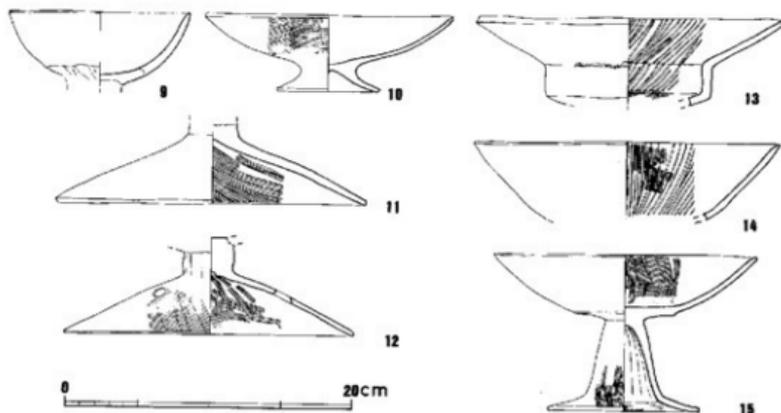


Fig. 123 西新町遺跡D地区第16号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

発掘番号 (整理番号)	器種	型式 分類	器 形		産成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 124 1	甕	F-II	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	淡黄褐色	濃赤・細砂粒を含む。		Ⅱ
2	甕	B-II	ハクメ(横方向のケンマ)、胴部下平にヘラズリが先行。	口縁部、横ナデ、胴部、ナデ。	良好	赤褐色	横糸粘土を用いる。		Ⅱ
3	甕	A	ハクメ(5本/1cm)後、横ナデ。	口部が深くて、ハクメを部分的に隠れるのみ。	良好	淡黄褐色	焼成・細砂粒多し。		
4	甕	A	口縁部、横ナデ、胴部、ナデ(2本/1cm)後、ハクメ(10-12本/1cm)。	ハクメ(4本/1cm)。	良好	黄褐色	細砂粒を含む。	外面に横ナデ。	

Tab. 50 西新町遺跡D地区第17号竪穴式住居跡出土土器観察表1

種別番号 (整理番号)	器種	型式 分類	素 型		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 124 5	甕	目目	横ナデ	口縁部、横ナデ、胴部、ヘラケズリ。	良好	暗褐色	精選されている。		Ⅱ
6	甕	目目	口縁部一帯部、横ナデ、胴部、ヘラケズリ。	口縁部、横ナデ、胴部、ヘラケズリ。	良好	暗褐色	精選されている。外面に厚付面。		Ⅱ
7	フシ		ハケメ(12~13本/1cm)。	ハケメ。	良好	暗黄褐色	精選粘土を用いる。		
8	鉢	D	口縁部一帯部、ナデ、底部付込、ケズリ横ナデ。	ハケメ(5本/1cm)。	良好	暗褐色	細粒を含む。		
9	鉢	F	ヘラ工具によるナデ。	ヘラ工具によるナデ。	良好	暗褐色	細粒を含む。		
10	高杯	D	ハケメの横線方向のケム。	ハケメ(8本/1cm)横線方向のケム。	良好	茶褐色	微細砂粒を少量含む。		
11	高杯	A	ケム。	ハケメ(6~7本/1cm)横線部分的にナデ。	良好	赤褐色	細砂粒を含む。		

Tab. 51 西新町遺跡D地区第17号竪穴式住居跡出土土器観察表 2

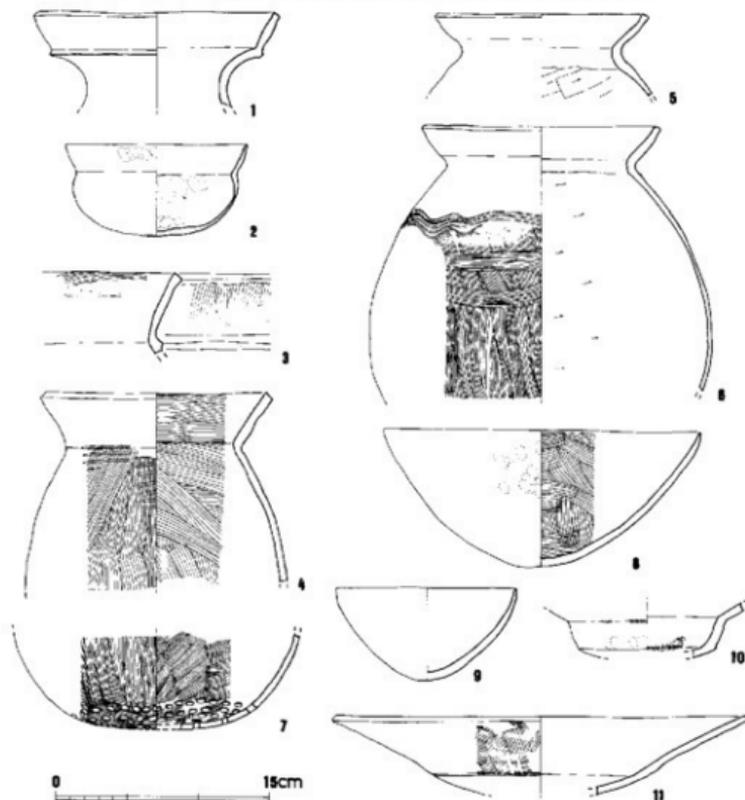


Fig. 124 西新町遺跡D地区第17号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺 1/4)

発掘番号 (整理番号)	器種 分類	調		製	焼成	色	調	胎土	備考	様式
		外	内							
Fig. 125 1 (R-2)	甕	F-II	横ナデ	横ナデナ。胴部ナデが著しく仔細不明。	口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	黄灰色	微細・細砂粒多し。		Ⅱ
2 (R-1)	甕	F-II	横ナデ		口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	黄灰色	細砂粒多し。	1/3ほどの破片。	Ⅱ

Tab. 52 西新町遺跡E地区第1号竪穴式住居跡出土土器観察表

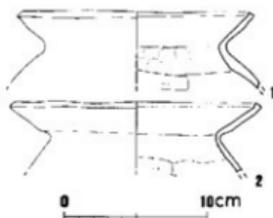


Fig. 125 西新町遺跡E地区第1号竪穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

発掘番号 (整理番号)	器種 分類	調		製	焼成	色	調	胎土	備考	様式
		外	内							
Fig. 126 1 (R-4)	甕	F-II	横ナデ	横ナデ	良好	暗赤白色 いし黄灰色		微細・細砂粒多し。		Ⅱ
2 (R-4)	甕	F-II	横ナデ	横ナデナ。胴部に1全、肩部に3本の浅溝がある。	口縁部横ナデ。胴部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	暗黄灰色	砂粒多し。		Ⅱ
3	甕	F-II	横ナデ	横ナデナ。	口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。胴部上半に微細線を残す。	良好	黄灰色	粗・細砂粒多し。		Ⅱ
4	鉢	G-II	ハケメ	ハケメ後横方向のケンマ。	口縁部横ナデ。胴部横ナデ。胴部横ナデ。胴部横ナデ。	良好	暗赤灰色 暗赤褐色 暗赤褐色	赤粒をほとんど含まない。	丁窯なつくり。	Ⅱ
5	鉢	G-II	ハケメ	あれが著しく仔細不明。	横ナデ	良好	暗赤褐色	赤粒をほとんど含まない。	丁窯なつくり。	Ⅱ
6	鉢	H-II	ハケメ	ハケメ(10cm以上/1cm)後横方向のケンマ。	口縁部、ハケメ後横ナデ。胴部丁窯ナデ。	良好	暗褐色	暗赤褐色。砂粒を少量含むのみ。	丁窯なつくり。	Ⅱ
7 (R-12)	甕			胴部上半、ハケメ後横方向のケンマ。胴部下半・基部横方向のケンマ。	ナデ。胴部上半に接合線。基部付込にへう括了其痕を残す。	良好	赤褐色	砂粒を少量含むのみ。		Ⅱ
8	甕?			タタキ(2-3cm/1cm)。	指ナデナ後ナデ。	良好	暗赤褐色	粗・細砂粒を少量含む。		Ⅱ
9	甕	H-II	横ナデ	横ナデ	横ナデ	良好	黄灰色	微細砂粒多し。	外面にうすく灰分着。	Ⅱ
10	甕	I-II	肩部、横ナデ。胴部、ハケメ(7-8cm/1cm)。	胴部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	暗赤灰色 暗赤褐色	粗・細砂粒多し。	外面肩部以下に灰分着。		Ⅱ
11 (R-3)	高坏	B-II	環部上半、横ナデ。胴部下半が著しく仔細不明。	丁窯ナデ。	不良	暗褐色	砂粒少なし。			Ⅱ
12	高坏	B-II	ハケメ後ケンマ	ハケメ後ケンマ破文。	良好	黄褐色	粗砂粒を含む。	胴との接合部でわれている。		Ⅱ
13 (R-1)	高次	C-V	環部、横方向のケンマ。胴部、ハラで陶氣に染取りした後、ケンマ。環部付近にハケメを残す。	環部、あれが著しく仔細不明。部分的に緑変を残す。環部、横ナデ。	良好	赤褐色	精製粘土を焼いた。	胴部に焼成痕の穿入。		Ⅱ
14 (R-5)	高坏	C-V	ハケメ(10cm/1cm)後ケンマ。	口縁、1箇所ナデ(?)。胴部、横ナデ。環部ハケメ。	良好	暗褐色	功高粘土を焼いた。			Ⅱ

Tab. 53 西新町遺跡E地区第2号竪穴式住居跡出土土器観察表1

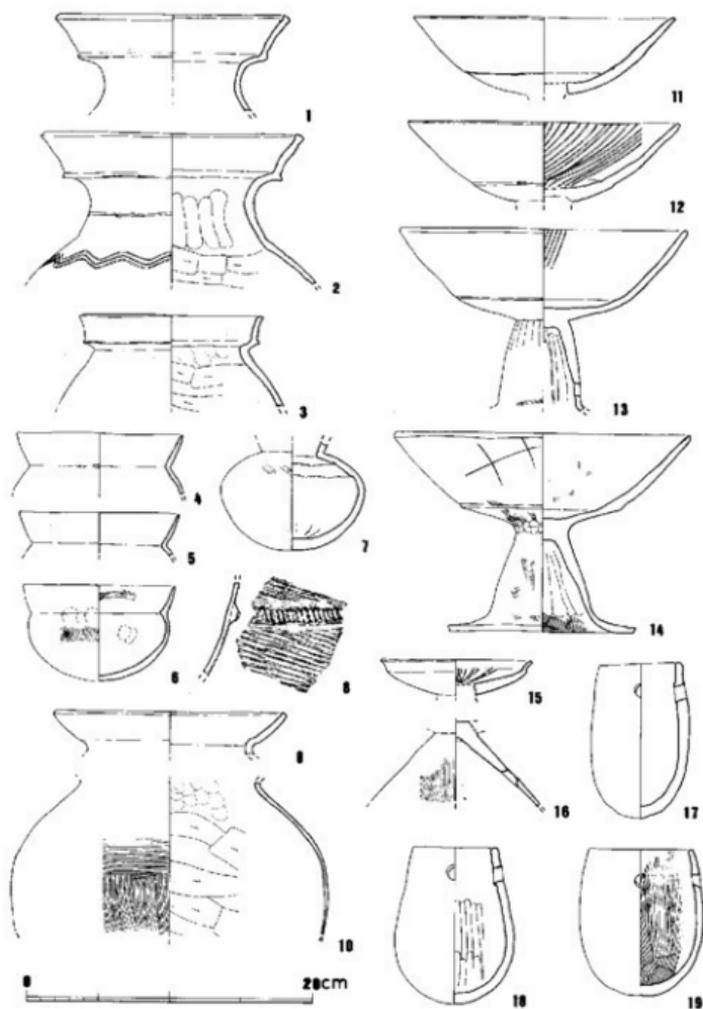


Fig. 126 西新町遺跡E地区第2号竪穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

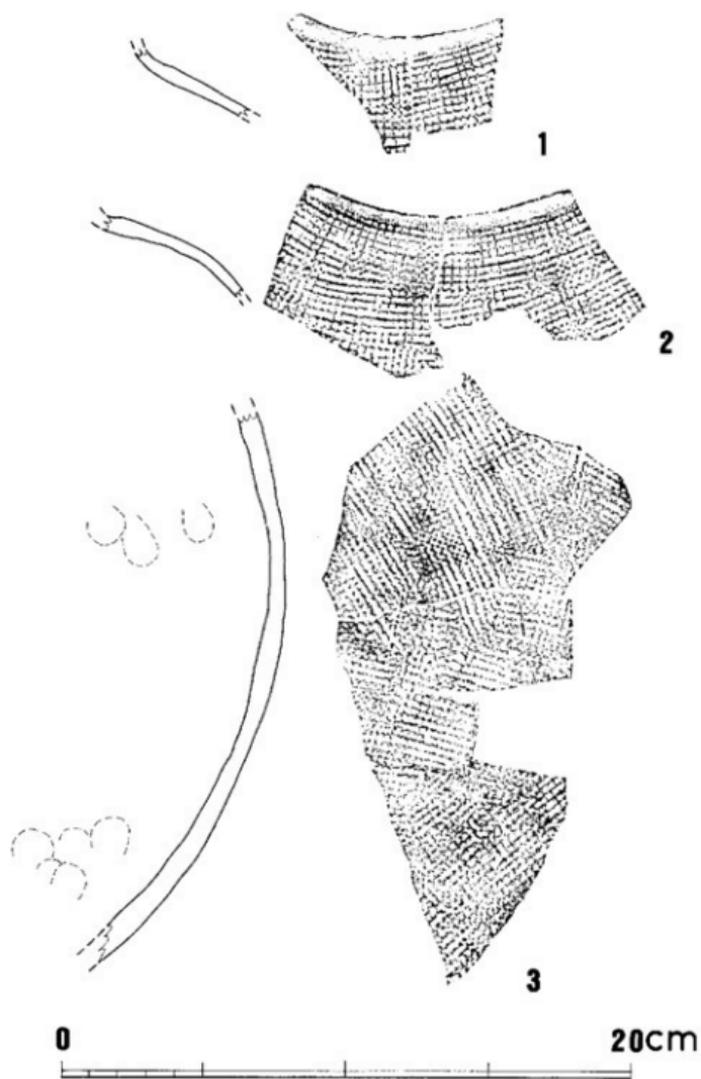


Fig. 127 西新町遺跡E地区第2号堅穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/2)

検出番号 (整理番号)	器種 分類	胴		焼成	色調	胎土	備考	様式	
		外 面	内 面						
Fig. 126 15	器台 B-V	横方向のケンマ。	横方向のケンマ、暗文。	良好	淡茶褐色	砂粒をほとんど含まない。	図5の同一個体の。	IV	
	器台 B-V	横方向のケンマ。	あれが詳しく仔細不明(ナダマ)。	良好	淡茶褐色	砂粒をほとんど含まない。			
17	ツコ壺	ナ	ナ	ナ	ナ	良好	茶褐色	砂粒多し。	
18	ツコ壺	口縁部、横ナダ、胴部、ヘラナダ。	ナ	ナ	ナ	良好	黄灰色	細砂粒を含む。	
19	ツコ壺	ハクメ(8-7cm)横ナダ。	ナ	ナ	ナ	良好	黄灰色	砂粒を含む。	
Fig. 127 1	壺	タタキ、一部横ナダ。	ナ	ナ	ナ	軟質	灰黄色	砂粒をほとんど含まない。	陶質土器
	壺	タタキ、一部横ナダ。	ナ	ナ	ナ	軟質	灰黄色	砂粒をほとんど含まない。	陶質土器
3	壺	ナ	ナ	ナ	ナ	軟質	灰黄色	素焼砂粒を少量含むのみ。	陶質土器 図1あるいは2の同一個体か?

Tab. 54. 西新町遺跡E地区第2号竪穴式住居跡出土土器観察表2

検出番号 (整理番号)	器種 分類	胴		焼成	色調	胎土	備考	様式	
		外 面	内 面						
Fig. 128 1	手揉み 砂土器	ナ	ナ	ナ	ナ	やや軟質	淡黄褐色	砂粒を多く含む。	III?

Tab. 55 西新町遺跡E地区第3号竪穴式住居跡出土土器観察表

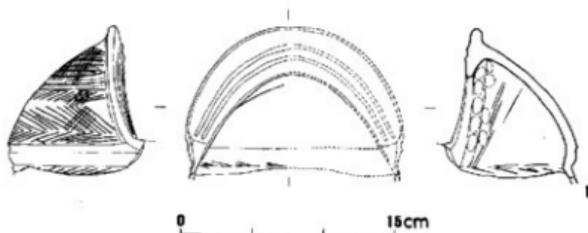


Fig. 128 西新町遺跡E地区第3号竪穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種 分類	胴		焼成	色調	胎土	備考	様式
		外 面	内 面					
Fig. 129 1	壺 E-V	口縁部、横ナダ、胴部、ハクメ(8cm)横ナダ。	口縁部、横ナダ、胴部ハクメ横ナダ。	良好	黄灰色ないし黄褐色	粗・細砂粒を少量含む。	IV	
2	壺	横 ナ ダ	ナ	ナ	良好	淡茶褐色		
3	壺	口縁部-胴部上半、ハクメ(8cm)横ナダ、横方向のケンマ、胴部下、横方向のケンマ後ケンマ。	口縁部、横方向のケンマ、胴部指サエ後横方向のケンマ。	良好	暗赤褐色	粗細され、砂粒をほとんど含まない。	I? 事欠つくり。	
4	壺	胴部-胴部上半、横方向のケンマ、胴部下、ハクメ。	胴部、丁寧なナダ、胴部、あれが詳しく仔細不明。	良好	淡黄褐色	内面・細砂粒を多く含む。		
5	鉢 H-II	横方向のケンマ	丁寧なナダあるいはケンマ。	良好	淡黄褐色 淡茶褐色	砂粒を含まない。	IV	小片。

Tab. 56 西新町遺跡E地区第4号竪穴式住居跡出土土器観察表1

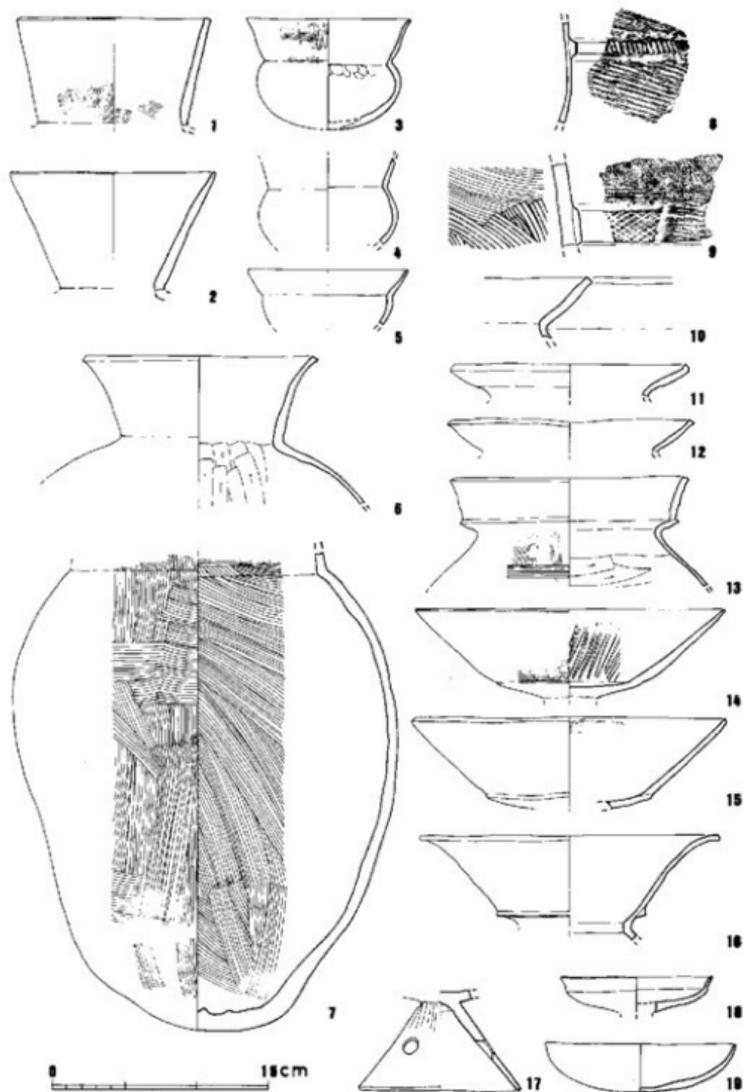


Fig. 129 西新町遺跡E地区第4号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

図号番号 (整理番号)	器種 分類	調 整		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
		外 面	内 面					
Fig.129 6 (B-5)	壺	口頸部、横ナデ。胴部ハケメ後ナデ。	口頸部、横ナデ。胴部ヘラケズリ。	良好	黄褐色	砂粒を含む。		Ⅱ
7 (B-8)	壺	胴部ハケメ(4~5本/1cm)。底部、あしが堅く仔細不明。	胴部ハケメ。底部傾キサエ。	良好	赤褐色	砂粒を含む。		
8	罎?	ナ デ ナ	ハ ケ メ	良好	緑褐色	砂粒多し。		
9	罎?	ハケメ。調整付底は横ナデ。	ハケメ(3~4本/1cm)	良好	黄褐色	骨・細砂粒多し。	調整を施す前に、塗灰状の調整を施す。	
10	罎 H-II	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	黄褐色	微塵・細砂粒多し。		Ⅱ
11	罎 H-II	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	黄褐色	微塵・細砂粒多し。		Ⅱ
12	罎 H-II	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	黄褐色	微塵・細砂粒多し。	外面に厚付層。	Ⅱ
13	罎 F-II	口頸部、横ナデ。胴部、ハケメ後ナデ。	口頸部、横ナデ。胴部、ヘラケズリ。	良好	黄褐色	微塵・細砂粒多し。	外面にうすく厚付層。	Ⅲ
14 (B-2)	高杯 B-II	ハケメ後ナデ。	ケンマ。増文。	良好	淡褐色	塊状粘土を用いる。		Ⅳ
15 (B-3)	高杯 C-IV	ケ シ ャ	ハケメ(5~10本/1cm)後ケンマ。	良好	淡褐色	塊状粘土を用いる。		Ⅳ
16 (B-7)	器台 A-II	横 ナ デ	丁家急ナデ。くびれ部以下はヘラケズリ。	良好	淡褐色	塊状粘土を用いる。		Ⅲ
17 (B-17)	器台 B	ナデ。胴部のつけ根付近はへらで高取りする。	横 ナ デ	良好	暗黄褐色	塊状粘土を用いる。	胴部に、焼成前穿孔し土層。	
18	器台 B-II	横方向のケンマ	横方向のケンマ。	良好	淡茶赤色	砂粒をほとんど含まず。		Ⅳ
19	鉢 F-II	ケ シ ャ	丁家急ナデ。	良好	赤褐色	細砂粒を少量含む。	1/2を欠失。	Ⅲ

Tab. 57 西新町遺跡E地区第4号壺六式住居跡出土土器観察表2

図号番号 (整理番号)	器種 分類	調 整		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
		外 面	内 面					
Fig.130 1	壺	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	淡褐色	砂粒をほとんど含まず。	小 片	
2	壺 F-II	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	黄褐色	微砂粒を含む。	2/3欠失。外面に厚付層。	Ⅱ
3 (B-3)	壺 G-II	口頸部、横ナデ。胴部上ホケメ。胴部下部、ハケメ	口頸部、横ナデ。胴部一底ホケメ、ケズリ。	良好	暗黄褐色	砂粒多し。	外面に厚付層。	Ⅱ'
4	壺 H-II	横 ナ デ	口頸部、横ナデ。胴部、ケズリ。	良好	淡黄褐色	微細砂粒を少量含むのみ。	外面にあつく厚付層。	Ⅲ
5	壺 H-II	横 ナ デ	口頸部、横ナデ。胴部、ケズリ。	良好	淡黄褐色	微細・細砂粒多し。	小 片	Ⅲ
6	壺 H-II	横 ナ デ	口頸部、横ナデ。胴部、ケズリ。	良好	暗褐色をいし、暗黄褐色	微細・細砂粒多し。	1/3ほどの破片	Ⅲ
7	壺 H-II	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	淡黄褐色	微細砂粒を少量含むのみ。	1/6ほどの破片外面に厚付層。	Ⅲ
8	壺	丁家急ナデ。	丁家急ナデ。	良好	暗褐色	塊状粘土を用いる。		
9	壺 H-II	ハケメ(5~10本/1cm)後ナデ。	ハケメ後ナデ。ヘラによる増文。	良好	暗黄褐色(内法黄褐色)	砂粒をほとんど含まず。		Ⅲ
10	壺	ナデ後脚文風のケンマ。	壺 ナ デ	良好	黄褐色	砂粒をほとんど含まず。		
11	壺?	胴部、ナデ。胴部、横ナデ。	ナ デ	良好	茶赤色	微細・細砂粒多し。	胴部に焼成前穿孔し土層。	
12	器台 B	ハケメ(5本/1cm)後ナデ。	壺 ナ デ	良好	淡茶赤色	微細砂粒を少量含む。	穿孔数不明。	

Tab. 58 西新町遺跡F地区第1号壺六式住居跡出土土器観察表

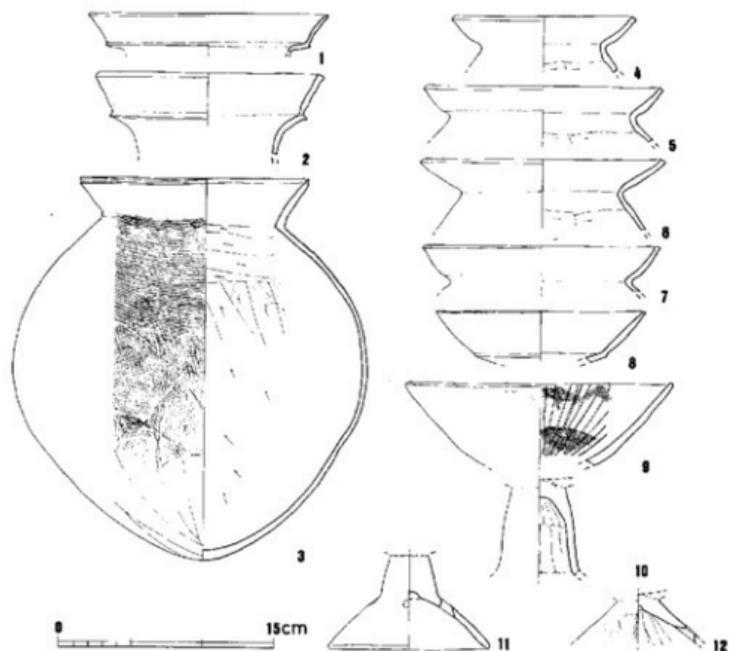


Fig. 130 西新町遺跡F地区第1号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

調査番号 (整理番号)	器種	調		構成	色	土	備考	様式
		外	内					
Fig. 131 1 (R-1)	甕	E-II	口縁部一貫部、横ナデ。胴部、ハケメ(8本/1cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、ケズリ。	良好	淡黄灰色	横糸粘土を用いる。	Ⅲ
2 (R-2)	コシヤ		口縁部、横ナデ。胴部上半、ハケメ(4本/1cm)、胴部下半、ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ケズリ。底部、ナデ。	良好	淡黄灰色	横糸粘土を用いる。	厚みの数は不明。
3	鉢	H-II	横方向のケンマ。	丁寧な横ナデ。	良好	淡茶褐色	横糸粘土を用いる。	1/6ほどの破片
4	白台	F	横ナデ	横ナデ	良好	淡黄灰色	砂粒をほとんど含まず。	胴内付録
5	甕?		胴部付近、指イサエ後横ナデ。胴部全周ハケメ。	指イサエ後ハケメ(4~5本/1cm)。	良好	淡黄灰色	炭粒・細砂多し。	小片のため編みは不明。
6	甕	H-II	横ナデ	横ナデ	良好	淡黄褐色	炭粒・細砂多し。	小片のため口縁は不明。
7	甕	H-II	胴部、横ナデ。胴部、ハケメ(8~9本/1cm)。	口縁部周、指イサエ後ケズリ。	良好	淡黄白色	炭粒・細砂多し。	胴部に沈殿土をめぐらす。
8	甕台	A-II	横ナデ	底部、ケズリ。胴部、横ナデ。	良好	暗褐色	炭・細砂多し。	
9 (R-3)	テコ	甕	形ナデ	ヘラナデ。	良好	淡茶褐色	細砂粒を含む。	

Tab. 59 西新町遺跡F地区第2号竪穴式住居跡出土土器観察表

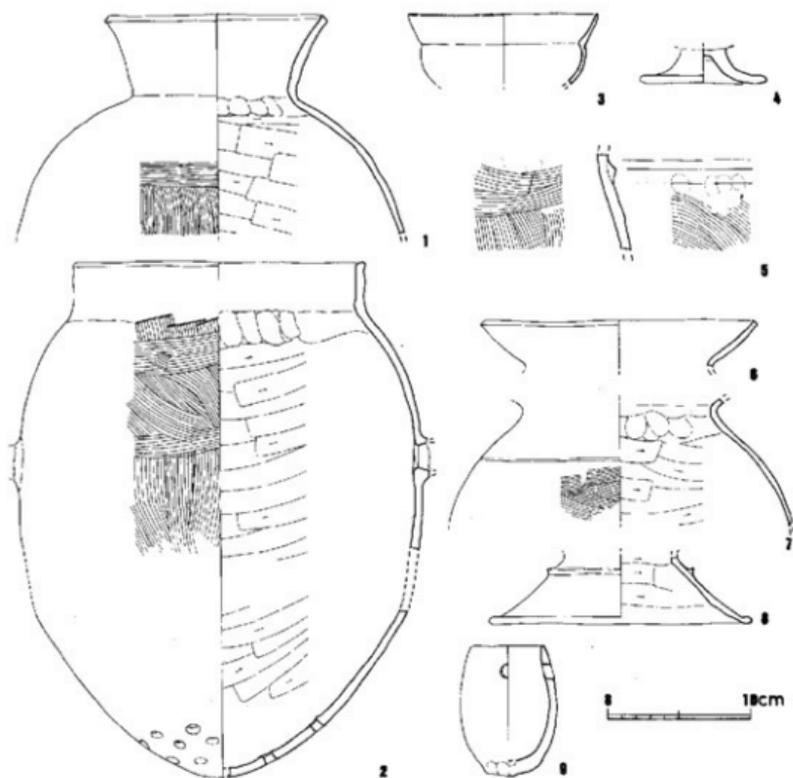


Fig. 131 西新町遺跡F地区第2号竪穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

標記番号 (製作番号)	器種	型式 分類	装		構成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外	内					
Fig. 132 1	鉢	G-II	ハケメ(10cm以上/1cm)横、 縦方向のケンマ。	横 ナ デ	良好	褐色色	砂粒をほとんど含まず。	丁寧なつくり。	目
2	赤	A-II	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	淡黄褐色	炭粒・細砂粒多し。		目
3	高杯	Ⅱ	ハケメ(7cm/1cm)縦横方 向のケンマ。	ハケメ横ナデ	良好	淡黄褐色	精選されている。	割合付録	
4	壺	I	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	淡黄褐色	微細砂粒多し。	小片のため口縁は 脆断	
5	壺	I	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	暗褐色	炭粒・細砂粒多し。	1/4ほどの破片。 惣付録。	
6	壺	I	横 ナ デ	横 ナ デ	良好	淡黄褐色	炭粒・細砂粒多し。	口縁部下面、偏変。	
7	壺	II-III	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメ(7cm/1cm)。	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメ(7cm/1cm)。	良好	灰褐色	砂粒多し。	胴部に6本の筋を 浅彫。	目
8	壺	II-III	口縁部、横ナデ。胴部ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハ ケメ(7cm/1cm)。	やや 不良	淡黄褐色	砂粒多し。		目

Tab. 60 西新町遺跡F地区第3号竪穴式住居跡出土土器観察表

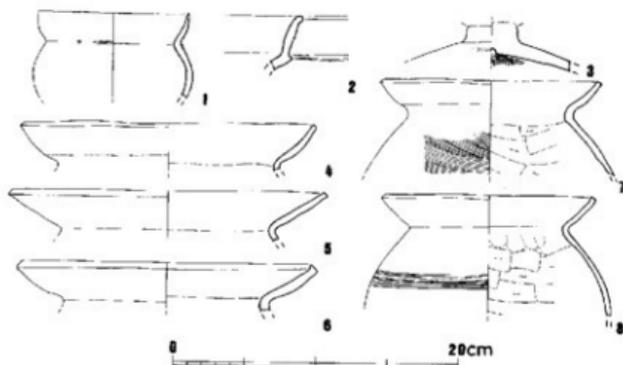


Fig. 132 西新町遺跡F地区第3号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種 分類	型式	製		地味	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 133 1	碗	B	口縁部、横ナデ。胴部一帯部ハケメ(6-7本/1cm)横ナデ。	口縁部、ハケメ横ナデ。胴部、ナデ。	良好	黄灰色	砂粒多量。	あれが著しい。	
2 (R-3)	盆	C ₂ B	口縁部、縦方向のケシマ。胴部、ハケメ縦方向のケシマ。	口縁部、横ナデ。胴部上半、ハケメ(5-6本/1cm)。胴部下半、ナデ。	良好	黄褐色	細砂粒多し。		II
3	鉢?		突唇付。横ナデ。他はハケメ。	横 ナ デ	良好	淡褐色	砂粒多し。		
4	鉢	A ₂ II	口縁部、ナデ。胴部ナデハケメ。	ハケメ横ナデ。	良好	黄褐色	砂粒多量。	外面全面に煤付着。	II
5 (R-5)	鉢	A ₂ III	口縁部、横ナデ。胴部下半ハケメ(5本/1cm)。胴部上半、全ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部上半ハケメ横ナデ。胴部下半、ナデ。	良好	淡黄褐色	砂粒多し。	外面全面に煤付着。	II
6 (R-4)	鉢	A-II	口縁部一帯部上半、ハケメ(6本/1cm)。胴部下半、縦横ハケメ(ケズリ)にケシマ。	口縁部一帯部上半、ハケメ。胴部下半、ハケメ横ナデ。	良好	黄褐色	砂粒多し。	外面全面に煤付着。	II
7 (R-1)	鉢	E-II	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(5本/1cm)。胴内部、ナデ。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ横ナデ。胴内部、ナデ。	良好	暗褐色	粗・細砂粒多し。	胴部に黒変。	II
8 (R-2)	鉢	E-II	口縁部、横ナデ。胴部一帯部、ハケメ(10本/1cm)。	口縁部一帯部上半、横ナデケメ。底部、ナデ。胴部ハケメ横ナデ。	良好	明黄褐色	粗・細砂粒多し。	外面に煤付着。	II
Fig. 134 9	鉢	F	横ナデ。	横ナデ。	良好	灰黄褐色	砂粒多し。		
10	鉢	F-II	口縁部一帯部上半、横ナデ。胴部下半、ハケメ。	ハケメ(5-6本/1cm)。	良好	淡黄褐色	砂粒多し。		II
11 (R-7)	鉢		ナ	デ	良好	淡黄褐色	砂粒多し。	発生中期の上段。	

Tab. 61 西新町遺跡G地区第1号竪穴式住居跡出土土器観察表

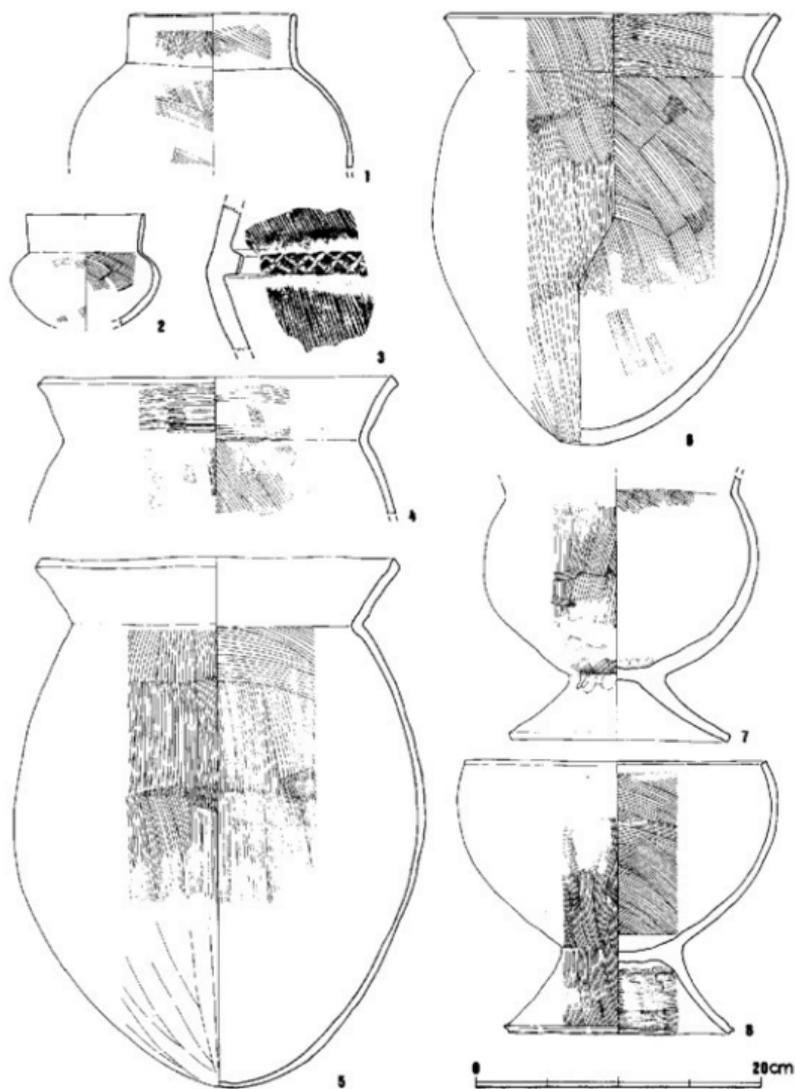


Fig. 133 西新町遺跡G地区第1号堅穴式住居跡出土土器1 (縮尺1/4)

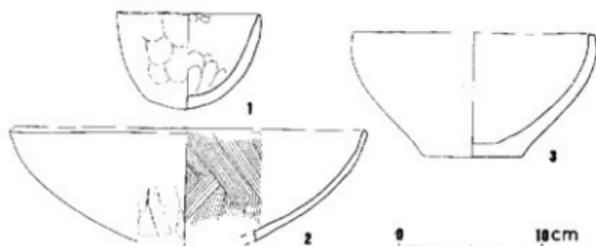


Fig. 134 西新町遺跡G地区第1号竪穴式住居跡出土土器2 (縮尺1/4)

調査番号 (整理番号)	器種 分類	器 形		構成	色 調	粘 土	備 考	様 式	
		外 面	内 面						
Fig. 134 1 (B-2)	碗	Gr D	横方向のツツム。	1: 緑部、用ナナエ後様ナナエ 地は、ハクメ(5本/1cm)	良好	黄褐色	磁粒多し。	1/2と欠失。	II
2 (B-1)	碗	A	1: 緑部、ハクメ(4-5本/ 1cm)後様ナナエ、ツツム。	ハクメ(6本/1cm)	良好	暗黄褐色	磁粒多し。		

Tab. 62 西新町遺跡G地区第3号竪穴式住居跡出土土器観察表

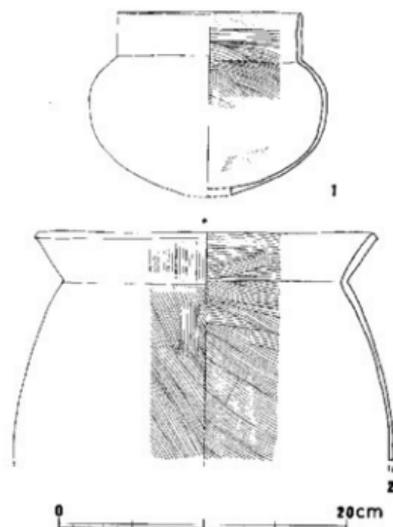


Fig. 135

西新町遺跡G地区第3号竪穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種 分類	調 整		産地	色 調	胎 土	備 考	様 式
		外 面	内 面					
Fig.136 1 (R-1)	甕 E-I	口縁部、横ナデ。胴部、横 方向のケンソ。	口縁部、横方向のケンソ。 胴部、横ナデ。胴部、横ナ デと縦ハケナデ。	良好	赤褐色 ◎赤褐色	微細・粗粒多し。		I
2 (R-5)	甕 C-II	口縁部、ハケメ(5本/1cm) 横ナデ。胴部上段ハケメ。 胴部下半部ハケメナデ。	口縁部、ハケメ横ナデ。 胴部ハケメ横ナデ。胴部、 横ナデ。	良好	淡褐色	微・粗粒多し。	胴部下半部は白陶。	II
3 (R-3)	甕	口縁部、横ナデ。口縁部 一部ハケメ(5本/1cm)。 口縁部、横ナデ。胴部下半 部ハケメ(6本/1cm)。	口縁部～胴部、ハケメ。胴 部、ナデ。	良好	淡褐色	微細・粗粒多し。	胴部下半部は白陶。	
4 (R-4)	甕 A-I	口縁部、ハケメ。胴部、ハ ケメ横ナデ。底部、横ナデ。	口縁部、ハケメ。胴部、ハ ケメ横ナデ。底部、横ナデ。	良好	淡褐色	微細・粗粒多し。	胴部と胴部中央の 対称的な位置に胎 土。	I
5	甕?	タタキ(4～5本/1cm)	ハケメ横ナデ	良好	暗褐色	粗・粗粒多し。		

Tab. 63 西新町遺跡II地区第2号竈穴式住居跡出土土器観察表

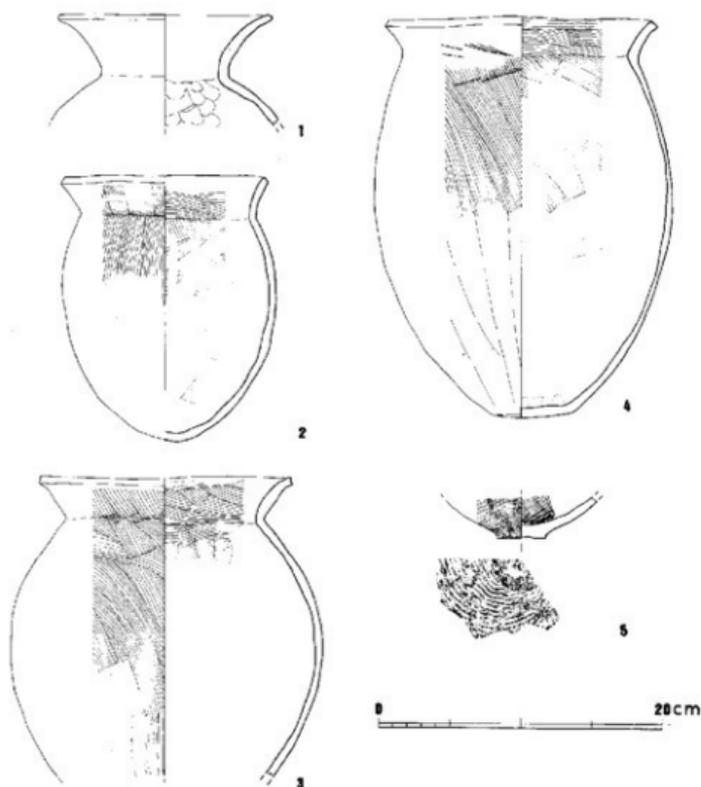


Fig. 136 西新町遺跡II地区第2号竈穴式住居跡出土土器(縮尺1/4)

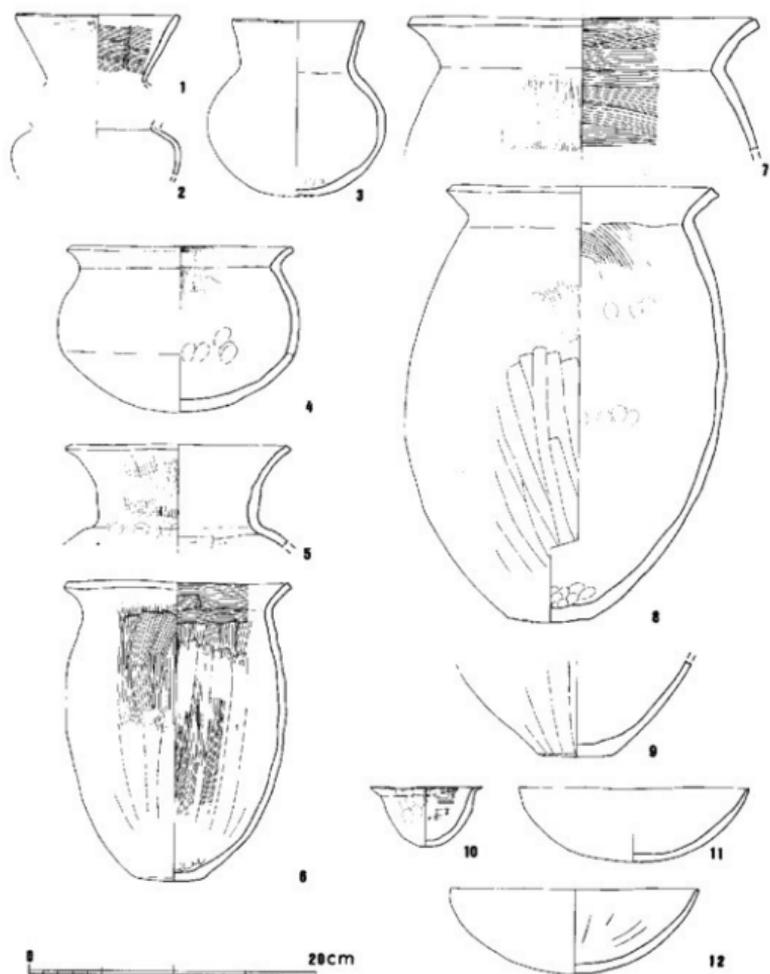


Fig. 137 西新町遺跡H地区第3号竪穴式住居跡出土土器 (縮尺1/4)

発掘番号 (整理番号)	器種 分類	調 査 部			焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
		外 部	内 部	内 面					
1 (R-10)	蓋	口縁部、横ナデ、胴部、ハケメ(10本/1cm)横ケシマ。	ハケメ(8~9本/1cm)。	良好	赤褐色	砂粒を含まず。			
2	蓋	縁方向のケシマ。	指ナデあるいばナデ。	良好	茶褐色	砂粒をほとんど含まず。			
3 (R-11)	蓋	C ₁ 口縁部、横ナデ、胴部、ナデ。	口縁部、横ナデ、胴部、指ナデ、ハケメ。	良好	黄褐色	砂粒多し。			
4 (R-4)	蓋	ナ	口縁部周辺、ハケメ横ナデ、胴部、指ナデ。	良好	黄褐色	砂粒多し。	胴部下半に黒炭部。		
5 (R-8)	蓋	E ハケメ(6本/1cm)横ナデ。	口縁部、横ナデ、胴部、ハケメナリ。	良好	淡黄褐色	砂粒多し。			
6 (R-5)	蓋	C-1 口縁部、横ナデ、胴部上半、ハケメ(4本/1cm)、胴部下半、ケズリ。	口縁部周辺、ハケメ、胴部、黒いハケメ(ケズリに近い)、横部、指ナデ。	良好	赤褐色	粗・砂粒多し。	底部を中心として二次的な大をうけている。変形。	I	
7 (R-9)	蓋	A 口縁部、横ナデ、胴部ハケメ横ナデ。	ハケメ(4~5本/1cm)	良好	灰黑色	粗・砂粒多し。			
8 (R-6)	蓋	A 1 口縁部、横ナデ、胴部上半、ハケメ(5本/1cm)横ナデ、胴部下半、ケズリ。全体的に二次的な大をうけている。	口縁部、横ナデ、胴部上半、ハケメ横ナデ、胴部、指ナデ。	良好	赤褐色	粗・砂粒多し。	全面に黒炭部。変形。	I	
9 (R-2)	蓋	A-1 口縁部ハケメ(ケズリに近い)横ナデ。	ナ	良好	灰黄色	砂粒多し。		I	
10 (R-3)	鉢	F-1 口縁部、横ナデ、胴部ケズリ。	口縁部、ハケメ(5~9本/1cm)、胴部、ナデ。	良好	灰白色	粗・砂粒多し。	残欠つくりである。	I	
11 (R-1)	鉢	F ₁ ケズリ	ナ	良好	灰黄褐色	粗・砂粒多し。		I	
12 (R-7)	鉢	E ₁ 口縁部、ナデ、胴部、ケズリ。	ナデ、部分的にハケメ横ナデを施す。	良好	黄褐色	粗・砂粒多し。		I	

Tab. 64 西新町遺跡H地区第3号竪穴式住居跡出土土器観察表

5. 土 壤

A~H地区の各調査区で、多くの性格不明の土壌が検出された。弥生時代中期後葉の甕棺墓にともなう祭祀と考えられるもの、弥生時代終末~古墳時代初頭の竪穴住居跡群にともなうと考えられるもの、近世の井戸跡などが含まれる。遺構の残存状態は、竪穴住居跡と同様に悪く、出土遺物もきわめて少ない。

地区	遺跡番号	周辺地形 採取番号	遺構状態	平面プラン	規模 m		遺物出土状況、その他	編年
					長	幅		
A	D-1	—	完 成	不整形円形	2.42	2.0	1は層中、2は土層の両面から 土器・灰土層の残骸で出土。	—
	D-2	—	完 成	円 形	1.25	0.5	ナシ	—
	D-3	Fig.129 P.119	完 成	不整形多角形	2.28	1.92	層中からやや深い土層まで一括 して出土。	II
	D-4	—	完 成	不整形円形	1.32	0.68	ナシ	—
	D-5	—	完 成	不 整 形	—	1.9	ナシ	—
	D-6	—	完 成	円 形	1.1	0.62	ナシ	—
	D-7	—	完 成	円 形	0.7	0.55	ナシ	—
	D-8	—	完 成	円 形	0.95	0.95	ナシ	—
	D-9	—	完 成	円 形	0.7	0.6	ナシ	—
	D-10	—	完 成	長 方 形	0.95	0.7	ナシ	—
	D-11	—	完 成	不整形円形	1.0	0.65	ナシ	—
	D-12	—	D-7に切られる。	不整形円形	—	1.85	ナシ	—
	D-13	—	D-14に切られる	不 整 形	—	0.7	ナシ	—
D-14	—	D-15を切る	不整形円形	2.65	1.95	ナシ	—	
D-15	—	完 成	長 方 形	1.8	0.75	ナシ	—	
D-16	—	北側は調査区域のため未調査。	方 形 ?	—	1.35	ナシ	—	
B	D-1	—	完 成	楕 圓 形	0.7	0.55	ナシ	—
	D-2	—	D-1を切る、完 成	楕 圓 形	1.25	0.9	ナシ	—
	D-3	—	完 成	不 整 方 形	3.2	1.0	ナシ	—
	D-4	—	完 成	不 整 方 形	1.68	0.95	ナシ	—
	D-5	—	D-6に切られる。北側の一部は 調査区域外の未調査。	隅 方 形	2.35	2.35	ナシ	—
	D-6	—	D-5, 7を切る、完 成	隅 方 形	3.6	2.6	ナシ	—
	D-7	—	D-6, 8に切られる。完 成	隅 方 形	—	—	ナシ	—
	D-8	—	D-7を切る。完 成	隅 方 形	—	1.15	ナシ	—
	D-9	—	完 成	不整形円形	1.54	1.05	ナシ	—
	D-10	欠 乏						
	D-11	—	完 成	不 整 円 形	1.55	1.8	ナシ	—
	D-12	—	完 成	不 整 方 形	1.2	0.95	ナシ	—
	D-13	—	完 成	不 整 円 形	1.25	1.1	ナシ	—
	D-14	—	完 成	不 整 円 形	0.85	0.8	ナシ	—
	D-15	—	完 成	不 整 円 形	1.6	1.6	ナシ	—
	D-16	—	完 成	不 整 円 形	1.15	0.7	ナシ	—

Tab. 65 西新町遺跡上へ観察表 1

地区	遺構番号	隣接基台 区画番号	遺構状態	平面プラン	規模 m		遺構出土状況、その他	通年	
					長	短			
C	D-1	—	完壁	不整形方形	3.03	2.66	覆土中から出土。	—	
	D-2	—	D-4を切る	隅丸方形	2.83	2.0	覆土中から出土。	—	
	D-3	—	J-1を切り、 J-1から切り取れる。	楕円形	—	0.92	覆土中から出土	—	
	D-4	—	D-2から切り取れる。	不整形円形	2.37	1.7	ナシ	—	
	D-5	—	J-1, D-3を切る。	不整形形	3.0	—	ナシ	—	
	D-6	図様	完壁	不整形円形	1.45	1.05	ナシ	—	
	D-7	—	完壁	不整形形	1.1	0.85	ナシ	—	
	D-8	図様	完壁	不整形円形	0.85	0.8	ナシ	—	
	D-9	図様	完壁	不整形円形	2.4	2.0	ナシ	—	
	D-10	欠番							
	D-11	図様	完壁	円形	1.6	1.6	ナシ	—	
	D-12	図様	完壁	不整形形	1.9	1.5	ナシ	—	
	D-13	—	完壁	隅丸方形	0.9	0.65	ナシ	—	
	D-14	—	完壁	隅丸長方形	1.95	1.0	ナシ	—	
	D-15	—	完壁	方形	1.05	0.95	ナシ	—	
	D-16	欠番							
	D-17	—	完壁	楕円形	0.9	0.65	ナシ	—	
	D-18	—	完壁	不整形円形	0.9	0.7	ナシ	—	
	D-19	—	完壁	不整形方形	1.7	1.3	ナシ	—	
	D-20	—	K-17に定まれる。	—	—	—	ナシ	—	
	D-21	—	K-18, D-22と切り合う。	—	—	1.4	ナシ	—	
	D-22	—	D-21を切る	—	2.1	1.65	ナシ	—	
	D-23	—	K-19と切り合う。	不整形形	3.0	1.25	ナシ	—	
	D-24	—	完壁	不整形円形	1.45	0.85	ナシ	—	
	D-25	—	完壁	不整形方形	1.1	0.9	ナシ	—	
D-1	—	完壁	不整形円形	1.9	1.05	ナシ	—		
D-2	—	完壁	不整形円形	0.95	0.85	ナシ	—		
D-3	欠番								
D-4	—	J-3を切る。	楕円形	1.16	0.9	ナシ	—		
D-5	欠番								
D	D-6	—	完壁	不整形円形	0.5	0.6	ナシ	—	
	D-7	—	完壁	不整形円形	1.27	0.8	ナシ	—	
	D-8	—	完壁	不整形形	1.1	0.7	ナシ	—	
	D-9	—	完壁	不整形円形	1.5	1.1	ナシ	—	
	D-10	—	完壁	隅丸方形	1.2	1.0	ナシ	—	
	D-11	—	完壁	不整形円形	0.7	0.5	ナシ	—	

Tab. 66 西新町遺跡土壁観察表 2

地区	遺構番号	図様番号	遺構状態	平面プラン	規模(m)		遺物出土状況、その他	様式
					長	幅		
D	D-12	-	完 全	不整四角形	0.6	0.45	ナシ	-
	D-13	-	完 全	楕 円 形	0.8	0.7	ナシ	-
	D-1	-	完 全	溝 状	4.15	0.35	ナシ	-
	D-2	-	完 全	溝 状	3.8	0.2	ナシ	-
	D-3	-	完 全	不整四角形	1.1	0.5	ナシ	-
	D-4	-	完 全	不整四角形	2.0	1.72	ナシ	-
	D-5	-	D-6を切る	不 整 形	1.5	1.3	ナシ	-
	D-6	-	D-5に切られる	不 整 形	-	1.0	ナシ	-
	D-7	-	完 全	不整四角形	0.55	0.4	遺土中から山土 層らにつき調査不可	-
	D-8	-	完 全	不整四角形	1.0	0.8	ナシ	-
	D-9	-	完 全	円 形	0.25	0.55	ナシ	-
	D-10	-	完 全	不整四角形	1.0	0.8	ナシ	-
	D-11	-	完 全	不整四角形	1.1	1.0	ナシ	-
	D-12	-	完 全	不整四角形	0.8	0.5	ナシ	-
	D-13	-	完 全	楕 円 形	1.1	0.71	ナシ	-
	D-14	-	完 全	楕 円 形	1.1	0.71	ナシ	-
	D-15	-	完 全	不 整 形	2.5	2.3	ナシ	-
	D-16	-	完 全	不 整 形	1.8	1.5	ナシ	-
D-17	-	北壁は調査区域外のための 調査。J-4を切る。	楕 円 形 ?	-	0.9	ナシ	-	
D-18	-	J-4を切る。	楕 円 形	5.6	3.55	ナシ	-	
D-1	欠 番							
D-2	欠 番							
D-3	欠 番							
G	D-4	-	東側の1部は調査区域外	西丸長3形	2.0	1.0	ナシ 層土中より出土。	II
	D-5	-	南側は調査区域外	不 整 四 角 形	-	1.5	ナシ	-
	D-6	-	完 全	不 整 四 角 形	1.1	1.0	ナシ	-
	D-7	-	完 全	隅 丸 方 形	1.05	1.55	ナシ	-
D-1	欠 番							
H	D-2	-	完 全	不 整 四 角 形	2.3	2.0	ナシ	-
	D-3	-	北西半分は調査区域外。	隅 丸 方 形	1.3	-	ナシ	-
	D-4	-	完 全	不 整 四 角 形	1.3	1.15	ナシ	-
	D-5	-	D-6、7と切り合う南側 は下水道のための調査	不 整 四 角 形	1.4	-	ナシ	-
	D-6	-	D-5、7と切り合う 完 全	隅 丸 方 形	1.0	-	ナシ	-

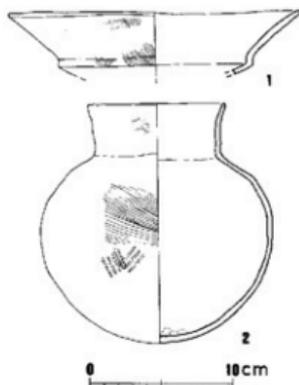
Tab. 67 西新町遺跡土壌観察表3

地区	遺構番号	図面番号	発掘状態	平面プラン	規模(m)		遺物出土状況, その他	様式
					長軸	短軸		
H	D-7	—	D-5, 6と切り合う西側はD-6のために削除。	長方形	1.0	0.9	ナシ	—
	D-8	—	海側は下水道のために未調査	長方形	—	0.7	ナシ	—
	D-9	—	北側は下水道のために未調査	不整形内郭	—	0.65	ナシ	—
	D-10	—	完壁	不整形	1.6	1.05	ナシ	—
	D-11	—	完壁	扇形	0.7	0.7	ナシ	—
	D-12	—	完壁	不整形内郭	1.5	1.3	ナシ	—
	D-13	—	完壁	不整形方型	2.8	1.2	ナシ	—

Tab. 68 西新町遺跡上墳観察表 4

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調		焼成	色	胎	土	備考	様式
			外	内						
Fig.136 1	壺		ハケメ(5本/1cm)横方向のケンマ	横方向のケンマ	良好	黄褐色		砂粒をほとんど含まない粘着粘土を用いる。		—
2	甕	C ₁	口縁部一帯は上中、ハケメ(6本/1cm)。腹部下中、タタキ横タテ。	ナシ。底部付近に粘着粘土を施す。	良好	淡褐色		砂粒多し。	調査中。	—

Tab. 69 西新町遺跡A地区第1号土壇出土土器観察表

Fig. 136 西新町遺跡A地区第1号
上墳出土土器(縮尺1/4)

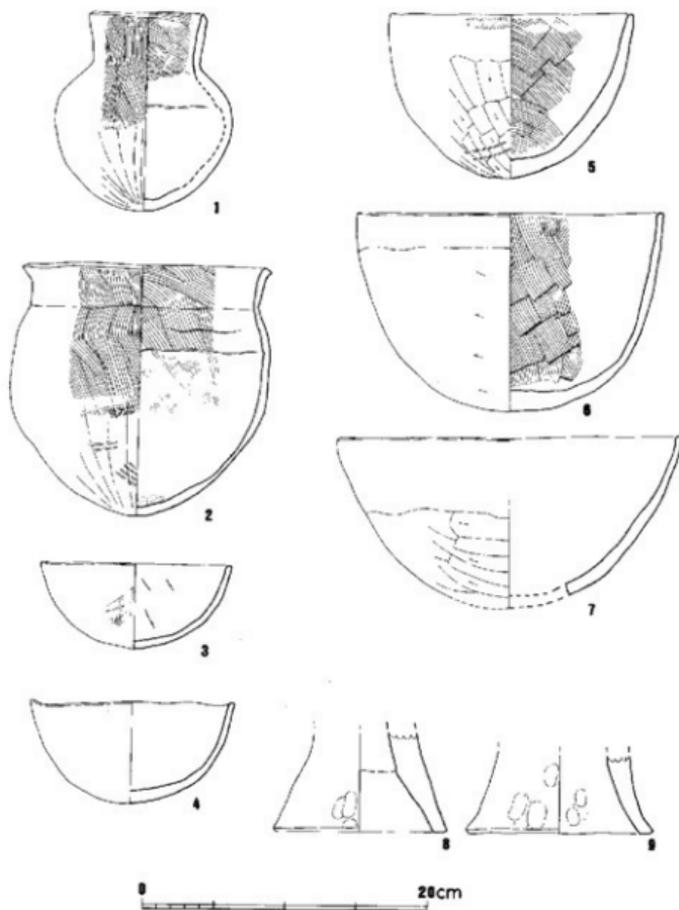


Fig. 139 西新町遺跡A地区第3号土塚出土土器 (縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調 査		構成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig.135 1	甕	C ₁	口縁部～胴部上下、ハケメ(5～6本/1cm)。胴部下半、ケズリ。	口縁部、ハケメ。口縁部～胴部下半。胴部上半に横合線を認める。	良好	暗褐色	砂粒多し。		ほぼ完成。
2	甕		口縁部～胴部上下、ハケメ(5～6本/1cm)。胴部下半ケズリ。	口縁部～胴部上下、ハケメ。胴部下半、ハケメ後ヘラによる丁寧なナデ。胴部上半に横合線を認める。	良好	暗褐色	細砂粒多し。		
3	鉢	D ₁ -I	ハケメ(7～8本/1cm)後ナデ。	ヘラ状下具によるナデ。	良好	淡褐色	砂粒を含む。		外面に横合線。
4	鉢	D ₁ -II	ナデ。	ナデ。	良好	淡褐色	砂粒を少量含む。		胴部下半に横合線。
5	鉢	C-II	口縁部ハケメ後ナデ。胴部～底部ケズリ後ナデ。	口縁部～胴部、ハケメ(6～7本/1cm)。底平ナデ。	良好	褐色	砂粒を含む。		
6	鉢	C-III	口縁部横ナデ。胴部～底部ケズリ。	ハケメ(5本/1cm)。	良好	暗褐色	砂粒多し。		横合線あり。
7	鉢	D-II	口縁部～胴部上半ナデ。胴部下半ケズリ。	丁寧なナデ。	良好	淡褐色	砂粒多し。		横合線あり。
8	甕台	C	指ナデ。	指ナデ。	良好	淡褐色	砂粒を含む。		
9	甕台	C	指ナデ。	指ナデ。	良好	淡褐色	砂粒を含む。		

Tab. 70 西新町遺跡A地区第3号土壇出土土器観察表

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調 査		構成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig.140 1	鉢	D	口縁部、横ナデ。胴部上半ハケメ。胴部下半、丸棒ハケメ(ケズリに近い)。	口縁部、横ナデ。胴部、ハケメ(3～6本/1cm)。	良好	淡褐色	砂粒を含む。		1/2ほど全欠片。

Tab. 71 西新町遺跡C地区第1号土壇出土土器観察表

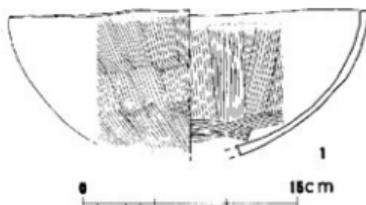


Fig. 140 西新町遺跡C地区第1号土壇出土土器(縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調 査		構成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig.141 1	甕		ケム。	指ナデ。	軟質	⑤丹塗り ⑥赤褐色	磨面粘土を用いる。		
2	鉢		胴部上半、ハケメ(6～7本/1cm)。胴部下半、ケズリ。	胴部上半、ハケメ(ケズリに近い)後ナデ。胴部下半ケズリ後ナデ。	良好	暗赤褐色	砂粒を含む。		発土中層の土器。
3	鉢		ハケメ(6～7本/1cm)後ナデ。胴部横ナデ、横ナデ。	ハケメ後ナデ。	やや良好	黄褐色	砂粒を含む。		

Tab. 72 西新町遺跡C地区第3号土壇出土土器観察表

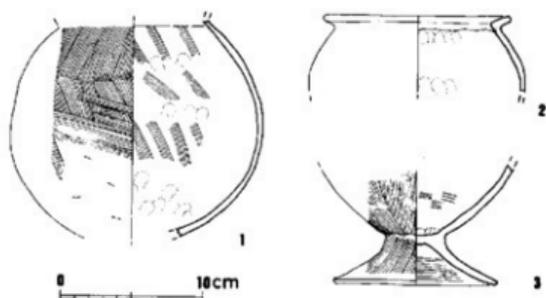


Fig. 141 西新町遺跡C地区第3号土壇出土土器(縮尺1/4)

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調 型		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 142 1	壺	B-目	ハケメ(10本/1cm) 後横ナデ。	①:顔面、横ナデ。胴部、ヘ ラケズリ。唇部に指痕線を 残す。	良好	灰黄褐色	砂粒多し。	唇部に4本のクシ 線が縦。	Ⅱ

Tab. 73 西新町遺跡E地区第7号土壇出土土器観察表

検出番号 (整理番号)	器種	型式 分類	調 型		焼成	色 調	胎 土	備 考	様 式
			外 面	内 面					
Fig. 143 1	鉢		①:顔面、横ナデ。胴部、ナ デ(ケズリが先行あり)胴部 下至、タタキ	①:顔面、横ナデ。胴部、ナ デ。唇部にハケメ小口調を 残す。	良好	灰黄褐色	砂粒多し	1/3を欠失。	Ⅱ?

Tab. 74 西新町遺跡H地区第2号土壇出土土器観察表

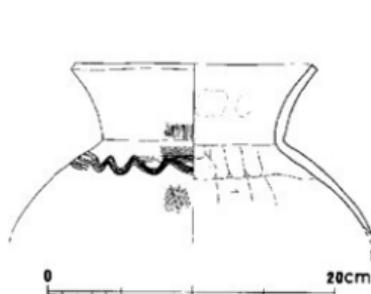


Fig. 142 西新町遺跡E地区第7号
土壇出土土器(縮尺1/4)

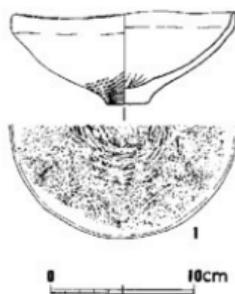


Fig. 143 西新町遺跡H地区第2号
土壇出土土器(縮尺1/4)

標本番号 (整理番号)	器種	型式 分類	製 型		完成 色 澤	土 質	備 考	様 式	
			外 面	内 面					
Fig. 144 1	壺	A・E II	口縁部、ハラム後縁ナデ、 胴部上半、ハケメ、胴部下 半、乱織文ハケメ(ケズリ に似い)。	口縁部、ハラム、胴部ハケ メ。	良好	黄土色	砂粒を少量含む。		B'
			口縁部、横ナデ、胴部、ハ ケメ。	口縁部、ハラム後縁ナデ、 胴部上半、ハケメ、胴部中 位、ハラム後ナデ。	やや 良好	淡褐色	砂粒を含む。		
3	壺	アンマ。		横ナデあるいはナデ。	良好	赤片盛り 肉赤褐色	焼通されている。	弥生中期の上段。	
4	鉢	F	横ナデ。	直ナデ。	良好	淡褐色	砂粒を少量含む。		
5	フタ蓋		ナデ。	ハラ工工具によるナデ?	良好	黄土色	砂粒多し。		

Tab. 75 西新町遺跡C地区第2号上墳出土土器観察表

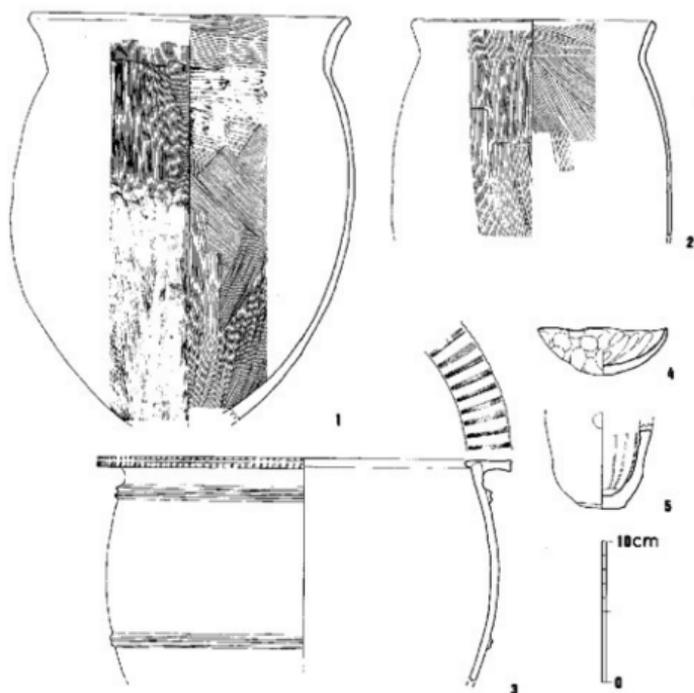


Fig. 144 西新町遺跡C地区第2号上墳出土土器 (縮尺1/4)

7. その他の遺物

(1) 貝輪 (Fig. 145・PL. 13)

西新町遺跡10号墓棺に埋葬された熟年男性の右前腕に装着されて出土した。人骨は仰臥屈葬で右腕は強く屈し、右手首は頸部に近かった。3個列んで耐寄りに出土したが、これは埋葬後の軟部融解に伴ない、その方向にズリ落ちたためと思われる。装着順に肘に近いものから1～3号の番号を便宜上つけた。各貝輪はこの順で僅かながら小型化する。

保存の状態は人骨同様よいとは言えない。表面の腐食が甚だしく、やや完形に近いのは間にはさまれた2のみで、1・3ではほぼ半周に及ぶ欠失がある。

§ 装法について

男性の右前腕に内側を肘側に向けて装着されていることは従来の他例と同じであるがただ原埋葬時、原材の螺旋側を(稜側)にしていたか否かが懸念される。もともと人骨の出土状態には、埋葬後の軟部融解に伴ない若干の自然転位が見られるのが普通であるが、この人骨の場合も稜骨が過度の回内位となっていた。この型の貝輪の出土時は、通常なら彎曲辺が外側に来るはずであるのに180度回転して対側の直辺が外側に来っていた。このような例は2・3他でも経験したことがあるので、もともと前後を逆にした、すなわち貝輪の螺旋側を尺側にする装法があったのか、それとも埋葬後の骨の自然転位、この場合は稜骨の過回内に伴なう回転に過ぎないのか、なお判断し切れぬところがあるので今後の出土例に注意したい。

§ 貝輪の型式と小考

この貝輪が「ゴホウラ貝」を原材として作られていることは、筆者の模造実験と、多数にのぼる九州北半の弥生遺跡出土例から見ても論をまたない。型式は三島・橋口の分類によれば縦型貝輪中の「諸岡型」に入る。ただやや大型であって、原材の大きさを手許の標本から推定してみると殻長(殻頂から殻軸の前溝端までの直線距離)170mm程度の老成した貝殻を使用しているようである。また、全般に腐蝕が強いので、それほど正確には行かないが、辺縁高は20mm前後、その厚みはやや薄手で3.5mmである。測定点は比較的直線的な内唇縁中央である。因みに福岡県嘉穂郡スタレ遺跡の出土例では、それぞれ26mm、5.0mmを超える。今までに「諸岡型」のゴホウラ製縦型貝輪を出土した遺跡としては、九州西岸から瀬戸内海へかけて、所屬時期は弥生時代中期中葉を中心とした15箇所ほどが知られている。その中で一人で4・5個以上も装着しているのはやや内陸に入り広い平野をバックにした九州北半の遺跡に限られ、1・2個を装着している例は海辺に多い傾向がある。

この西新町遺跡の着装者は、年齢の判明した該遺跡被葬者中では唯一の熟年で、当時としては高齢者に当たる。海辺小集団の指導的地位にはあったろうが、この遺跡自体に他に目ぼしい副葬品が無いことから察するに、この貝輪の由来には当時の沿海交易の際の「オコボレ」的なものを感じる。

註 三島格・橋口達「南海産貝輪に関する考古学的考察と出土地名表」『立岩遺跡』1977年

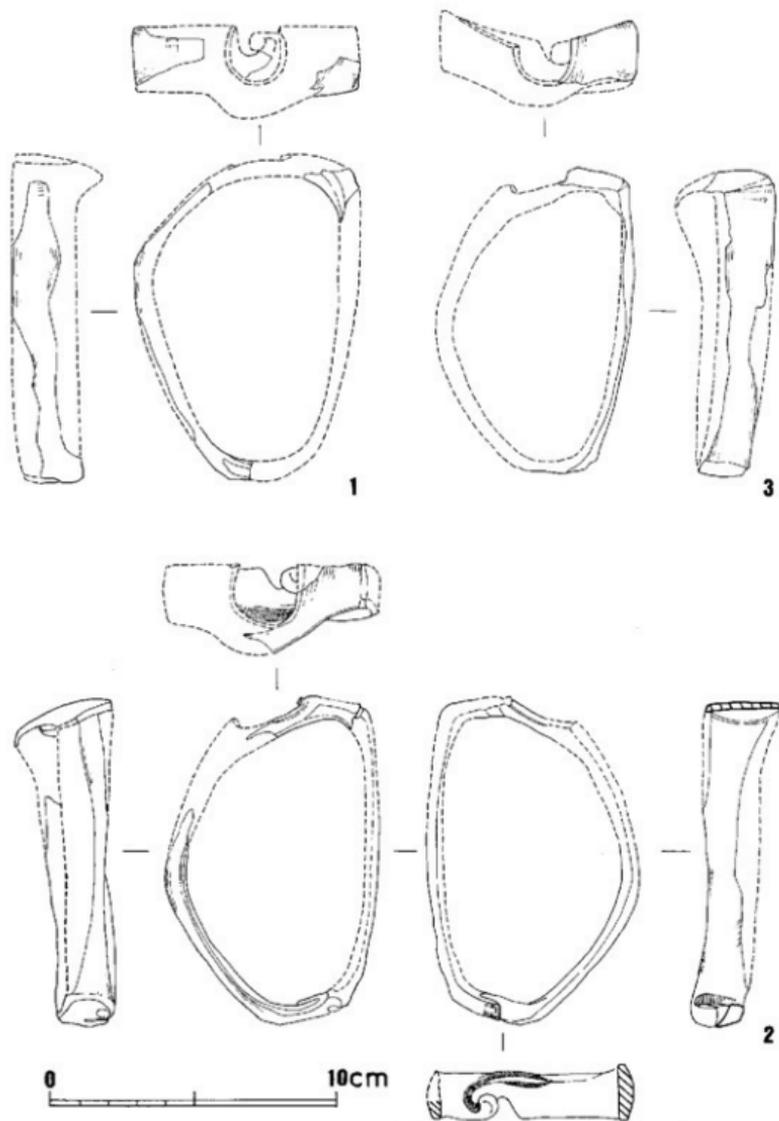


Fig. 145 西新町遺跡C地区第10号瓮棺墓出土貝輪の実測図 (縮尺1/2)

(2) 銅剣の切先について (Fig. 146・1・PL. 13)

C地区19号甕棺墓の下部甕棺より検出されたもので、残存長36.5mm、幅19mm、厚さ5.5mmを測る。出土状況について述べると、位置としては人骨の腰骨付近に当たり、器壁との間に約3cmの比高差が認められた。一般に副葬遺物は、器面に接して出土するケースが多い。しかも近年、銅剣や石剣など武器の先端部が副葬ではなく、戦闘によって折損したまま葬られたとする論考が示されており、本例もその解釈に依り、遺体に残存したものと考えたい。

註

橋口達也「磨製石剣嵌入人骨について」スダレ遺跡 徳波町文化財調査報告書第1集1976年

(3) 銅剣の銚型について (Fig. 146・2・PL. 41)

銅剣の銚型の一部を砥石として転用したもので、D地区第8号竈穴式住居跡より検出された。内面に銚型面を有しているが、一方は火を受けていないため、実際に湯入れが行われたのは片面(2の右)に限られる。断面などと考えあわせて、剣身の中央に半円形の銚が通る細形銅剣が銚造された可能性が強い。身幅は、37.5mmと推定され、且の粗い砂岩を素材としている。

(4) 鉄器について (Fig. 147・PL. 41)

覆土中より数片の鉄器が出土したが、うち5点を図化した。

Fig. 147の1・4・5は、折返して袋部を形成する鋤先と思われ、いずれも錆化が進んでおり、依存の状態は良くない。

2は、刃部の断面が弧状を呈することから鋸の先端部と思われる。身幅は1.8cm、現存長は約4.0cmで、腐蝕が著しい。

3も、鋸の先端部と思われ、刃部は中央で屈曲している。刃部の付根には、木片の付着が認められるが、これは柄部に用いられた木質部が残存したものであろう。

(5) 石鐘・土鐘・砥石・タコ壺について (Fig. 148・149・PL. 42)

Fig. 148の1は、C地区第9号竈穴住居跡より出土した滑石製の石鐘である。面取りを行なって紡錘形に加工した壺製品に、長軸方向に幅5～6mmの溝を回らし、溝中に端部よりほぼ均等の位置に径5mmほどの2孔を穿っている。全長は11.4cm、最大幅3.9cm、重量195gを測る。

2は掘土中より出土した頁岩製の石鐘である。中央の口みに紐を結って使用したものであろう。

3はD地区第16号竈穴式住居跡出土の土鐘である。

Fig. 149はいずれも粘板岩製の砥石である。1はD地区第17号竈穴式住居跡より2・3は同16号より出土した。

西新町遺跡からはD・E地区を中心に大小50個体におよぶ响壺の破片が検出された。当遺跡の立地は海岸線に面しているとはいえ、整理の結果、出土する漁撈関係の遺物が全体に占める割合は予想していた程高くはなかった。

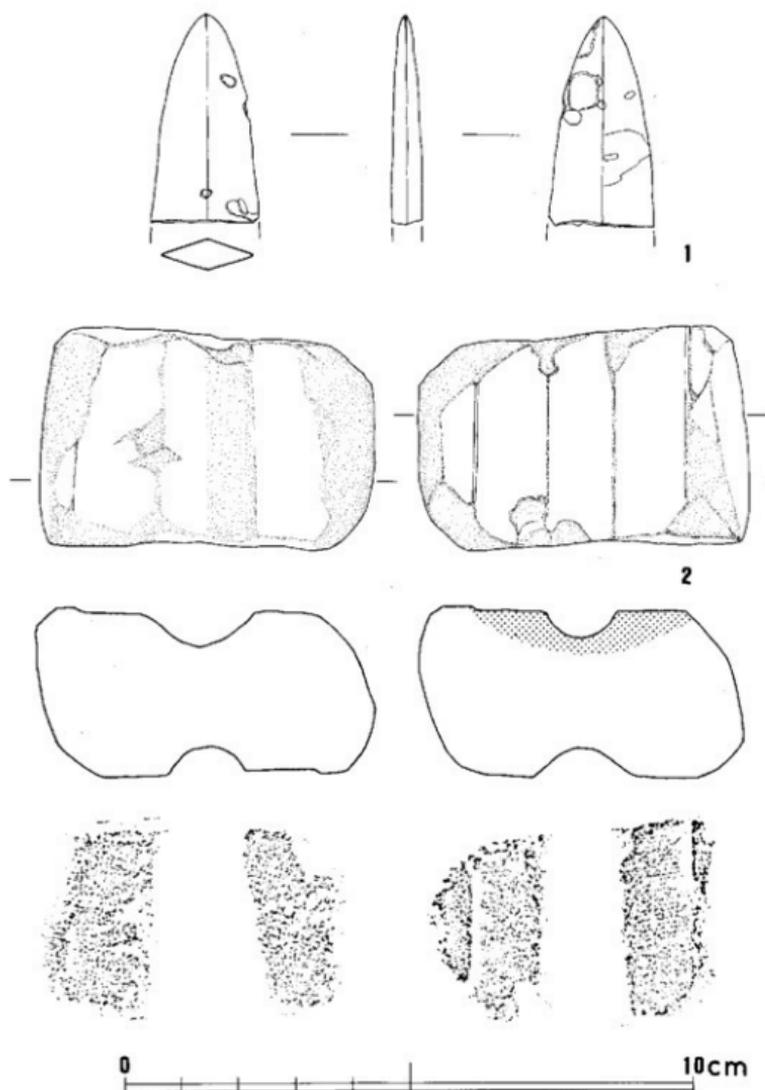


Fig. 146 西新町遺跡C地区第19号塚墓出土の銅剣の切先 (上・原寸大)
西新町遺跡D地区第8号竪穴式住居跡出土の銅剣の鈎型 (下・原寸大)

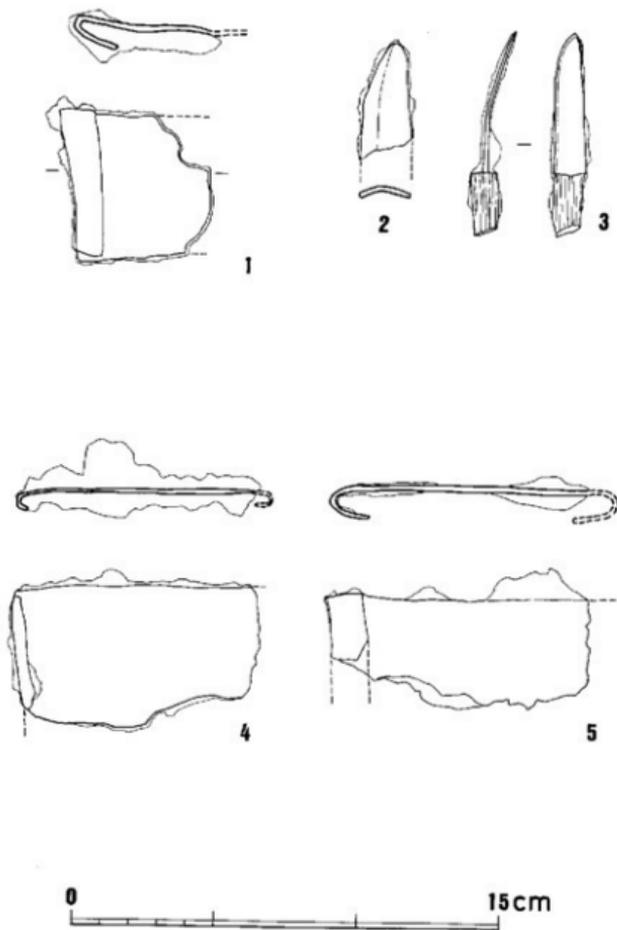


Fig. 147 西新町遺跡空穴式住居跡出土の鉄器（縮尺1/2）

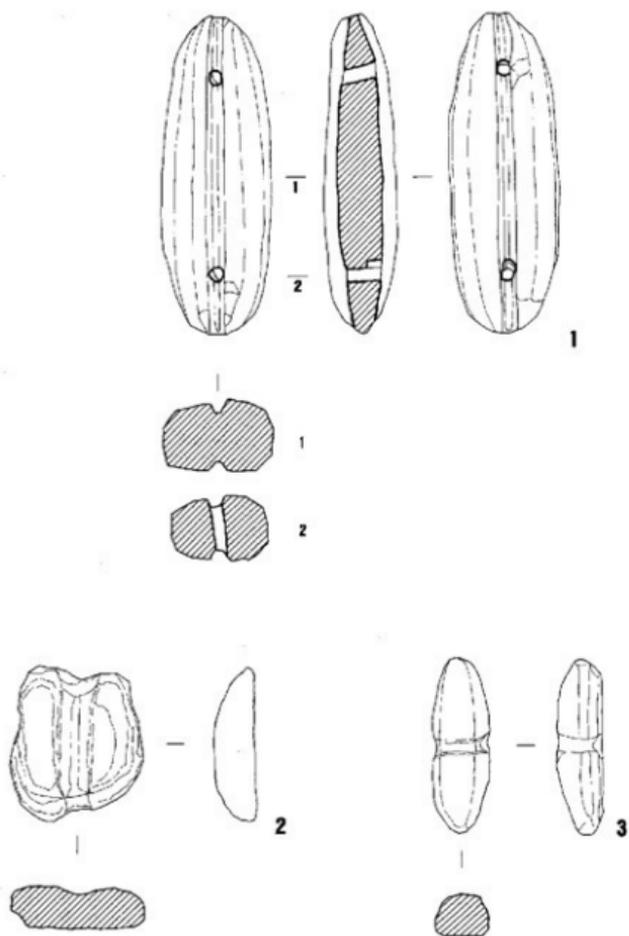


Fig. 148 西新町遺跡出土の石錘・土錘 (縮尺1/2)

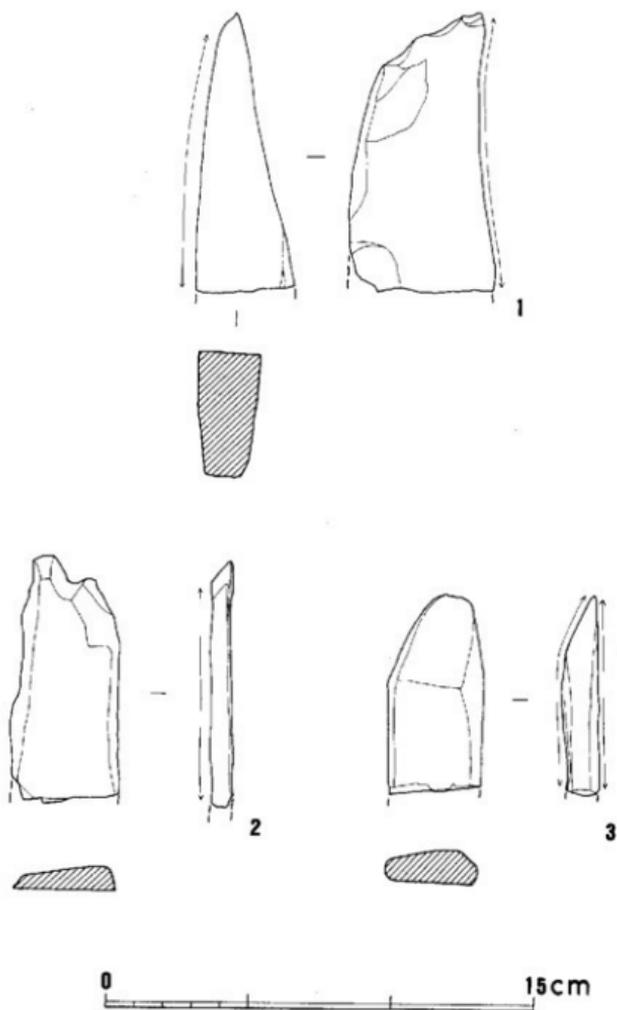


Fig. 149 西新町遺跡出土の砥石 (縮尺1/2)

(6)中世木棺墓と出土遺物 (Fig. 150・PL. 43)

藤崎、西新間道路拡充部の調査におけるB-3トレンチ付近、202号線の南側から杭打工事に先行する布張りで地表下約1.5mの砂層から一基だけ出土したものである。立会調査時に検出されたものであるため遺構の詳細な観察はできず、長軸1.5mの長方形の木棺墓であることが確認されたのみである。採集された遺物には、見込みに刺花文を施した、灰青色釉の龍泉窯系青磁皿1点と、糸切りで板目を底に残す土師皿5点、木筒の鉄製留釘16点、図示されていないが鎌と思われる鉄製品1点などがある。土師皿はいずれも口径9cm、器高1.2～3cm程度のもので、青磁皿と併せ考えると、この墓は13世紀半ばから後半にかけて営まれたものと思われる。また、当該期の墓は藤崎バスターミナルの調査でも1基発見されており、集団墓地的様相は示していないが元寇防塁に近接する砂丘上の墓として、それとの関係が興味深い。

註

- (1) 福岡市教育委員会 「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ 藤崎遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981年
 (2) 福岡市教育委員会 「藤崎遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982年

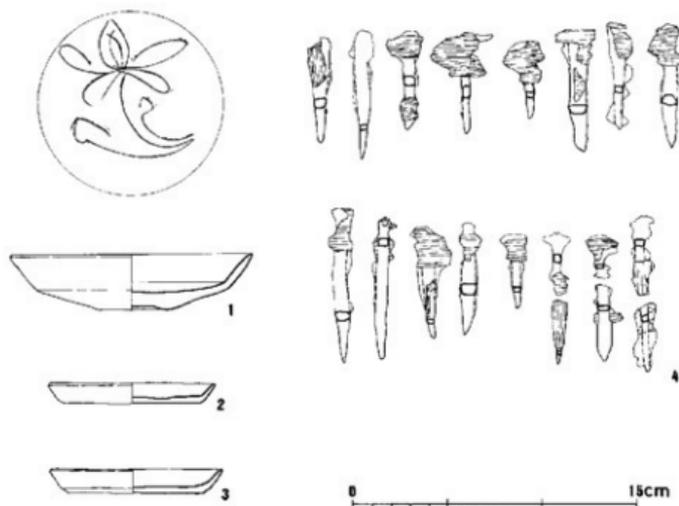


Fig. 150 防塁前の中世木棺墓出土の遺物 (縮尺1/3)

(7) 包含層出土の土器 (Fig. 151)

遺構に伴わない土器が各地区から少量出土している。1はB地区出土の短頸の壺形土器である。口頸部は横ナデ、胴部はタタキ後ハケメ調整を施す。2はA地区出土の山陰系の2重口縁の甕形土器である。他の山陰系の土器と同じく、焼成は脆弱で、濁った黄白色を呈する。胴部に7条1組の乱雑な櫛描き辻線文をめぐらす。胴部外面はハケメ、内面は丁寧なヘラケズリ調整である。3はC地区出土の手握ねの鉢形土器である。4はG地区出土の鉢形土器で、外面はハケメ後ナデ、内面はナデ調整を施す。5・6はA地区出土。5はやや大形の鉢形土器で、口縁部付近は横ナデ、胴部外面はケズリ、内面はハケメ後ナデ調整を施す。6は高坏形土器で脚部を欠損する。外面はあれが著しく調整の仔細は不明である。内面は上半をハケメ調整を施した後に放射状の暗文を描く、下半は乱雑なケンマ調整である。

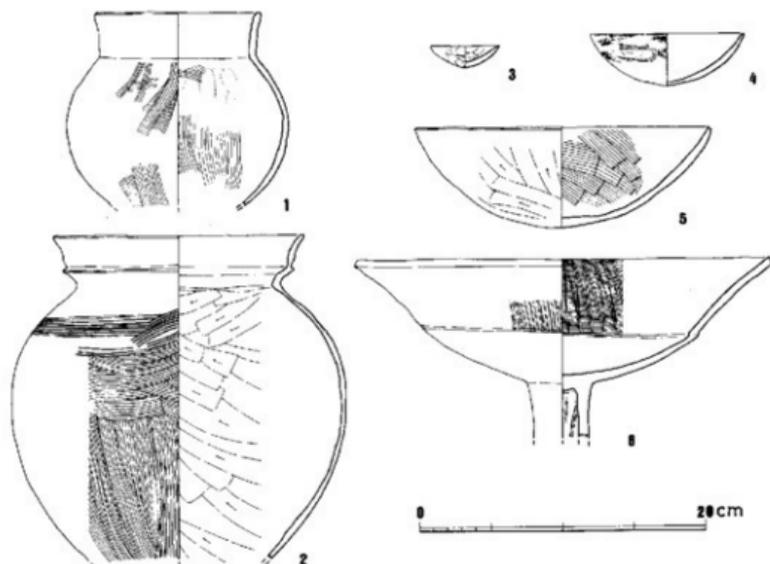


Fig. 151 西新町遺跡包含層出土の土器 (縮尺 1/4)

8. 棺墓検出の人骨について

§ 保存状態

既報の藤崎遺跡出土人骨と同じく保存状態は概して不良である。四肢長骨の骨体部を辛うじて残しているものが大多数で、なかにやや多量の骨ある個体があるが骨質は脆弱で不良である。包含砂層が酸性に傾くためであろう。

§ 埋葬姿勢

頭部や四肢骨から何とか判断しうる数例ではすべて仰臥屈葬である。他の不明なものもおそらくそうであろう。

甕に頭から先に挿入したものと逆のものがあるが、いずれにせよ、ほとんどが頭を北にしているのは興味深い。

§ 技術風習の痕跡の有無

明らかに痕跡の無いのが半数で他は不明であるが、あったとしても既に一般的ではなかった公算が大きい。

§ アベニューマンション敷地出土人骨について

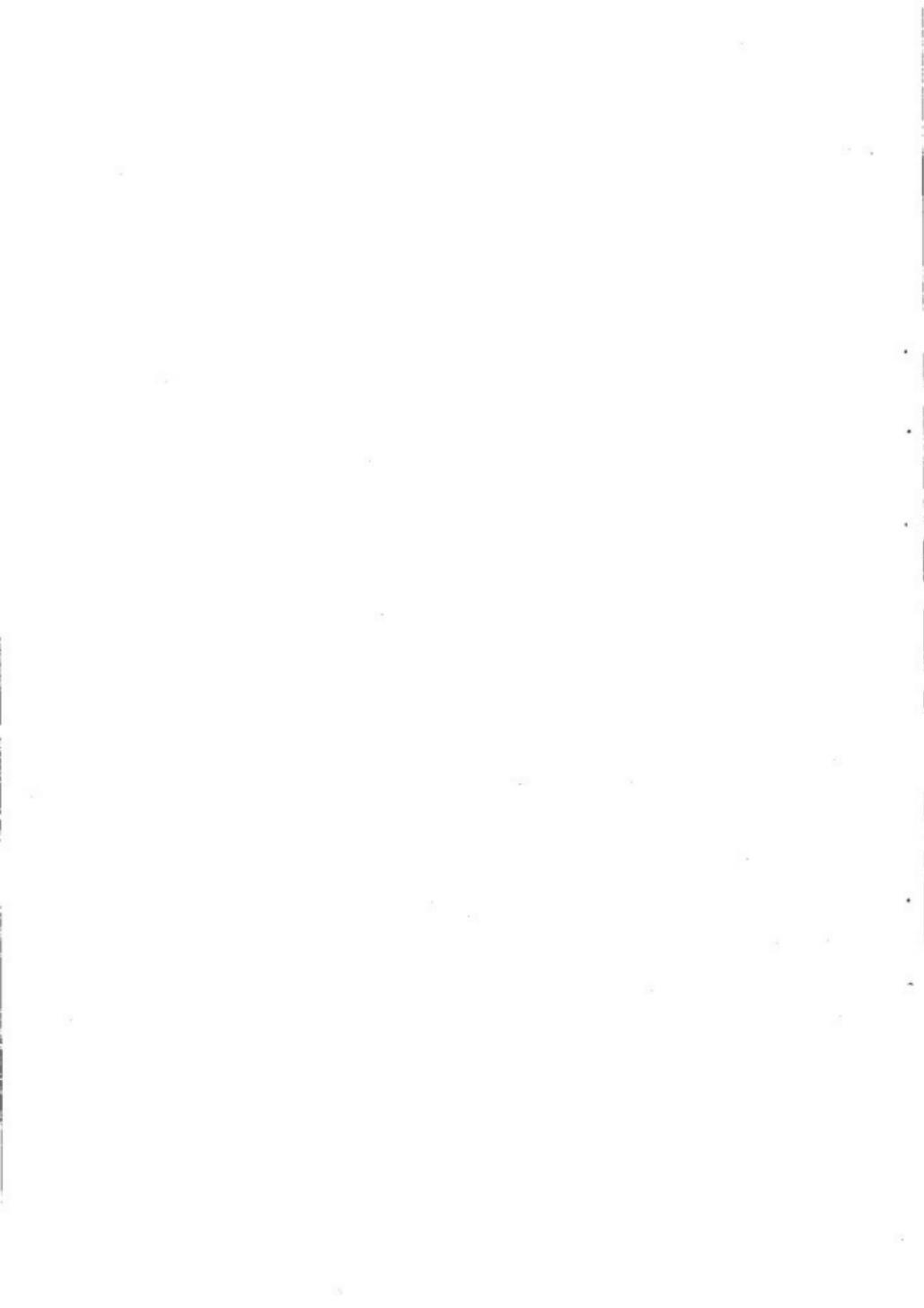
3体の壙棺人骨が昭和47年7月同敷地整地の際に出土した。C地区と距離的にも非常に近いので一連の遺跡と見て附表に併せ掲げた。本格的調査は行なわれていず、人骨も一部だけ既に採り上げてあったので詳細は不明だが、取寄骨片の骨質はむしろC地区出土のものより良好である。道路下にあったC地区よりも住居域にあったこちらの方が砂質は良かったのでであろう。

西新町遺跡出土人骨の保存状態

(○…良、△…不良、●…部分的残存)

地区	壙棺番号	性	年齢	保存状態	身長	頭形示数	技術	備考
C	K-10	♂	熟年	○	161.5	73.2	なし	貝輪 3個
	K-11	♀	成年	●	不明	不明	不明	
	K-12	♀?	成年	△	(142.9)	不明	不明	
	K-13	♀?	成人	●	不明	不明	不明	銅剣の切先
	K-19	♂	成人	●	不明	不明	不明	
	K-28	♂	成年	△	(158.3)	不明	不明	寄せ骨の如し
	J-3			●				
B	K-1	不明	若年	●	不明	不明	不明	
アベニューマンション敷地	K-1	♀	成年	●	不明	不明	なし	
	K-2	♂	成人	●	不明	不明	不明	
	K-3	♂	成年	●	不明	81.5	なし	

Tab. 76 西新町遺跡壙棺検出人骨の観察表



結 語

1. 本遺跡は弥生時代中期中葉から後期の始めに営まれた、甕棺墓を主体とした共同墓地と、弥生時代の後期終末から古墳時代の始めにかけて行なわれた、竪穴式住居跡を主体とする集落跡である。
2. 弥生時代の甕棺墓の特徴で、甕棺の形状や製作技術、そして共同墓地としての有り方は過去に報告された遺跡の範ちゅうを出ることはない。ただ副葬品として、第10号甕棺墓の南方産ゴホウラ製貝輪がある。永井昌文教授の鑑定によれば、弥生中期の初頭の甕棺墓に副葬されていた諸岡遺跡のゴホウラ製貝輪より、山が狭くて肉厚が薄く加工されている所見を得ている。この所見は本遺跡出土のゴホウラ製貝輪の製作技法が、より高度になっている事を示すものである。この判断は第10号甕棺が弥生時代中期中葉に編年されると考えられるところから何ら矛盾しない。

又、第19号甕棺墓より出土した細形銅剣の切先は他の遺跡で類例が検出されており、副葬品として把握されるより、人体刺突の結果と考えたい。第19号甕棺墓は下甕が中期後葉に、上甕が後期前葉に編年上比定されるが、細形銅剣が副葬品として使用されるのが中期前葉の汲田式期までであるところから考えて興味深い問題を提起している。祭祀・武器両用に使われた細形銅剣は副葬品としての役割を弥生時代中期中葉に終了したが武器としての利用は残り、細形銅剣は生き続けた事を示している。なお、第19号甕棺墓内出土の銅剣が、大陸からの移入品なのか国産のものかは普及を避け、将来、化学的分析結果を待ちたい。

3. 弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡を主体とする集落跡は種々の問題を内包している。

遺構に関していえば、住居跡の構造の把握は基盤が砂地という事と、調査技術の不熟さから正確な記述は列記できないが、F地区の第2・3号住居跡に作り付けのかまどを検出できた事はその出土する土器に与えられる編年から考えて、意義あるものと認識する。与えられる編年は後章で詳述する西新町第Ⅲ・Ⅳ様式であり、古墳時代初頭に比定される。かまどの初現を示していると考えられ興味深い。

4. 竪穴式住居跡出土の土器群について言及したい。過去、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器群に関して議論はされるものの「古式土器」という名称をもって、弥生式土器と土師器との分岐線が曖昧にされてきた嫌いがある。本報告では、その曖昧さを排除すべく、その分岐線を西新町遺跡出土の土器群に設定する事により、北部九州の弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器編年研究の一助にしたいと考える。なお、詳述は後文で行うが、本遺跡出土の弥生時代終末から古墳時代初頭の土器編年上の様式は第Ⅰ様式から第Ⅳ様式まであって、「西新町Ⅰ式」から「西新町Ⅳ式土器」とした。弥生式土器と土師器との分岐線は「西新町Ⅲ式土器」と「西新町Ⅳ式土器」の間にある。

5. 北部九州における西新町遺跡の位置

〈土器の型式分類と編年を中心として〉

弥生時代終末をさす型式名である「西新式」土器の研究の過程については、第1章3項において概略を述べた。次に第3章に示した竪穴式住居跡及び土壇出土の土器について考察を行ない、西新町遺跡の文化的様相に何らかの実像を与うべく論考を試みた。ついては以下に示す順に分析を行った。

(1)型式分類・(2)編年試案・(3)周辺の資料と問題点・(4)2・3の併行関係について・(5)小結

なお型式分類及び編年を組み立てるに際し、本遺跡の他、赤井手遺跡・三雲遺跡・藤崎遺跡出土の土器により一部資料を補った。出土遺跡及び出土地点は、各々の器体の下に示した。遺跡名の記されていないものは、本遺跡出土の遺物をさし、(1)の型式分類の下の数字は、各編年図に対応するものである。(付図2～5参照)

(1)型式分類

器形ごとの基本的な型式分類を、甕形土器・壺形土器・高坏形土器・器台形土器・鉢形土器その他の順で行なった。各々の型式の下に記した数字は、付図の番号と各々の土器の通し番号とを示している。(付図2～5参照)

甕形土器A類……弥生後期の「くの字口縁」の系統をひく長胴の甕形土器で、器高が35cm前後の型式をさす。

甕形土器A-I類 (1-01) 中膨らみの胴部に、短く屈曲する口縁部を有する。底部は突レンズ状の平底をなし、胴部下半の調整にはケズリが加えられている。

甕形土器A-I類 (1-02) 肩部が張る長胴の器体に、ゆるく外反する口縁部を有する。底部は完全な丸底ではなく、わずかに面を残している。突レンズ状の底部が、丸底へと変化する過渡的な形態をとどめている。

甕形土器A-I類 (1-03) やや肩の張る砲弾形の胴部に、ゆるく反転する口縁部を有する。胴部最大径は、胴の中位よりも上部にくる。底部は、尖り気味の丸底を呈している。

甕形土器A-II類 (1-06) 中膨らみの砲弾形の胴部に、屈曲する口縁部を有する。丸底を呈し、口縁端部は丁寧なつまみナデによる面取りがなされている。この型は藤崎遺跡出土のもので埋葬に用いられていた。上巻には「布留式」系の土器が用いられていた。

甕形土器A₂-II類 (1-04) 砲弾形の胴部を有する長胴の甕形土器で、肩部はすぼまる。底部は丸底を呈し、最大径は胴部中位にくる。

甕形土器A₃-II類 (1-05) 胴部下半に重心が置かれた丸底を呈する長胴の甕形土器で、口縁部は内

穹気味にひらく。また、口縁端部は、つまみナデによってゆるく立ちあがる。

変形土器B類……タタキ成形によって作られた長胴の甕形土器で、表面にタタキ痕を残存する型式をさす。

変形土器B₁-Ⅱ類
(1-07) 胴部最大径は、器高の中位よりも上部にくる。砲弾形の胴部に、尖り気味の丸底を有する。頸部の屈曲は不明瞭で、口縁端部に粗い刻目を有する。

変形土器B₂-Ⅱ類
(1-08) 胴部最大径は、器高の中位付近にあり、重心は、B₁-Ⅱ類よりも下位にくる。

変形土器B₃類……タタキ成形によって作られた長胴の甕形土器で、ハケ目調整等によってタタキ痕をナデ消した器種をさす。

変形土器B₄-Ⅱ類
(1-09) 砲弾形の胴部に、ゆるく反転する口縁部を有している。重心は胴部中位にあり、底部は尖り気味の丸底を呈する。

変形土器B₅-Ⅱ類
(1-10) 胴部下半に重心をもつ丸底の甕形土器で、ゆるくのびる口縁部を有している。変形土器A₃-Ⅱ類とともに、下膨れ気味の体部は、砲弾形を呈する器種よりも、時期的に下る傾向があると考えている。

変形土器C類……長胴の甕形土器で、器高が20cm前後の小型の器種をさす。

変形土器C₁-Ⅰ類
(1-11) 突レンズ状の底部を有する長胴の器体に、ゆるく屈曲する口縁部を有する。

変形土器C₂-Ⅱ類
(1-12) 砲弾形の胴部を有し、ゆるくひらく口縁部を付する。底部は丸底を呈し、胴部中位は張る。

変形土器C₃-Ⅱ類
(1-13) 器高に比べて胴部が膨らみをもち、重心がやや下にくるものをさす。

変形土器D類……口縁部が屈曲してひらく在地系の甕形土器で、頸部及び胴部下半に突帯を有する型式をさす。

変形土器D₁-Ⅱ類
(1-14) 中膨らみの砲弾形の胴部に、屈曲してひらく口縁部を有する。底部は突レンズ状を呈し、頸部及び胴部下位に断面台形の刻目突帯をめぐらす。

変形土器E類……肩台部を有する甕形土器をさす。

変形土器E₁-Ⅱ類
(1-15) 口縁部は外反して、短くひらく。

変形土器E₂-Ⅱ類
(1-16) 口縁部は、すぼまりながら内湾した所で終結する。

変形土器F類……二重口縁の甕形土器をさす。

変形土器F₁-Ⅱ類
(1-17) 倒卵形の胴部に、直立気味に立ちあがる口縁部を有する。底部は、不安定な平底を呈している。器形からみると山陰地方の「鍵尾式」や青木Ⅳ期、山陽地方の「酒津式」の中に、これに近い類例がみられるが、そのままあてはまる型式ではない。

変形土器F₂-Ⅱ類
(1-18,19) 肩の落ちた胴部に、外湾気味に立ちあがる口縁部を有する。肩部には数

条の沈線をめぐらすものがある。

- 変形土器G類**……張り気味の胴部に、直線的に屈曲する口縁部を有する型式をさす。
- 変形土器G—Ⅰ類** (1-20) 口縁端部はつまみ上げて、横ナデが行なわれ、沈線を回らす。尖り気味の底部、肩部にタタキが加えられていることから、畿内の「庄内式」の壺形土器を模して作られた可能性がよい。
- 変形土器G—Ⅱ類** (1-21) 張り気味の胴部に、屈曲する口縁部を有する。外面はハケ目調整、内面はヘラケズリが施される。肩部に沈線を回らすものがある。
- 変形土器H類**……球形の胴部に、短く屈曲した口縁部を有する。畿内の「布留式」の系統をひく型式をさす。
- 変形土器H—Ⅰ類** (1-22) 肩の張る胴部に、直線的に屈曲する口縁部を有している。口縁端部は、つまみ上げによって面をなしている。このタイプには、タタキ痕を残すものもみられ、「布留式」系のなかで、最も古相を呈しているといえよう。
- 変形土器H—Ⅱ類** (1-23, 24) 球形の胴部に、外弯気味に立ちあがる口縁部を有する。口縁端部は、ゆるく丸味を帯びながら、内面を向く傾向がみられる。H—Ⅳ類への過渡的段階の型式といえよう。
- 変形土器H—Ⅳ類** (1-25, 26) 球形の胴部に、外弯気味に立ちあがる口縁部を有する。従来の「有田Ⅰ式」に属する甕形土器には、この型式も含まれるであろう。
- 変形土器I類**……在地系のA類の甕形土器に、H類の特徴が合わさってできた折衷様ともいえる型式である。
- 変形土器I—Ⅰ類** (1-27) 胴部は在地系変形土器の特徴を備え、口縁部はH—Ⅱ類と同様、外弯気味に立ちあがる器種である。
- 変形土器A類**……袋状口縁の壺形土器の系統をひく型式をさす。
- 変形土器A—Ⅰ類** (2-01) 球形の胴部に、突レンズ状にふくらむ底部をもつ。口縁部は大きく広がり、鋭角に反転する屈曲部には、稜線が入る。頸部に太日の三角突帯2条と、胴部中位下端に1条の台形突帯を有する。
- 変形土器A—Ⅱ類** (2-02) やや肩のおちた球形の胴部に、突レンズ状の平底を有する。口縁部は大きく広がり、ほぼ直角に反転する屈曲部には稜線が入る。頸部にゆるい三角突帯と、胴部中位のやや下寄りに台形の刻目突帯を有している。
- 変形土器A—Ⅲ類** (2-03) 丸味のある胴部に若干尖り気味の丸い底部を有する。直上にのびる頸部は、一目外にひらき、突帯によって画された口縁部は再び直上に短く立ち上がる。口縁部、頸部、胴部下半に刻目突帯を有している。
- 変形土器A—Ⅳ類** (2-04) 球形の胴部にやや外弯気味にひらく頸部を有する。突帯によって画され

た口縁部は、外弯気味にのび、その端部は短く屈曲する。口縁部と胴部中位よりやや下半には太目の刻目突帯を、頸部にはゆるい三角突帯を有する。

壺形土器B類……球形の胴部に、短く直上気味に立ちあがる口縁部を有する在地系の大型の壺形土器をさす。

壺形土器B-I類
(2-05) 球形の胴部に少し内傾して立ちあがる口縁部を有する。胴部上半から中位にかけて、成形の際のタタキ痕を残す。口縁部の内外及び胴部下半の内側は、ハケによる調整が加えられている。

壺形土器B-II類
(2-06) 中位が張る球形の胴部に、短く直上して立ちあがる口縁部を有する。タタキによる成形を行なったあと、内外面にハケ目を施し、底部付近を中心に、ケズリを加えている。

壺形土器C類……球形の胴部に短く直上して立ちあがる口縁部を有する型式をさす。

壺形土器C-I類
(2-07) このタイプはB類の直口縁の壺より派生したと思われるが、成形技法と調整に検討の余地がある。丁寧なつくりで焼成も良好である。

壺形土器C₀-II類
(2-08) C-I類の壺形土器で、器高が20cm以下の小型の器種をさす。

壺形土器C₀-III類
(2-09) 中位がはる球形の胴部に、直上気味にのびる口縁部を有する。器面の内外に丁寧なハケとナデを加えている。

壺形土器C₀類……器高10cm前後の小型の壺形土器で、球形の胴部に直立する口縁部を有する型式をさす。

壺形土器C₀-II類
(2-10) 肩のはる胴部に、直立する口縁部を有する器種で調整は丁寧である。

壺形土器C₀-III類
(2-11) 球形の胴部に直立する口縁部を有する器種である。II類との間に明白な形態の違いは、現段階では認められなかった。

壺形土器D類……截頭卵形の胴部に、短く外弯する口縁部をもつ在地系の壺形土器をさす。

壺形土器D-I類
(2-12) 截頭卵形の胴部に、短くひろく口縁部を有する。底部は丸底を呈し、屈曲する頸部には、断面で三角形のゆるい刻目突帯をめぐらしている。胴部下半には、ケズリにも似た粗いナデが加えられている。

壺形土器D-II類
(2-13) 截頭卵形の胴部に平底の名残りをとどめた底部を有する。屈曲する頸部には、断面台形の刻目突帯をめぐらしている。

壺形土器E類……球形の胴部に、のびてひろく口縁部を有する型式をさす。

壺形土器E-I類
(2-14) 球形の胴部に、鋭角に外反する口縁部を有している。

壺形土器E-II類
(2-15) 球形の胴部に、直上気味にのびて外反する口縁部を有する。内外ともにハケ目調整が施されている。

壺形土器E-III類
(2-16) 球形の胴部に、ゆるく外反してのびる口縁部を有している。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケを加えた後、肩部に刺突文を施している。他に数条の沈線を回らすものもみうけられる。

壺形土器F類………頸部がしまって立ちあがる二重口縁の壺形土器をさす。

壺形土器F-I類 肩の張る胴部に、直上気味にのびる口縁部を有する。畿内地方に通有の
(2-17) 形態である。

壺形土器F₂-II類 なで肩の胴部に外弯気味の口縁部を有する。
(2-18, 19)

壺形土器G類………口頸部において段をつけて長くのびる二重口縁の壺形土器をさす。

壺形土器G-I類 短く屈曲してのびる口縁部に、丸底の胴部を有すると思われる器種をさ
(2-20) す。

壺形土器G-II類 丸底の底部を有し、ゆるくのびる口縁部を有する器種をさす。
(2-21)

壺形土器H類………楕円球の胴部に、長くのびる円筒形の口頸部を有する型式をさす。

壺形土器H-I類 楕円球の胴部に、ゆるく外反気味にのびる円筒形の口頸部を有する器種
(2-22) で胴部の中位より、やや下には、断面三角形のゆるい刻目突帯をめぐらしている。

壺形土器H-II類 楕円球の胴部に、円筒形の口頸部を有すると思われる器種で、胴部下位
(2-23) には、断面三角形の突帯を有する。

壺形土器I類………二重口縁の壺形土器で、口縁部が内傾して立ちあがる型式をさす。

壺形土器I-I類 球形の胴部に、内傾して立ちあがる頸部を有する器種をさす。
(2-24)

壺形土器J類………二重口縁の壺形土器で、器高が15cm前後の型式をさす。

壺形土器J-I類 丸底の底部に、屈曲して外弯気味に立ちあがる口縁部を有している。
(2-25)

高坏形土器A類………在地系の高坏形土器をさす。

高坏形土器A-I類 坏部上方において短く屈曲する口縁を有する器種である。脚部は、ゆる
(3-01) く屈曲して広がる。

高坏形土器A-I'類 坏部の口縁部は、A-Iよりも深く屈曲して外弯する。A-I類とA-II
(3-02) 類の中間的位置にある移行の傾向の強い高坏である。出土例も少ないため、過渡的段階に位置づけて考えることができるだろう。

高坏形土器A-II類 屈曲した口縁部は、内外に段状を呈する接合部を有し、直線的にのびる。
(3-03)

高坏形土器A-III類 屈曲した口縁部が、大きく外弯する器種である。
(3-04)

高坏形土器A-IV類 接合部はゆるい段をなし、ひろくのびる。
(3-05)

高坏形土器A₂-I類 A類に比べて深い坏部を有する器種で、屈曲部は、ゆるい稜をなす。
(3-06)

高坏形土器A₂-II類 屈曲部は、ゆるい稜を描きながら直線的にのびる。脚柱の裾部には、穿
(3-07) 孔を加えている。

高坏形土器A・A₂のII及びIII類は、これまで宮の前タイプと呼ばれてきた器種を包括する型式として捉えられよう。

高环形土器B類……坏部が屈曲してのびる型式で、脚部は屈曲して広がる型式をさす。

高环形土器B—Ⅲ類 深い坏部に、中膨らみの脚柱部を有し、裾部は屈曲して広がる。器面の内外には丁寧なへら調整を施す。

高环形土器C類……屈曲部に稜をもち、外弯気味にのびる坏部に、裾広がりに屈曲する脚部を有する型式をさす。

高环形土器C—Ⅲ類 浅い坏部に、屈曲する脚部を有する器種をさす。

高环形土器C—Ⅳ類 深い坏部に、重心の低い脚部を有する器種をさす。

高环形土器D類……二段の屈曲をもち、大きく広がる坏部を有する型式をさす。

高环形土器D—Ⅲ類 脚部は屈曲して広がり、丁寧な調整が施されている。

(3-12,13)

高环形土器B・C・D類の器形は、畿内の特色が強く認められる。また、C—Ⅳ類の次の段階としては、炭焼古墳出土にみられるような深い坏部に、発達した脚部を有するタイプが設定できよう。

高环形土器E類……椀形の坏部を有する高环形土器をさす。

高环形土器E—Ⅲ類 脚部は、屈曲して大きく広がり、坏部の径をしのいでいる。

(3-14)

この類の高环形土器は、吉備から畿内地方にかけての分布が広く知られている。福岡平野では、神藏古墳の裾部より類例が出土している。

高环形土器F類……小さな裾広がりの脚部に、椀形の坏部を有する型式で、山陰地方において有脚杯や酒環形土器の名で呼ばれている器種をさす。

高环形土器F—Ⅲ類 屈曲する脚部に口径10cm内外の坏部を有する器種をさす。

(3-15)

高环形土器F—Ⅳ類 ゆるくのびる脚部に口径10cm内外の坏部を有する器種をさす。

(3-16)

高环形土器F_a—Ⅲ類 屈曲する脚部に口径15~20cm程の坏部を有する器種をさす。

(3-17)

高环形土器F_a—Ⅳ類 ゆるくのびる脚部に口径15~20cm程の坏部を有する器種をさす。

(3-18,19)

器台形土器A類……いわゆる鼓形器台をさす。

器台形土器A—Ⅲ類 短い筒部に、外反してのびる受部を有する。筒部の内側は、面をなして

(3-20,21,22)

おり、受部の端部は、ゆるく屈曲する。

器台形土器A—Ⅳ類 短い筒部に、外反してのびる受部を有する。筒部の内側は、稜線を有し

(3-23)

ており、A—Ⅲ類の面が退化したとも考えられる。受部の端部は、ゆるく下方方向に反転しており、筒部と受部の境目のツマミナデは、垂れ気味である。

器台形土器B類……皿状の受部をもち、円錐形の脚部を有する型式をさす。

器台形土器B—Ⅲ類 受部の端部は、短く立ちあがり終結する。

(3-24)

器台形土器B—Ⅳ類 受部の端部は、ゆるく内弯気味に屈曲する。

(3-25)

器台形土器B—Ⅳ類 受部の端部は、内弯気味に屈曲し、ゆるくひろく。

(3-26)

器台形土器B類は、小型丸底の壺形土器や鉢形土器とセット関係をなすもので、畿内地方に多くみられるタイプである。

器台形土器C類……在地系のいわゆる円筒形器台をさす。

器台形土器C-Ⅰ類 (3-27, 28) ゆるいカーブを描いて立ちあがり、受部を形成する。受部と脚部の区分は、あまり明らかではない。

器台形土器C-Ⅱ類 (3-29) くびれ部は、C-Ⅰ類よりも明瞭であるが、C-Ⅲ類ほどはすぼまらず、両者の中間的形態をなしている。

器台形土器C-Ⅲ類 (3-30) 脚部は、円錐状に立ちあがり、屈曲して受部を形成する。
在地系器台のC-Ⅲ類にみられる傾向は、器台形土器B類などの影響下に変化をとげたことの顕われといえるかもしれない。

鉢形土器A類……口径が、30cmをこえる大型の器種をさす。

鉢形土器A-Ⅰ類 (4-01) タタキによる成形がなされており、底部は、丸底を呈する。口縁部は、ゆるく屈曲する。

鉢形土器B類……口縁部に、稜を有し外反する大型や中型の器種をさす。

鉢形土器B-Ⅰ類 (4-02) 張り気味の胴部に、屈曲してのびる口縁部を有する。底部はやや尖り気味の丸底を呈する。

鉢形土器B-Ⅱ類 (4-03) 張り気味の胴部に、二段に屈曲する口縁部を有する。

鉢形土器B₂-Ⅱ類 (4-04) 器高は、口径の約2分の1で、ゆるく屈曲してひらく口縁部を有する器種をさす。

鉢形土器C類……深鉢形を呈する器種をさす。

鉢形土器C-Ⅰ類 (4-05, 06) 口径が20cm前後で、ほぼ直立した口縁部からそのまま底部につながる器種をさす。

鉢形土器D類……口径が、器高のおよそ2倍を測る器種をさす。

鉢形土器D-Ⅰ類 (4-07, 08) 口径が25cm内外で、口縁部からそのまま底部につながる器種をさす。

鉢形土器D-Ⅱ類 (4-09) D-Ⅰ類とほぼ同様の器形を呈する。

鉢形土器D-Ⅲ類 (4-10) 口径が20cm前後で、器高が口径の約二分の一を呈する器種をさす。

鉢形土器D₂-Ⅰ類 (4-11-14) 口径が15cm内外で、口縁部からそのまま底部につながる器種をさす。

鉢形土器E類……器高が、口径の約3倍を測る浅鉢形を呈する器種をさす。

鉢形土器E-Ⅰ類 (4-15, 16) 口径が25cm前後で、口縁部から底部にそのままつながる器種をさす。

鉢形土器E₂類……E-Ⅰ類と同様の器形で、口径が20cmに満たない器種をさす。I~Ⅲ類と3様式にまたがるが、明らかな形態の変化は見出すことができない。

鉢形土器F類……各住居跡内で、個人用の器として、用途が充てられていたと思われるもので、(4-24~31)

器形は多様化しているが、現段階において、様式ごとに大きな変化はみられなかった。

鉢形土器G類……球形の胴部に、外弯気味に立ちあがる口縁部を有するもので、器形は壺形に近い。器高と口径とはほぼ同じ数値を示す。胎土は良精で、赤褐色を呈する。

鉢形土器H類……楕円球の胴部に、外弯してゆるくひろく口縁部を有する。器高は、口径の約2分の1を呈する。西新町遺跡においては、「Ⅲ様式」から「Ⅳ様式」にわたって見うけられるが、器形に明らかな差異は認められない。胎土は良精で、赤褐色を呈する。

手焙り形土器……鈎状を呈する平坦面及び背面の一部を残存している。北部九州方面では、朝倉地方の天香山遺跡などにおいてみうけられるが、出土した例は少ない。器形や調整技法などは、纏向遺跡東田地区中層出土のものに、類似しているといえよう。

以上が型式分類であるが、福年岡において2つの様式の線上で「J」を付けて示した器種は、両様式の中間の様相が認められる型式であり、同一の様式内で「J」をつけたものは、型式的に微妙に分化する傾向がみられる器種を示している。

(2) 福年試案

本項では、IIの第三章において紹介した基礎資料をもとに、在地系の壺形土器と壺形土器の型式上の変化を中心に追ひ、4つの様式で捉えた。(付図2～5参照)

様式名は、遺跡名に基づき、「西新町Ⅰ式、同Ⅱ式、同Ⅲ式、同Ⅳ式」と呼称する。

次に各様式について言及し、その組成と問題点を整理しておきたい。

「西新町Ⅰ式土器」について

森貞次郎氏の提唱した「下大隈式」の次の段階として設定した様式であり、西新町H地区第2号竪穴式住居跡及び第3号竪穴式住居跡出土の遺物が主体をなす。

壺形土器A-Ⅰ類は、三雲遺跡仲田地区第17号竪穴式住居跡より検出された長胴の壺形土器と同様の型式と考え、壺形土器A-Ⅱ類に先行するタイプとしてA-Ⅰ類を組み入れた。また赤井手遺跡の芹戸より検出された壺形土器A-Ⅰ類は、Ⅰ式とⅡ式との過渡的様相をつよくひくものと考え、中間に位置づけた。

高坏形土器については、A-Ⅰ類のように短く屈曲する口縁部を有するものをあげたが、移行する傾向が認められるものとして、A-Ⅰ類を新しい段階に位置づけた。

この時期の特徴は、突レンズ状の平底を呈する器種が主体をしめ、小型の壺形土器や壺形土器には既に丸底化する傾向が認められる点にある。

この様式は、在地系の土器の流れのなかで変化したもので、器種ごとの分化は目立たない。

また他の地方との関係においては、H地区第2号竪穴住居跡より、畿内第V様式の範疇に入るとされる甕形土器の底部が出上している (Fig. 136—5)。

小片につき、今後に検討の余地を有しているが、併行関係を究明するうえで、何らかの手がかりとなる可能性を与えるものといえよう。調整は、外面にタタキ痕を残し、内面に放射状のハケ目に加えられていることを加えておく。

「西新町Ⅰ式」の前段階には、平底と突レンズ状の平底とが混在する、「下大隈式」の新段階的資料が想定される。

「西新町Ⅱ式土器」について

西新町遺跡C地区第3号竪穴式住居跡及びD地区第3号竪穴式住居跡に代表される土器群が主体をなす。

甕形土器、壺形土器ともに一様に丸底化する傾向が認められる。

甕形土器では、A—Ⅲ類にみられるような器体の重心を胴部中央か、それよりも上半に置くものを主体とする。また、壺形土器や甕形土器もD類のように大型に近い法量のもの、ゆるく平底の名残りととどめてはいるが、「西新町Ⅰ式」の底部ほど明瞭ではない。

高坏形土器は、坏部の中位に段をなして屈曲するこれまでの早良平野の編年において、「宮の前Ⅰ式」に相応するものが充てられる。高坏はまたAとA₂とに分化すると考えているが、現段階では類例となる資料が不足しているため、今後検討の余地を残している。

この段階で注目されるのは、甕形土器F類にみうけられる他の地方の系統をひくと考えられる土器の出現である。この土器は、中国地方でも、山陰方面の影響下に作成されたものではないかと考えているが、現状において、地域を限定することはできなかった。

他に壺形土器E—Ⅰ類でも同様に在地の土器の系統に見い出せない器形のものがあり、土器が多様化する前段階的な様相が認められる。また手埴り形土器も、単体で出土したものではあるがこの様式に組み入れておくことにする。

「西新町Ⅱ式土器」の特徴は、壺形土器、甕形土器ともに、やや尖り気味の丸底を呈する在地系の土器群に、他の地域の影響をうけたと考えられる土器群が出現し始める様相として捉えることができよう。今後胎土分析などによって、搬入関係も明らかとなれば、そうした傾向もより限定されるであろう。

「西新町Ⅲ式土器」について

西新町遺跡D地区第4号及び第16号竪穴式住居跡出土の遺物が主体をなす。

この様式の段階では、形式を問わず、器種は一挙に増加する。その中で、在地系の土器が分化を遂げたと考えられるものは少なく、むしろ山陰や畿内地方の特色を帯び、影響をうけたと考えられる土器が大量に検出される。

またそうした他の文化圏の土器を模倣して製作することも行なわれる。その例としてあげられる型式には、壺形土器のF₂・G・II類を始め、壺形土器のE・F・F₂・G・I・J類、高坏形土器のB・C・D・E・F・F₂類、器台形土器のA・B類、鉢形土器のG・H類などがある。

上記の現象に伴い在地の壺形土器A・B類が「Ⅲ式」になると減少するようになる。

その誘因には、製作に内面ヘラケズリ技法を導入することによって、機能的に熱効率が高いと考えられる壺形土器II—Ⅲ類に転化してゆくことが一つにあげられる。そして壺形土器H類と在地系の器種とが融合したタイプといえる壺形土器I—Ⅲ類へ形態変化を遂げたことも考慮に入れる必要があるだろう。そしてこの場合、後者の傾向がより有力と考えている。

それは、在地系の製作技法から発達した壺形土器A—IV類の形態と、畿内の製作技法によって在地系の土器を模倣した壺形土器I—Ⅲ類の形態とが、ほぼ同様のプロポーシオンを呈していることから裏付けられよう。

先に述べた他の文化圏の系統をひく土器群を地域ごとに言及すると次のような結果となる。

壺形土器F₂—Ⅲ類、壺形土器F₂・G・I・J—Ⅲ類、高坏形土器F・F₂—Ⅲ類及び器台形土器A—Ⅲ類には、出雲・伯耆地方を中心とする山陰的色彩が濃く認められる。壺形土器G・H—II・Ⅲ類、壺形土器E・F—Ⅲ類、高坏形土器B・C・D—Ⅲ類、器台形土器B・B₂—Ⅲ類及び鉢形土器G・H—Ⅲ類は、畿内に通有の器種を取り入れた型式といえよう。高坏形土器E—Ⅲ類は、吉備地方より一たん畿内へ伝播した後、もたらされた可能性もあるため、現状で系統を断定することは保留しておきたい。

また壺形土器H—Ⅲ類及びF₂・G・I—Ⅲ類、壺形土器E・F₂—Ⅲ類の肩部には、2・3条の沈線やハケの小口によるとと思われる刺突文を回らすものが、かなり見うけられる。この類の施文方法は、山陰方面の土器にも汎く認められるが、地域相を究明するうえで、今後こうした技法の分布状況にも留意すべきである。

「西新町Ⅲ式土器」は、在地系の土器様式に、畿内や山陰の影響を受けた土器群が、製作技法においても在地の組成に大きな位置を占めるようになる段階であり、こうした現象は変革的な様相として捉えることができよう。

「西新町Ⅳ式土器」について

西新町遺跡E地区第2号及び同地区第4号竪穴式住居出土の遺物が主体となるが、藤崎遺跡第7号方形周溝墓出土の遺物によって一部資料を補った。

型式分類を行なったもので「Ⅳ式」に相当するものは限られているが、それは遺物の全体に占める割合が少ないためである。このように資料としての幅はかなり限定されるが、器種ごとの型式にみられる特徴について概括的に述べておきたい。

壺形土器では、H類の系統をひく器種が主体となり、それに次ぐ型式としてはF類の流れを

くむ二重口縁の菱形土器があげられよう。菱形土器H—IV類は、以後口縁端部は内傾し、胴部が球形を呈する典型的な「布留式」の系統をひく菱形土器へと移行すると考えられる。

菱形土器では、F・F₂・I・J類より派生した器種が盛行し、在地系の型式の中には、この段階で途断してしまうものもあると思われる。

こうした傾向は高環形土器や器台形土器、鉢形土器にも見うけられる。すなわち高環形土器は、C—IV類にみられるように、深い坯部に裾広がり脚部を有するものとなり、同時に幾内の傾向のつよいB・C類などの高環形土器より派生したと思われる長くのびる脚部に屈折して外にひろくタイプの器種を受け入れてゆくと思われる。また高環形土器D・E・F類については、「IV式」にも一部延長線上にくる器種が存すると思われるが、現状において型式の設定は控えたい。

器台形土器ではA・B—IV類が、端部の調整などにおいてややだれ気味な特色を帯びながら継続してゆく。鉢形土器G・H類にも、とくに明記すべき形態的变化は見られないまま、H—IV類へと引き継がれていくようである。

「西新町IV式土器」は、「III式」において在地の組成に多くの影響力を与える契機となった土器群が主体となって展開する段階である。そしてこの場合の型式変化は、在地の土器に融合するというよりも、その主導権は、既に外来の土器群に占められていた可能性がより強く認められるといえよう。

(3) 周辺の資料と問題点について

広義の福岡平野は、東を三郡山地、南と西を背振山地で限られ、北は博多湾に面している。早良平野は福岡平野のなかで、平尾丘陵と長浜の山塊に囲まれた地域の呼称である。

福岡平野より太宰府の狭い丘陵地帯を抜けると朝倉平野、そしてその西には、有明海を臨む筑後平野が位置している。ここで、これまでに行なわれてきた弥生時代終末から古墳時代前期にかけての主な遺跡の調査概要についてふれておきたい。

ここに掲げるのは次の12の遺跡である。

1. 有田遺跡
2. 牟多田遺跡
3. 野方中原遺跡
4. 湯納遺跡
5. 宮の前遺跡
6. 藤崎遺跡
7. 柏田遺跡
8. 今光遺跡
9. 赤井手遺跡
10. 小田道遺跡
11. 狐塚遺跡
12. 三雲遺跡

早良平野

1. 有田遺跡 (福岡市西区有田)

早良平野のほぼ中央部に位置し、室見川と金脛川とはさまれた洪積層の丘陵上に位置する。遺物は旧石器から中世にいたるまでひろく出土しており、全時期にわたる複合遺跡とされている。

1967年とその翌年にかけて、九州大学考古学研究室によって第二次までの調査がなされた。その結果、古墳時代前期の遺物は、17街区住居跡・27街区3号住居跡・31街区C層において検出されており、「有田Ⅰ・Ⅱ期」として古式土師器編年の基礎資料とされた。

1968年度の報告によると、「Ⅰ式」は関東の「五領式」要素をもつ「和泉式」の文化に近接した時期として、「Ⅱ式」は、「和泉式」の前半期として各々捉えられた。その後の調査結果とあわせて、「有田Ⅰ式」という用語は、畿内の「布留式」併行の時期をさすものとして用いられるようになった。

2. 牟多田遺跡（福岡市西区大字野方字牟多田）

早良平野の西、海岸線より3km程奥まった十郎川の流域に位置している。

1973年度の調査により、縄文晩期から歴史時代にいたる遺物が検出された。

溝中より古式土師器が出土しているが、そのうち溝1と溝3出土の甕の型式は、資料的な不足を認めたくえで、「有田Ⅰ期」あるいは、それにやや先行する時期に比定された。

3. 野方中原遺跡（福岡市西区大字野方字中原）

早良平野の西、叶岳山麓の平坦な扇状地に位置し、東には十郎川が流れる。

1973年より翌年にかけて調査が行なわれた結果、弥生時代後期後半から古墳時代にかけての遺構が確認された。

その扇状地の中央部から東にかけて回る径約100mの楕円形の環溝と、その内側の堅穴式住居跡及び竈の一部が調査された。A溝の営まれた時期は、かなりの時期幅があるが、現状では弥生後期後半とするのが適当と思われる。

台地中央部一帯には、100軒以上にのぼる古墳時代の住居跡が確認され、扇状地の西北部には、ほぼ同時期の箱式石棺墓10基、壺棺墓1基が調査された。早い時期の詳細が待たれる。

4. 湯納遺跡（福岡市西区大字拾六町字湯納）

早良平野の西、海岸線から1km程深まった所に位置している。十郎川の西にある低丘陵部と水田部分からなり、丘陵部から集落跡、溝を隔てて十郎川との間に水田跡が検出された。

縄文時代から歴史時代の遺物が出土しているが、弥生と古墳時代の遺物が大半を占めている。

溝中より出土した古式土師器は「湯納Ⅰ～Ⅱ式」として編年が組まれた。

溝という遺構の性格上、一括遺物として考えられるのは、D5溝であり、井堰出土のものやD11溝出土の遺物は、単一の時期ではないという見方もある。D5溝出土の土器群は、「有田Ⅰ式」として捉えられている。低湿地であることから木製品の残りもよく、土器とあわせて、当時の生活様式を知るうえでも貴重な資料である。

5. 宮の前遺跡（福岡市西区大字拾六町字宮前）

早良平野の西北部にある丘陵の先端に位置し、平野を臨んでいる。

1969年とその翌年の三次にわたる調査によって、A～Fの6地点が調査された。

調査の結果、湯納遺跡の発展途上に生まれた弥生時代終末から古墳時代初頭の遺跡であることが明らかとなった。

C地点は、マウンドを持った高塚墳で、弥生終末期の原始古墳として報告された。

墳墓出土の土器と包含層出土の土器をもとに、弥生～古墳時代の過渡の様相は、「宮の前Ⅰ式～Ⅲ式」で捉えられた。弥生終末の土器は「宮の前Ⅰ式」、古墳時代初頭の土器は「宮の前Ⅲ式」として、早良平野における編年案が提示された。「宮の前Ⅱ式」は資料的にも少ないため、「Ⅱ式」に包括される様式としての見通しが示されていた。

同平野中、以上の出土遺物に関しては、武末純一氏によって論考がなされている²⁵⁾。

6. 藤崎遺跡（福岡市西区藤崎）

早良平野の東北部、博多湾に面する古砂丘上に位置している。

弥生時代から古墳時代にいたるまで、葬地が営まれてきたと考えられていたが、1977年とその翌年の調査によって、弥生中期を主体とする、前期から後期にいたる墳墓が検出された²⁶⁾。

古墳時代の墳墓としては、1912年に箱式石棺中より、直刀と三角縁二神龍虎鏡とが出土し、次いで1917年にも、方格渦文鏡を副葬した箱式石棺が宅地内より検出された²⁷⁾。

1980年の調査の結果、10基の方形周溝墓が確認され、第6号方形周溝墓より、三角縁二神二車馬鏡、第7号墓周溝より珠文鏡、10号墓の主体部より鋸歯帯乳文鏡が各々検出された²⁸⁾。溝中より出土した土器は、墓の祭祀に伴うものと考えられ、その一部は、本報文の型式分類に用いている。

福岡平野

7. 柏田遺跡（福岡県春日市上白水字柏田）

福岡平野の南西、那珂川の低位段丘上に位置する。

1970年から72年にわたって調査が行なわれ、縄文、古墳、歴史時代の遺構が明らかとなった²⁹⁾。

竪穴式住居跡や土壌などから出土した遺物を基に、3期の編年案が示された。

「柏田Ⅰ期」は、畿内の「庄内式」、「柏田Ⅱ期」は「布留式」期の古期に併行するものとして位置づけられた。「柏田Ⅲ期」に関しては、「庄内式」並行期の様相を持ちながらも、「Ⅲ期」への過渡的な遷が存在する時期としているが、良好なセット関係で捉えられていない。

8. 今光遺跡（福岡県筑紫郡那珂川町大字今光）

福岡平野の南西、梶原川の東側の段丘上に位置し、柏田遺跡に隣接している。

1976年、78年の二次にわたる調査によって、弥生時代にかけての住居跡、溝、歴史時代の遺構が検出された³⁰⁾。

出土遺物の編年が祖まれ「Ⅰ期」は弥生終末、「Ⅱ期」は「庄内式」併行、「Ⅲ期」は「布留古式」の様相で捉えられた。また18号住居跡出土の一括資料は「西新町Ⅲ式」に比定できよう。

9. 赤井手遺跡（福岡県春日市大字小倉）

福岡平野の南と西を限る背振山地より発達した春日丘陵西北端の樹枝状に派生した小丘陵上に位置している。

1976年より79年にかけての調査によって、弥生時代から古墳時代にいたる遺構が検出された¹⁰⁾。

なかでも井戸跡より出土した壺形土器は、弥生終末の器形として捉えられるもので、壺形土器A-I'類として、本稿の型式分類にも用いている。

朝倉平野

10. 小田道遺跡（福岡県甘木市大字平塚字小田道）

福岡平野から太宰府の狭い丘陵地域を抜けた所に広がる朝倉平野の小石原川と佐田川にはさまれた河岸段丘上に位置している。

1978年度の調査の結果、弥生時代終末から奈良時代にわたる集落跡が確認された¹¹⁾。

その中で弥生終末から古式土師器の時期の遺物は、土器編年の基礎資料として用いられた。

報文中「I・II期」は「唐古第五様式」から「樹向I式」、「II期」は「庄内式」並行（經向II・III式）に比定されている。報告者は、古式土師という言葉を用いているため、「I・II期」を弥生終末、「II期」を古墳時代初頭と解釈していると思われる。これは、同地域内で調査された「神藏古墳」出現前夜の社会的様相を考慮してのことであろう。

筑後平野

11. 狐塚遺跡（福岡県筑後市上北島）

筑後平野の中央部、地勢を東西に分つ台地の西部に位置している。

1969年に九州大学考古学研究室によって調査が行なわれた¹²⁾。その結果、竪穴式住居跡の時期が弥生終末期から最古式土師器におよぶもので、編年研究上の空白を埋めるべくII期に分類された。すなわち弥生終末期を二期に細分し、それにつづく時期として「II期」に最古式土師の時期を設定した。「I式」を「西新町式」前半に充て、「II式」はその後半として、弥生から古墳にいたる過渡的様相を強く認めている。

実年代については、「I・II式」の時期を2世紀後半より3世紀前半にあて、「II式」に関しても3世紀とする論考が示されている¹³⁾。

糸島平野

12. 三雲遺跡（福岡県糸島郡前原町大字三雲）

平野は背振山地より派生した長垂山地によって早良平野と境を接している。「魏志倭人伝」の伊都国はこの付近に位置すると考えられ、内外交流の中継地としての役割を果たしていたと思われる。1974年から79年までの調査の結果、縄文時代から歴史時代にいたる遺構が確認され、

弥生時代の墳墓や古墳時代の遺構が検出された¹⁸⁷⁾。

番上地区及び仲田地区において、これまで弥生終末から古墳時代にかけての土器が報告されている。「西新町Ⅱ式」には、番上地区6号住居跡及び仲田地区18号住居跡の資料、「同Ⅲ式」には番上地区2号土器溜出上の資料が各々充てられよう。

(4) 2・3の併行関係について

これまで西新町遺跡の出土遺物について4つの様式で示してきたわけであるが、それら各様式が従来の編年観とどのように対応し、結びついてゆくかについて言及する必要があるだろう。まず本遺跡が所在する早良平野に関して述べ、できれば周辺の平野や他の文化圏との関係についても概観しておきたい。

早良平野においては、古式土器器を二期に大別し、それぞれA・B二小期に細分した武末氏による論考が示されている。その中で「宮の前A期」の単純資料には、筆者の型式分類にそのままではまるものはないが、「宮の前B期」では、壺形土器A₂-Ⅰ・F₂-Ⅱ・H-Ⅰ類、鉢形土器H-Ⅰ類などが見うけられることから、「西新町Ⅱ式」に相応すると解釈し、本稿では「宮の前A期」が暫定的に「西新町Ⅱ式」に組み入れられる蓋然性を示唆するととどめておく。現状ではなお検討すべき余地を残してはいるが、「西新町Ⅳ式」が「有田Ⅰ式」のA・B両期にわたり対応する様式と理解しておくことにする。

また、畿内地方における「庄内式」の本編年における位置づけも、提起されるべき問題といえよう。北部九州において「庄内式」的特徴を有する壺形土器が出土した例は、福岡平野とその周辺では、柏田、三雲、今川の各遺跡において知られている。そのうち柏田遺跡の報告で、井上氏が「柏田Ⅰ期」の典型としてあげている壺Ⅰは、本文中、壺形土器G-Ⅰ類とした型式に該当するものである。本編年においては、「西新町Ⅱ式」と「同Ⅲ式」の中間に置いているが、これは土器の出土状況に数次にわたって堆積した可能性を考慮に入れた結果である。従ってこの器種をセット関係で捉えることはできないのだが、敢えて言及するなら、壺形土器G類の初現的な器種は「西新町Ⅱ式」の段階より、壺形土器F-Ⅱ類などの製作技法と供にもたらされた所産である壺形土器G-Ⅰ類(仮称)として設定されうらうだろう。しかしながら畿内においても不統一な数通りの名称で示されている「庄内式」の時期を、型式的にも類例が乏しい状況での判断は困難である。

従って所謂「庄内式」系の上器群は、「西新町Ⅱ式」を「布留式」の古相とした場合、「同Ⅲ式」に位置づけるのが適当かと思われる。そして両者の間には「庄内式」系の新しい要素と「布留式」系の古い傾向を有した土器群とが混在する過渡的の様相が小様式として設定される可能性を有していると考えている。これは「柏田Ⅱ期」にも共通する概念であるが、この様相は他の器種における型式上の流れを明記するまでに至らなかったため、今後の分析を進めよう。

で構成を明らかにしてゆきたい。

山陰方面では、青木遺跡において弥生時代中期より古墳時代後期にいたる編年案が示されているが、各遺構の出土資料を時期的に組み入れたもので、土器様式としては示されていないため、相互地域との対照にはやはり問題があるといえよう。

そうした中で、山陰・山陽地方における併行関係を、接点となる地域の資料に分析を加えて再構成した藤田憲司氏の見解は、両地方をパイプで結んだ論考として評価できよう。

西新町遺跡では、山陽地方の影響の強く認められるタイプを型式として確実に捉えることはできなかったが、いわゆる「酒津式」の甕形土器は、福岡平野でも多々良込田遺跡において検出されている。また岡山県の川入・上東遺跡では「才の町Ⅱ式」や「下田所式」の組成に「く」字状の口縁部を有する甕形土器がみられ、こうした土器の系統を北部九州に求める意見もある。

上記の状況をふまえて「西新町Ⅱ式土器」以降の様相と、畿内・山陰地方との併行関係の究明は、媒体となる土器型式の分析を進めてゆく過程で、比較資料の単位を単一の個体から組成に近いものとするまでに発展するであろう。今後それらの結果を基に、現在は深い関りが認められていない文化圏とのつながりも明らかにされてゆくのではないだろうか。

なお本項については、将来資料の分析・集成をすすめたうえで、詳解することとし、誠に舌足らずではあるが御許しを願いたい。

小 結

「西新町Ⅱ式」と「同Ⅱ式」との設定の基準は、主に畿内・山陰地方の影響をうけた土器群が在地系の土器の組成に明確な位置を占めるようになる傾向を、一つの期と認めたことによるものである。そして弥生時代終末をさす型式名として「西新式」を確立した森貞次郎氏の論考を考慮に入れたうえで、「西新町Ⅱ式」と「同Ⅱ式」の境に、弥生式土器と古式土器とを画する変換線を見出すことができるだろう。

ここで文化的背景が問題となるが、定型化した古墳の出現以前に、その基盤となる社会が、既に「古墳文化」と呼ばれうる類型に発達していたとするならば、その期間を一様式として古墳出土の土器群の一段落前の様式を古式土器とみなす解釈もなり立つ。だがしかし土器様式を組み立てる際に、背後の政治性や文化論を過剰に意識することは、土器編年の立場を崩壊させる危険性をも含んでいる。この点において「様式の変化は人間集団の社会的・経済的環境の変化を反映するが逆は必ずしも成り立たない」とする寺沢氏の考えに賛同し、土器型式の動向を忠実に追うことを基本としてゆきたい。

今日弥生時代終焉の問題は、地域によって方形周溝墓や四隅突出墳など墳丘墓の位置づけと相俟って複雑な様相を呈している。土器様式の把握は、こうした地方文化圏を究明するうえで考古学の最も基礎的な作業であり、一つの土器様式は他の文化様式と対比させることによって、

地域文化の歴史的な性格は、一層明確化される。過去の土器の編年論は、土器様式の先後関係及び相互関係の把握として、純粋に資料的な価値を再構成する時期にきている。

最後にあたり、Ⅱ・第1章第3項の挿図 (Fig. 13) に示した「西新式」の指標とされてきた壺形土器と甕形土器の、本編年試案における位置づけであるが、壺形土器はD-Ⅰ類、甕形土器はB-Ⅰ類として、各々「西新町Ⅱ式土器」で捉えられる結果となった。

ここに「西新町Ⅱ式」を、弥生時代終末をさす様式名として従来の「西新式」に充てることを提唱したい。そして、これまで「西新式」や「西新町式」と呼び慣らわれてきた呼称をここで、後者に統一してはいかかなものであろうか。

また「西新町Ⅱ式」から「同Ⅱ式」にかけての資料は基本となる土器型式の変化に留意しながら、中核をなす様式の確立につとめる必要がある今日、そうした様式を細分するまでに至っていないのが現状である。

西新町遺跡出土の土器群は、編年上四つの様式で捉えられた。そして海に近接している地理的条件は、他の地方との活発な交渉として、そのまま土器の組成に映し出されていると言えよう。そうした現象は、この遺跡が、在地系の土器群を擁する文化圏と山陰・瀬戸内・畿内などの各文化圏とを結ぶ、開接的位置にあることを示している。

今後、本報告について論議が交されることにより、他の地方文化圏を含めた併行関係や文化構成の背景となる時代的様相の解明を行ううえで一助となれば幸いである。

この論考をまとめるにあたり、西谷 正先生を始め多くの方々のお助言や教示を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

註

- (1) 春日市教育委員会「赤井手遺跡」春日市文化財調査報告書第6集 1980年
- (2) 福岡県教育委員会「三雲遺跡Ⅰ」福岡県文化財調査報告書第58集 1980年、「三雲遺跡Ⅱ」福岡県文化財調査報告書第60集 1981年
- (3) 1980年に調査が行われた藤崎バスターミナルの建設に伴い検出された土器の一部を報告者の御厚意により掲載させていただいた。
- (4) 山本清「島根県安来市鍵尾の土壘墓群とその土器」日本考古学協会29回総会研究発表要旨 1963年
- (5) 鳥取県米子市所在「青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ」青木遺跡調査団 1978年
- (6) 岡壁忠彦「倉敷市津津及新屋敷出土の土器」瀬戸内考古学第2号 1958年
- (7) 田中琢「布留式以前」考古学研究第12巻第2号 1965年
- (8) 安達厚三、木下正史「飛鳥地方出土の古式土器」考古学雑誌第60巻第2号 1974年

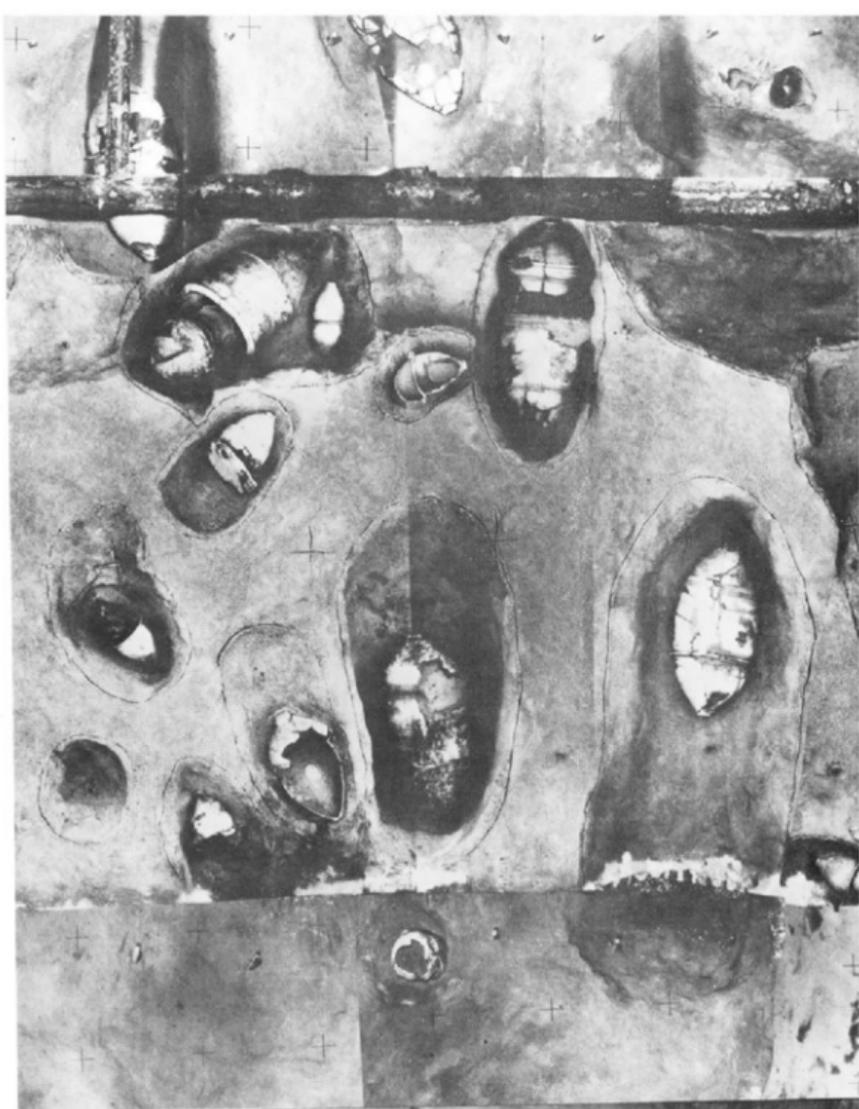
- (9) 柳田康雄「炭焼古墳群」福岡県文化財調査報告書第37集 1968年
- (10) 甘木市教育委員会「神蔵古墳」甘木市文化財調査報告書第3集 1978年
- (11) 高山明「土師式土器集成本編1前期」1971年
- (12) 福原考古学研究所編「経向」1976年
- (13) 本項において「様式」という概念は、小林行雄氏の論によるところが多く、「複数の型式の同時性」を表わす語として用いた。
小林行雄「先史考古学に於ける様式問題」考古学4～8 1933年
小林行雄「弥生式土器集成図録」1938年など
- (14) 福岡県教育委員会「三雲遺跡Ⅱ」福岡県文化財調査報告第60集 1981年
- (15) 春日市教育委員会「赤井手遺跡」春日市文化財調査報告書第6集 1980年
- (16) 下條信行・沢皇臣編「宮の前遺跡(A～D地点)弥生～古墳時代移行期の墳墓と壙穴の調査報告」福岡県労働者住宅生活協同組合 1971年
- (17) 福岡市教育委員会「有田周辺遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集 1977年
福岡市教育委員会「福岡市有田・小山部第1集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集 1980年
- (18) 有田遺跡調査団「有田遺跡 福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告」1968年
- (19) 福岡市教育委員会「牟田多遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集 1974年
- (20) 福岡市教育委員会「野方中原遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974年
- (21) 柳田純孝「野方中原遺跡の遺物(Ⅱ)A溝出土の土器」福岡市立歴史資料館研究報告第2集 1978年
- (22) 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第1集 1970年、第4集 1976年、第5集 1977年
- (23) 武末統一「福岡県・早良平野の古式土師器」古文化叢書第5集 1978年
- (24) 福岡県教育委員会「宮の前遺跡E地点」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 1970年
下條信行・沢皇臣編「宮の前遺跡(A～D地点)弥生～古墳時代移行期の墳墓と壙穴の調査報告」福岡県労働者住宅生活協同組合 1971年
福岡市教育委員会「宮の前遺跡F地点」福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 1971年
- (25) 武末統一 前掲(23)
- (26) 福岡市教育委員会「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981年
- (27) 福岡県「藤崎の石棺」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第1輯 1925年

- (28) 中山平次郎「古式支那鏡蓋沿革(二)」考古学雑誌第9巻第3号 1918年
- (29) 浜石哲也「方形周溝墓出土の鏡 福岡市藤崎遺跡」考古学ジャーナル185 1981年
- (30) 井上裕弘編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第4集」福岡県教育委員会 1977年
- (31) 佐々木隆彦編「今光遺跡・地余遺跡」東急不動産株式会社 1980年
- (32) 春日市教育委員会「赤井手遺跡」春日市文化財調査報告書第6集 1980年
- (33) 甘木市教育委員会「小田道遺跡」甘木市文化財調査報告第8集 1981年
- (34) 甘木市教育委員会「神蔵古墳」甘木市文化財調査報告第3集 1978年
- (35) 狐塚遺跡調査団「狐塚遺跡、福岡県筑後市上北島集落遺跡の調査」 1970年
- (36) 岡崎敬「日本考古学の方法 古代史の基礎的条件」古代の日本9 研究資料 1971年
- (37) 福岡県教育委員会「三雲遺跡Ⅰ」福岡県文化財調査報告書第58集 1980年、「三雲遺跡Ⅱ」福岡県文化財調査報告書第60集 1981年
- (38) 武末純一 前掲(23)
- (39) 田中琢前掲(7)
- (40) 井上裕弘 前掲(30)
- (41) 柳田康雄氏の御教示による。
- (42) 伊崎俊秋「今川遺跡」津原崎町文化財調査報告書第4集 1981年、包含層中層出土の埴形土器は河内地方より搬入された可能性がつかいとしている。
- (43) 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」大阪府島上高等学校研究紀要3号 1968年
都出比呂志「古墳出現前後の集団関係」考古学研究第20巻第4号 1974年
榎原考古学研究所編「趣向」 1977年など
- (44) 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」考古学研究第26巻第3号 1979年
- (45) 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書ⅢA・B・E・H地区」 1978年
- (46) 藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」考古学雑誌第64巻第4号 1979年
- (47) 福岡市教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集 1975年
- (48) 岡山県教育委員会「川入・上東」岡山県埋蔵文化財調査報告16 1977年
- (49) 森貞次郎「九州 日本の考古学Ⅱ」 1966年
- (50) 都出比呂志 前掲(43)
- (51) 寺沢薫「大和におけるいわゆる第5様式土器の細別と二・三の問題」六条山遺跡 奈良県文化財調査報告書第34集 1980年
- (52) 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓——熊築遺跡をめぐって——」岡山大学法文学部学術紀要第37号 1977年

圖 版

PLATES





(上) 甕棺墓遠景

(下) 甕棺墓近景

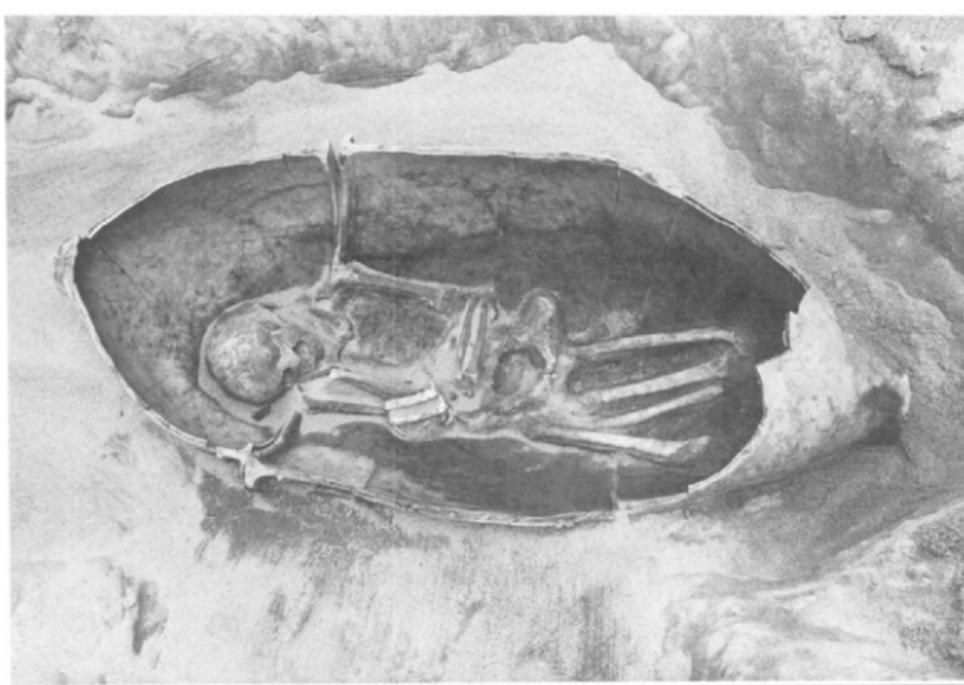






(上) 第1号甕棺墓と人骨・(下) 第12号甕棺墓と人骨





(上) 第10号甕棺墓と人骨全景・(下) 第10号甕棺墓の人骨と貝輪





第11号喪棺墓出土の人骨



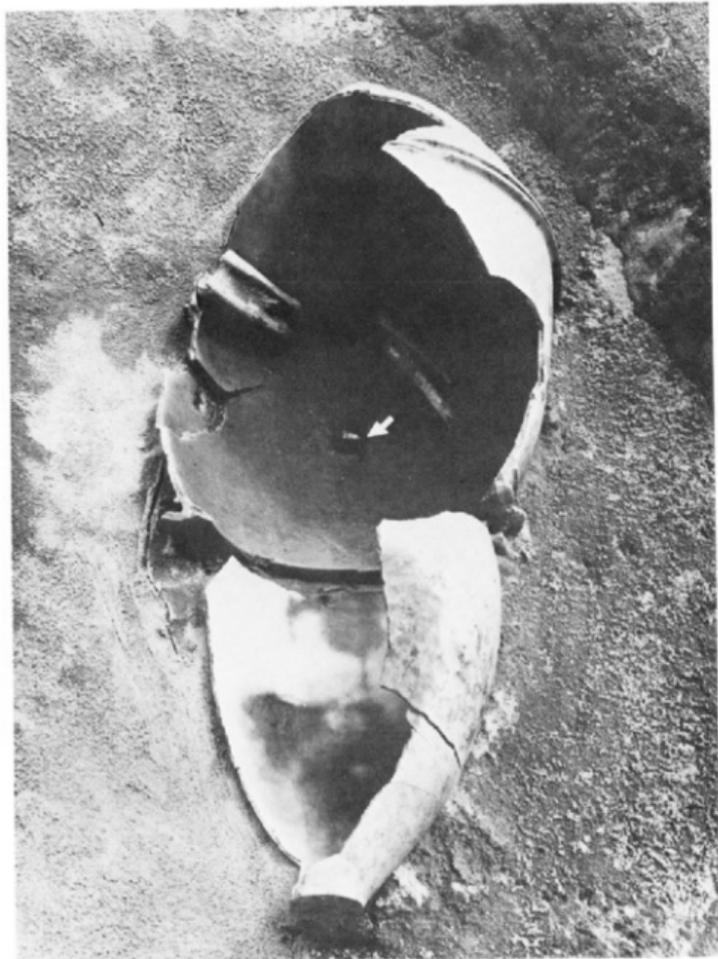
第12号喪棺墓出土の人骨





(上) 第13号甕棺墓と人骨・(下) 第19号甕棺墓全景





第19号甕棺墓と銅剣の切先(矢印)





1. 第1号甕棺 (上·下)



2. 第2号甕棺



3. 第3号甕棺 (上·下)



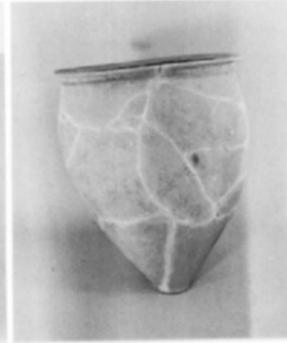
4. 第4号甕棺 (上)



第4号甕棺 (下)



5. 第5号甕棺 (上·下)







6. 第6号甕棺 (上·上·下)



7. 第7号甕棺

8. 第8号甕棺(上·下)



9. 第10号甕棺 (上·下)

10. 第10号甕棺 (上)





10. 第10号甕棺 (下)



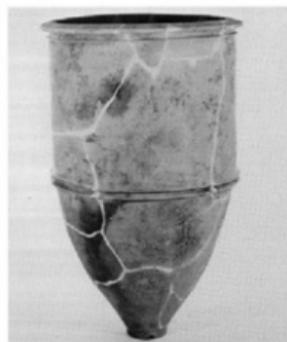
11. 第11号甕棺 (上·下)



12. 第12号甕棺 (上·下)



13. 第13号甕棺 (上)



第13号甕棺 (下)



14. 第14号甕棺



15. 第15号甕棺 (上)



15. 第15号甕棺 (下)



16. 第16号甕棺 (上·下)



17. 第17号甕棺



18. 第18号甕棺 (上·下)



19. 第19号甕棺 (上·下)



20. 第20号甕棺 (上)



20. 第20号甕棺 (下)



21. 第21号甕棺



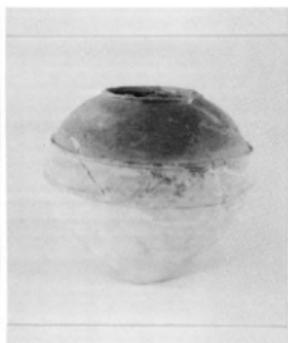
22. 第22号甕棺 (上)



第22号甕棺 (下)



23. 第23号甕棺



24. 第24号甕棺 (上)



第24号甕棺 (下)



25. 第25号甕棺 (上·下)





26. 第26号甕棺 (上·下)



27. 第27号甕棺 (上)



第27号甕棺 (下)



28. 第28号甕棺 (上·下)



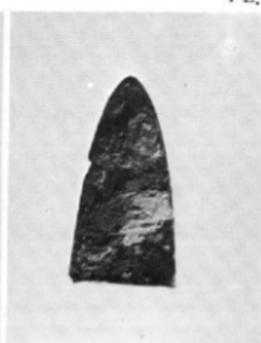
29. 第29号甕棺 (上·下)



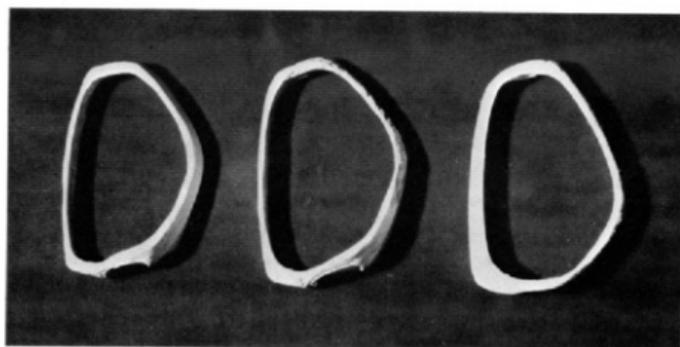
30. 第30号甕棺 (上)



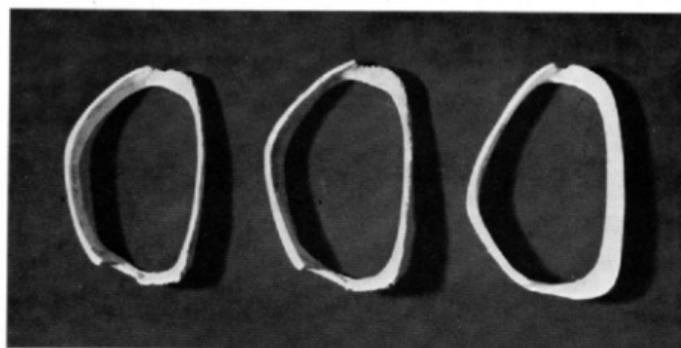
第30号壺棺（下）



第19号壺棺墓内出土銅劍の切先（表・裏）



第10号壺棺墓内人骨の副葬貝輪（表）



第10号壺棺墓内人骨の副葬貝輪（裏）



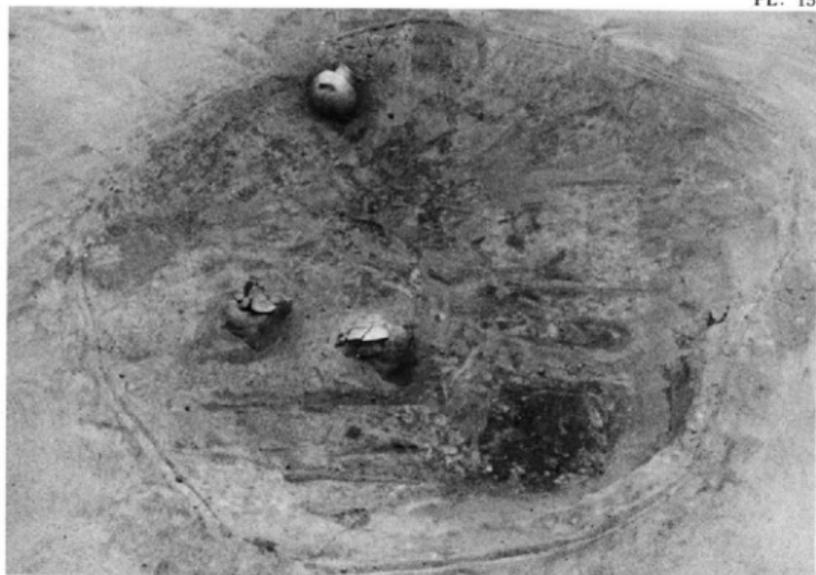


A地区第5号窑穴式住居跡



A地区第11号窑穴式住居跡





A地区第1号土坑



A地区第3号土坑

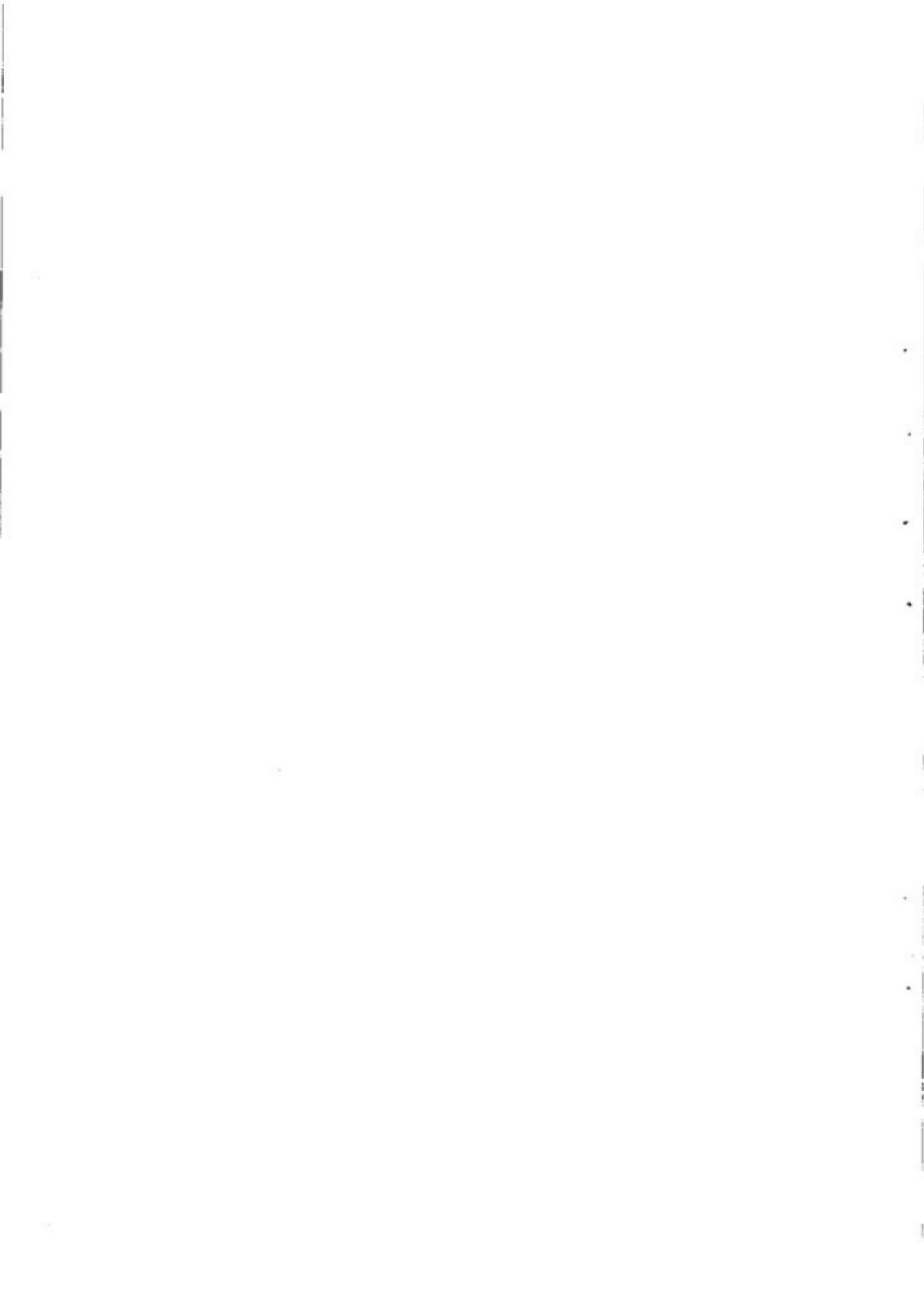


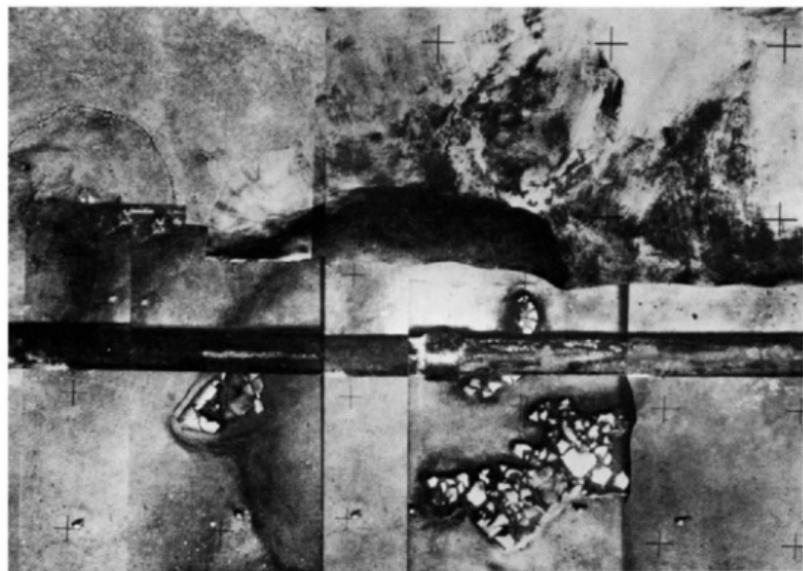


B地区第1号竖穴式住居跡・第1号土壇・第1号壘棺墓



B地区第4号土壇

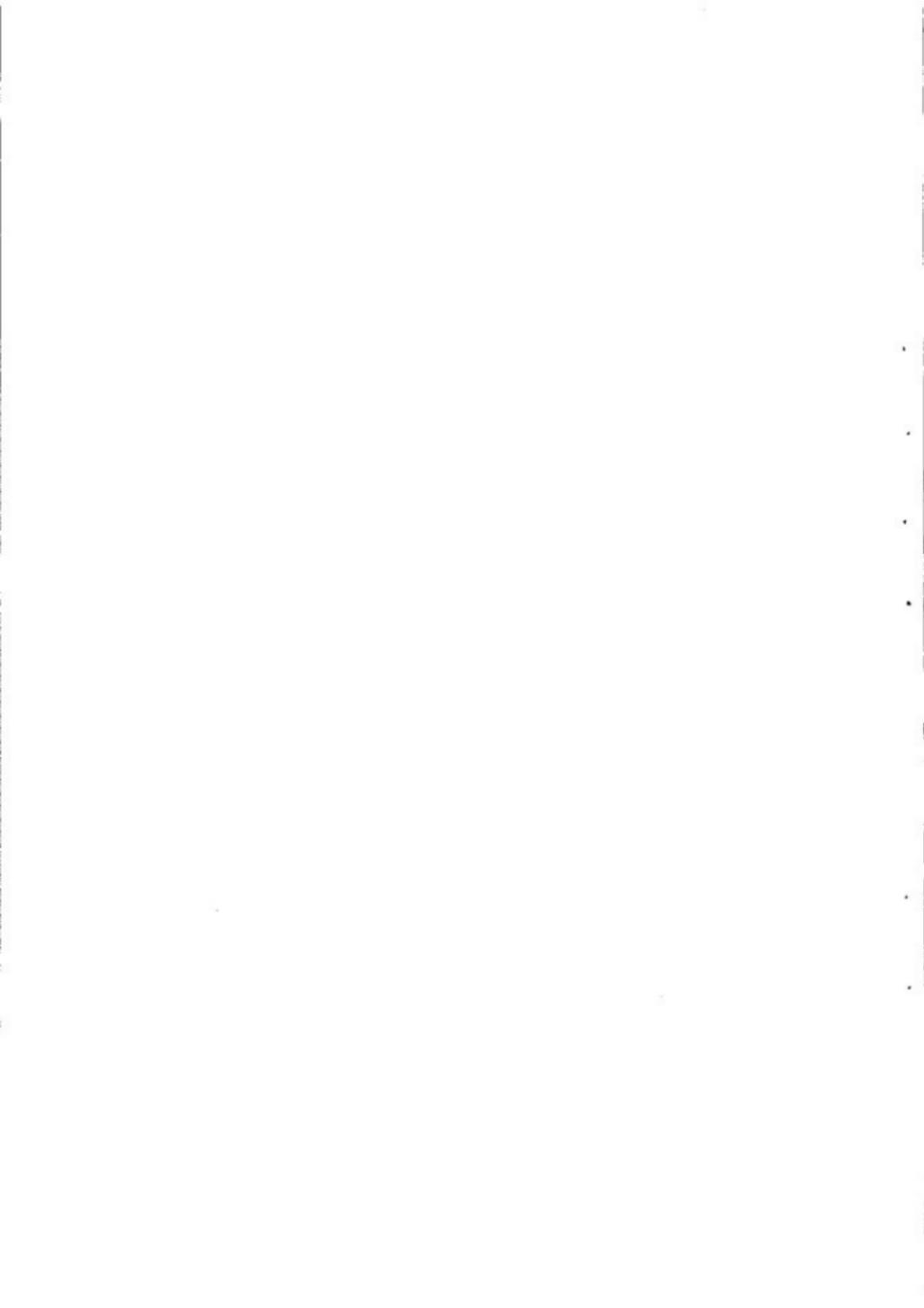




C地区第3号竖穴式住居跡



C地区第9号竖穴式住居跡





D地区第1·15号竖穴式住居跡



D地区第2·3号竖穴式住居跡

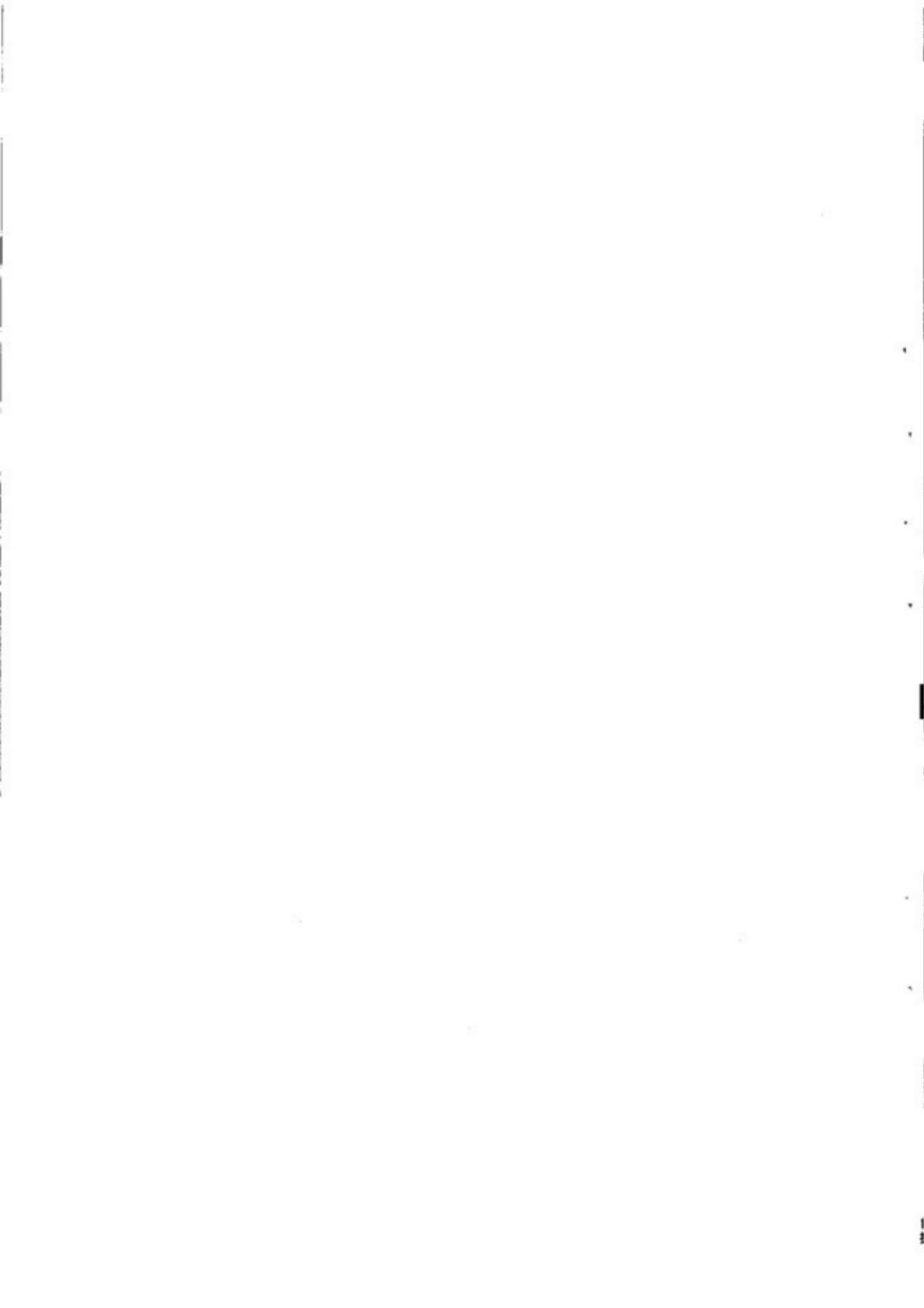




D地区第3・11号竖穴式住居跡

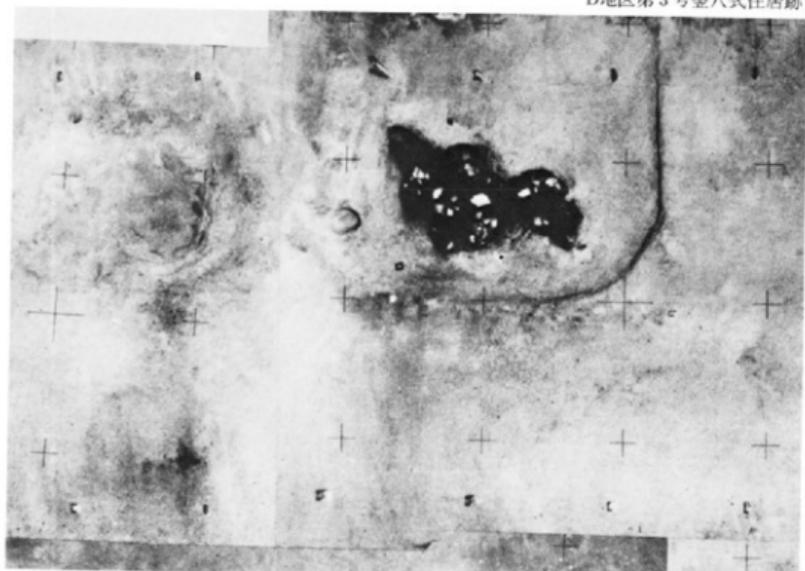


D地区第3号竖穴式住居跡

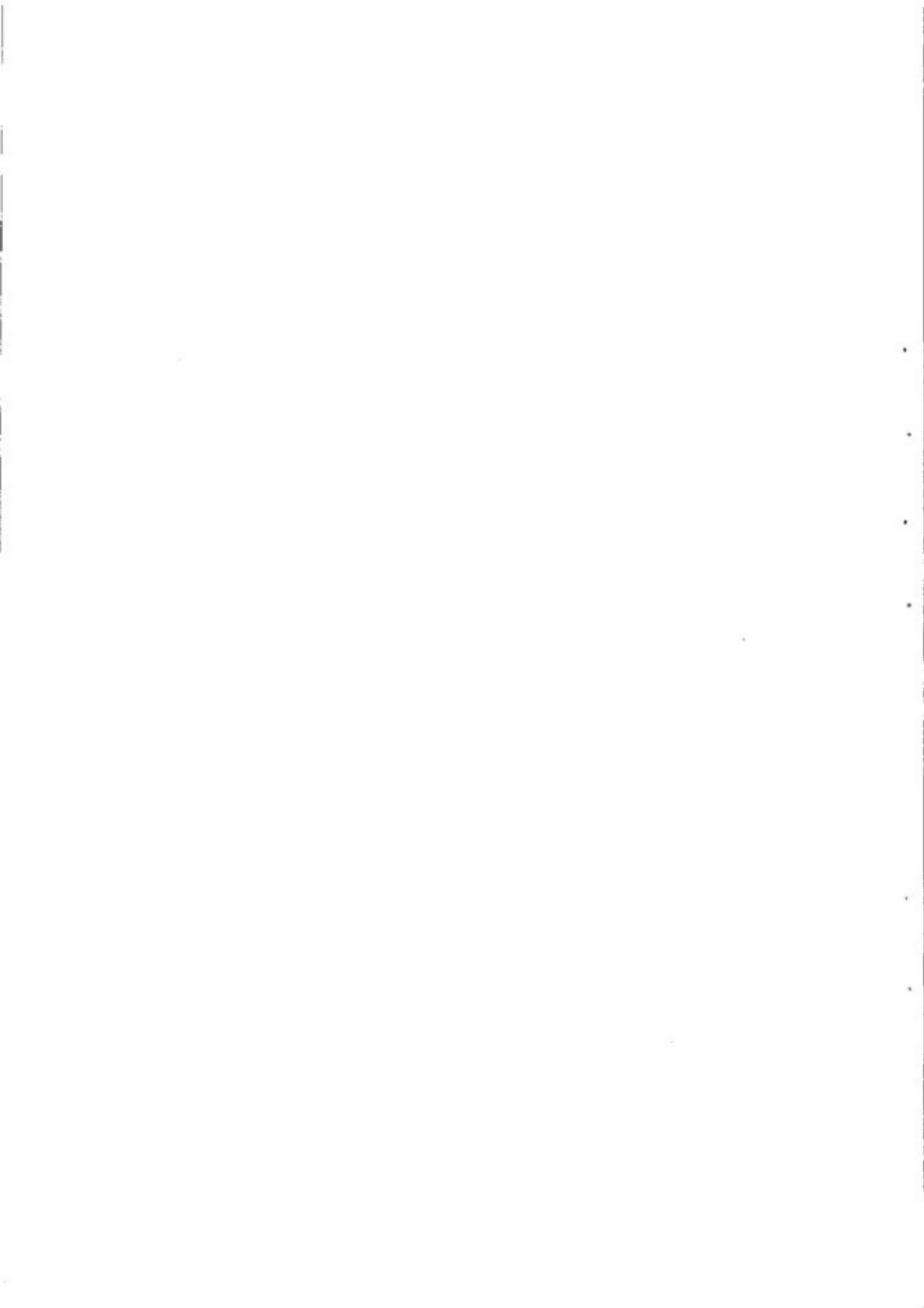




D地区第3号竖穴式住居跡



D地区第10号竖穴式住居跡

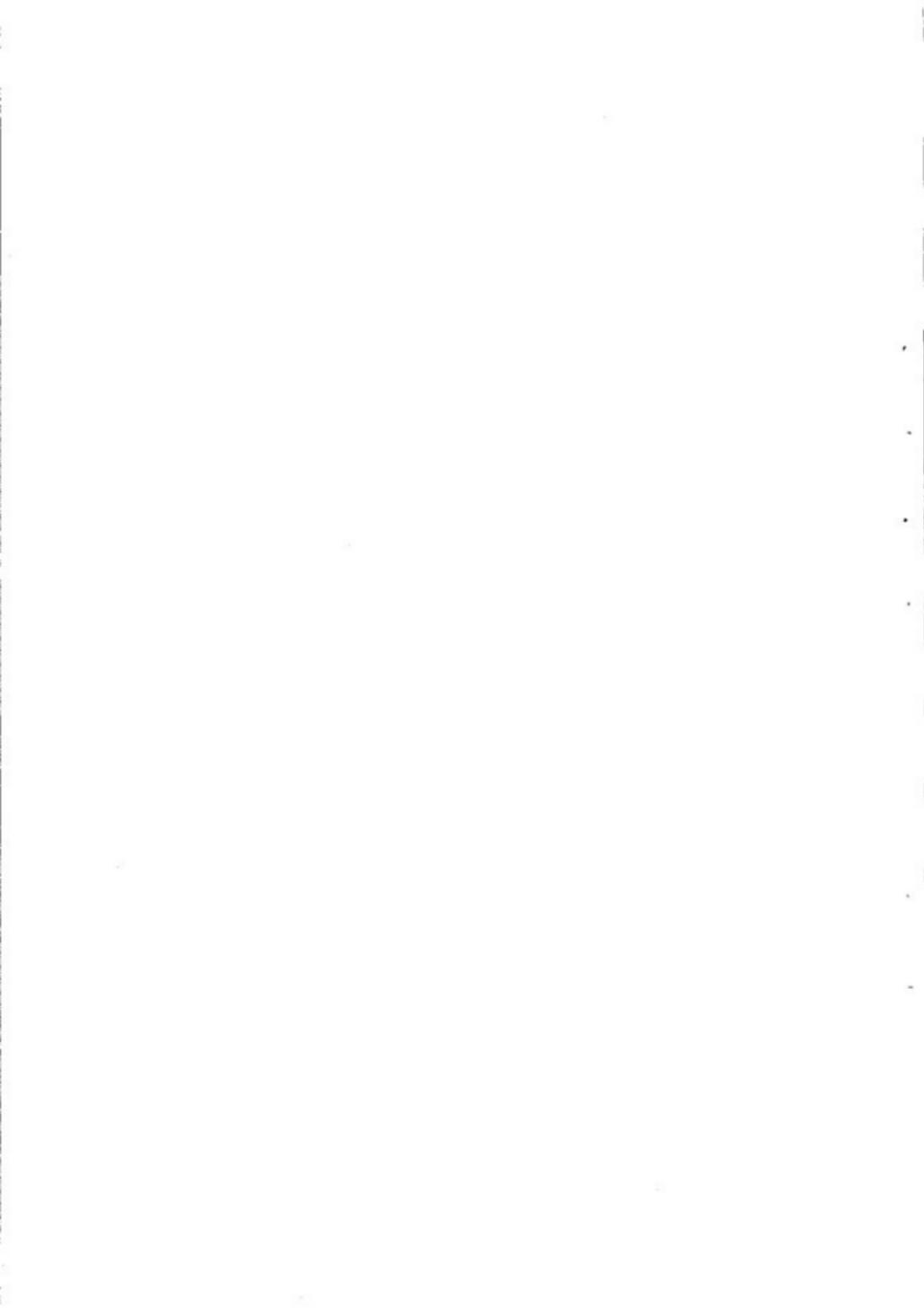




D地区第4号竖穴式住居跡

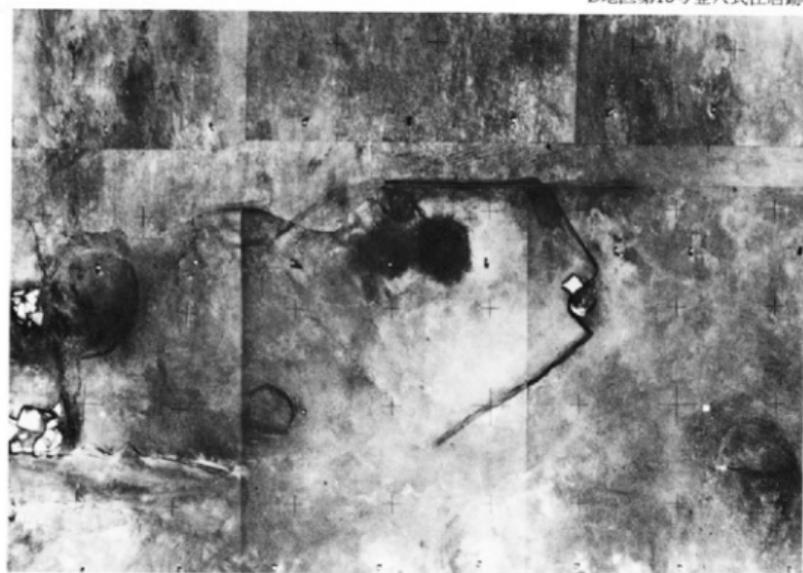


D地区第4号竖穴式住居跡





D地区第13号竖穴式住居跡



D地区第14号竖穴式住居跡





F地区第1号竪穴式住居跡



F地区第1号竪穴式住居跡かまど



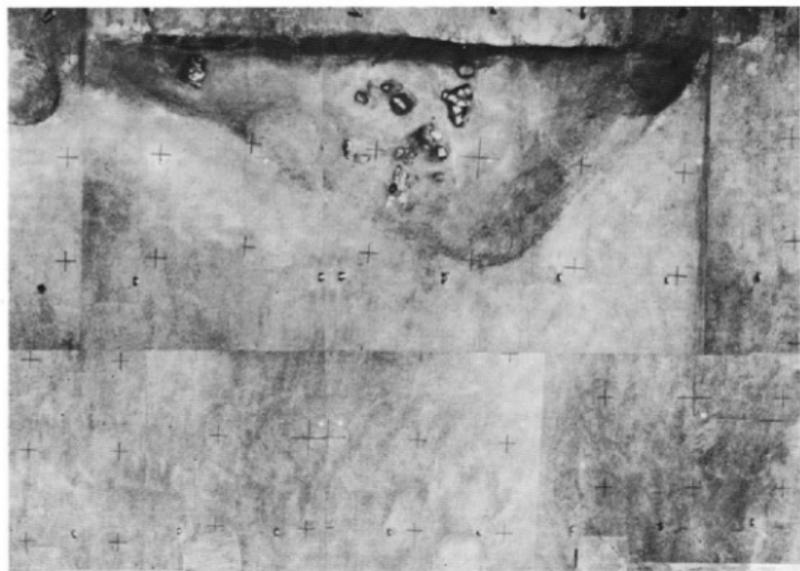


F地区第1号竖穴式住居跡かまど断面



F地区第2号竖穴式住居跡

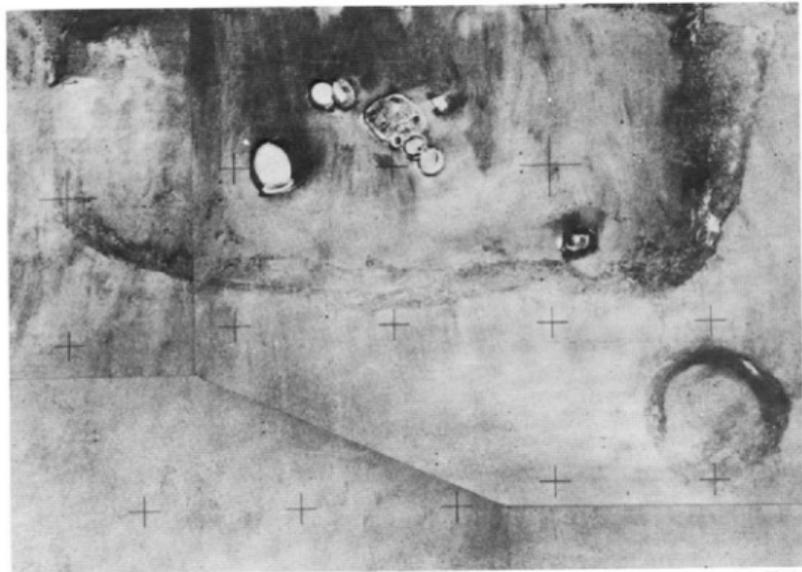




G地区第1号竖穴式住居跡



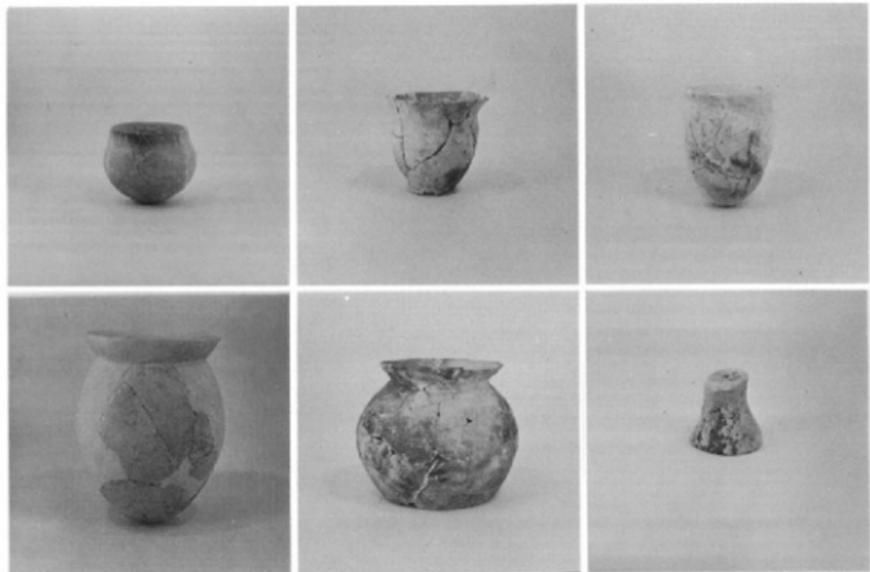
G地区第3号竖穴式住居跡



H地区第3号竖穴式住居跡



H地区第3号竖穴式住居跡



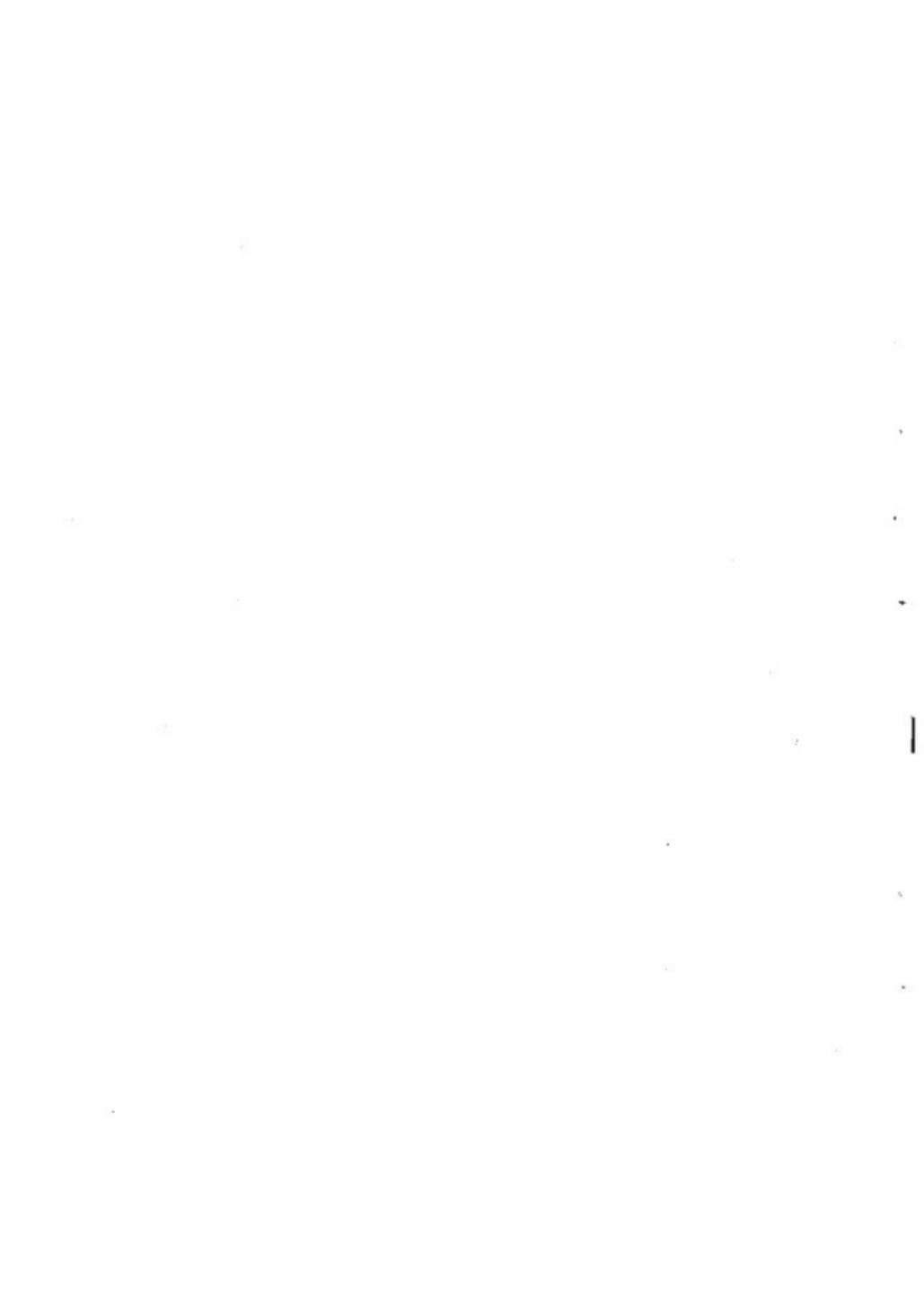
A地区第1号竖穴式住居跡出土土器

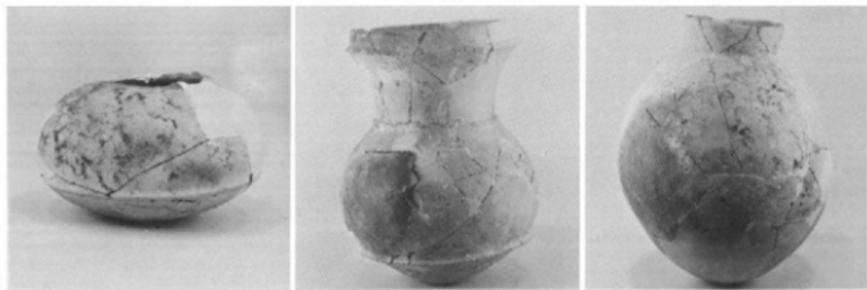


A地区第11号竖穴式住居跡出土土器



B地区第1号竖穴式住居跡出土土器

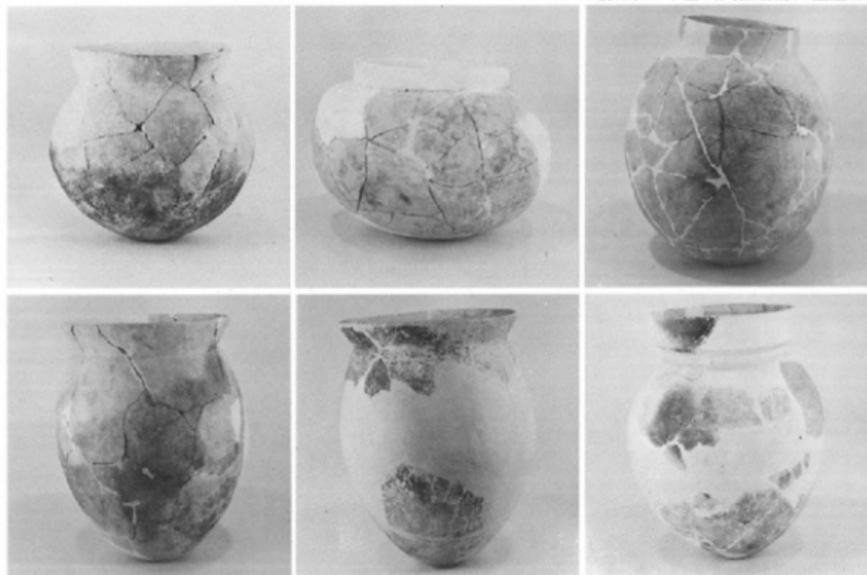




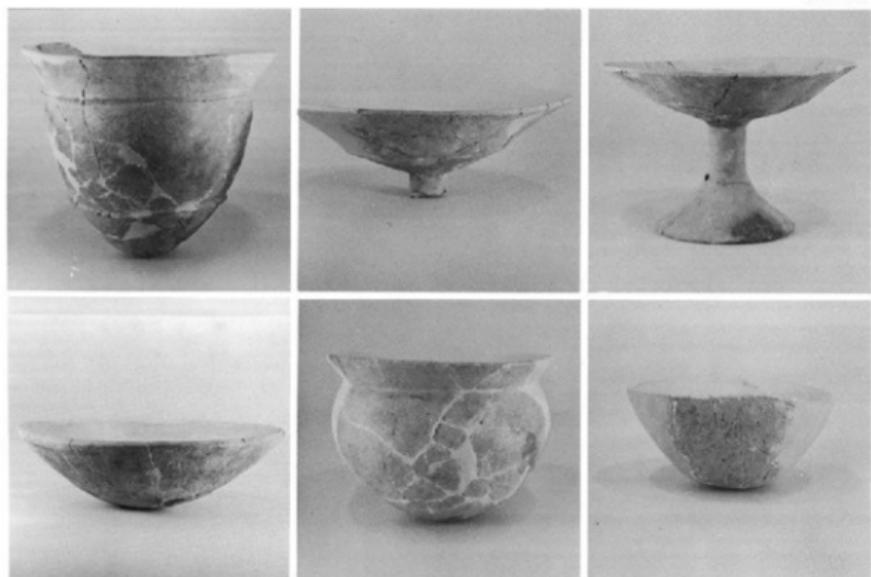
C地区第1号竖穴式住居跡出土土器



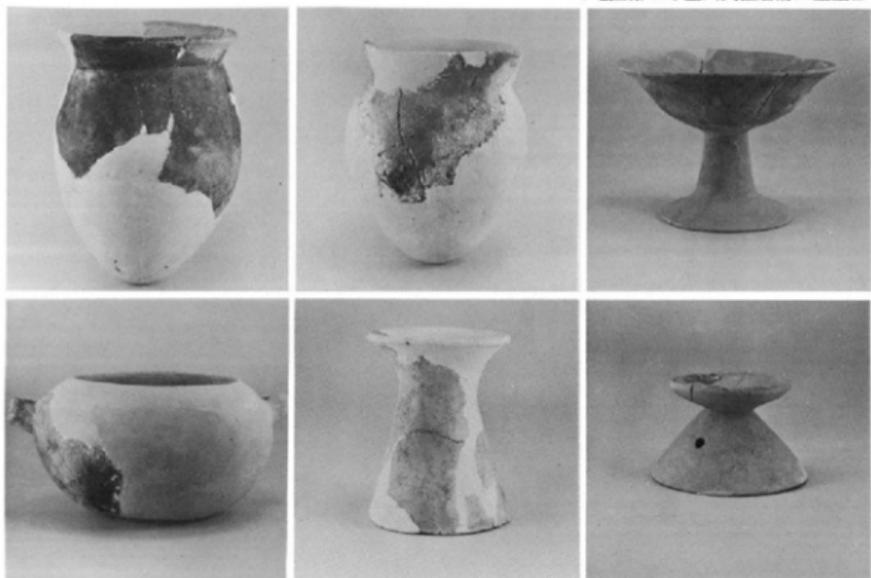
C地区第2号竖穴式住居跡出土土器



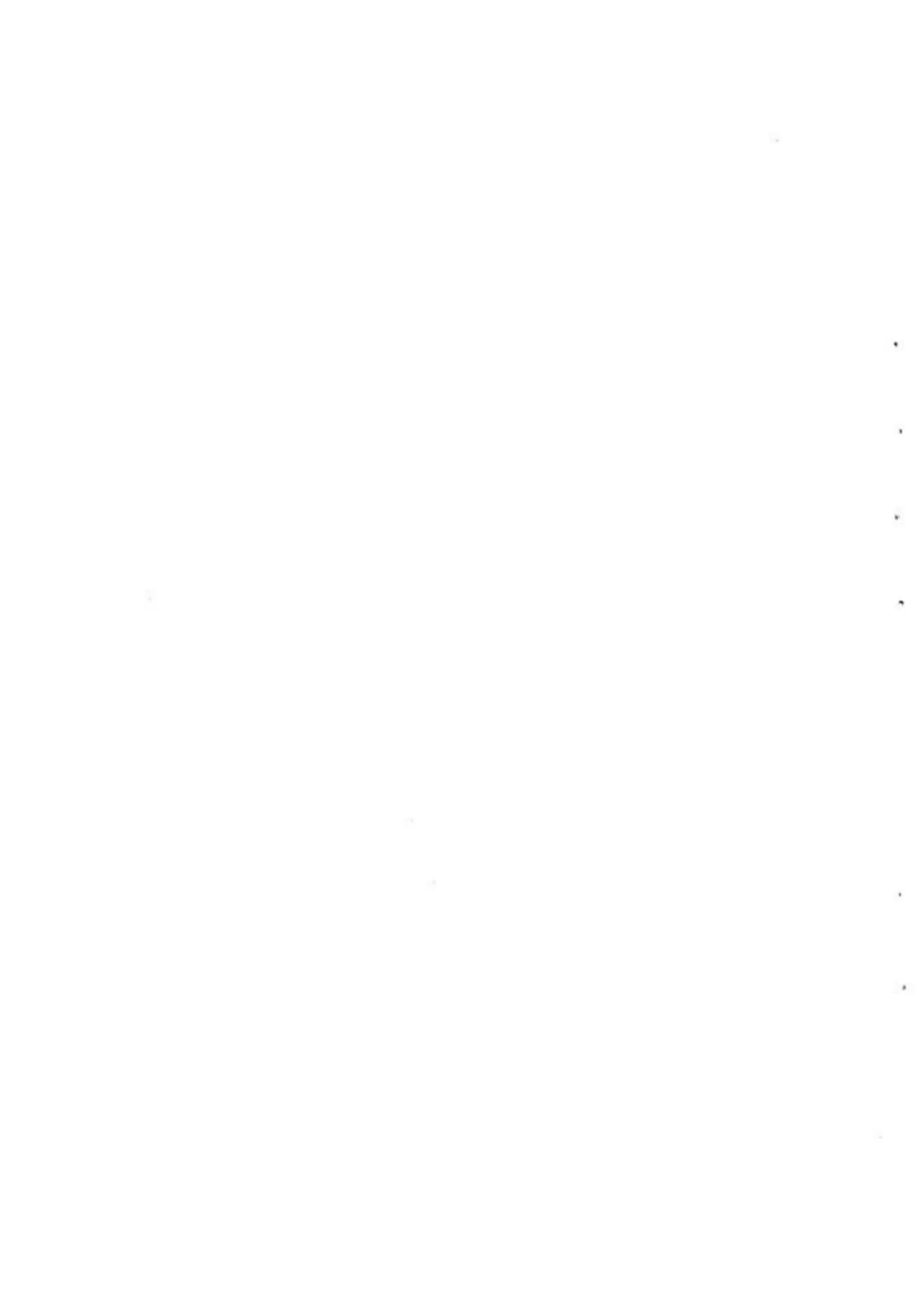
C地区第3号竖穴式住居跡出土土器

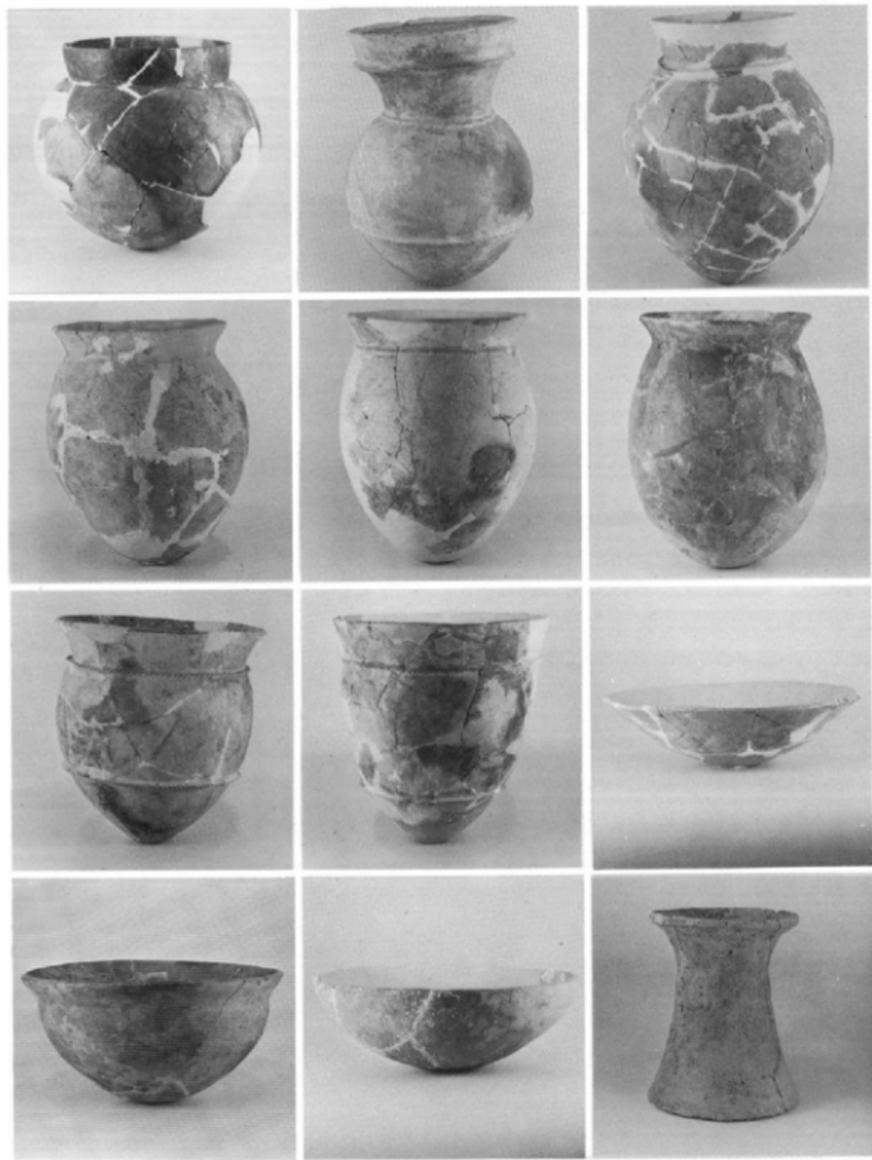


C地区第3号竖穴式住居跡出土土器

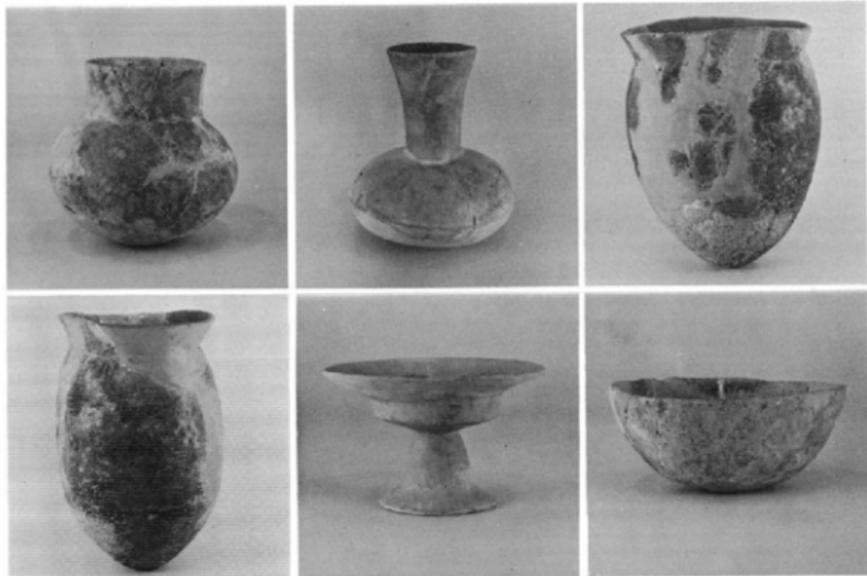


D地区第1号竖穴式住居跡出土土器

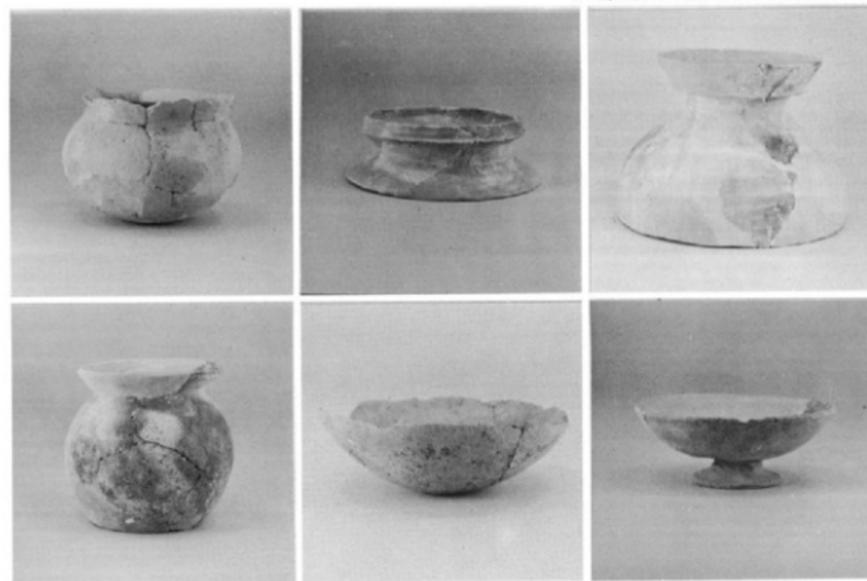




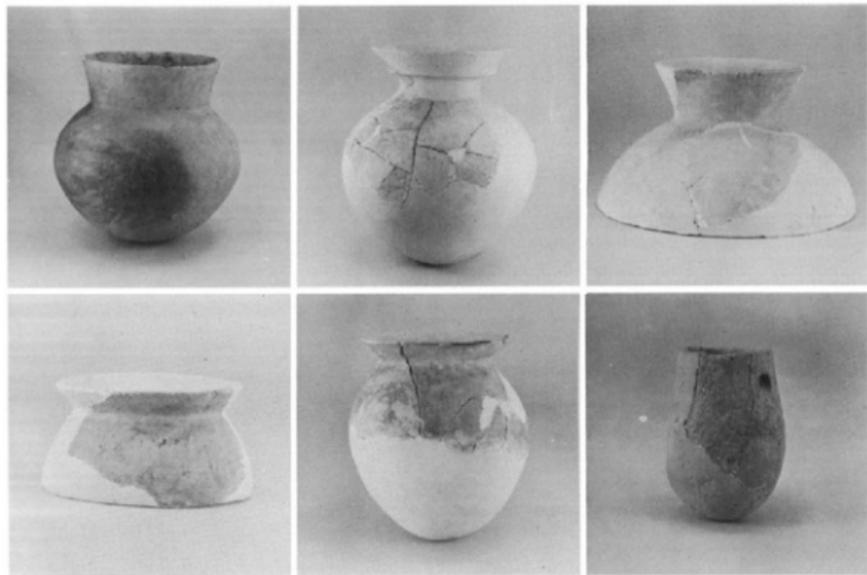
D地区第3号竖穴式住居跡出土土器



D地区第4号竖穴式住居跡出土土器



D地区第5号竖穴式住居跡出土土器



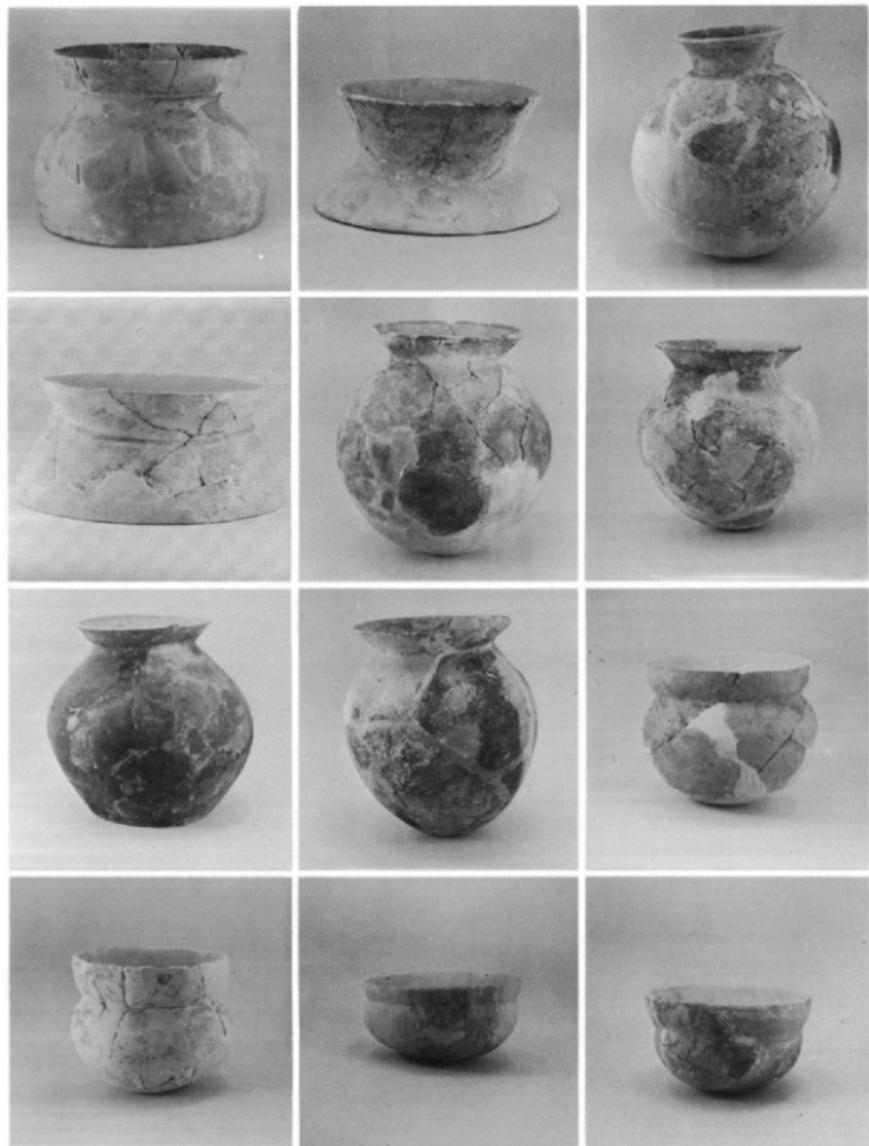
D地区第6号竖穴式住居跡出土土器



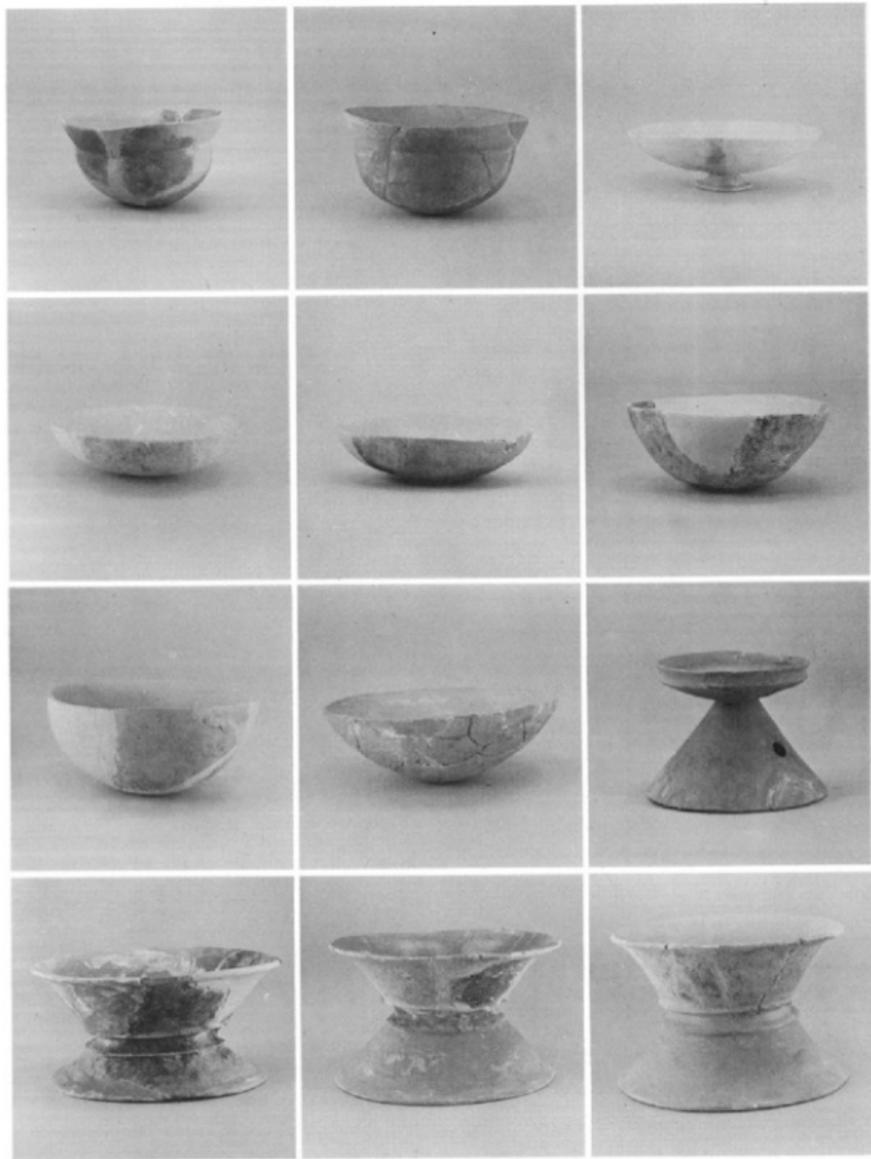
D地区第7号竖穴式住居跡出土土器



D地区第8号竖穴式住居跡出土土器



D地区第8号竖穴式住居跡出土土器

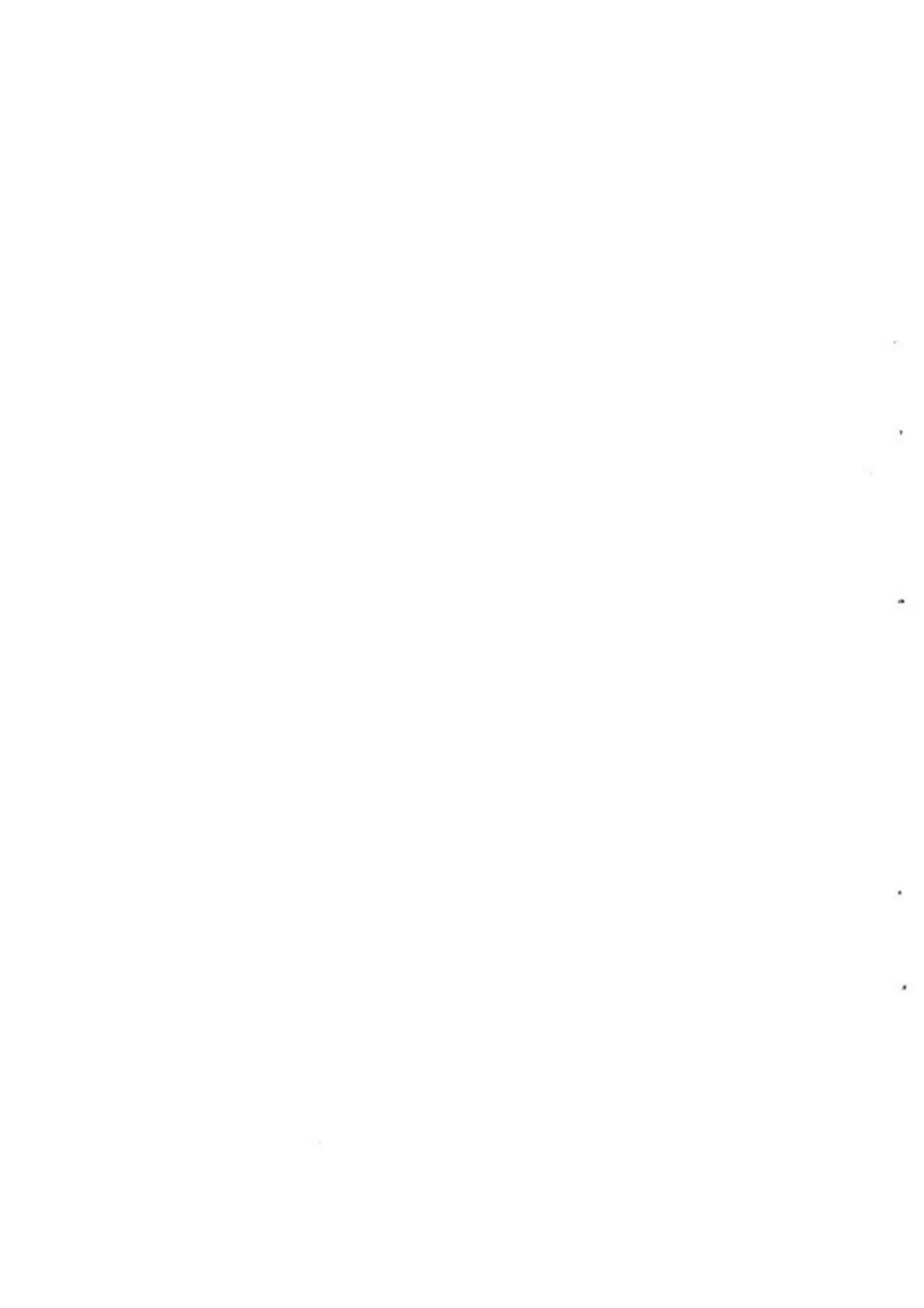


D地区第8号竖穴式住居跡出土土器



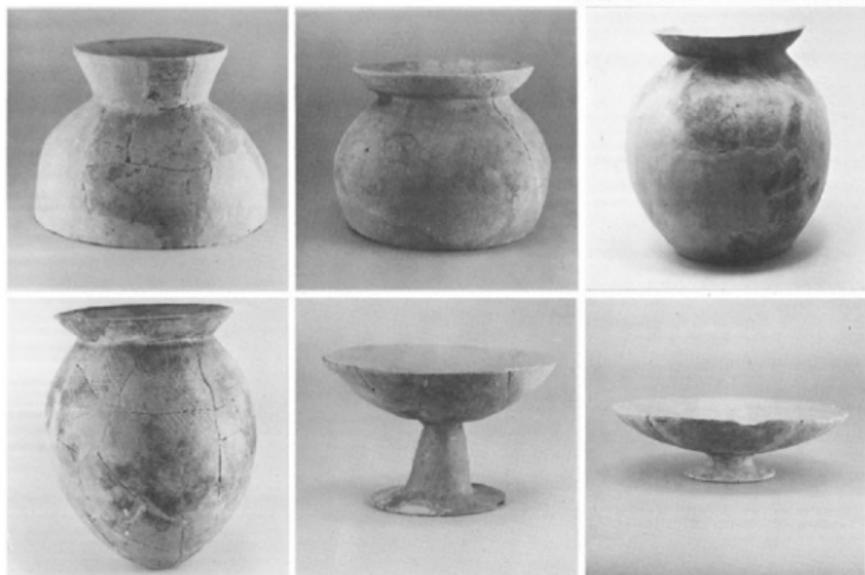


D地区第11号竖穴式住居跡出土土器





D地区第13号整穴式住居跡出土土器



D地区第16号整穴式住居跡出土土器



D地区第17号整穴式住居跡出土土器



E地区第2号整穴式住居跡出土土器



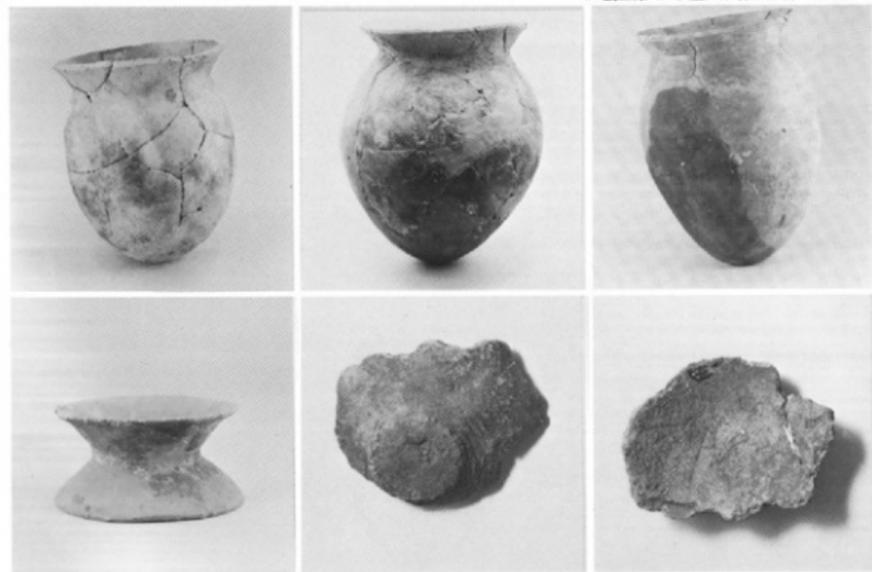
E地区第2号整穴式住居跡出土土器



E地区第4号整穴式住居跡出土土器



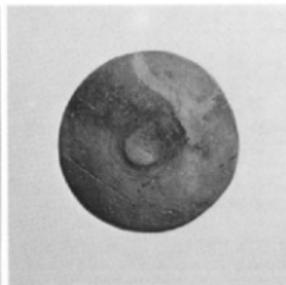
G地区第1号竖穴式住居跡出土土器



H地区第2号竖穴式住居跡出土土器

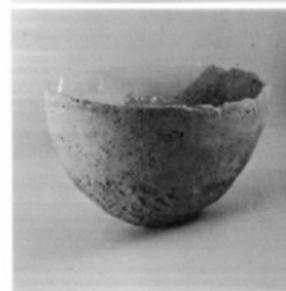


H地区第3号竖穴式住居跡出土土器



H地区第2号土壇出土土器

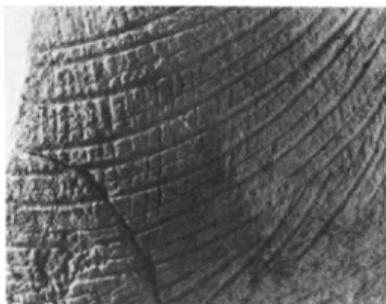
F地区第2号竖穴式住居跡出土土器



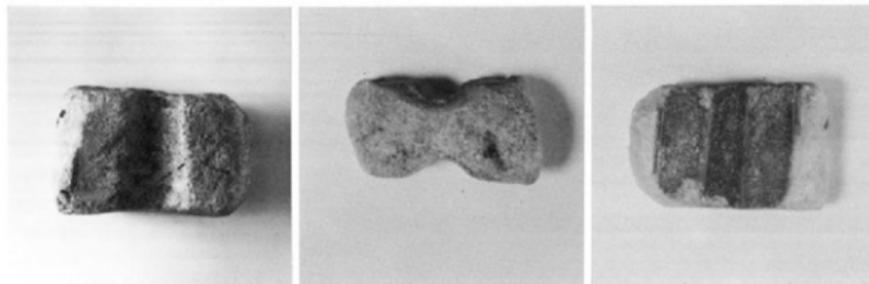
A地区第3号土壇出土土器



F地区第1号竪穴式住居跡出土土器
全体(左)・部分(右)



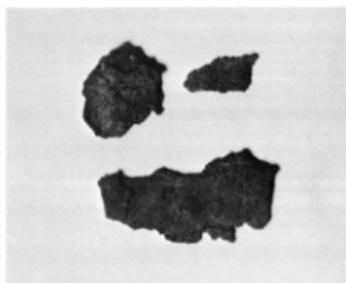
E地区第3号竪穴式住居跡出土土器
正面より(上左) 上より(上右) 外面の調整紋大(下)



D地区第8号竪穴式住居跡出土の銅剣の鋳型
 (未使用の面-左・断面-中・使用した面-右)



鉄斧



鉄斧(下)・鐵(上右)

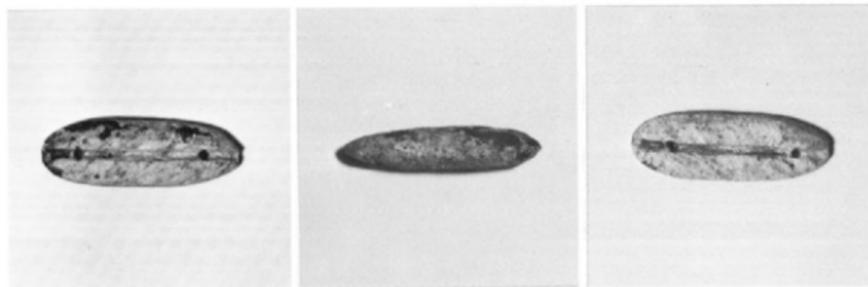


鐵(3方向より)

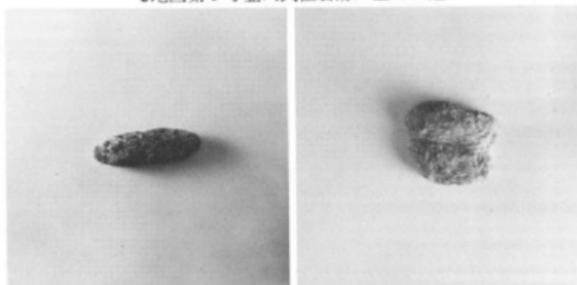


鉄斧

覆土中出土の鉄器

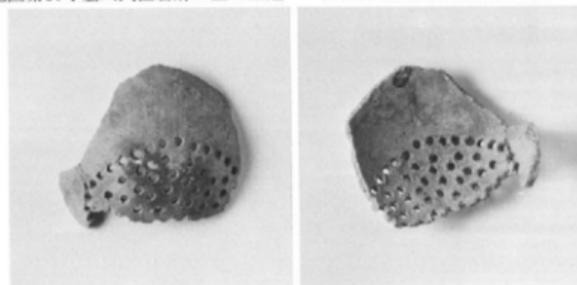


C地区第9号竪穴式住居跡出土の石錘

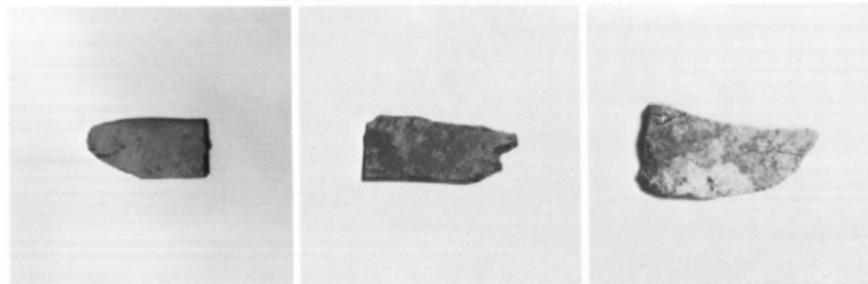


D地区第16号竪穴式住居跡出土の土錘

排土中より検出された石錘

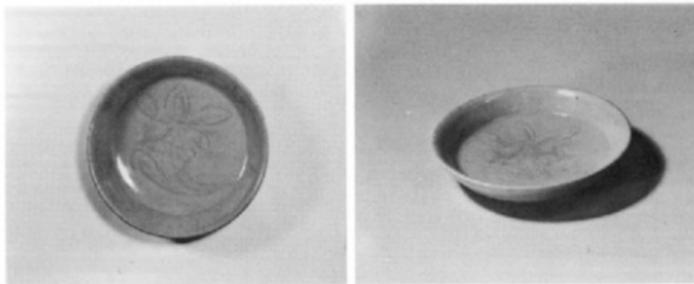


D地区第17号竪穴式住居跡出土の甔形土器の底部

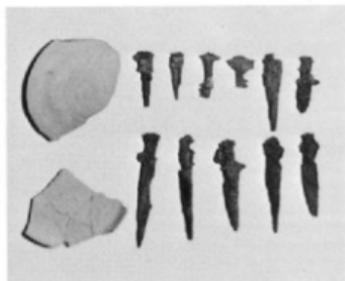


D地区第16号竪穴式住居跡出土の砥石

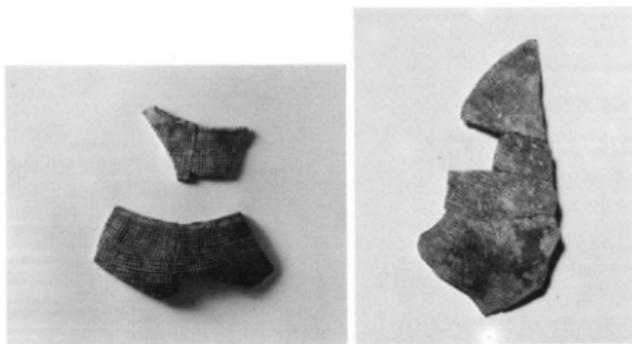
D地区第17号竪穴式住居跡出土の砥石



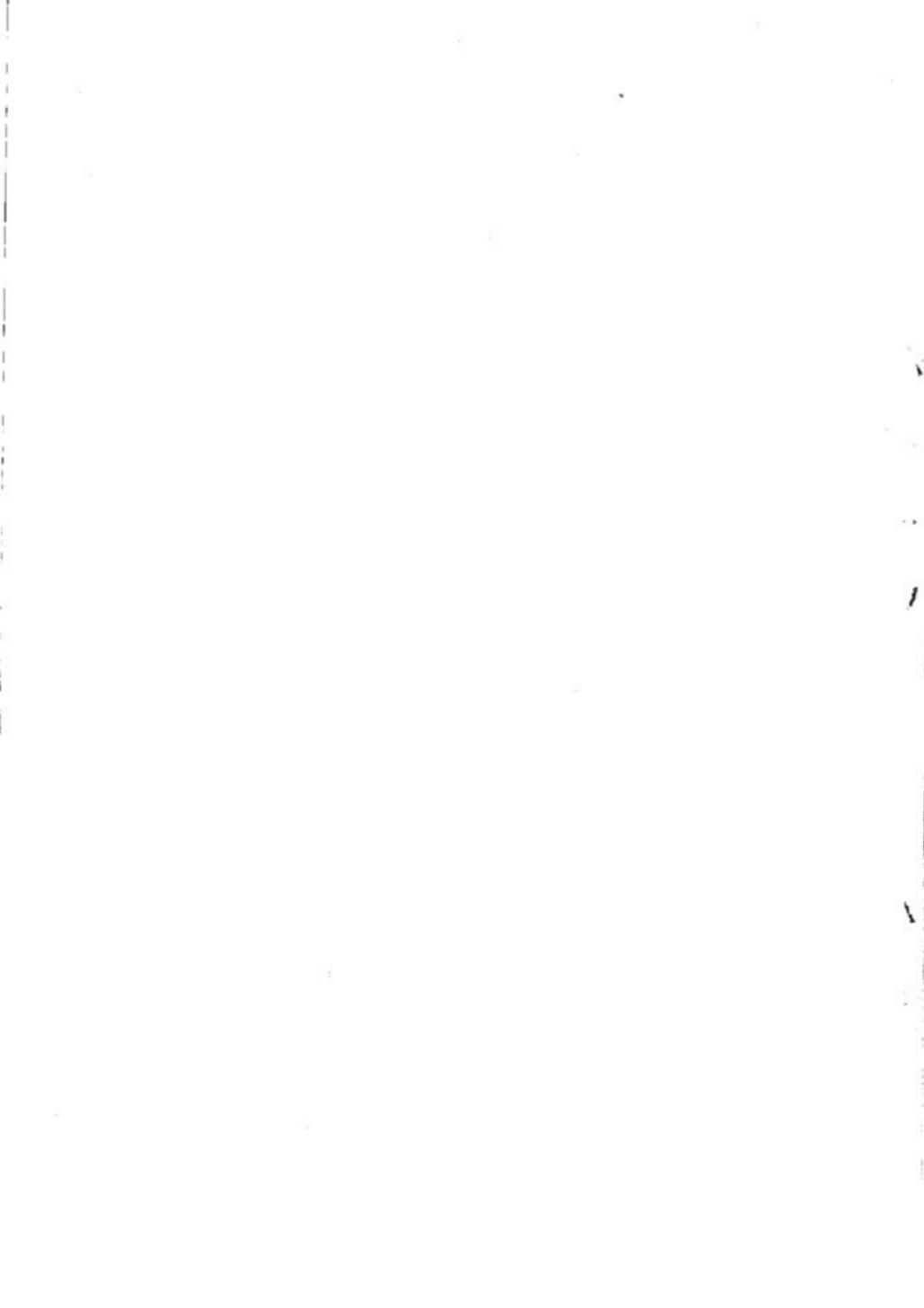
中世木棺墓出土の青磁皿



中世木棺墓出土の土師器の皿及び鉄製の留釘



E地区第2号竪穴式住居跡出土の陶質土器



福岡市
高速鉄道関係埋蔵文化財報告Ⅱ
西新町遺跡

1982(昭和57)年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23
印刷 福博綜合印刷機
福岡市博多区壱粕3丁目16番36号

高速鐵道關係埋藏文化財調查報告Ⅱ

福岡市埋藏文化財調查報告書第79集

1932

福岡市教育委員會